

# 異世界に、日本国現る

護衛艦 ゆきかぜ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

西暦2048年 令和30年 日本国は異世界へと転移してしまう。

混沌とした世界で日本がするべきこととは？

明日をユメミル様の許可のもと、『後世日本国召喚 新世界大戦録』の一部を参考、引用させていただいています。

スカルルキー様の許可のもと、『分岐点 こんごうの物語』の設定の使用許可をいただいています。

# 目次

導かれし太陽	
天変地異	1
接触	30
不穩	73
侵攻阻止	101
Operation Forrest	
shield 2nd stage	3
rd stage	153
講和 忍び寄る魔の手	192
異世界列強ムー共和国	
列強ムー共和国 その1	235
列強ムー共和国 その2	267
列強ムー共和国 その3	313
来訪、ムー共和国!	345
ムー共和国の調べ	375
ムー共和国の調べ その2	408
ムー共和国の調べ その3	439
灯台	487
世界の鼓動	
第八帝国	517
動乱の予兆	550
混乱	573
Battle of fen	
war	639
603	

東の間の平和	—	667
これが戦争	— 1	716
これが戦争	— 2	749
これが戦争	— 3	765
『ラファエル・ペラルタ』の戦い		
786		
挑発	—	818
殲滅のメロデー	—	847
宣戦布告	—	874

# 導かれし太陽

## 天変地異

「馬鹿な!」

異世界転移当日も夜が来ると同時に、異変を自分自身の目で確かめる人々が増え始めた。

「は、春の大三角は………どこだ」

ふと夜空を見上げたアマチュア天文家から、JAXAや国防宇宙軍の研究員までが、衝撃に打ちひしがれ、愕然とした。子どもの頃から見慣れた不変の星空が、まったく違うなにかに変わっていた。

「落ち着けよ、………星図が変わるはずが………」

「落ち着いていられるか! だいたい北極星は? 北極星がないじゃないか!」  
有史以前から人類を導いてきた北極星がない。

春の大三角や夏の大三角、へびやおとめといった著名な星座がない。

星図がまったく違ったものになっている。

それどころか………

「月が、違う」

「そう言われれば、確かに大きさも模様も……」

「晴れの海も静かの海も、コペルニクスのクレーターもない！」

能面のようにのつぺりとした凹凸のない月が、爛々と日本の夜空に輝いていた。そのさまは、まるで鏡。何の面白味もなく、太陽の光をそのまま反射するだけの、不気味な衛星。それを見たとき、天文学者から一般市民まで、自分が全く異なる世界に迷いこんでしまったような不安に襲われた。

他に人工衛星の機能不全。インターネット通信の不調。国際電話回線の断絶。消息不明となる国際便。一向に現れない入港予定の外国籍の船舶。

「以上が、日本国内で現在起きている異常事態の概要になります」

この非常識的事態の連続に対して、日本政府は災害対策基本法第二八条二に基づく形で、緊急災害対策本部を内閣府に設置した。今回の非常識的事態が自然災害にあたるかは異論が残るところだが、現在進行中の異常事態が、第二八条二にて明文化されている著しく異常かつ激甚な非常災害に該当すること

は、間違いない。

「現場からの報告では――」

——樺太島（ロシア・サハリン州）が確認できず。

——釜山市街（韓国・釜山広域市）方面の灯火が肉眼で確認できず、韓国方面に航空機の反応なし。

——既存の地形と一致しない。

「—とのことです」

国防軍総隊司令白井が佐山総理に向かって報告する。

「…………… どういうことだ？」

宇治和外相が理解できずに問い返す。

「わかりやすく言うと、『中国、ロシア、韓国、南洋諸島国家が一切確認できず、確認できている大陸の地形が一致しない』ということですよ」

「つまりロシアと言った諸外国が確認できない代わりに、未知の大陸が確認できると？」

「はい、そうなります」

「じゃあどこに行つたんだ？」

「いや待て、大陸ほどの質量がすぐに消えるわけがない」

誰かが適当に出した言葉だが的を射てる。

「じゃあどう説明するんだ？」

「それは…………… 転移？とか……………」

官僚らが口々に「ありえない」と言うが、

「……………いや、十分にあり得るだろう。科学的根拠は一切ないが」

肯定したのは、佐山総理であつた。

「証拠はどうする？」

宇治和外相が聞いたが、佐山は笑みを浮かべ、

「直接見てくればいい」

と答えた。

「わかりました。日帰り任務を通達しときます」

「市ヶ谷に連絡」と広瀬国防相がいい、「了解」と白井が答えた。

「さて、原因は置いといて、ぶっちゃけ無補給で何年もつ？」

新山経産相は、

「無補給なら、5年は持ちます。総力戦体制に移行すれば、8年は持ちます」

「経済的損失を全て無視すればですが……………」と付け加えた。

「まあ、損失はいい、人さえ守れば問題ない」

佐山総理の考えとしては、「守るべきなのは、モノではなくヒトである」と考えている。

「さてと、一時か恒久的かで運命が決まるな」

佐山の言葉は、誰にも聞こえなかつた。



## 市ヶ谷 地下防衛総隊司令部統合会議室

「広瀬大臣からだ。『西方、南西方面の大陸を偵察せよ。手段は問わない』とのことだ」  
「空軍による航空偵察が一番手っ取り早いですが……………」

「まあそれしかないが、どこまでとは言っていないんだろ？」

財前副統幕長に聞かれた海野統合運用官は、

「はい、どこまでともなんとも言われていません。ですが、コースを逸脱するのは、国民による突き上げを食らう危険があります」

と、考えられる危険を含めながら答えた。

財前副統幕長が口を開こうとしたとき、

「いやーすまんすまん。渋滞に引っかかってたから遅れたわ」

と、呑気な声を出しながら会議室に入ってきたのは、雲野副防衛総隊司令だ。

幕僚ら全員が起立し、礼をする。

雲野副司令が着席すると同時に、全員が着席する。

「中斷して悪かったね。続けていいよ」

「では……………国民の突き上げは気にしなくていい。とりあえず、西方、南西方面大陸

の偵察は、空軍による、強硬偵察を敢行させるしかない」

そこで財前副統幕長は、霧島航空幕僚長を見る。

「了解です。速やかに、戦略偵察機JS-2を2機偵察にあたらせます」

「内神田空間幕僚長」

「アンドロメダ、および、ドレッドノート数隻を惑星偵察に当てます」

「頼む」

その後、作戦内容をまとめ、官邸に送信した。

同日 総理執務室

国防軍の作戦計画を読んでいる、佐山総理の姿があった。

「……………」

「西方、南西方面に戦略偵察機JS-2を、それぞれの大陸を偵察させます。そして、惑星の調査を、アンドロメダ、およびドレッドノートを充てます」

「……………」 この星が、どのようなものかはつきりさせよう」

「了解」

## 2日後

当時の作戦計画は、白井の手によって、当初より大幅に増強された。

偵察作戦に従事する部隊は下記の通り

国防宇宙海軍

アンドロメダ級一番艦『アンドロメダ』

ドレッドノート級 5隻

国防空軍

第1戦略偵察団—奥尻—JS—2 10機

第6航空団—小松—E—000 2機

同 —F—4A 20機

第8航空団—築地—E—000 2機

国防宇宙海軍

第1護衛艦隊—舞鶴

『いずも』『めいおう』『みようこう』『なち』『あきづき』『てるづき』『かげろう』『し  
らぬい』『伊—01』『伊—02』『伊—03』

第2護衛艦隊—大湊

『ひりゆう』『せいおう』『あしがら』『はぐろ』『すづつき』『はつづき』『くろしお』『おやしお』『伊—04』『伊—05』『伊—06』

第6機動部隊—呉

『かが』『ひらぎ』『まや』『ちようかい』『ふううん』『ながなみ』『むつき』『きさらぎ』『伊—404』『伊—405』『伊—406』

音響観測隊—左から、横須賀、大湊、呉、それぞれの艦隊に随伴する。

『ひびき』『はりま』『あき』

と、艦艇42隻、航空機34機（海軍航空隊は含まない）、が参加するという、国防軍史上最大の偵察任務従事部隊数となった。

なお、そのうち、大陸の偵察を行うのは、JS—2、10機の内、2機のみであるが……。

2日後 奥尻基地

空が明るくなり始める頃、蒼天に2機の鋼鉄の鳥が飛び立った。

その2機は、離脱地点を迎えると、翼を振り、離れていく。

その後……。

国防空軍戦略偵察機JS-2、2機は、ロデニウス大陸、フィリアス大陸を偵察、異世界国家の存在を確認した。

2日後 首相官邸 総理執務室

「以上、南西方面大陸、西方方面大陸に国家の存在を確認しました」

白井が、各閣僚に報告する。

白井が一人一人の目を見るが、例外なく全員暗い。

「……………中国、ロシア、韓国、フィリピンが消えた……………いや……………前世界

からすると、我々が消えたように思うだろうな……………」

橋立特命担当大臣が、ポツリと呟いた。

「前世界のことを考えても仕方ない。今をどうするかだ」

佐山総理が言った通り、現状切り抜けるかどうかにかかっている。

「というか惑星の直径が、単純計算で約2.5倍とか……………ふざけてるだ

ろ……………」

「大気圧、公転速度は、ほぼ誤差の範囲内、月が2個あるとか……………何食ったらこん

なになるんだ？惑星のデカさが2倍近くあるのに……………」

皆本環境相が、気象庁や国防軍の天測などの報告書を見て、ぼやく。

「「は〜」」

執務室にいる何人かの大臣がため息をつく。

「非日常に突入か……………」

その後、

気象庁の職員が、大気中の未知の成分、物質を確認したこと。

国防省の職員が、軌道基地から、未知の人工衛星を発見したこと。

を、報告した……………他にも多々あるが、インパクトが大きかったのは、その2つだ。

「今のところ、国民は落ち着いています。いつパニックに状態になるか……………」

「研音、国民は俺たちを信じてるんだ。俺たちが国民を信じないでどうする」

研音官房長官は少しじろぎながらも答える。

「そういうわけじゃ……………」

「まあいい」

佐山総理はそこで、偵察機が撮影した国旗を……………画像処理した、異世界国家の

国旗を叩いた。

「接触してみよう」

「……………それしかありませんね」

だらだら言つても、なにも始まらない。

行動を起こすのみ。

「……………外交団護衛には、海軍部隊を充てよう」

さらつと、とんでもないこと言う佐山総理。

「……………」

本来なら、誰か何かを言うのだが、誰もなにも言えない。

この世界の国際条約、意識が一切不明だからだ。なので、ほぼ手探り状態での接触となる。

しかし、佐山総理の突拍子もない意見は、全員が納得した。そう、なにが起こるか分からなからだ。

佐山総理は、椅子をくるりと回転させ、窓の外を見た。

いつのまにか、雨が降っていた。

佐山総理は、徐に切り出す。

「例え、この世界の常識が外れていようとも。例え、この手が血に濡れようか……………」  
「守り切る」

瀬和田私設秘書が、一瞬だけ総理の横顔を見れたが、その顔は、世界を敵に回しかけ

た国連演説の時と、同じ表情を浮かべていた。

全員が静かに礼をする。

佐山総理の覚悟は、全員が承知している。

全員が静かに動き出す。

1時間後 国防省 大臣執務室

「—と言うことだ。日本海沖に展開してる、第6機動部隊と第2護衛艦隊に外交官を搭乗させ、異世界国家に接触しろ…………… はあ〜」

自分でも自覚できるほどの、デカいため息をついた。

『疲れてるのか?』

「んなわけあるか。世界を敵に回しかけた時よりは、はるかにマシだよ」

『…………… ;確かにそうだな。米国が宣戦布告しかけた時よりは遥かにマシだな』

「昔のことはもういい。任務を遂行してくれ」

『Yes sir』

「アメリカの気持ち? は抜けたんじゃないーブチッ!!」

……………  
切れた。



「は、明後日は178日振りの休みだっというのに……」

広瀬は、ふと写真を見る。

その写真は、2038年、コンゴ共和国人道支援復興隊設立5周年の時、視察も兼ねて手伝い（超極秘）に、白井のみを連れていった時の写真だった。

そこに映っているのは、コンゴタワーを背景に、現地住民と、近くにいた国防軍隊員と撮影した写真だった。

1枚目は、復興隊隊長、現地住民、族長代表、コンゴ共和国政府関係者が並んだ写真。

これは、一般公開用。

2枚目は、後列に、国防軍隊員が並んだ写真。

3枚目には、最前列に、広瀬と白井が、しゃがみこんだ姿があった。

その写真は決して表に出ることのないものだ。

現地復興隊長の話だと、今も尚、大切に保管しているとのことだった。

「あの時は良かったな」

広瀬は、その日を振り替えながら仕事をする。

同時刻 外務省 アジア太平洋州局オフィス

「—ということ、君には島崎君と一緒に海軍艦隊に搭乗し、異世界国家と接触してきてもらいたい」

課長が、仙崎浩二に説明する。

「わかりましたけど……なぜ僕と島崎に？他にも適任者がいると思いますけど」

「ああ、そうなんだがな……まず、異世界国家の大陸配置状況から、この大陸を、南アジア、この大陸を東アジアと、据え置いたから、我が局の担当になったんだがな……」

そこで、課長が言いづらそうにしていたが、すぐに話す。

「まず、外交官が、この馬鹿げた事態で深刻な人手不足になってしまったんだ」

外務省で働く人間（大使館勤務など含めて）は、約3500人だが、転移によって失われた人材は約1000人。しかも、ほとんどがベテランという……。日本で勤務する外務省関係者は、約2500人。そのうち、国と国とのやり取りをする人間（予備）は、約500名しかない。

転移によって失われた人員が、在外公使館（ベテラン）の人間という、非常事態であった。

「なるほど。で、予備の中で役立つのが、うちらなどしかない」と……」

「メタいこと言うが、そういうことだ。君たちの他にも、宇都宮と宝生君も派遣されるか

ら。2日後に、築地基地へ向かってくれ。拾ってくれるから」  
「了解です」

---

2日後 築地基地 午前9：10

「はえ、まさかシーガルで行くとは……………」

2人の目の前には、MV-10シーガルが、離陸準備を進めていた。

2人のもとに緑色の飛行服を着た隊員が近づいてくる。

「おはようございます！本日エスコートさせていただきます、大野2等宙佐です」

「おはようございます。お世話になります」

「では、どうぞ」

仙崎らが、シーガルに乗り込む。

島崎がシートを少し倒す。

「シーガルはよく見えますけど、乗るのは初めてでしたけど、とても軍用機とは思えませんね」

しばらく話し込んでいると、栗林1等宙尉が近づいて、概要を説明する。

「おはようございます。事前にも説明しましたが、フライトは1時間を予定しています。」

可能性は低いですが、万が一トラブルが発生した場合は、事前レクチャー通りをお願いします」

「はい、本日はよろしくお願いします」

5分後

シーガルは母艦である、『かが』に向かって飛び立つ。

?分後

「……………?」

島崎が、何かに気付く。

「何か航行してますね。あの艦は……………」

「あれは『ひびき』『はりま』『あき』ですね。海底調査中でしょう」

島崎の疑問に、近くにいた栗林1等宙尉が答えた。

「あれが国防軍の中で、2番目に謎に包まれている艦……………」

無論、一番は波動砲艦隊である。

「それにしても……………」

島崎は、本省からの書類を読んでいた。

「想定される事態が多すぎてこっちが困るんですけど……」

「仕方ないさ。むしろ少ない方かもしれないな」

外務省だけではなく、各省庁も、想定される事態を書面に起こし、それを現場へ通知していた。

「は〜」

2人してため息を吐く。

「お二人さん、そんなにため息を吐くと老けますよ」

後ろに座っている、深谷補佐が言った。

「違うない」

仙崎は笑いながら答えた。

「見えてきましたよ。そこからじゃ見えないでしょうから、こちらまで」

仙崎らは、大野2等宙佐が手招きする。

コクピットから見えた景色―

「デカッ!」

島崎が思わず口に出してしまうほどのデカさだった。

あかぎ型護衛航宙母艦2番艦『かが』

全長 444 m

全幅 114 m

全高 56 m

『かが』もそうだが、周りの護衛艦の大きさも大概だ。

ぱっと見、全長250 mはありそうである。

実際そうなのだが。

「10分後に着陸します。シートベルトを締めてください」

「sea gull 01, this is KAGA Control tower, 着艦を許可します。以後は信号士官の誘導に従ってください」

「sea gull 01, roger」

どれだけ時代が進み、機械化、自動化が進んでも、結局最後は人間がするのである。

『進路速度そのまま！4番ワイヤーに架けろ！』

「了解」

シーガルの車輪が、飛行甲板に接地する。

着艦フックが4番ワイヤーに引っかかり、ワイヤーが伸びきる。

『よしー』

信号士官が、ワイヤーの巻き取りの合図を送る。

シーガルは、専用の誘導車に車輪を引っ掛けられ、そのまま牽引する。

昇降エレベーターの手前で停止する。

「お疲れ様でした。こちらから降りてください」

案内に従って、シーガルから降りる。

降りた直後、風が吹きつけてくる。

「うおっ！」

「大丈夫ですか？」

「あ、はい。それにしても風が強いですね」

そこで大野が、視線を右端に向けて、またすぐに戻す。

「現在東から4ノットの風ですね」

「強いですね」

「合成風が形成されていますからね……………さ、こちらへ」

く 貴賓室 く

「こんにちは。護衛宙母「かが」艦長のががです」

「外務省太平洋州局の仙崎です」

「同じく島崎です」

他の4人も挨拶をする。

「どうぞ座ってください。紅茶でもどうぞ」

「……………では、いただきます」

仙崎が一口だけ飲む。

「!?、これ砂糖とか入っていませんよね?」

苦味すら一切感じない、かすかに甘い味がする。

「入っていませんよ」

かがが、笑いながら答える。

他の外務省関係者も驚きの声を上げる。

「どうやったらこんな味を出せるんですか?」

深谷の質問に、かがは、

「ある方からの直伝です。まあ、本家には及びませんがね」

「“ある方”とは?」

「おそらく、国防宇宙海軍の中で、一番紅茶の入れ方にうるさい人間から教えていただきました」

仙崎ら、外務省関係者一同は、ピンときた。

「こんごうさん……………ですか」

「ええ」

「なるほどね」



深谷は、ここで咳払いをし、話を戻す。

「んん、かが艦長。今日からよろしくお願ひします」

「はい。身の安全は保証しますよ」

不意に警報がなる。

ボタン!!

扉が乱暴に開かれ、士官妖精が入ってくる。

「攻撃を受けています!!至急お戻りください!」

「は、こつちが外交官を乗せてるのに、問答無用で撃ってくるのか……………」

「あ、大丈夫ですか?」

たまりかねず、仙崎が聞いた。

「心配いりません。護衛艦が守ってくれます。士官妖精!」

「はっ!」

「外交官の保護をお願い」

「了解!ついてきてください」

士官妖精が、外交官を伴って貴賓室から出て行く。

かがは、走りながら、別の士官妖精からインカムを受け取る。

「砲雷長!状況は!」

すぐに返事が来る。

『艦隊前衛『かざぐも』のレーダーが、大陸間対艦ミサイルを探知しました！目標は本艦です！』

「砲雷長」

『はい』

「武器使用判断は、『法律と現場の状況によって、逐次許可される』でしたね？」

『はい、そうです』

「わかりました。武器等防護法を適用されるとし、艦隊旗艦艦長権限で認可します。全兵装使用自由！」

かざぐも      CIC

「かがより入電。『全兵装使用自由』とのことです」

「BMD強化艦の実力を舐めて貰っちゃ困るね〜総隊司令」

かざぐもが笑みを浮かべながら言う。

「システムをBMDモードに、1〜3番までのSM-2、攻撃用意！」

「敵ミサイル、『かが』への突入進路に入りました！」

「SM-2 攻撃はじめ！」

「recommend fire! つ撃！」

「インターセプトまで10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、マークインターセプト」

「全弾迎撃成功」

「了解。引き続き警戒を」

「了解」

かがは、迷路のような通路を走り抜け、艦橋に入る。

「お疲れ様です。現在、『かざぐも』『むつき』が迎撃中です」

「…………… 6発だけ？」

“かが” がレーダースクリーンを見るなり、口に出した。

「安田司令、入られます」

艦橋士官妖精が声を上げる。

「そのまま。かが、状況は？」

安田はインカムをつけながら、かがに状況を聞く。

「大陸間対艦ミサイル6発の接近を探知。『かざぐも』及び『むつき』が迎撃に当たって

います」

「“彼ら”にしては数が少ないな」

「はい。自分もそう思いました」

「……………どう思う？」

「はい……………おそらく潜水艦による第2次攻撃。または、大陸間対艦ミサイルの第

2射をしてくると思います」

「普通ならそうだが、“彼ら”のことだ……………無人攻撃機あたりを仕掛けてくる」

『かがブリッジ！excite101！レーダーに反応あり！無人攻撃機です！！数12！！』

「来た……………」

『『かぎぐも』『むつき』大陸間対艦ミサイルを全弾迎撃』

警報がなる。レーダー照射の警報だ。

「撃つて来る……………」

『敵無人機！72発の対艦ミサイルを発射！！』

まや C I C

「72発のミサイルを確認」

「おし、割り振りに従い迎撃する」

まやが右の手を握る。

艦内は、すでに戦闘配置済みである。

「E C M 戦用意!!」

「パッシブからアクティブへ変更! 妨害電波照射!!」

電子戦士官妖精が、E C M システムをパッシブからアクティブへ切り替える。

「敵ミサイル、本艦との距離、70 k m!」

『ひらぎ』『ちようかい』『ながなみ』も妨害電波を照射中!」

72個の輝点が50個に減る。

「敵ミサイル残存数、50発!」

「本艦との距離60 k m!!」

「トラックナンバ―20001から20009、C I C 指示の目標! 前甲板V L S、1く10番までのS M―2〔34式多目的ミサイル〕S M―6的な〕、データ入力!」

「諸元入力よし!!」

「発射!!」

ハッチが開き、10発のS M―2が飛び出していく。

『ひらぎ』『ちようかい』『ながなみ』『きささらぎ』、からも、それぞれ10発のS M―2

が飛び出す。

やがて輝点が重なる。

「！、敵ミサイル、3発残存!! 『かが』に向かっていきます!!」

「右舷CIWS! open control!!」

分速5000発の、CIWS、パルスレーザー10門が起動し、まやの横をすり抜けようとするミサイルを撃ち落とす。

「全弾迎撃」

「対空目標なし!」

「母さん（旧海上自衛隊まや型護衛艦まや）に叱責されるのは防いだな」

かが CIC

「次は何が来る……………」

安田は思案していると、通信妖精の声がインカム越しに聞こえてくる。

「モールズを受信しました。『状況終了』です」

安田は、帽子とインカムを取り頭を掻きながら、

「精神が削られる……………」

と言った。

## クワ・トイネ公国 政治部会

「ムーの遙か西、文明圏から外れた西の果てに新興国家が出現し、付近の国家を配下に置き、暴れ回っているとの報告があります。かれらは、自らを第八帝国と名乗り、第二文明圏の大陸国家群連合に対して、宣戦を布告したと、昨日諜報部に情報が入っています。彼らの武器については、全く不明です。」

「ここで、ロウリア王国対策の会議が行われていた。」

「しかし、第八帝国は、ムーから遙か西にあるとの事、ムーまでの距離でさえ、我が国から2万km以上離れていますので、直接的な脅威はないと判断します」

「ロウリア王国については、ここ最近演習活動が活発になっていると間諜から報告が入っています」

「国境にはいないのだな？」

「は、」

「しばらくの侵攻はないと見ます」

バタン!!!

その時、政治部会に、外交部の若手幹部が、息を切らして入り込んでくる。

通常は考えられない。明らかに緊急時であった。

「何事か!!!」

外務卿が声を張り上げる。

「報告します!!」

若手幹部が報告を始める。要約すると、下記の内容になる。

本日朝、クワトイネ公国の北側海上に、長さ444mクラスの超巨大船が現れた。

海軍により、臨検を行ったところ、日本という国の特使がおり、敵対の意思は無い旨伝えてきた。

その後の臨検を行ったところ、下記の事項が判明した。なお、発言は本人の申し立てである。

○ 日本という国は、突如としてこの世界に転移してきた。

○ 偵察をしたところ、貴国の位置する大陸を見つけた。

○ クワトイネ公国と会談を行いたい。

突拍子もない話、政治部会の誰もが、信じられない思いでいた。

しかし、444mという考えられないほどの大きさの船も、報告に上がってきている。国ごと転移などは、神話には登場することはあるが、現実にはありえないと思っ

る。  
だがそれよりも……



「444 mの巨大船だと!!?何かの間違いではないか!？」

「いえ、間違いありません」

「一体どうやったら400 m越えの船を作れるのか……。」

「どうします?カナタ首相」

「問いかけられたカナタは、

「ひとまず会ってみましょう、今の我が国の状況では新たな敵対国を増やす余力はありませんからね」

「わかりました」

## 接触

4 時間程時間を遡る。

国防宇宙海軍 第6機動部隊 かが

あかぎ型護衛宙母『かが』はこちらに近づく船舶1隻をexcel01が探知。同船へ近づき、接触を果たす。

「随分と驚いてますね」

航海長妖精がモニターを見ながら言う。

「レーダー反射が少ないから漁船かと思ったが、まさかガレオン船とは……………」

「……………司令」

安田は、かがに睨まれて硬直する。

「まさか中央からのレポート読んでないんですか？」

安田の目が泳いでるのをかがは見逃さなかった。

「はく。司令としてあるまじき行為ですね」

「すみません」

「かが艦長。その辺にしてくれないと艦橋要員が笑い死んでしまいます」

かがはそう言われて周りを見ると、艦橋要員が笑いを堪えていた。

かがは再び司令を睨む。

「次にやったら白井司令に言いつけますからね」

「うっ、それは勘弁です」

艦橋に笑い声が響いた。

「さあ、未知との遭遇だ」

軍船『ピーマ』

軍船ピーマは、領海付近を哨戒中、超巨大船と遭遇。臨検をするため接近する。

軍船『ピーマ』 船長のミドリは水平線上に微かに見える船を見ていた。

「大東洋沖からきたのか？」

ミドリの問いに副長も唸りながら答える。

「うーん。国というより群島の集落はありましたがね。あのような船を作る技術はないと思いますけどね」

「やはりパーパルディア王国か？」

あれこれ言うが答えは分からない。

やがて、巨大船の全容が明らかになる。

「……………副長。私の目が逝かれたのかも知れんが、小島が動いてるようには見え  
ないのだが？」

「私もです」

「!?な、なんて大きさだ！400m位はあるんじゃないか!？」

「そうにしか見えません」

「超巨大船。停止した模様！」

「敵対の意思はないか……………これより臨検を行う。絶対に威圧したりするなよ」

ミドリは恐怖に包まれた。

かが 艦橋

「こちらの誘導に従ってますね」

艦橋要員が接舷作業をしている軍船『ピーマ』を見てそう言った。

軍船『ピーマ』の大きさは約50mなのに対し、かがは約400m。

象と蟻である。

『接舷終了。ラツタルを渡します』

「了解。気をつけて」

『はい』

「艦長、行つていいですよ」

「え？」

「さつきからずっとソワソワしてますから」

そう言われて自分を見ると、いつのまにか腕を挿んでいた。

「じゃ、艦の指揮お願いね」

「了解です」

かがは艦橋から出る。

「あ、司令は………いいか」

そう言い、貴賓室へ向かう。

(この船の動力は一体何なんだ？ マストが複数あったものの帆が無かった。それにこれは全て金属でできている………)

ミドリは顔を少し後ろに向けて後ろにいる謎の黒い杖を持った青いまだら模様

を着た兵士を見る。

(見たことのない兵器。日本軍の兵士は全て魔道士なのか?)

ミドリは不安を感じながらも案内に従う。

貴賓室(食堂)

「緊張しますね仙崎さん」

「言葉の壁はないみたいだ」

仙崎は傍にある端末に流れてる映像を見ながら言った。

その映像は艦内各所に設置されてる監視カメラの映像だ。これを閲覧できるのは司令と艦長のみであるが、一時的に許可をもらって見ていた。

「文法、言葉遣いともに現代日本語ですね」

仙崎の隣に座っているかががぶつぶつと言っている。

「あのくかが艦長」

「ブツブツ」

「艦長?」

「あー艦長のいすも型護衛艦2番艦「かが」母 かが はこんなじゃないんですけどね」

「ていうか先<sup>空母加賀</sup>先代の血を引き継いでる先祖帰りふごっ!!」

給養員妖精がかがから左ストレートを顔面に喰らう。

「ねえ今何か言った?」

「何も言ってません」

「よろしい」

かがと給養員妖精とのやり取りを見てた仙崎らは萎縮した。

(怒らせない方がいいな)

貴賓室（食堂）でそんなやり取りをしてるのを露知らず、艦内保安妖精が貴賓室の扉の前に到着する。

ゴンゴンゴン

「どうぞ」

中からかがの声が聞こえてきた。

「艦内保安妖精、客人案内を終了します」

「ゴ」苦労様」

椅子に座る。

ミドリは気を引き締めて話始める。

「私はクワ・トイネ公国海軍所属軍船『ピーマ』船長のミドリです。ここから先は我が国

の領海に入ります。貴船の航行目的を教えてください」

「私は日本国外務省アジア太平洋州局外交官仙崎と言います。航行目的は貴国との国交開設です」

他も挨拶をする。

「そうですか。しばらくお待ち下さい。本国に連絡します」

「どのくらい時間がかかりますか？」

「魔信があるので比較的すぐに返答できると思います」

「分かりました」

クワ・トイネ公国 マイハーク防衛司令部

「司令！軍船『ピーマ』からの続報です。『超巨大船の国籍は日本国。航行目的は我が国との国交開設』とのことですよ」

「すぐに上層部へ連絡だ！すぐにだ！」

「はい！」

「日本国？聞いたことがないな」

その後、政治部会に連絡された。



## クワ・トイネ公国 首相官邸

「カナタ様。わかっていると思いますが絶対に彼らを侮らないように」  
「分かっています。気を引き締めなければ……………」

カナタは背筋を伸ばし扉をノックする。

中に入るとパリッとした服を着てる8人の男がいた。

「こんにちは。クワ・トイネ公国首相カナタです」

「こんにちは。日本国外務省太平洋州局外交官の仙崎です。こちらは」

日本側も挨拶を終える。

「さて、日本国の皆さん。我が国に何の御用でしょうか？」

「我が国の目的は貴国との国交締結です」

カナタは手元の書類に目を落としすぐに戻す。

「そうですか……………。貴国が転移国家というのは真実ですか？」

「はい。事実です。もし信じられないのであれば我が国を直接見ていただけないでしょうか？」

「なっ！ぶ、無礼だぞ!!領海を侵犯しようとして——」

捲し立てる外務卿をカナタは手を掲げて止める。

「分かりました。私達はお互いのことをよく知らない、使節団を派遣しましょう。それと、国交締結、政治部会に話を通さないといけません。が最善を尽くすと約束しましょう」

「あ、ありがとうございます！」

仙崎ら外交官一行は揃って頭を下げた。

(こちらを見下すような様子はない、か。信用まではいきませんが信頼できそうです)  
その後、政治部会にて日本国と国交締結、使節団派遣がわずか1日で決定した。

神聖ミリシアル帝国 天文観測所

「ここで天体観測が国を挙げて行われていた。

「ん?」

「月を観測していたところ妙な物に気づく。

「…………… なんだありや?」

「望遠鏡の倍率をいじる。

「!?!」

「艦?」

誰か挿絵描いてくれないかな……………。

同日 神聖ミリシアル帝国 帝都ルーンポリス アルビオン城

「緊急と聞いたがどうした？」

皇帝ミリシアル8世が対魔帝対策省長官サーフに聞く。

「申し訳ありません。まずこちらをご覧ください」

「そう言い、魔写を渡す。」

「これは？」

ミリシアル8世が影の部分指差す。

「まずこの魔写は天文観測所から送られてきた物です。月の観測中、艦のような物が映ったと」

「…………… 貴様はどう思う？」

「このどう思うは、魔帝か否かを問うた意味だ。」

「真か否かは置いといて、魔帝ではないと思います」

「ほう、何故だ？」

「確かに僕の星の可能性もありますが、そんな物で報告してくるとは思えません」

「ふむ、確かにそうだ。だが、念のため調査をせよ」

「仰せのままに」

サーフは部屋から退出する。

「一体何なんだ……………」

ミリシアル8世の言葉は誰もいない部屋に吸われた。

---

日本とクワ・トイネ公国と接触から1日後

日本国 首相官邸 総理執務室

「ひとまず穏当な接触ができたということか」

「はい。それと、クワ・トイネ公国からの資料なのですが……………」

この資料は、お互いの国の情報交換で作成した資料だ。

「は？」

農林水産相が間拔けな声を出す。

「食料自給率%換算で210%だど!?!」

「人口は3000万人強。明らかな過剰生産じゃないか?」

「それについて問い合わせたところ、『勝手に育ってくる』とのことだす」

「「「.....」」」

「なんだそれ.....」

「天然食料問題は解決だな」

「いやそういう問題じゃないでしょ」

「惑星調査の状況は？」

「惑星の3分の1程終わりました」

「結構結構」

佐山は椅子を回転させ窓の外を見る。

外にはデモ行進が行われていた。

「面白い世界だ。ありえないと思ったことが起こる」

「総理。懸念が一つあります」

「なんだ？」

「この世界に骨を埋めたとして、我が国が再び転移した時のことを考えますと、異世界国家との接触はクワ・トイネ公国と、資源輸出有力国に絞るべきだと考えます。我が国の経済構造は以前から崩壊に備えて強化してきてます。5、いや8年は持ちます」

大鷹厚労相が熱弁した。

「ああ、その通りだ。だが、国会、経済連が何を言うかわからないぞ」

この場合追及されるのは経産省だが、責任は大鷹になるという意味だ。

「うっ、それはそうですが……………」

佐山は再び窓の外を見る。

「…………… 広瀬、白井は？」

「ああ、確か横田の国連軍司令部に行つてたはず…………… はい。横田に行つています」

広瀬は紙を次官から受け取り話した。

「そうか。好都合だ。国連軍司令官ジェームズ・ファイパーを連れてくるように言つてくれ」

「了解です」

「なぜ国連軍司令官を？」

「いずれ彼らには必要になつてくる」

「…………… そうならないことを祈ります」

井村保安相が言った。しかし彼の願いは叶わない。

そのことを知るのはずつと後だ。

---

5日後　クワ・トイネ公国　マイハーク港

「緊張するな……………」

「淵上さん。そんなに緊張しなくても……………」

「いやだって国の命運がこの肩にのし掛かってくるような感じしかないんだよ……………」

今話しているのは、日本国外務省から派遣された淵上と浦尾である。

「いや、実際に交渉するのは本省の大臣と総理でしょ？俺たちの仕事は使節団の案内だけですよ」

「それはそうだが……………」

「さっ、行きましょう。使節団の皆さんと国防宇宙海軍の方が待ってますから」

まだなにかを言いたそうな顔をしてる淵上を置いて浦尾は波止場に向かう。

……………  
……………  
……………

「お集まりの皆様、本日は日本へ使節団として来て頂けるとの事で、喜びの極みです。」

使節団を出迎えた淵上は、使節団の代表である『ヤゴウ』以下の、使節団の面々に挨拶を兼ねて、日本国への移動手段として用意した船が停泊している場所へと案内する。

「はあ…………… 船旅は好かんのじゃ……………」

使節団の中で憂鬱そうな表情をしているのは、使節団のメンバーとして日本国の軍事力を見定める役目を担う陸軍のハンキ將軍だった。

「ハンキ將軍、顔色が優れませんか？」

「ヤゴウ殿、今は外務省出向の身なのだから將軍はやめてくれ。いやな、船旅は良いものではないぞ。船内は暗く、狭く、湿気も多い。長旅になると疫病に掛かる者もであるから……」

クワ・トイネ公国において、船旅と言うのは過酷との戦いである。

中世時代の帆船しか知らない彼らにとっては、船の中と言うのはあまりイメージは良くなく、ハンキ將軍程では無いが、ヤゴウ達使節団も少し憂鬱に感じている。

「皆様、我が国の船が到着しました」

波止場の上で測上が言うと、ヤゴウとハンキ達も立ち上がり沖を見る。

「なっ！」

「あれは………なんてデカイ！」

マイハーク港沖に止まっていたのは旭日旗を掲げた日本の軍艦だった。

全長400メートルの船を海軍が臨検したという噂を聞いたヤゴウとハンキは、作り話程度にしか聞いていなかったため、その軍艦の大きさに驚く。

いずも型護衛艦



全長320m

全幅62m

搭載機数 固定翼機52機 回転翼機12機

「あれは我が国の海軍に所属する軍艦『いずも』です。本来なら客船を使いたい所でしたが、周辺の海域と空域の安全が確認されていないので、使節団の方々の安全を第1に考え用意しました」

ちなみにいずもは旧海軍、海自、宇宙海軍と3代目である。

「ふ…… 測上殿、いずも?と言うあの軍船には帆が付いていないようじゃが、どうやって動いてるのじゃ?」

ハンキの質問に測上はそばにいた青い迷彩服を着た人に視線を送る。

「はい。あの艦は波動エンジンを使用して動いています」

「はどうえんじん?」

「はい。帆やオールを使わなくても船を動かせる事ができる……… 何と言いましようか……… 人間で言う所の心臓にあたる絡繰りと考えて頂ければ」

「よく分からんが……… 凄いと云う事だけは分かった」

旧世界では凄いを通り越して頭おかしいのだが………

測上や、クワ・トイネ使節団は、いずもからやってきた迎えのSH-60Kへと乗り、

無事にいずもへと乗艦する。

「これが軍船の上なのか……まるで要塞のようじゃ……美しい……」

「それに見てください。全てが金属でできていますよ」

「でかい甲板だ。騎馬戦ができてしまう……」

ハンキはいずもの偉容に敬服し、ヤゴウはいずもの大きさと手入れされた甲板を見て感心する。

(本当は水上任務よりの宇宙艦とは言えんな……)

国防宇宙海軍隊員妖精は心の中でいずもの正体については口に出さず、胸の内に仕舞い込む。

「測上殿、出来れば良いのじゃが、このいずも？の責任者に合わせて頂けないじやろうか？ワシも軍人の端くれとして、この軍船の責任者に挨拶をしたいのじゃが」

「ええと、よろしいですか？」

測上は隊員妖精へ聞いた。妖精は頷き返す。

「ではこちらへ」

隊員妖精に従い艦橋に向かう。

「クワ・トイネ公国使節団の皆さん、お待ちしております。私は当艦、いずも艦長のいずもです。本日より2日間は大変窮屈な思いをさせてしまうでしょうが、日本までの道

中よろしくお願いいたします」

艦橋では、いずも艦長のいずもが使節団を出迎える。

「クワ・トイネ使節団代表のヤゴウです」

「おなじくクワ・トイネ使節団団員のハンキです。お会いできて光栄です」

「ではこれよりいずもは日本国へ向けて出航いたします。これより皆様を客室へとご案内いたします」

使節団を客室エリアへと案内する。

「なんて広いんだ！それに回りは明るい！」

「光の精霊でも宿しているのかこの船は!？」

豪華客船程では無いが、豪華で、尚且つ軍艦とは思えないほど清潔に保たれた客室に一同は驚きの連続だった。

いずもは各国VIP、日本国内閣総理大臣、天皇陛下が乗艦されることを想定しているため、豪華ホテルに肩を並べられるほどのレベルだ。

驚きの熱が覚めぬまま、各々は割り当てられた客室へと入り、一堂は思い思いにくつろぐ。

しかしハンキは再び艦橋に戻りいずもを見学する。

「速い！どのくらいの速度が出てるのですか？」

「今は20ノットですね。もうすぐランデブーポイントですから少し速度を落としますかね」

「らんでぶーぼいんと?」

「味方との合流地点のことです」

「だが海の上だと目印はないぞ?どうやって味方と合流するのだ?」

「航海レーダー、GPSをもとに予め合流地点を算出しています」

GPSは波動砲艦隊と、突貫改造ロケットで打ち上げられた衛星を中継衛星として使用してる。

「それが何なのかよくわからないが凄いことはわかった」

その後もハンキの質問にいずれもは嫌な顔一つせず答えた。

充てがわれた客室でヤゴウは日記を書いていた。

『私は日本国へクワ・トイネ公国使節団代表として、日本の軍船に乗り込んでいるが、私はこのような巨大で尚且つ、帆やオールも無しに動く船など見た事はない。おまけに中は一定の温度が保たれ、明るく、清潔が保たれている。こんな物を作り出す日本国について私は、この日記を書いている今も、興味が尽きず、非常に楽しみである。もしかしたら日本国は、他の列強国に匹敵する力を持っているかもしれない』

ヤゴウは日記を閉じる。

「明後日が楽しみだ」

ヤゴウは眠りについた。

いずも 艦橋

使節団や外交官が眠りについてても当直士官妖精は周りに注意を払いながら航行していた。

「まもなくランデブーポイント」

「『めいおう』『みようこう』『なち』『あきづき』『てるづき』『かげろう』『しらぬい』を視認」

『伊―01』『伊―02』『伊―03』の推進音を探知』

「さあ、不安な状況もこれで終わりだ」

「艦橋よりCIC、僚艦以外の目標は探知できるか？」

『こちらCIC、確認できません』

副長妖精はひつきりなしに発艦、着艦する飛行甲板を見た。

「どうされました？」

「いや…………… なんでもない」

「僚艦、面舵回頭。輪形陣に着きます」

いずもの護衛艦は見事なまでの艦隊行動を見せた。

「おはようみんな」

艦橋に時刻に合っていない挨拶が聞こえた。

「おはようございます司令」

「まさかずつと寝てたの!?!」

「そのまさかグヘツ!!」

第1護衛艦隊司令富岡はいずもから右フックを喰らう。

「ゲホツゲホツ、上司に対して扱いがひどくないか?」

「怠け者には関係ありません。立場上は上司ですが、あなたのことを上司とは思ってません!」

「そこまでにしないか? また夫婦喧嘩とか言われるぞ?」

「うっ、わかりましたここで手打ちにします」

艦橋が笑い声に包まれる。

富岡は本省の総隊司令部付の参謀だったが、総隊司令、海上幕僚長の連名により、第1護衛艦隊司令となった。

いずもは米留学、米軍留学を経た防大卒生だ。

富岡の階級は1等宙将。いずもは1等宙佐。

階級の差は3段位はあるがここまで仲がいい理由は、防大時代の先輩後輩だからである。

「全く、少しは優しくしてくれよ……………」

「あなたには一生優しくしませんから」

「すみません」

「全く……………」

いずもより北東560kmに青白い光を後方に吐きながら漆黒の空を飛ぶ鳥がいた。

「あ?」

電子士官妖精が謎のモールス信号を受信する。

「……………なんだこれ?暗号化されてるのか……………」

「どうした?」

戦術士官妖精が話しかけてくる。

「いや、国籍、発信元不明、送信先不明のモールスを受信しました」

「ん?……………モニターに投影してくれ」

「はい」

電子士官妖精がキーボードを操作しモニターに投影する。

「……………何かわかりますか？」

「全く分からん。ロシア系なのはわかるが……………暗号までは分からんよ」

「仕方ない。お艦に送れ」

「了解です」

いずも CIC

ここは、アメリカ海軍航空母艦のCDCに相当するところである。

「で、解けた？」

いずもの問いに電子士官妖精が答える。

「本艦の演算能力、というか、このお古の暗号に対応してませんので、中央のシステムを一部拝借し、ようやく解けました。それがこれです」

いずもは紙を受け取り、読もうとして固まる。

「ちよつと待って。中央のシステムを拝借って言ったけどどういうこと？」

「そのままですよ……………ハッキングしました」



電子戦士官妖精は言い逃れをしようとしたが、いわずもに睨まれて正直に言う。

「ログは残してないでしょうね？」

「全て消しましたが、総隊司令のことですから……………」

「あの人の人脈は恐ろしいからね…………… その時の責任は—」

「分かってます」

責任は電子戦士官妖精にあるという意味である。

ちなみにこの電子戦士官妖精、国防軍機密サーバー群に侵入したことがある腕利きのハッカーである。

「ふ…………… 驚いた。まさかD暗号を使つてるとは……………」

「内容はロデニウス大陸各国の軍事力、政治体系、マジもんの諜報員の報告電文だと思われまます」

「んー、グラバルカス？グラ・バルカスか……………」

「発信源、送信先は依然不明です」

「中央に報告。原文そのままね」

「はい」

「うーむ……………」

「まだ何か？」

「いやね〜」

「なんでロシア語擬きなのにD暗号を使ってるのか解せない、だろ？」

いずもが言うより早く富田が言った。

「そうです……………」

「痛っ！」

富田がいずものブーツの踵で踏みつけられる。

「な——」

そこで富田はいずもに睨まれる。

「すいません」

「よろしい」

「痛い……………」

富田の声は誰にも聞こえなかった。

---

2日後 舞鶴港沖

2日間の船旅で、日本の舞鶴港に到着したいずもの飛行甲板からヤゴウとハンキは田中からの説明を受けながら横須賀の町並みを眺める。

「これが日本の都市……………」

海上から見える舞鶴港は、彼らからすればとんでもないくらいに発展しているように見える。

「この舞鶴港は国内において有数の規模を誇る港であります。ここには国内の産業を担う様々な工場や造船所が設けられ、我が国が保有する民間船や軍艦の少数がここで建造されています」

「測上殿、ここは随分と発展しているようだが、ここが日本国の首都なのかね？」

「いえ。我が国の首都は東京であり、ここは地方都市となります」

「なんと!？」

ヤゴウは地方都市でこれ程発展しているという説明にただ驚く。

普通地方都市は首都よりも開発や発展が遅れているというイメージを持っており、舞鶴港や舞鶴市街でこれ程発展しているのなら、東京はどのくらいの規模の町なのか、興味が湧き始める。

やがて、舞鶴港の棧橋に接舷したいずもを降りて、外務省から迎いの車に乗り込んだ使節団一行は、舞鶴港を離れ、警察車両に囲まれながら舞鶴港市内にあるホテルへと向かう

ホテルに到着しチェックインの後に、測上から今後の事についての説明を受ける。

「ええ、では明日の予定についてお話しします。明日の午前中は我が国の首都防空を担当する基地にて第1独立航空団の見学を行います。午後からは東京へ移動し、我が国の首相、佐山総理大臣と、各大臣との会談を予定しております。」

「ふ…… 渚上殿、我々に日本軍を見学させて頂けるのですか?」

「はい。我が国を知っていただくための重要な機会です。」

（本当は「あのお方」の命令なんだけどな……）

ハンキは元々日本軍の調査を担当しているので、渚上には日本軍の見学を依頼するつもりだったため手間が省けて良かったと安心する。

「以上が明日の予定になりますが、何か質問はございますか?」

「渚上殿、一つよろしいですか?」

「どうぞ。」

「明日の午後に予定されている貴国の首相は、どういった存在なのでしょう?」

「はい。我が国における総理大臣とは、国の政治における最高責任者であり、首相を筆頭とした政党を中心に国会が開かれ、日本国憲法が定める規定の下、国民投票で選ばれた様々な政党に属する議員が法律の制定や検討、国家戦略、予算について議論を行います。」

「共和制と民主制なのですね。して、総理大臣と言うのはこの国の王なのですか?」

「総理大臣は政治の最高責任者であり、我が国には『天皇陛下』と言う、所謂皇帝と言う

王の更に上の立場に居る方がおられるのです」

「その天皇と言うのは、政事には関与するのですか？」

「いいえ。およそ100年前の大日本帝国憲法と言う憲法では、天皇主権という制度があり、細かい説明は省きますが天皇に主権が集中していたのですが、敗戦後に発布された日本国憲法では、陛下は国の象徴と位置付けられ、陛下と皇族方は首相や国会の承認なしに国の国事行為以外では国政には携われなくなりました」

「つまり皇帝には、国政に携わる事を禁止している？」

「はい。陛下に国の主権が集中してしまえば、それを良いことに独断で暴走する者が現れてしまいます。かつて我が国もそれが原因で泥沼の戦いに引摺りこまれてしまった歴史がありましたから」

前世界において関東軍の暴走。陸軍海軍によるクーデターの連続発生。軍令部、参謀本部による統帥権の乱用。天皇陛下の裁可を無視した作戦。玉砕など挙げたら数え切れないほどの原因で敗戦した。

「佐山総理大臣が掲げる、恒久的な世界平和理論に基づいて、先ずは国民の意識改革。次に地球市民全員の意識を改革しようと活動されていました」

その活動によって得られた成果としては、

○常設国連軍の設立

○世界平和活動、紛争調停への大国の意思関係なしの積極的関与などが挙げられる。

「成る程……………佐山総理大臣は中々の政治家のようですね。明日に会えるのが楽しみです」

その後、使節団一行は細かい説明を受け、明日に備えて床についた。

日

使節団一行の姿は、岐阜県にある岐阜航空基地にあつた。

「おおーこれは……………」

使節団一行の目の前には、F-4Aコスモファルコンの姿があつた。

「ハンキ将軍。これは神聖ミリシアル帝国の天の浮舟と同じでは……………?」  
「確かに似ていますな……………」

(ジェット戦闘機を配備してる国があるのか……………)

測上はヤゴウ達の会話を聞き逃さなかつた。

「では、この機体について解説してもらいます」

淵上と交替して現れた、基地に所属する解説役の軍人（妖精ではない）がファルコンの説明に入る。

「では、このファルコンについてのご説明をさせていただきます。まずこの正式名称はF-4A。ファルコンと言う名は愛称です。このファルコンは我が国が宇宙空間戦闘のために開発した戦闘機であります。高度は燃料と搭乗員の体が持つほどこまでも、速度は大気圏内でマツハ7です」

「高度制限なし!?それとマツハというのは?」

「マツハというのは音の速さを表しています。この場合だと音の7倍位ですね」

ハンキは言葉がでなかった。

彼が知るワイバーンは出して350キロが限界で、高度1000メートルを過ぎると空気が薄く、温度が急激に下がるため、高高度での長時間の空中戦はベテランの龍騎士でもやらないのが普通である。

だが目の前のファルコンという鉄竜は、高高度性能と速度性能がワイバーンと比較にならない。

恐らく勝負に持つてくる前に、上昇して逃げられるのがオチである。いや勝負にすらならないだろう。

「そろそろ訓練飛行の時間です。ファルコンの飛行する場面をご覧ください。」

予め用意されていた来賓席に通される使節団一行は、目の前の滑走路に駐機されていたファルコンに目を向ける。

するとハンキがあることに気づく。

「!?」

「ハンキ將軍。どうされましたか?」

「あの鉄竜は女が操るのか?」

「ええ。まず我が第1独立飛行団は主に実験航空団として作られましたからね。で、あのパイロットは鳳翔さんです」

「どうして女の竜騎士を?」

「確かに我が国も最初は男性のみでしたが、女性登用の機運が高まり、我が軍も女性もパイロットになる道が開けました。しかしそれ以前に鳳翔さんは前世界で最初の航空母艦として作られましたから、操縦技量では国防軍航空隊の中でトップレベルです」

鳳翔が、操縦席に乗り込む。

鳳翔は昔を思い出していた。

西暦2028年 横須賀 郊外



鹿威しの音が鳴り響く中、1人の女性と1人の男性が座布団に座り、向かいあつていた。

一見普通に見えるが、中に入るとそれが間違いだつたと思ひ知らされる。

鳳翔の艦靈力が解放されているため、一般人はおろか、軍人でさえも倒れるだろう。

ここに白井が来てからずっと鳳翔は白井の目を見て、艦靈力をぶつけていたが、白井はそれをものともしない。

「で、何の御用でしようか」

鳳翔が口を開く。

「静かに余生を送れて何よりだ」

睨み合いが続く。

「は〜」

鳳翔がため息を吐くと艦靈力を、スツと収める。

「ありがとう。では早速これを」

ちやぶ台に紙を乗せる。

「お断りします」

紙を一瞥するなり鳳翔は問答無用で断つた。

その紙の内容は、『国防空軍第1独立飛行団への所属願』と記されていた。

「前にも言ったはずですよ。私はもう後世に語ることだけが仕事だと。もう私は軍用機に乗ることはできません。それがたとえ実験機だとしても」

鳳翔が話している中、白井は目を瞑ったままだった。

すると徐に目を開き話始める。

「空は嫌いになつたのか？」

「意地悪ですね……………嫌いになれるわけがないです」

「……………皆から、鳳翔のことを頼むように言われてることは知っているな？」

「はい。特に源田さんからですよ？」

「ああ……………もうすぐ60年か……………」

白井はお茶を飲む。

「うん。腕は落ちてないな」

と、満足そうに言った。

「さて。もう一度言う。君は第1独立飛行団に入るか？」

白井の気配が変わる。

「私は入るつもりはありません」

鳳翔も応じる。

「ふつ、頑固さは相変わらずか……………」

「それが私の取り柄だと思っておりますので」

再び白井がお茶を飲む。

「そうか……………君にこれを見て貰いたい」

「?……………!?。え?これって……………」

「赤城から渡された」

そこに書かれていたのは、赤城からの手紙だった。

「どうやら俺だけでなく、南雲様もお望みになられてるらしい」

赤城は防衛大学校で非常勤勤務員として勤めている。

「……………南雲さんが」

「鳳翔。君の腕をそのままにしておくのはもつたない。その気になれば戦闘機なり何なりをすぐにでも物にできるだろう。だが、実験機を乗り回した—」

鳳翔は源田らと並び、テストパイロットとして積極的に志願していた。

「—その実力は源田様だけではなく、一般人でも知られていた。今でもその評価は高い」

鳳翔は顔を伏せたままだった。

「鳳翔。お前にだけしかできないことをやれ」

その言葉にはっとする鳳翔。

「覚えてるだろ?」

「…………… 山本長官」

「それならいい。で、どうだ？」

鳳翔は顔を上げる。目には涙を浮かべていた。

「私をこんな顔にさせるのはあなただけです。白井」

「自慢にする」

「ふふふ…………… わかりました。引き受けましょう」

「ありがとうございます」

操縦席に乗り込み、鳳翔が機付きに合図を送る。機付きがミサイルの安全ピンを抜き、数を確認し、トレーに乗せる。

機付きが頷き、機体から離れる。

「Control Tower here for Scott Ol engine  
start permission (管制塔、こちらスコット01、エンジンスタートの許可を求めます)」

『This is control tower Scott Ol engine  
start is allowed (こちら管制塔、スコット01、エンジンスター  
を許可します)』

「Roger」

鳳翔は機体電源のスイッチを押す。

昔は、燃料タンクからエンジンに燃料を送るなど、始動までに時間がかかる物だったが、今はボタン一つでエンジンを始動させることができる。

チェック項目を一つ一つ確認する鳳翔。問題ないことを確認すると、管制塔に滑走路への移動許可を求める。

「Engine start is okay. Ask for permission to enter the runway. (エンジン始動よし。滑走路への進入許可を求めます)」

『Scott 01. Allow entry to the runway via taxiways 01 and 05 (スコット01。誘導路01、05経由での滑走路への進入を許可します)』

「Roger. Scott 01. Enter the runway via taxiways 01 and 05. (了解。スコット01、誘導路01、05経由で滑走路へ進入する)」

『I confirmed the repeat. here you go (復唱を確認しました。どうぞ)』

F-4Aの車輪止めが外され、キャノピーが閉じられると、F-4Aはゆつくりと自走し滑走路の端にある離陸位置につく。

鳳翔は酸素マスクをつけ、バイザーを下げる。

『スコット01。Start of mission』

「Roger」

一分後、F-4Aは離陸位置から一気に加速し、滑走路の中央辺りで機首を上に向けて離陸した。

「なんと言う上昇速度じゃ……………」

ハンキは空に向かって信じられない速度で上昇していくF-4Aに驚き、啞然となる。

やがてファルコンは空の彼方へと消えていった。

「……………」

ハンキは絶句する。

「ご覧ください！先程離陸したファルコンが戻ってきます」

「え？もうなのか？」

上昇し姿が見えなくなっていたファルコンが降下しながら戻ってくると、時速700

キロ近い速度で飛行場上空で大きく旋回しつつ、左右へのロール回転や急旋回、急上昇といった飛行技術を披露する。

「あんな動きもできるのだな……………」

「はい。では次に射撃訓練に入ります。滑走路の北にある標的をご覧ください」

示された方向を見ると、巨大な一枚の鉄板があった。鉄板の真ん中には大きく目玉のような模様が描かれている。

待機していたファルコンは標的に向かって機首を向け、ギリギリまで接近すると、機首から25mm機関砲に装填された曳光弾が飛び出し、標的に命中する。

「それでは標的をご覧ください」

モニターに映された標的を見るとハンキは愕然とした。

（こんな分厚い鉄板に大きな穴が……………）

25mm機関砲は、分厚い鉄板を易々と貫通していた。

（日本国の力恐るべし。もしあのファルコンと我が国のワイバーンが戦えば間違いなく敗北だ……………）

ヤゴウの脳裏には、ファルコンに撃墜されていくワイバーンの姿が写った。それと同じに二人は日本国とは敵対してはならないと直感した。

（これは…………… 本腰で掛からないと、我が国の未来と運命を左右しかねない）

日本国 帝都東京 首相官邸

岐阜基地での見学を終えた使節団一行は、再び警察車両に囲まれながら迎えの車にて首相官邸へと訪れていた。

ヤゴウら使節団は首相官邸内の会議室へと通され、充てがわれた席へと座り、会談相手である佐山らを待つていた。

「ヤゴウ殿、貴方は日本国の佐山総理大臣をどんな人物だと考える？」

「はい。昨日、渚上殿から教えられた通りの人物なら、恐らく相当に優秀な政治家であると考えられます。なにせ、世界平和のために動いていらしたのですから」

「うむ……………」

2人は佐山がどのような人物で、どのような人柄なのか、殆ど口頭での説明でしか知らされていないため、緊張で汗しか流れない。

そこへドアをノックする音が聞こえ、ヤゴウ、ハンキ、使節団一行は姿勢を整える。

そしてドアが開かれると、茶色いスーツを着こなした比較的若い男が入ってくる。

「クワ・トイネ公国使節団の皆さん、遅くなつて申し訳ありません。私が日本国首相の佐山です。今回はどうぞよろしくお願いします」

使節団は佐山の優しい雰囲気と、何処か堂々としている姿を見て少しだけ安心する。



「皆さん、どうか緊張なさらずに楽にしてください」

「は、はい。御気遣いありがとうございます」

佐山に促されヤゴウは肩の力を抜く。

「では、早速ですが、両国にとつて初となる会談を始めましょう」

向かい側の席に座つた佐山を含めた各省庁のトップ達は早速、ヤゴウ達との歴史的な会談を開始する。

先ずはクワ・トイネ公国との交易と国交樹立に関する協議が始められる。

「まず貴国は農業が盛んな国だと伺つております。我が国の食料自給率は98%と比較的高い傾向なのですが、天然食料と、合成食料を合わせた数となっているのです。しかし、加工食品として利用できるものは少ない……よつて貴国から早急に食料を輸入したいのです」

「我が国は神のご加護により国内の土地は放つておいても農作物が生え、国民全員がタダで美味しい食料を手に入れる事ができ、家畜にさえも質の良いエサが与えられるのです」

「それは凄い！国民全てがタダで食事を摂る事が出来るとは……」

遠山農林水産相が何か小言をブツブツ言っている。

「我が国としましては国民を飢えさせないために早急に貴国と国交を結びたいと考えて

います。勿論、タダでは言いません。それに見合う対価もお支払いいたします。如何でしょうか？」

宇治和外務相は輸入品目と輸入数が細かく書かれた書類を手渡す。それを見たヤゴウは少し難しい表情となる。

「そうですね……………正直我々もここに書かれている品目の多さには少し戸惑っています。リストの中には聞いた事のない物もありますし、もしそれらを除く代替品でよろしければ我が国は……………貴国が欲している分を全てを賄う事ができますよ」

ヤゴウの言葉に農林水産省や外務省、国防省などの代表達はざわめく。

「ただし……………ただしですよ、これ程の量を輸出するにしても、それを定期的に、尚且つ安定して運び出すだけの資材や設備を我が国は保有しておりません」

つまりそれさえ解決すれば問題ないと言うことだ。

外務省関係者、国防省関係者が笑みを浮かべる。

「成る程。分かりました。我が国はそれらの設備に関する全ての技術援助を貴国に輸出いたします。我が国からは穀倉地帯における資材運搬用に鉄道を整備し、品物を輸出するための港湾設備の整備については我が国が全て引き受けます」

ODAの実施である。議会を通さないといけませんが、反対するものはいないだろう。

これを聞いたヤゴウとハンキは国内が一気に近代化し、国が更に栄える未来が見え

た。

「我が国は国交を結んで頂いた貴国に対して最大限の援助をお約束いたします」

「佐山総理！ありがとうございます！では今回の件については私どもが責任を持って首相にお伝えします！」

「ありがとうございます。これで我が国は救われました。貴国には感謝をしてもしきれません」

この日より一週間後の10月29日、日本とクワ・トイネ、更に石油大国のクイラとの3国間で正式に国交が樹立された。

この国交樹立を記念して、日本国内では異世界国家との初の国交締結。条約締結であることから、『ファースト条約』と呼ばれるようになった。

転移後の混乱を水に流すかのように、日本国からクワ・トイネとクイラ王国のインフラ整備に向いた各分野を得意とする会社が国防軍の護衛の元、インフラ整備を開始し、不眠不休の努力の末に、11月の終わり頃には鉄道と港湾設備、石油採掘プラントの整備が完了し、12月初旬より日本の貿易会社所有の石油資源や食料品を積載した貨物船が両国間を行き交うようになった。



## 不穩

日本とクワ・トイネとの国交成立から一ヶ月近くが経過し、既に両国との間では民間に限った交流が始まっていた。

特に盛んなのが技術交流だ。日本は『技術流出防止法』を制定。しかしその法律の許す限りの、また民間技術、書店からの本から、クワ・トイネとクイラの両国は日本から輸入した科学技術を応用し、拾得した技術を基に自国の発展に生かしつつあった。

経済都市マイハークの町は以前とは打って変わり、道路整備と鉄道整備が進み、穀倉地帯から首都へと続く町にある駅には資材や食料品を積載した電動機関車が行き交い、アスファルトで塗りがためられた道路にはトラックやバイク、馬車が頻繁に行き交う姿が見受けられる。

無論、クイラにもクワ・トイネから鉄道を使って石油や鉱物資源の運び出しや、食料品が運び込まれた。そのため、クイラは建国以来の好景気に沸いていた。

しかし、その好景気を喜びつつも浮かない顔をしている者もいた。

西暦2049年 1月9日 日本国首相官邸 総理執務室

執務室に明らかな不機嫌オーラを放出している者が1人。

「で、新年早々何の用？」

「うっさい。総理だから休みなんて存在しねえ」

「は〜」

佐山と白井のやり取りを呆れながら聞く箕輪私設秘書。

「それで、報告したいことって何？」

お喋りはここままでと言わんばかりの気迫で話す佐山。

「これを見てください。いや、見ろ」

端末を佐山に見せる白井。

「ん？」

「パーパルディア皇国は知ってるよな？」

「確かフェン王国とクワ・トイネ公国からの情報があった国か」

「ロウリア王国も知ってるよな？」

「門前払いされた国か……………」

「ああ、そのロウリア王国から出港を確認されたパーパルディア皇国籍の船を確認した」

「で？」

「で、MQ―5リーパーからの写真だ」

そこには鱗を持った異世界生物の―

「ワイバーンか……………」

の姿があつた。

「クワ・トイネ公国からの情報だとロウリア王国はここ最近急速に勢力を増したらしい」

「つまり？」

「パーパルディア公国からの軍事支援があると見て間違いない」

佐山はロウリアの背後関係に頭を悩ます。

「パーパルディア皇国は要注意国家としてマーク。荒米、背後関係を特定しろ」

「わかりました」

荒米情報庁長官が返事をする。

「広瀬。戦争になった場合どうする？」

「なぜ俺に聞く？」

「一応大臣だろ？」

「飾りのな。白井説明頼む」

広瀬は白井に投げる。

「えーと。まず国連軍に紛争調停、もしくは平和維持派遣の名目でうちと一緒に参戦という形にする」

「つまり遅れて参戦するということか……………」

「国連とは刷り込みが終わってるんだろ？とつとと話せや」

「おかしいな。会谈の内容は誰にも知らないはずなのに？」

白井はポケットから何かを取り出す。

「……………盗聴器か」

「ザルだから助かる。おかげで何もかも聞いたよ」

「あの……………」

たまりかねず箕輪が口を挟む。

「どうやって盗聴器を？定期的に警察、保安隊が検査してるはずですが……………」

「甘いね。俺の人脈舐めんなよ」

箕輪の額に青筋が浮かぶ。

「あなたを警察に通報できますけど？」

「どうぞ自由」



「くっ……………」

「そこまで。白井、盗聴器を撤去しとくように」

「一触即発の空気を佐山が一言声を掛け鎮める。」

「はい」

「で、話を戻すが、国連にほぼ丸投げでいいのか?」

「ああ。国連海軍第1艦隊旧アメリカ第7艦隊と国連海兵隊第100混成旅団にうちの先遣隊として第一戦隊、第1潜水艦隊、第7機動部隊、第1駆逐隊。陸軍は第7機甲師団、第2重機械化師団。空軍は各航空団からAS-2ハヤブサと、F-4A。そこにBP-1、AP-1を派遣する」

先遣隊の規模……………海軍艦船はおよそ50近くという、ある意味多国籍軍艦艇が、陸は日本国防陸軍から、第2重機械化師団―約9000名。第7機甲師団―約9000名。そして国連から海兵隊第100混成旅団―約4000。第2水陸機動団―2000名。空軍はまだ概算なので正確ではないが、60機近くの空軍機が参加する。何考えてるの?と思っただ方拳手。

「というか、先陣を切るのは第7機甲師団が持ち前の機動力、装甲化、ヘリコプター、航空機の支援のもと殴り込みをかける算段だ。国連は後詰に過ぎない。」

「うちの精鋭を送るのか?」

佐山が気になるところはそこだった。第7機甲師団、自衛隊から続く、最強の打撃力、機動力を保有している。第2重機械化師団、師団装備改編に伴い重機械化師団へと変貌したが、自衛隊から続く最精鋭部隊だ。

本土防衛に問題はない。海上部隊はおよそ一個機動部隊、一個戦隊、一個潜水艦隊がいなくなるが、十一艦隊計画は伊達ではない。3個艦隊がなくなるが残りの艦隊、地方隊がいるので問題ない。

「備え有ればなんとかだ。補給は問題ない。クワ・トイネ公国にうちの分屯地があるがそこに3ヶ月分の弾薬燃料を備蓄済み」

「後は待つのみか……………」

すると白井の端末が鳴る。

「すまん」

「そのままでもいい」

白井は席を外そうとしたが佐山に止められる。

「どうした……………ふー。了解した」

電話を切る。

「なんだって?」

「いい報告と悪い報告がある——」

「いい方から」

白井が言い切る前に口を挟む佐山。

「そうか……………まず惑星、世界地図が完成した」

「そうか」

「で、悪い報告はクワ・トイネ公国から謎の電文の発信が確認された」

箕輪がそのどこのどこのか分からず質問する。

「そのどこのどこのか悪いのですか？」

「うーむ。異世界国家各国からの情報だ。この世界は魔法を基礎として成り立っている。しかしその世界にうちらと同じ科学文明を有して国……………オカルトが喜びそうな話だったが、ムー共和国という国は科学文明で成り立っているらしい。ただ第1次世界大戦のイギリスレベルだが……………」

「WW1なら電信技術はそれなりに発達してるんじゃないか？」

広瀬が疑問を出す。

「そうなんだが……………その電信、D暗号が使われてるらしい」

「D、暗号？なんですかそれ？」

箕輪がわけわからんに聞く。

「D暗号。第2次大戦当時、日本軍が使用してた暗号だ。陸軍海軍で少し差異はあった

らしいが……それはD暗号本体か？ 発展系ではなくて？」

荒米情報庁長官が説明する。

「D暗号本体だ。まあ優秀な暗号だが、使用頻度が多すぎると簡単に解けてしまう一長

一短のような暗号だったがな……荒米、D暗号の資料残ってる？」

「残ってるといいな」

荒米の返事は残ってないという意味だ。

「は。話を戻すが……これを」

白井が箕輪に部屋のブラインダーを下げるように合図する。

部屋のブラインダーが下がり、部屋が少し暗くなる。

白井が目の前の端末を少し操作し、メインモニターに画像を表示する。

そこには……

「なんじゃこれ？ いやロシア語……？ グラ・バルカス帝国か？」

「しかもそのあとが問題だ。宛て『グラ・バルカス情報局』」

「ふむ……」

「まあはつきり言つてこの国の素性は全く不明。後回しでいいと思う。ただ、この発信

源だけは後で潰す」

白井の言葉に数人体が震える。それだけ白井の言葉に覇気があったのだ。

「程々にな」

コンコンコン

執務室のドアがノックされる。

「どうぞで」

佐山が入室を促すと扉が開き郡山政務秘書官が話し始める。

「ジエームズ・ファイパー様をお連れしました」

「うむ。ご苦労」

「こんにちは、佐山総理」

「こんにちは、ジエームズ司令」

ジエームズと握手をしながら挨拶する佐山。

「まず結果をお伝えします」

座りながら話始めるジエームズ。

「結論は、我が軍は派遣を決定しました」

「理由をお聞かせ願いますか?」

するとジエームズは少し笑ったのち話始める。

「佐山総理。敬語は要りません。私たちの存在はあなたによって作られたと言っても過

言ではありません」

「…………… 我が軍は国連憲章、道義的判断により派兵します」

「ありがとう」

「いえいえ…………… ただーつ望みが」

「なんでしよう？」

「我が軍は、いや国連は日本に存在しながらも準独立機関としての権限を与えて欲しい」

佐山は悩む。与えれば反乱を起こす可能性も否定できない。

佐山はジェームズの目を見る。青色の瞳、純血アメリカの血を引いてるのがわかる。

（反乱を起こすつもりは毛頭ない。権限は国連としての存在意義を保持するためか……………）

「わかった。国連関係機関を統合し、各国大使を国連大使として…………… 第2の国連を

作りましょう」

ジェームズは目を開く。正気か？、と。国連の運営資金は日本が全額負担することになる。しかしこれ以上ないほどのうまい話だ。

「想像以上の慈悲です。では貴国の混乱が収まり次第話を詰めましょう」

「わかった」

ジェームズは一礼すると執務室から出て行く。

「驚いてましたな」

荒米が言う。

「糸川が聞いたら真つ先に反対するだろうな」

「まあ反対するのは真に国のことを思ってるからな」

佐山は手を2回叩く。

「さあ、今日の秘密会はここまで。各自自分の案件に対処するように」

執務室にいる全員が各々の返事をする。

「箕輪。この後の予定なんだっけ？」

箕輪は手帳を見てすぐに返事をする。

「えーと。経済連との食事会があります。その後幹事長との会談」

「—うげ、あの野郎と……………」

「それ、幹事長が聞いたら何をしでかすかわかりませんよ」

「言うだけならタダだ」

「あなたのその凶太さは尊敬しますよ……………」

「ありがとう」

「褒めてませんって」

「さあ仕事だ」

佐山は気を少し引き締めて執務室から出た。

中央暦1635年 ムー共和国 オタハイト

こじんまりとした部屋に20歳ぐらいの若い男と50歳ぐらいの初老の男が、机を挟み、話していた。

机の上には魔写がある。この魔写は先日神聖ミシリアル帝国天文観測所で撮影されたものだった。

「私から見ると明らかに艦です」

そう話すのはマイラス・ルクレール少尉。ムー軍で歴代最優秀と言われている逸材だ。

「そうか………しかしこれは明らかに宇宙を飛んでいる。伝承の魔法帝国の僕の星なのではないのか？」

そう言ったのはマイラスの上司、ウルゲン・ハイル大佐であった。

「宇宙空間で艦を浮かばせるなどできないですからね………しかしこの出所はミシリアル帝国政府中枢からですよ？欺瞞情報を掴ませるようなことは低いと思いません」

「は。仕方ない、これはどうしようも無い、次回しにしよう」



ウルゲンは解析すらできないため柵上げにした。

「最近パーパルディア皇国がロウリア王国に軍事支援を行っていることは知っているな？」

「はい……………ですが国としてではなくある機関が独断でやっているとか？」

軍事支援を行うことは知ってるとしても、どの機関が、または国が行っているのか特定できたのはさすがムーだと言えるだろう。

「まあその話は関係ないんだがな」

マイラスはずつこける。てつきりどのような軍事支援内容を調べてきた諜報員からの報告の分析を頼まれると思っていたからだ。

「クワ・トイネ公国。ロウリア王国と緊張状態にある国だが妙な存在を確認された」

「妙な？」

「クワ・トイネ公国と新たに国交を結んだ国、新興国家日本というそうだが……………どうやら我が国の技術レベルを遥かに上回っているらしい」

ウルゲンが言った、『技術レベル』とは、魔法などではなく、科学技術レベルの意味である。

「なっ?!最近噂のグラ・バルカス帝国でさえ我が国を上回るというのに……………」

グラ・バルカスの存在を確認されたのはつい最近だ。第2文明圏のさらに西の西方国

家群が容赦なく併呑されているという噂だ。奇跡的に得られた情報によると、技術格差はおよそ30年あるとされている。しかし、まだ全貌が明らかになっていないわけではないので、変動するだろうが。

「よってマイラス君。君はアルタラス王国経由でクワ・トイネ公国に入り、日本国に関する情報入手せよ」

「はっ」

(面倒な事になってきた……………)

2人の思いは共通していた。

2ヶ月後

マイハーク 日本大使館

「仙崎大使、ヤゴウ様が至急お会いしたいとの事で、応接間に来て頂けないでしょうか？」

マイ・ハーク近郊に設けられた日本大使館で、仙崎は突然の来客者に驚きつつもヤゴウと会う。

「その節はお世話になりましたヤゴウさん。何やら火急の用事があるとお聞きました

が？」

「はい……………隣国のロウリア王国についてはご存じでしょうか？」

「ええ。我が国もロウリア王国に接触を図っているのですが、中々我々には応じてくれないようでした。それが如何したのです？」

「我が国とロウリア王国の軍勢の動きが最近活発しているようで、ロウリア王国軍が我が国への侵攻を見越した準備を開始しているとの情報が入ったのです」

不穏な話題に仙崎の表情が険しくなる。

「程なくして我が国はロウリアとの戦争になるかもしれません……………そうなった場合、都市のいくつかを放棄しなければならぬでしょう。その都市の中には貴国に輸出する穀物を作っている穀倉地帯も含まれているのです。もしそこがロウリアに押さえられれば、貴国への輸出は……………」

「……………まで来て……………何と言う事だ……………」

仙崎は齒を食い縛り、せっかくの努力が水の泡になりかねない事態に曇った表情となる。

「私は貴国で見せていただいた光景を片時も忘れた事はありません。仙崎さん！」

ヤゴウは仙崎に詰め寄り、真剣な表情で訴える。

「貴国から援軍をお願ひします！」

「それは…………… 軍事支援要請と言う事でよろしいですか？」

「はい」

仙崎は目を閉じて考える。

(最近本国の戦力転換が激しいと報告があつたな…………… これはまさか……………)  
仙崎はある可能性にたどり着く。

(本国は戦争参戦に躊躇いはないということか…………… 根拠が乏しいがそれになぞらえるようにしよう。後は派遣の口実作りか…………… クワ・トイネ公国に万が一の責任を取ってもらう事になるが仕方ない)

その場でヤゴウに仙崎は返事を出す。

「ヤゴウさん。援軍の件につきましては、私が責任を持つて本国に届けます」  
「本当ですかっ!!」

「はい。ですがおそらく本国は口実を欲しているはずですよ」

「口実、ですか……………」

「はい。その口実、軍事支援要請を文書にて送ってもらいたいのです」

「その程度で貴国からも支援が得られるなら文書くらい安い物ですよ」

「ありがとうございます」

その日のうちに、クワ・トイネ公国からの要請は日本の佐山の元へと届けられた。

同日 首相官邸 大会議室

「現地大使館からです。『クワ・トイネ公国からの軍事支援要請』、内容は総理の予想通りです」

宇治和外務相が報告する。

「広瀬。待機中の全部隊に行動開始を下命。『世論、議会は一切気にするな。法律、国際条約範囲内なら何しても構わない』と。全責任は私にある」

「まあ、そこまでは言わないけどね。白井、待機中の部隊に通信、『異世界の夜明けは東から』と」

「了解」

日本国 奥尻基地

ここ、北の島にある港を母港としてるのは第1戦隊、第3護衛艦隊、第8遠征打撃軍の3個艦隊である。

そして奥尻島にある3本の滑走路を備えた基地は第3護衛艦隊第3空母航空団、第3

空母ヘリコプター団。空軍の第1航空大隊が本拠地としてる。

そして山の麓にある駐屯地は第2水陸機動団、第2高射特化部隊の駐在地となっている。

第3護衛艦隊旗艦『そうりゆう』FIC

「『異界の夜明けは東から』ね。作戦名は『森の盾』？。絶対総隊司令だ………何このダサイ作戦名は………」

「藤堂司令、あんまり総隊司令の悪口を言うと、司令の耳に入りますよ」

第3護衛艦隊司令の藤堂咲に警告したのはそうりゆうだ。

「あの人、どこからともなく情報を仕入れてきますからね」

「おー怖い怖い」

全く怖気付いてる様子のない藤堂。

「ふふふ。さあ出港しましょう」

「錨上げ!!」

投錨されていた左舷の錨が巻き上げられる。

「舳い上げ!」

舳が巻き取られる。

「誘導舫、放て！」

誘導舫がタグボートに向けて投げられる。

出港の準備が整う。

「さあ元氣にお願いな」

「任せてください」

「すー。出港用意！」

航海長妖精が声を張り上げる。

それに合わせて航海士妖精が見事な出港ラツパを鳴らす。

『出港用意!!』

港に響く出港用意の声。

出港ラツパは、機械による音声再生に変わろうとしていたが、護衛艦勤務の隊員全員

が反対。

誰もが旧海軍、旧自衛隊時代からの伝統を変えたくなかったのである。

「両舷前進最微速！」

「両舷前進最微速。黒5」

航海士がテレグラフィレバーを『最微』まで上げる。

「艦隊合流地点まで5km」

「第1戦隊を確認」

「両舷第3戦速。黒20」

「両舷第3戦速。黒20」

テレグラフィバーをさらに上げる。

「第1戦隊、艦隊前衛に就きます」

航海士が『ながと』を見ながら報告する。朝日を浴びながら航行する『ながと』の姿は美しかった。

「艦隊速度全艦連動。第2戦速」

「第2戦速。黒10。全艦連動」

第1戦隊、第3護衛艦隊、第8遠征打撃軍は朝日を浴びながらクワ・トイネ公国を支援するために向かう。

2日後 マイハーク沖 マイハーク人工島

マイハーク港の沖合5kmに日本が作った人工島がある。その人工島のほぼ中心部に今回の派遣部隊司令部があった。

「第8遠征打撃軍は第2水陸機動団の揚陸作業を開始しました。終了予定時刻は150



0です。すでに国連軍海兵隊第100混成旅団は揚陸終了。空軍戦闘機、攻撃機、爆撃機、早期警戒機の計65機はすでにクワ・トイネ公国のエジエイ基地にて待機中。海軍の第3護衛艦隊、第7機動部隊、第1駆逐隊、第1潜水艦隊が遊弋中です」

「しかし……………なぜこんな大規模派兵になったんだ？2個師団2個旅団つて……………まあ考えても仕方ない」

「それにしても、国連軍は面白いですね」

「何がだ？」

「こう、かなりの多国籍、自国製なのに弾薬燃料は全て共通化されてますからね」

彼の1番のお気に入りドイツのレオパルト2A8がお気に入りであった。

「まあその費用は日本持ちだけだな」

そう、全て日本持ちである。もう一度言おう。全額負担である。

「まあ予算は財務省だ。うちには関係ない」

話が脱線しているので猪瀬高級参謀が咳払いをする。

「ゴホン！。話を戻します。現在、稼働可能なヘリ、輸送機は全てギムの避難輸送に充てています。現在の避難状況は全体の0.5割が完了したとのこと。車両部隊が到着すれば効率は良くなるはずですが……………なんとも……………」

派遣部隊司令官『小野大地』は顔を僅かにしかめる。

「まずいな。ロウリア王国軍が侵攻するまでおよそ5日だつて言うのに」

「時間稼ぎが必要です。自分は第2水陸機動団の第31機動連隊、第12空中機動大隊。国連軍海兵隊第100混成旅団は揚陸を終了しています。早急に向かわせるべきだと………」

小野は横にいたアメリカ人、UN海兵隊第100混成旅団参謀のカール・シュナイダーを見る。

カールはすぐに答える。

「我が隊は既に準備を整えています。命令が有ればすぐに動けます」

え？なぜ国連軍が日本軍の指揮下にあるつて？さつきも言っただろう、国連軍の資金は全て日本が負担していると。もう一度言おう。全額負担である。

しかし、今回の件は国連軍が自ら望んで指揮下に入ったと言うのが正しい。この判断は国連軍アジア司令部司令官ジェームズの判断だ。なぜ？まず彼の個人的動機。彼は日本に救われたからである。これは後々解説する。そして組織の目的。自分たちが食つてけるのは日本が生活資金、燃料など、元々の負担に加えて更に自分達を保護するために金を払っているのだ。つまり………。食客としての務めを果てす………ということである。

「わかりました。貴隊はすぐにギムに向かい避難民輸送任務に当たってください」

「了解」

「ふー。予定通りだがー」

小野は顔の表情をキツと引き締める。

「戦争は予定を狂わす……………気を引き締めないと……………」

小野は職務を遂行する。

同日

国連軍海兵隊第100混成旅団の移動の様子を見ている男の姿があった。

「なんだあれは!?プロペラが上に付いてる!?それにあれは戦車か?我が国の戦車よりも遥かに大きい。というか設計思想が全く違う……………!?それに形も大きさも全然違う

!?実験部隊か?……………主砲はざつと120mmはあるか?」

マイラスはレオパルト2A8、T-14、M1H2を見てそう言った。

「あんなのとうちの陸軍が戦つたらー」

「手も足も出ずに敗北する。でしょ?」

「えっ!?」

当然の声にマイラスは振り向こうとするが、体を後ろから押し倒され動きを封じられ

る。

マイラスが首を動かし顔を見ようとするが逆光のせいで見えない。しかし髪が長いことから女だと判断した。

マイラスがもがこうとすると、

ガチャ！

背中に金属音を鳴らしながら何かを押しつけられる。

(銃!?)

マイラスは驚愕する。

銃という銃を軍で正式採用しているのは神聖ミリシアル帝国とムー共和国しか採用していない。

最近はいパーパルディア王国がマスケット銃の開発に成功したとの噂を聞いたがレベルが違う。

「へー。お兄さんいいもの持ってんじゃん。カメラ？にしてはやたらアクセサリ……」  
あ、これ魔法写真だっけ？の奴か……」

マイラスは考えに夢中でバックの中を探られたことに気づかなかつた。

「あ、銃じゃん」

懐にしまつてあつた拳銃を抜き取られる。

「設計思想はイギリスっぽいね……………あなたこの人間じゃないわね？」  
「……………」

「沈黙は肯定とみなします」

「うげっ！」

マイラスは突然首根っこを掴まれて持ち上げられる。そこでその女性の美貌が明らかになる。

「!？」

ブラウンの髪に特徴的なアホ毛、背中まで伸ばした髪。そしてブルーの瞳。人間離れた容姿だった。そしてマイラスの視線は……………。

パシィィィィィン!!!

「どこ見てんのよ……………」

マイラスはこんごうの胸部装甲を見て、こんごうから平手打ちを喰らった。

「こんごう。何をやってるんだ……………」

後ろから複数の声が聞こえてきた。マイラスが首を後ろに振り向けようとする前に、首根っこを掴まれていた手を離され地面に倒れる。マイラスはすぐに起き上がりその声の正体を確かめる。

屈強そうな男が数人立っていた。その手には見たことのない銃が握られていた。

「これ」

こんごうが左手に持っていた拳銃を渡す。屈強そうな男がそれを一瞥すると、  
 「ウェブリー・リボルバー。イギリス製……………兄ちゃんの服装、繊維からすると、WW  
 1のイギリスレベルか?……………おい」  
 マイラスは聴き慣れない単語に耳を傾けていたが突然呼ばれて体をビクツと震わせる。

「お前、ムーの人間か……………」

一瞬で答えにたどり着かれたことに驚愕するマイラス。だが答えを言うわけにはい  
 かない。

「……………」

「素人でも諜報員か……………よしこんごう。小野司令から『のぞき見るものは排除』と  
 いう命令に従ってー」

「ひっ!!!」

「ーん?」

するとマイラスが土下座する。

「すいませんでした!!私にはムー共和国総括軍情報局員のマイラス・ルクレール少尉です  
 !!目的は貴方達の軍の偵察です!!!」

と全てを白状した。マイラスの体は震えている。

「お前、軍人というより技術畑の人間か……。あの白に塗られた車両を見てどう

思った？」

屈強そうな男が指を指しながらマイラスに聞く。

「……少なくとも100年の差はあるように見えた。だが陸軍では負けてるが海

軍にはラ……」

マイラスは内心、『あ、やべ』と思っていた。ついカツとなって自国の情報を話してし

まっていた。

「ラ？」

「……」

マイラスは黙ることで抵抗の意思を示す。

「はあ、もういい。こんごう、小野司令がお呼びだ」

「了解」

こんごうは敬礼すると駆け足でどこかに行く。

「さて、兄ちゃん。彼女に一目惚れしたそうだが……やめといた方がいいぞ」

「え？それってふごっつ!!」

マイラスは聞き返そうとしたが麻酔銃を撃たれ、眠りについてしまう。

「よし、連れてけ」

「うい」

眠ったマイラスを担いで運んでいく。

「この世界の列強、ムー共和国が目をつけてきた……………面白いことになってくるな……………」

『こちら alpha 05、感度チエック』

不意に圧縮音声越しに声が聞こえてきた。

「こちら alpha 01、感度良好。どうした?」

『ターゲットポジジョン A-2-6 の諜報員を4人確保しました。ロシア語を話しています…………… 総隊司令の読みは正しかったですね、一ノ瀬1尉』

一ノ瀬は髪をガリガリと掻きながら返事をする。

「無駄口を叩くな。と言いたるところだが、まあその通りだ。こっちに搬送しろ」

『了解』

一ノ瀬は懐から写真を取り出すと、それを優しく撫でる。情勢は水面下で動き始めていた。



# 侵攻阻止

中央歴1635年 クワ・トイネ公国

あぜ道を土煙を巻き上げながら猛スピードで駆け抜ける車両の姿があった。

その車両は、全てが白色の塗装を施され、各所に『UN』と書かれていた。先頭を走るLAV-25の車内で話している者がいた。

「隊長、なぜ全速力で向かうのですか？向こうに着く前に燃料切れになる可能性もありますか………」

運転手の疑問に車長は、

「統合司令部の命令は『後を考えるな。民間人避難を最優先とせよ』だ。それに燃料は向こうで補給できる」

「ですがあのエイブラムスの改良型は燃費が良くなりましたね」

運転手は画面に移されている映像を見ながら言った。エイブラムス、主はこう思う。燃費悪すぎ、と。何しろ停止状態で何リットルの燃料を消費したと思う？約46リットルもの燃料を消費するのである。うん、いくらあのデカブツを動かす為とはいえ、ガス

タービンを採用したのが原因だね。

『Ob, s s t . r m t o d e r s c h n e i t』

ふと無線から歌が聞こえてきた。

どうやらレオ乗組員がパンツァーリートを歌っているようである。

「楽しそうですね」

「俺らも歌うか？」

「遠慮します」

国連軍海兵隊第100混成旅団は、ドイツ人が歌う『パンツァーリート』をBGMにギムヘ向かった。

マイハーク近郊の海岸

ここで日本国国防軍の輸送艦3隻と国連海軍の強襲揚陸艦2隻が第2水陸機動団の揚陸作業を行っていた。

L C A C が陸まで上がり、戦車や装甲車、人員を吐き出していく。揚陸された部隊は離れた位置で整列している。その中のうちの1両、30式指揮通信車の中で話し合っている人物がいた。

第2水陸機動団所属の2尉妖精が指揮通信車の扉を開けて入り、作業をしている団長に向かって報告する。

「失礼します。高野団長、現在部隊の8割の揚陸が完了。引き続き作業に当たります」

「そうか……この調子だと夕方に終わるかな？」

「はい。予定だと1750に終了です」

「そうか、事故に気をつけて」

「了解」

指揮通信車から出ていく2尉妖精を見送りながら時計を見る高野。

「この調子だと向こうに着くのはギリギリか……それまで頼むぞ、国連軍」

高野はディスプレイに表示されている国連軍海兵隊第100混成旅団のマークを見ながら言った。

マイハーク人工島 統合司令部

統合司令部は先ほどからざわめきに包まれていた。その理由は……

「まずいぞ。このままじゃ避難が間に合わない……」

彼らの前にあるディスプレイに表示されていたのは、第7機動部隊の早期警戒偵察機

E―8Jがリアルタイムで送信している、国境付近に集結しつつあるロウリア軍の姿だ。

「隠すつもりもない…………… それだけ自信があるってことか……………」

小野の呟きに、

「まあそうでしょう。日本が参戦しなければ圧倒的な戦力ですからね」

と参謀は同意した。

「現在の避難状況は？」

参謀は自分の端末を見ながら説明する。

「現在、6割の避難を完了しました…………… 間に合うかはギリギリです……………」

「第100混成旅団が向かってるが、多勢に無勢か……………」

「はい……………」

「司令。こちらを……………」

そう言い、写真を見せる。

「ん？ああ、例の諜報員か……………」

「はい。こんごう艦長が発見し、特殊作戦群が連行したとのことす」

「まあ、こんごうさんはS入隊資格どころか、そのSから訓練を受けていたらしいからね…………… これぐらいは朝飯前だろう。で、そのこんごうは？」

「すでに自艦のヘリで戻っています」

「了解した」

「失礼します!!!」

参謀妖精が声を張り上げる。

「第2水陸機動団の揚陸が終了しました」

「よし。第2水陸機動団に下命。『ギムに向かい、ロウリア軍の侵攻を阻止せよ』と」

「了解」

統合司令部の命令は第2水陸機動団に適切に伝えられた。

「これでなんとか最低限の戦力は確保できた。後は任せよう」

第2水陸機動団は命令を受領し、全速力でギムへと向かった。

クワ・トイネ公国 ギム

国連軍海兵隊第100混成旅団はギムの入り口に着いた。街の入り口の警備をしている、日本国防軍隊員に止められる。

「強行軍お疲れ様です。第100混成旅団ですね?」

先頭のLAV-25の車長が代表して部隊証を渡す。部隊証を受け取った隊員はそ

れを腕に付いているデバイスにかざし、認証する。認証を終えた隊員はそれを車長に戻す。

「問題ありません。任務頑張ってください！」

隊員は敬礼すると車止めをどかすように指示する。車止めをずらされたことを確認すると車列は進み出す。

『各車、所定の位置に付け、車両部隊は国防軍と合流し避難民搬送に協力。それ以外は国防軍が拵えてくれた陣地に配置だ』

戦車、装甲車などが配置につく。

「後は待つだけだ……………」

第100混成旅団団長は少ない戦力で40万もの勢力を相手取することに恐怖を覚える。

ロウリア王国侵攻軍 本陣

「ヒヒヒ、亜人共をいたぶることができるまで後少し…………… ヒヒッ」

獐猛な笑みを浮かべながら独り言を話す者が1人。彼の名はアテム。ロウリア王国軍の中でも人格が最悪な将軍とされている。

「楽しみですねぇ」

「アダム君、想像するのは勝手だが、場を弁えたまえ」

そのアダムを注意したのは今回の侵攻軍の将軍『ジューンフィルア』だ。

「おっと…………… 申し訳ありませんでした」

アダムはジューンフィルアの注意を受けて謝罪する。

（本当に面倒くさい男だ……………）

ジューンフィルアは、アダムの腐った性格にうんざりする。

「まあいい。抜かりないようにな」

「分かっております」

ジューンフィルアは地平線に沈みかけてる太陽を見た。

「なんだろう、嫌な予感がする……………」

この後起こる様子を頭に想像するアダムをよそに、ジューンフィルアは不吉な予感に身震いするのだった。

後日

ロウリア王国はクワ・トイネ公国、クイラ王国の両国に宣戦布告、戦争が始まった。

国境の町、ギムの避難状況は、不眠不休の搬送によつて8割が終了した。

ギム防衛戦力は国連軍海兵隊第100混成旅団、国防陸軍第7師団第34機動部隊、第10高射特化部隊のみである。

この僅かな戦力で敵軍40万の侵攻を、阻止とまでは行かないが、避難民の搬送が完了するまで時間を稼がないといけない。

「現在第2水陸機動団がこちらに急行していますが、まあ、会戦までには間に合わないでしょうな」

参謀がそう言った。

「エアカパーは空軍、海軍が行ってくれます。露払いは陸軍の高射特化部隊がするでしょうが……」

参謀達があればこれ言うが、つまりは誰にも予想ができない戦いになるということである。

「失礼します!! たった今、MQ-9リーパーのカメラが侵攻するロウリア軍を捉えまして!」

「モニターに出せ」

端末を操作し、ディスプレイに投影する。映像には大地を這いずる大蛇……

否、列を成すロウリア軍40万の姿が映った。



「うわー。これを相手取るんですか？」

「それ以外に選択肢はあるか？」

「ありません」

「よし、少ない戦力で時間を稼ぐぞ」

「『Yes sir!!』」

各班長の後ろ姿を見送ると、自身も配置につくためヘルメットを抱えて退出する。

## ダイダル基地

待機室で8人の隊員が思い思いに寛いでいた。突如、警報が鳴る。投影機に表示されたのは『SC』スクランブルと表示された。それを見た隊員と妖精は、椅子から飛び上がった。格納庫に走っていく。

「オラー!! さっさと飛ばすぞ!!」

機付き長が吠える。

AA M-4 (37式長距離誘導弾) 8発、AA M-5 (39式短距離誘導弾) 8発のミサイルの安全ピンを抜く。それを目視で確認した機付き長はトレーに乗せる。その間にパイロットはエンジンを始動させ、各種テスト項目を確認する。GPSだけがエ

ラーで返ってきた。

パイロットがキャノピーを閉める。

「外せ!!!」

機付きの合図で車輪止めが外される。それを確認したパイロットは機体をスルスルと移動させる。

『This is the control tower. Epoch 01, no aircraft scheduled to enter the runway. Allow takeoff as soon as you enter the runway. The current wind direction is and wind force is 2 knots from the east. (こちら管制塔。エポック01、滑走路に進入予定の機体はありません。滑走路に侵入次第離陸を許可します。現在の風向、風力は東から2ノットの風です)』

『This is Epoch 01, roger. Take off as soon as you enter the runway.』

F-4Aが滑走路に進入する。

『Epoch 01 Take off』

『Epoch 02 Take off』



「ゴキブリみたいに湧いて出てくる……………!!」

「自走防空車両 A Aがミサイルを発射!」

今度は空飛ぶトカゲが飛来する。A Aが近SAM、35m機関砲4基がハエ叩きのようにワイバーンを落とす。

しかし近SAMもすぐに撃ち尽くす。

「!?、レーダーに新たな反応……………来た!味方です!団長!航空支援が来ました!!」

「このトカゲ共め!02、03は俺とトカゲの相手だ!他は地上の援護をしてやれ!!」

ファルコンはミサイルを全弾撃ち尽くすと、格闘戦に持ち込む。本体なら一撃離脱戦法が適切だが、ファルコンは機体各所に設置された制動装置で通常ではあり得ない機動を披露し、ワイバーンの背後を取ると、25mmをワイバーンにプレゼントする。

「後ろを取られた!!誰か助けてーガキッ」

『導力火炎弾を避けられた!?!この化物め!!ーブツッ』

ロウリア軍の飛竜隊は混乱を極めていた。

「くそ……………」

隊長は拳を握りしめる。眼前の鉄竜は自分たちと比べものにならない能力を保有している。

『隊長！後ろ!!』

「なっ!!」

気づいた時には遅かった。ファルコンの20mm機関砲が当たり、そこで意識は消えた。

「アデム將軍!!ワイバーンが………上空のワイバーンが全て落とされました!!」

「何をやっているのですか飛竜隊は!!」

アデムは先程からイライラしていた。ギムごときなどに陥落させれると思っていたのに、敵は謎の爆裂魔法を行使してくる。物量で押そうとしてもその前に隊が壊滅する。この場合は一旦撤退しなければならないが、そんなことをすれば昇進の道が閉ざされる。絶対にそんなことはできない。

「これも貴方達無能のせいですよ………早くなんとかしなさい!!」

「はい!!!」

アデムは爪を噛む。

「まずいですねえ」

第2水陸機動団 第2ヘリコプター大隊

「佐藤隊長。友軍が苦戦しているようです」

「当たり前だ。あれだけの戦力で苦戦しない方がおかしい」

「隊長」

用賀副隊長が笑みを浮かべながら聞く。

「例のあれ、やりますか？」

「……………やるか」

「了解！」

「全機、太陽を背に突入。第100混成旅団を援護する」

「行きます!!」

隊員妖精が再生ボタンを押す。Bluetoothで連動されたスピーカーから大音量でワグナーの『ワルキューレの奇行』が再生される。

『いいねえ、地獄の黙示録よろしくだな』

AH-64Jを操る隊員妖精が言った。

「ハンター02、いっちょやりますか」

『ハンター02、了解』

『ハンター各機、俺達も混ぜてください』

偵察ヘリコプター、OH-3の隊員も混ぜてくる。

「いいぞ」

『あざす!!』

AH-64J2機とOH-3、1機は、OH-3を先頭に傘型体型へ以降する。

「いいぞ!」

「フオーー!!!」

第2ヘリコプター大隊の士気は爆上がりした。

海兵隊第100混成旅団 LAV-25

車内

「クソっ!キリがない!」

ロウリア軍が、未知の攻撃に苦しんでいるのと同時に、国連、国防軍側も押し寄せる物量に苦しんでいた。

「まじでやばいぞ!!」

「撃て撃て!!」

激しい意志のぶつかり合い。お互いに引かない……………。

「ん？」

ふと隊員が何かに気付く。

「どうした!!」

「しっ!」

全員が静かにする。

「……………ふ、あれ? キルゴア中佐が来てくれたようすな」

全員がその意味を理解する。

「ハンマー04より各員! 戦場の女神が来てくれたぞ!」

と、同時に突撃を敢行してくるロウリア軍の後方が突如爆発する。

「なんだ!」

ロウリア軍はすぐにその正体を知ることになる。

「新しい鉄竜が来たぞ!!」

「うわああああ!!」

敵の鉄竜は猛烈な光弾とともに流星の如き何かを打ってくる。一部の魔道士が鉄竜に向けてファイアーボールを放つが、軽く躲される。そして新たな鉄竜が現れ、光弾を放ってくる。弓を放つ兵もいたが、焼け石に水、当たるはずもない。

「まずい、襲撃された!! 全隊左右に退避しろ!!」



隊長が敵がいらない左右に退避する様に命じたが、その目論見は挫かれる。

「隊長!!左右に地竜が!!」

「何!!」

そう言われて左右を見た……………そこには第2水陸機動団の各戦車部隊が左右に展開していた。その後も、続々と車両が到着する。

「なっ!!まずい包囲された!!」

そう、前に行けば腰を据えた地竜、左右に逃げようものなら同じく地竜が待ち構えている。後ろには、滞空する鉄竜がいる……………どうしようもない。だがそれよりもあることに気付く。

「ジューンフィルア様は!!アテム様は!」

そう、指揮をする将軍が消えたのだ。

「それが……………」

「それが!」

「見当たらないのです……………」

隊長は歯をギリギリ軋ませる。

「あの野郎……………一足先に逃げやがったな……………」

ちなみにパンドールは最初の突撃で戦死した。

「どうしますか？隊長」

「…………… くそ————!!! 全軍に発令、正面に向かって突撃を敢行せよ!! 以上だ!!!」

「なっ?! それはあまりにも無謀です!! 降伏の決断—グハツ!!」

降伏するよう具申した兵士を剣で刺し殺す隊長。

「わかつたな!?!」

近くにいた兵士を睨む隊長。

「はいいいい!!!」

残存する10万の兵力がギムに向かって突撃を—ピカッ!!!……………

ドオオオオオオオオオオ—————!!!

突如、集団のど真ん中に閃光が走り、高さ5000mを超えるであるキノコ雲が出現する。

その上空には、1機の黒い物体が飛んでいた。

B—2A戦略爆撃機。日本にたつた1機—予備機を含めれば30機、パイロットも

確保済み—だけしか存在しないステルス戦略爆撃機だ。彼らが投下したのは、BSG—

21誘導爆弾を投下したのだ。

「Thunder 01, mission complete, RTB」

「まさか最初で最後のやつを落とすとは思いませんでしたね」

そう、副長が言った通り、何故か知らないが、自衛隊時代にBSG―21誘導爆弾を米国から購入していたのだ。しかし、結局何にも使われず、倉庫で埃被っていたのを見。使用期限はまだまだだったので在庫処分も兼ねて投下されたのだ。

「だがな……………10万は辛い……………」

副長が機長の手が震えてることに気付く。

「カウンセリングを受けないとダメだな」

「機長……………」

それ以上は何も話さず、基地へ帰投した。

ロウリア軍……………戦死者 40万……………

国連軍・日本国防軍・クワ・トイネ公国軍・クイラ王国軍……………戦死者

者 0 負傷者 2056人

クワ・トイネ公国侵攻軍約40万は、日本国防軍、国連軍と交戦、侵攻軍40万は全滅した。

一方……………

「はあはあはあ」

「はあはあはあ」

森の中を走り抜ける影が2つあった。その影の正体はジューンフィルアとアデムであつた。

「アデム君、ありがとう。おかげで助かったよ」

「いえいえ、当然のことですよ……………ん!？」

アデムが視界の端で何か動いたの感じた。

「どうした？」

「何かあそこで動きました」

アデムが指差した方向を見るジューンフィルア、だが、何もいない。

「気のせいじゃないのか？それより急ごう、追手が来るかもしれん」

「……………はい」

「しかし、奴ら、一体どこであんな力を……………？」

ジューンフィルアはなぜか視界が斜めになっていることに気付いた。(あれ?)と、

ジューンフィルアが思った時、そこでジューンフィルアの意識は消えた。

「なっ!」

アデムは剣の柄に手を掛けようとしたとき

「ゴフツ!!!」

右手に激痛が走り、そこを見ると手首から先がなくなっていた。

「うっ………」

常人なら発狂ものだがアデムは気合と根性で耐える。

(一体誰が………)

プスッ!!

「グハッ!!!」

背中に鋭い痛みが走る。するとそこからぶくぶくと膨れていった。

「な、なんなんだこれは!!!」

バアアアアアアアアアアア!!!!!!

まるで風船が割れる音のようにアデムは弾け散った。

「golff01、逃亡兵を排除しました。1人は生かしてます」

『了解。帰投せよ』

「う……… うーん」

唸るジューンフィルアを抱えて男は何処かへ消えた。

「敵侵攻軍40万。全滅させたとのことですよ」

参謀が小野に報告する。

「そうか……………少しイレギュラーが発生したが第1段階前段は終了か……………」

「はい。後は海でケリを付けるだけです」

「ギム防衛隊はエジエイまで後退中です」

「承知した」

「日が暮れるか……………」

小野の言葉につられて窓の外を見る。水平線に沈もうとする太陽の姿があった。

するとラツパの音が聞こえてくる。港に停泊している第1戦隊、第3護衛艦隊の各艦が君が代ラツパを鳴らしているのだ。

「うん。さすがだ……………」

「小野司令。リーパーからの映像です」

参謀が映像を見せる。

「「「おお……………」」」

統合司令部要員らがどよめく。数えるのが嫌になる程のガレオン船が確認できたのだ。

「ざつと4000隻はいますね」

頭逝かれてる。と誰かが言った。

「第1戦隊を含めた理由はこれか……………」

小野は戦艦を擁する第1戦隊を派遣部隊に含められたのが解せなかったが、この大艦隊を見て納得した。

「5インチ速射砲だけじゃ弾切れを起こすのは間違いない」

「速度は5ノット。敵速はこのままですと、3日後にクワ・トイネ公国領海に侵入します」

「了解した。第1戦隊、第1駆逐隊、国連第7艦隊の第5駆逐隊を遊撃に向かわせろ。空母あかぎ、ロナルド・レーガンは上空エアカバー、遊撃隊の背後を取ろうとする船を撃滅させろ」

「はっ!!」

「Yes sir!!」

～1時間後～

『出港用意!!』

停泊していた第1戦隊各艦から錨が巻き取られ、港から離れていく。6隻の戦艦は口

ウリア艦隊を迎撃するため出航した。

その頃、日本では……………

日本国 市ヶ谷 国防省 防衛装備庁オフィス

旧自衛隊時代に設立された防衛装備庁の会議室で会議が行われていた。出席者の中にはピンク色の髪色に癖つ毛を擁する者もいた。(防衛装備庁で会議に参加、しかもピンクの癖つ毛なドリー人しかないよなあ?)

「えー。まず……………技術格差が時代錯誤を超えてる件についてだ」

司会役が言った通り、日本はこの世界で隔絶していることを知ったのだ。現在行われている『ロデニウス大陸統一戦争』—ネットでそう付けられ、政府関係でもそう呼ばれるようになった—で、ジェット戦闘機と時速200km程度のワイバーンとの空戦に於いて各種戦闘機の稼働率が下がることが懸念されていた。そのため、装備庁では新世界の情勢、任務に対応できる戦闘機の新規開発案を有識者を交えて部内検討中だった。

「最優先課題は戦闘機の新規開発だ。ちなみに現時点で考えてる要求項目は……………」

課長が端末を見ながら読み上げる。

・ターボプロップエンジンを採用すること。



- ・時速800kmから900kmであること。
- ・多目的機として運用できるようにすること。
- ・固定武装は30mm機関砲1門を採用すること。
- ・直線翼であること。

### 最重要

・西暦2049年から西暦2050年までの開発成功を目指す。

とデカデカと書かれていた。まだ企画事案だが、たったの1年で新規開発を成し遂げなければいけないのである。

他にも多々あるが、目玉は上記の通りだ。

「あの一。これ鬼畜すぎませんか？」

技官の1人が言った。

「ああ、それは百も承知だ。しかし、機体稼働率は必ず落ちる。だからこそだ」「しかし……………これだけの項目……………1年で出来ますかね？」

そう聞かれた課長は笑みを浮かべながら答える。

「問題ない。そうだろ？あかし」

課長の視線が端にいる女性に向けられる。

「問題あらへんで。総隊司令の許可と自由にやらせてもらえるなら」

ピンク色の髪の女性はそう答えた。

「総隊司令の許可は絶対に取り付ける。任せろ」

「了解。すぐに取り掛かるよ」

「恩に着る」

「で、次にこれを見てくれ」

机の全てを使い切り世界地図を広げる。

「この惑星の直径は2.5倍、表面積は6.3倍……何食ったらこんなにでかくなるんだよ……」

課長が説明を放棄する。

「えー。陸地と海の比率は3.7と前世界と変わりませんが、惑星の大きさが前世界と違うので……海洋面積は比較にならないほど増えました」

「それで？」

「それで問題は、異世界国家と交易することになった場合、シーレーン防衛戦力がとても足りません。船団護衛なんて非効率なことではできません」

「仮に船団護衛をすることで……第1から第3護衛艦隊を全て充てたとしても足りなさすぎる……」

「どうします?」

「裏技を使うか、真面目にやるかだ……………どうぞ」

司会役が手を上げた技官を指名する。

「はい。当面は裏技でいいと思います。真面目の方は異世界情勢を鑑みてからの結論で良いと思います」

「うん。確かにそうだ。じゃあ皆、一応案を考えといてくれ。後で使うかもしれん」

「」「うい」「」

「まあ、検討すべきはこれだけだ。他にもあるが今議論するには早い。しばらく経つてからにする。ではこれで解散」

司会役が解散を宣言すると、皆椅子を立ちそれぞれの仕事に戻る。

マイハーク港

マイハーク港の開けた広場で3人の男が立っていた。

「パンカーレ提督! 時間です」

「うむ……………ブルーアイ、頼むぞ」

「はっ!!」

ブルーアイはこれから日本国艦隊の観戦武官として搭乗するのである。  
「来た」

竹とんぼのような金属で出来た物が飛んできた。

事前に連絡は受けていたが、どうやら乗り物らしい。それが近づくとつれ、大きな風を受ける。

「こちらへ!!頭を低くしてください!!」

ヘルメットを被った人物に案内される。

乗り物に乗り、沖合いへ移動した。

フワフワのシートに座り、ほとんど揺れずに「それ」は進んだ。ワイバーンよりも遙かに快適で、人が大量に運べる。

やがて、母船が見えてくる。

その大きさにブルーアイは何度も見たとはいえ驚愕する。

「本当に大きいですね」

「444mはありますからね」

やがてSH-60Jは飛行甲板に着艦する。ブルーアイは案内に従って艦橋に入った。  
た。

ブルーアイの元に1人の女性が近づいてくる。

「こんにちは。本艦艦長のあかぎと申します。本日からよろしく申し上げます」

「こんにちは。私はクワ・トイネ公国海軍第2艦隊参謀、ブルーアイと申します。今回は援軍ありがとうございます」

ブルーアイは、あかぎに礼をする。

「こんにちは、話は聞いています。では早速……………」

あかぎはディスプレイにリーダー情報を出す。

「現在、ロウリア艦隊はここから600km地点にいます。相対速度はおよそ40ノットなので1・5日後には会敵しますね」

ちなみに航空攻撃は一切しない。遊撃隊のエアカバーをロナルド・レーガンと共同で行うだけだ。

「そうですか……………あの、これに映ってる戦艦に乗ることはできますか？」

ブルーアイは、ディスプレイに映っているこんごうを指した。

「問題ありませんよ。むしろこれに搭乗してもらおう予定でした。明朝に移動します」

「ありがとうございます」

『艦長！こちら砲雷長』

あかぎのインカムに砲雷長の声が聞こえてくる。

「どうしました？」

『はるなスワローより通報がありました。艦隊より東方50km、MADに反応があったと』

あかぎのオルタナにソナー情報が出される。

「わかりました。フライトコマンダー、あかぎスワロー01から03を向かわせてください」

『了解です』

「何を発見したのですか？」

ブルーアイが突然の動きに訳がわからずあかぎに聞く。

「この地点で潜水艦……水中に潜る艦ですね。の尻尾を掴みましたが……」

「潜水艦ですか……本国でも科学の基礎研究は進んでいますますがそこまではまだたどり着けそうにもないですが……どうしました？」

あかぎがずっと黙っているのでブルーアイが心配する。

「この世界に潜水艦は存在しないはず……たくみスワロー、聞こえる？」

『感度問題なし。どうしましたか？』

はるなのSH-60Kパイロット妖精の声が聞こえてくる。

「音紋は拾えた？」

『はい。馬鹿でかい音を発してますので母艦でも探知できると思います』

(馬鹿でかい?)。あかぎは気になりどれくらいかを聞き、すぐに返事がくる。

『そりゃあ、素人でもわかるレベルです。すいません。燃料がビンゴになります。あかぎスワローと交代します』

「悪いわね。邪魔しちゃって』

『いえいえ、それでは』

通信が切れる。

『こちらあかぎスワロー01。ポイント到達、捜索に入ります』

「よし、降ろせ!』

ドイツピングソナーが降ろされる。ソナーマンの手元のディスプレイに情報、ヘッドセットに海中の音が入ってくる。

「うっ!!」

ソナーマンがヘッドセットを取り外す。

「どうした!?!」

「煩すぎて鼓膜が破れかけた……………」

ソナーマン妖精はそう言いながら、ドラッグボールを動かし、ソナー感度を下げて、恐る恐るヘッドセットを付け直した。

「ふー。さつきは本当に鼓膜が破れるかと思ったよ……………さて」

ソナーマン妖精が気を引き締める。

「やっぱりデカいな……………」

『そんなにか?』

戦術士官妖精が聞いてくる。

「ああ。素人でもわかるぞ」

『うへえ』

「音紋取れました。母艦で解析してもらってます」

『了解。こちらあかぎスワロー01。潜水艦への対応はどうしますか?』

しばらくして返事がくる。

『こちらあかぎCIC、unknown alphaをボギーとし、強制浮上措置をとります』

『了』

……………ですが、最悪撃沈させてしまう可能性も」

『対潜弾を頭上にばら撒いて艦橋に傷を入れればいいです。責任は私がとります』

……………了解。機長!そっちに航路を送る!」

『了』

「全機、潜水艦の頭上に対潜弾をばら撒く」



やがて潜水艦の真上に到達する。

「全機！投下！」

戦術士官妖精がボタンを押す。胴体横に設置されてるウエポンベイから対潜弾が切り離される。

少しして高い水柱がいくつも発生する。

「どうだ!? 機関音拾えるか？」

「待つてくださいい…………… 浸水音とともに排水音。緊急浮上しているようです」

「ドアガン！レディー!!」

機体横の扉が開かれ24式機関銃が浮上予想地点を指向する。

やがて海面が盛り上がると、そこから黒い鯨、否、潜水艦が浮上してきた。

「全周波数、拡声器で直接警告だ！」

『こちらは日本国宇宙海軍である。直ちに投降されたし。繰り返す。こちらは日本国宇宙海軍である。直ちに投降されたし』

すると、ハッチが開き銃座、砲座に人が乗り込む。

「うおっ!!」

機体横を銃弾が掠めた。

「全機、離れろ!!」

あかぎスワロー01の命令で全機が距離を取る。

「こちらあかぎスワロー01、潜水艦がこちらに向け発砲してきた！繰り返す、こちらに向け発砲してきた！」

『全機退避せよ。現在ながとが急行中』

「全機退避するぞ！」

その場から退避する3機のSH-60K。

その間、潜水艦は20ノット近くまで増速していた。

ながと CIC

「座標入力よし」

潜水艦の位置の諸元入力が終わる。

「第1副砲。CIC指示の目標。撃ち方始め」

ながとが号令をかける。

「撃ち方始め」

砲雷長が復唱し、砲術長がトリガーを引く。

副砲から1発の砲弾が放たれる。

「ターゲット alpha 周辺着弾まで、5、4、3、2、弾着、今」  
潜水艦の付近に水柱が立つ。

「全手段で投降を呼びかける。白旗を上げるようにな………」  
発光信号、無線、手旗信号、音響通信、その他諸々で潜水艦に投降するように呼びかける。

すると、突然現れた戦艦に恐怖したのか、こちらの指示通り白旗を掲げて投降した。  
「本艦では大きすぎる、後続の駆逐艦に接触させたい」

『わかりました。『まきなみ』を急行させます』

しばらくすると、まきなみが海域に到達した。

「内火艇降ろせ！」

「砲雷長。主砲を潜水艦に向けて」

『了解です』

まきなみに搭載されてる200mm単装速射砲が潜水艦に指向される。

その間にも、内火艇が降ろされて潜水艦に近づく。

『こちら立入検査隊。潜水艦乗組員と接触。ロシア語を話しています』

「了解。気を付けて」

プレストークボタンが2回押されて、了解の意が来る。

まきなみはディスプレイに映る、立入検査隊隊員の目線カメラを見る。  
暫して……………

『こちら立入検査隊隊長。潜水艦の国籍はグラ・バルカス帝国と判明。目的は本艦隊の偵察だったようです』

隊長妖精から報告が入る。

「グラ・バルカス…………… あかぎ、聞こえる？」

まきなみは無線を取り、あかぎへ連絡する。

『聞こえますよ』

「潜水艦はどうします？。マイハーク人工島へ曳航するか、このまま帰すか、どっちかになりますか……………」

考えているのか、少しの間黙るあかぎ。

『たかなみにマイハークまで行かせます。まきなみはそのまま対潜指揮を続行してください』

「わかりました」

ロウリア艦隊との海戦を前に思いがけない事態が発生してしまったことにまきなみは軽く舌打ちをする。

「チツ。ドン亀が邪魔しやがって」

「ロウリア艦隊と前衛遊撃隊との距離、190km!」

とつくにミサイルのSSM、ASMの射程に入っているが、4000を超える相手にミサイルを撃つたら間違いなく足りない。よって砲撃をすることになっている。

「合戦準備!対水上戦闘用意!!」

ながと CIC

「合戦準備!対水上戦闘用意!!」

ながとが号令をかけ、副長がそれを復唱する。

「航海長聞こえる?」

『はい、バッチリ聞こえます』

航海長の元気な声が聞こえてくる。

「敵艦隊と同航進路をとって」

『了解です。最大戦速!黒40!』

41ノットまで加速する。

『こちら右ウイング!敵艦隊を確認!』

「来たな」

前衛遊撃隊はながと後方20kmで待機している。

『面舵20!』

操舵員が舵を右に傾ける。遠心力で艦が右に傾くがスタビライザーのおかげで傾きは僅かだ。

『敵艦隊の右に付きます。取舵一杯!!!』

『右舷砲戦!全砲門発射準備!』

回頭終了し、敵艦隊の右に付く。回頭終了と同時に全主砲副砲が艦隊に向け指向される。

『敵最右翼をalphaとする。第1副砲、砲撃目標ターゲットalpha!』

『砲撃目標ターゲットalpha!第1副砲発射用意!!』

砲雷長がターゲットの指定を行い、砲術長がそれを復唱する。

『発射準備よろし.....撃て!!』

副砲から200mm榴弾砲が放たれる。

『目標着弾』

『こちら艦橋、爆発閃光を確認』

CICで報告が入ると同時に艦橋からも報告が入る。

『うん.....威力過剰だ』

「ですわね」

ながとの言葉に同意する砲雷長。

ロウリア艦隊では……………

ロウリア東方征伐艦隊提督『シャークン』は、混乱していた。

突然小島のような長大船が現れたかと思うと、その船体に搭載されている馬鹿でかい魔導砲から放たれた砲弾が一番右にいた船に直撃したかと思うと、着弾した味方船は木っ端微塵に吹き飛んだ。

そして高いマストに掲げられた旗を見ると、白に赤い丸が描かれた国旗があった。シャークンの記憶が正しければ、宰相が門前払いした新興国『日本国』だったと記憶してる。

「日本国の仕業か……………全艦！あの巨大船に向かって突撃せよ！」

幸いにもあのでかい魔導砲は装填が遅いようである。撃ってきた砲よりも、さらに大きい砲があるが未だに撃ってくる気配がない。物量で押せばなんとかなるだろう。

全船が巨大船に向かって突撃する、が……………

「提督！！進んでも進んでも近づきません！！」

部下が報告してくる。

「あの船……………想像以上に早いのか……………」

不意に煙が巨大船から発生する。

「!?」

すると先導していた船が消える。

「なっ!!」

さらに不運は続く。シャークンが装填速度が遅いと読んだ魔導砲が猛烈な速度で撃ってくるのである。

「まずい！通信士!!ワイバーン部隊に上空支援を要請しろ!!敵主力船団と交戦中と!!」  
「はい!!」

ロウリア王国　ワイバーン本陣

「ロウリア王国東方征伐艦隊より魔伝が入りました。『敵主力艦隊と思われる船と現在交戦中、敵船は巨大であり、国籍は日本国と判明。航空支援を要請する』と……………」

「ほう、敵主力か…………… よろしい。350騎全騎を差し向けよ」

「し、しかし、先遣隊に150騎ほど分けてあるため、本隊からワイバーンがいなくなりますが……………」

この時すでに先遣隊、つまりギム攻略部隊が全滅していることを知らなかった。



「聞こえなかったか？全騎だ。敵主力なら、大戦果となろう。戦力の逐次投入はすべきではない」

### 戦力の逐次導入

それは戦争をする上で最もやってはいけないことである。米軍は1993年、ソマリアへ派兵したが所詮は民兵と高を括っていた……………結果は言うまでもない。

「……………了解しました」

ワイバーンは次々と大空に飛び上がった。

ワイバーンが離陸を始めた瞬間、空飛ぶ目に捕らえられたことを知る由もないワイバーン隊。

あかぎ搭載機、早期警戒偵察機E-100はロナルド・レーガン搭載機E-2Fと共に同で警戒飛行していた。

レーダーに次々と光点が映り始める。

レーダー監視員はそれにナンバーを振っていく。その数、350。

「トカゲ共が350匹も出てきたか……………」

「ふざけてないで、艦隊に通報だ」

「はい」

E-100が得た情報は、データリンクでリアルタイムで共有される。

あかぎ

「ワイバーン350騎、ながとに向かいつつあります」

「スクランブル！」

即応体制にあった機体。既に発艦準備を整えていた機体。CAPとして出撃していた機体。ながとに飛来するワイバーンに向かう。その数、44機。

各機は編隊を組み、トリガーを連結する。

「Whisky01、FOX2!!」

ミサイル発射の符丁を叫ぶ。

Whisky01パイロット妖精が発射ボタンを押すと、各機からもミサイルが発射される。発射されたミサイルの数は352発。うち6発が不調を起こしたが全て正常に飛行する。

ロウリアのワイバーン隊は地獄を見ていた。

「くそっ!!敵はどっこだ!!」

全員が周りを探しているが見つけれられない。

『隊長!!正面!何か来ます!!』

部下から報告を受けて正面に目を凝らす隊長。

「!?」

こちらに真つ直ぐ突つ込んでくる黒い点が見えた。

「回避!!」

愛騎を操り、回避しようとするが、それはこちらの動きを追ってくる。

「ついてくる!!」

そう思った時、隊長はワイバーンもろとも爆散した。

あれから何分経ったかわからない。350騎いたワイバーンは残り24騎。目標は重複することはなかったが、あまりにも数が多すぎたため、回避運動する他のワイバーンに当たるなどして24騎が残っていた。

「いた!!」

遠くに灰色の巨大船を確認したワイバーン隊はそれに向かって突撃する。

「仲間の仇!!」

すると灰色の巨大船から煙が発生する。

「!?、誤爆か?」

すると、こちららに向かって光の矢が飛んできた。

「回避!!」

愛騎を操り、回避しようとするが、それはこちらの動きを追ってくる。

「ついてくる!!」

そう思った時、竜騎士はワイバーンもろとも爆散した。

ながと CIC

「SM—2全弾命中。対空目標確認できず」

「対空警戒配置へ変更、油断するな」

「はい」

F—4Bが半分以上減らしてくれたおかげでながとが対応する目標は少なくて済んだ。

「全砲塔五月雨弾式統制弾。発射準備よろし」

「砲雷長、最大レートで撃つぞ」

「Yes」

「撃ち方始め!!」

「発砲!!」

砲術長がピストルトリガーを引く。

3基の主砲、2基の副砲から榴弾が放たれる。

距離にして19 km。それだけの近距離目標を外すわけがない。

「全弾命中!」

「各砲塔、振り分け目標を交互射撃!」

装填が終わり、各砲塔で交互射撃される。

え? 装填時間はどれくらいかって? 一回しか言いませんよ。主砲は毎分12発、副砲は毎分45発というキチガイレート。そして全て3連装砲なため12×3≡36発。45×3≡135発撃てるという……………誰だこんなの作つたやつ。

「くそつ!!」

シャークンは水飛沫を浴びながらも指揮を続ける。

「何もできないというのか……………」

たかが一隻に何もできない。

「提督!! 右舷側より8隻の灰色の船が!!」

先程の船とほぼ同じ大きさの船が5隻とそれより2回りほど小さい3隻の船がこちらに近づいてくる。

『撃ち方始め!』

『Fire!!』

かげろう型護衛艦、アーレイバーク級イージス駆逐艦から砲弾が放たれる。

「味方船被弾!轟沈!!!」

次々と轟沈報告が入ってくる。

そして羽虫からも光弾が浴びせられる。

何もできない

何もできない

何もできない

何もできない

何もできない

何もできない

何もできない

作戦すら思いつかない。

その間にも味方は次々と沈んでいく。

なら司令官としてできることは一つ。

「全軍に通信。『撤退せよ!』」

旗艦から撤退の連絡が入った途端全船が反転し、撤退していく。

「撃ち方やめ！」

敵艦隊が撤退していくのをリーダー上で確認したながとは射撃中止を命じる。

「味方は置いてったか……………飛行班長」

『はい。救助ですね。許可をもらえればすぐに発艦できます』

ながとが要件をいうより早く飛行班長は準備していた。

「艦長。確か敵兵を救助する理由は……………えーと……………」

「ジュネーブ条約」

「そうジュネーブ条約でした。その条約に基づいてるんでしたっけ？」

「ええ。我が国の捕虜保護規定は日本国の法律、旧世界の条約を基にしています」

ブルーアイの疑問にながとが答える。

その後、第7艦隊駆逐艦、第7機動部隊駆逐艦に捕虜が収容された。

ながと 戦闘詳報 一部抜粋

本海戦に置いて本艦はワイバーン迎撃に24発のSM-2を使用。撃ち漏らしなし。その後の艦隊決戦おいての戦果は、合計2470隻を撃沈したことを確認した。尚、捕

虜収容人数は合計で273人を収容、敵艦隊司令のシャークンと名乗る男を確保した。ロデニウス沖での海戦は日本国と国連海軍の圧勝で終わった。

マイハーク人工島 統合司令部

「海戦は当方の被害なしで勝利しました」

「うむ。ぐ」苦労」

「森の盾、第1段階は終了しました。第2段階後段発動まであと1日後です」

第1段階はロウリア王国軍の侵攻阻止を目的とした作戦。

第2段階

前段 第7艦隊艦載機による航空優勢確保の後、駆逐艦が砲撃を行いロウリア海軍を完全に殲滅する。

中段 第7艦隊艦載機と国防空軍が敵航空基地を完全に破壊、制空権を確保する。

後段 第7機甲師団によるロウリア王国首都ジン・ハークに向かい進撃し、後続の第2重機械化師団の援軍を以て首都を包囲する。

第3段階 国連軍事裁判所日本支所のハーク・ロウリア王逮捕委託任務に基づき、王城を強襲、同人の逮捕を目指す。



「本城一佐、頼むぞ」

「自衛隊時代から続く最強の機動力打撃力です。お任せを……………」

第7機甲師団参謀『本城秀吉』が恭しく礼をする。

壇上に第7機甲師団団長『西郷正志』が登壇する。西郷の眼前には整列した隊員達に整列した車両が並んでいた。

「えー。頑張ってくれ、以上!!」

「「おし!!」」

「え?これだけですか?」

ノウ將軍が西郷の話にずっこける。もっと壮大な事を話すかと思つたが、『頑張ってくれ!』 たつたそれだけである。

ノウ將軍の疑問にそばにいた隊員妖精が答える。

「ええ。これだけです」

「……………」

驚きの余り、声が出ないノウ。

「総員!!乗車!!!」

号令と共に車両などに乗り込む隊員や妖精達。

「さっさとこの時代錯誤戦争を終わらせるぞ」

西郷はそう言った。

第7機甲師団第8戦車大隊、第21特化連隊はジン・ハークを直指した。

国連海軍第7艦隊駆逐艦　カーティス・ウィルバー　C I C

「はい。我々は日本の戦艦と共同で敵軍事港湾施設、敵船を全て壊滅させる予定になっています。ただし、港に接近するのは我々で戦艦は後方で精密砲撃をするようです」

海図を見ながらそう言ったのはカーティス・ウィルバーの副長だ。

「まあ、戦艦の長距離射撃等を考えたら普通だな。後、あの巨体で港湾に突入させたら身動きが取れなくなるだろうしな」

く30分後く

「旗艦より入電。『第15駆逐隊所属のカーティス・ウィルバーとバリーは国防宇宙海軍第1戦隊と合流せよ』とのことですよ」

「了解。両舷最大戦速！艦隊より離れる！」

「ミサイル駆逐艦の本領を見せてやる」

アーレイバーク級イージス駆逐艦2隻は第1戦隊と合流し、敵港湾施設を破壊するた

めに進む。

上空

上空には国防空軍のF-4Aファルコンと空母ロナルド・レーガン艦載機F-18E / Sスーパーホーネット合わせて30機が編隊を組んで周回飛行していた。

彼らの目的は『森の盾』第2段階の敵航空基地―飛竜基地―を破壊するために全機対地ミサイルを搭載していた。

「作戦開始まで後20分か……………」

『暇ですね』

「暇すぎてアメリカ人は歌ってるよ……………」

そう、先程無線から『星条旗よ永遠なれ』が聞こえてくるのである。

『俺らも歌います?』

「遠慮する」

『ウェーキー。こちらスカイアイ。全機に通達する、作戦開始、繰り返し、作戦開始。各機は所定の行動を取れ』

A W A C Sより作戦開始が伝えられる。

「よっしゃ、行きますか」

『『了解』』

F-4AとF-18E/Sは敵飛行場へ進路を変えた。

ロウリア王国を破滅へと誘う矢は放たれた。

Operation Forest shield 2  
nd stage 3rd stage

中央歴1635年 西暦2049年 9月6日

第7機甲師団から分派された第8戦車大隊、第21特化連隊はジン・ハークまで残り20kmの所まで迫っていた。

その隊の大隊長田中宗一郎1佐は40式戦車のハッチからオルタナによる光学補正を受けたロウリア王国の首都ジン・ハークを見ながら不満げに話していた。

「全く。上は気が狂ってるのか?とやりたい所だが、野戦砲すらない世界、魔法というイレギュラーは存在するが、異世界各国の協力で魔法は戦車に対して脅威じゃないと……………」

「それに空さんと海さんは鎧袖一触だったらしいですからね……………」

「負けたら総隊司令が訪問……………」という名の罰が待ってるからな……………」

訪問…………… その言葉を聞いただけでも対象部隊が死に物狂いで訓練をし、

訪問日には100発撃つたとして、全て命中させるといいう、まさに100発100中。

「ああ、あれは恐ろしいな……………」

田中は身震いする。

「敵さん、動きはないんだな？」

「はい。今の所動きはありません。甲羅に籠った亀ですね」

「再侵攻の準備すらしていないとは…………… 明朝0700に敵目視圏内に入る。戦車

は主砲撃ってなんぼだ」

「うい」

その後、夜は明けた。

「うん、濃霧だ…………… 菅平が懐かしい……………」

「大隊長、感慨ふけるのはそこまでにしてください」

「隊長、現時刻0620です」

「うし、作戦開始。全車前進！」

40式戦車約100両がジン・ハークをめぐり前進する。

「向こうは全く見えんだろうな」

「どうでしょうか？魔法があるからわかりませんよ」

「早くレーザー探知機のように魔法探知機のような物が開発される事を願うよ」

「で、どうしますか？」

「どうもこうも。早く航空基地を破壊してもらわないことには……………」

「大隊長！航空隊より通信、『敵基地を破壊した』とのことですよ！！」

「よし。敵の目視圏内に入る。ヘッドライト点灯！派手に行くか……………」

40式戦車全車が今まで消していたヘッドライトを点灯させた。

「ふぁー」

見張りの1人が欠伸をする。

「おい！寝るなよ！」

「分かっているけど、ビールズに伏兵を配置させたんだろ？荒野を通るには馬への負担が  
でかいからな…………… どう足掻いてもここまでは辿り着けないさ」

首都防衛隊は楽観視していた。そしてそれはすぐに崩された。

「うん？」

見張りの1人が何かに気付く。

「どうした？」

「……………!!。日本国だ!!日本国が破城槌を持ち出してきたぞ!!」

「ば、バカな!!。あの荒野を行軍してきたとでもいうのか……………」

「パタジン将軍に連絡。全隊配置につけ!!」

「急げ！」

首都防衛隊は緊急配置につく。

第21特化連隊 首都より50km後方

「目標、見張り台」

「1発で当てろ」

「分かっています。弾種選択、ヴォルカノ、誘導信号受信を確認！」

「つてええー！！」

38式自走155mm榴弾砲が火を噴く。

「急げ急げ！！配置につけええー！！」

見張り台では怒号が響く。

「——ん!?!」

1人の兵士が何かに気付く。

「おい!!あれ——」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

見張り台にいた兵士達は、皆等しくあの世へ行った。



「何事だあああー！！！！」

パタジンは寝ていたところを爆発音によって叩き起こされた。パタジンは目の前の惨劇に目を見開く。

「なっ……………」

言葉が出ない。

「ランド！！何をしてでも大王様をお守りしろ！！」

『分かった』

「パタジン將軍！！飛竜基地より連絡……………日本国の鉄竜からの攻撃により……………壊滅したと……………ん？……………ば、バカな！！！」

「どうした！！」

「海軍基地より連絡、日本国の戦船より攻撃を受け壊滅したと……………」

「まずい……………日本国はケリを付けるつもりだ……………急いで配置につけ！！」  
「はい！！」

時系列は少し遡る

30分前

ロウリア王国の北の港沖に2隻の船が港を攻撃するために接近していた。

「哨戒に出ていると思われる船は、日本の戦艦によつて消滅したようです」

「うむ……………アタックポイントまで、後10kmか……………」

「すでに戦闘配置済みです……………トマホークを撃ちたいです……………」

「確かに……………」

自分達の任務は、敵地へのトマホーク攻撃だったり、空母ロナルド・レーガンの護衛だったり駆逐艦の汎用性を活かして、任務を任せられることが多い。

「だが、我らがリーダーからの命令だ、逆らえば……………」

「分かっています」

ゴオオオオオーン!!!

艦橋に微かに砲撃音が聞こえてきた。

「日本の戦艦が射撃を開始したようです」

「着弾まで5分か……………」

「日本の駆逐艦に斬り込み戦術を叩き込まれたんだ……………使わない手はない」

「行きますか……………第4戦速！」

カーティス・ウィルバーとバリーが、24ノットまで加速する。

「面舵45！」

「面舵45！」

操舵員が45。に合わせる。

船が遠心力で左に傾く。

「CIC、左舷砲撃戦用意！」

5インチ砲が水平線に見える灯を向く。

「射線確保！障害物なし！！」

「Fire！！」

『Fire！！』

火器管制士官が発射ボタンを押す。

ダン！！

カーティス・ウィルバート、バリーに搭載されてるMk45. mod4. 5インチ砲から、M1021榴弾が放たれる。

ロウリア王国 北の港 港湾施設

「うーん。気持ちいいいなー」

1人の水兵が潮風に当たっていた。



目はないと水兵は思った。

その間にも、味方の船が沈み続ける。

「くそっ！こんな勝ち目がない！」

水兵は逃亡を決意した。

国連海軍国防宇宙海軍合同艦隊による、ロウリア王国軍港襲撃戦果は、撃沈1487隻、残存ロウリア海軍を壊滅させた。

これが、ロウリア王国海軍基地壊滅の真実である。飛竜基地も同じ運命を辿っていた。

「結局各諸侯は見物を決め込んで。それに大王様は何も言われなかった………」  
はー、もう負けたような物だな」

だが、何もせずというのはあり得ない。

「騎兵隊！直ちにあの破城槌の能力を測れ！！無理はするな」

「はい！！！」

「我らが一番槍の榮譽をいただいた。勝機は速さにあり！！駆け抜けろ！！！」

騎兵隊長が突撃を命令する。

「「「おおおおおお!!!」」」

40式戦車に向かつて突撃する騎兵隊約400名。

ガガガガガガガガガガガガガガガガ!!

当然、なにかの発射音が聞こえてきたのと同時に光弾がこちらに向かつて――

グシャツ!!!

「!?!」

さつきまで破城槌を見ていたはずなのに、いつのまにか晴れていた空を見ていた。

(あれ?)

そこで隊長の意識は途絶えた。

「隊長オオオオー!!!」

ヒュンヒュン!!!

横を何かが通っていく音が聞こえてくる。

次々と味方がやられていく。

このままでは全滅する……………。

「くそっ、引き返せ!!」

副隊長が撤退を命令する。

不思議なことに、その破城槌は追撃を仕掛けてこなかった。

「報告。敵は礮のような光の弾を放ってきます」

騎兵隊副隊長の報告にパタジンはうなずく。

「ご苦労。今は休め」

「はっ」

騎兵隊副隊長が退出すると同時に対応策を話し合う。

「人海戦術を使えば敵は魔力切れを起こすかも……………」

「ならば、散開し、近づけばいいか……………」

「それでは各個撃破されないか？」

「あるいは重装歩兵の盾ならば……………」

「騎兵隊の金属鎧は貫通されたぞ」

こうして対応策を話しているものの、その前提条件が全く違う。彼らは敵が魔法を用いているという前提だが……………国防軍は魔法などという物理学に喧嘩をゲフィン、技術新体系を一切使用していない。

しかし、ロウリア王国は、今まで魔法を基礎として文明を発展させてきたのだ、いきなりそれを求めるのは酷だろう。

策は出た。しかし誰も口に出さない。明らかに死に行けと命ずるのだ。誰もそん

な重責を負いたくない。

「重装歩兵全軍！正門より出陣!! 『光弾』を引き付けろ！その他の兵力は、敵の死角となる門より出陣！散開し、一斉突撃せよ!!!」

パタジンから伝えられた命令に各隊は忠実に実行した。

「守ります。我が子、我が家、我が国……… ロウリア重装歩兵隊、これより出陣!!」

「[[[[ウオオオオオオオオオオオオー!!!]]]]」

荒野に雄叫びが響く。

8 戦車大隊 21 番車両

「出てきました」

「同軸、12・7mmで攻撃しろ」

「了解」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガ!!

7・62mmと12・7mm機銃から銃弾が放たれる。敵は盾を展開するものの、ひき肉のようにちぎれていく。敵は盾を展開するものの、ひ

「!?、おい嘘だろ………」



機銃カメラの映像を見ながら撃っていた隊員が戦慄する。

「どうした？」

「あいつ……………人が持つている盾で12.7mmを弾いてるぞ……………いくら避弾経始をしてるとはいえ……………」

「まさか……………魔法で強化しているのか？」

「でも、周りの奴らは簡単に倒れていきますよ」

「……………あいつが指揮官かもしれん。戦車砲の至近弾で吹き飛ばせ」

「Yes」

砲手が主砲を旋回させ、ただ1人、生き延びてる兵士の近くの地面をねらう。

「射線に障害物なし、撃て！」

発射ボタンを引く。

予め榴弾を装填していた主砲から砲弾が放たれる。

「グワツ!!」

盾を持つていた兵士が吹き飛ばされる。

『レコンより各車、左右より近く敵あり。数不明。送れ』

上空を旋回するMQ-8リーパーを操縦する隊員から報告が入る。

『こちらストーン01、指ひとつ触れさせませんよ』

ストーン01、木更津基地所属の第4対戦車ヘリコプター隊と第3対戦車ヘリコプター隊のAH-64JとAH-10飛燕が30m機関砲、70mmロケット弾を敵兵に喰らわせる。

「頼む。俺たちは正面に集中だ！」

その後も殺到する敵兵を主砲、機銃でなぎ払う。

「くそっ!!やはり撃破されるか……………」

「せめてワイバーンがいれば……………」

『俺が行きます』

突然、魔信に声が入った。

「誰だ」

『第2竜騎士団所属、ターナケインです。通信が開いていたので、監視員の報告は聞いていました。俺たちに行かせてください、『飛竜を討てるのは飛竜のみ』ってやつです。たとえば、『鉄竜』が相手だとしても』

ターナケインの願いに黙る将軍たち。

「……………ターナケイン。厳しい戦いになるが、やってくれるな？」

沈黙を破り、パタジンがターナケインに聞く。

『はい。一矢報いてみせます』

「頼む」

「さあ、行くぞ！相棒！」

.....

「しめた!!こいつら遅いぞ！いける!!」

ターナケインは時速160kmで飛行する飛燕とロングボウを見て、そう言った。

(群から浮いた奴を.....喰ってやる！)

AH—10 飛燕 第3対戦車ヘリコプター隊 11番機

ガガガガガガガガガガガガガガ!!

機内に30mm機関砲の発射音がかすかにこだまする。

このヘリを操っているのは陸軍隊員妖精だ。ガンナーの妖精がレーダーに新たな光点が映ったことに驚愕する。

「なっ!!まずい、トカゲがいるぞ!!」

「何！ファルコンとスパーパーホーネットがやったんじゃないのか!？」

ガンナー妖精が、HMDに表示された方向を見る。

するとこちらに近づくワイバーンが、火球を形成していた

「まずい!!」

パイロット妖精が出力を最大にまで上げて、機首を真上に上げて、すぐに出力を絞る。  
AH-110飛燕はバレルロールをし、導力火炎弾を躲した。

「なっ!!」

ターナケインは驚く。

絶対に当たると思った導力火炎弾をあつさりと躲したからだ。しかし、その鉄竜は急旋回をしたせいとか、スピード、機動力が落ちてきている。

「チャンスー!」

愛騎に導力火炎弾を放つように指示する。

「くそっ!避けれるか!」

「舐めるなよ!!こちとら第2ヘリコプター団卒、ナイトスカース研修したんだぞ!!」

そう言うと、パイロット妖精がコレクティブピッチをガンと、最大まで下げるのと同じ時に操作レバーを左に傾ける。

ちなみにこのパイロット妖精。ナイトスカース研修の際にこう呼ばれた、『魔王の燕』と。

「くそっ！また躲された！」

「やっちまえ！ガンナー！」

「アイリンクシステム問題なし!!」

ガンナー妖精が、AIが算出したワイバーンの未来予想位置を狙う。

「Fire!!」

30mm弾が放たれる。

ターケナインは、これを避けようとしたが、弾幕に絡め取られた。

「くっ!!」

ターケナインは身構えるものの、被弾した感触がない。

「クウウーン……………」

ワイバーンが、今にも死にそうな声で鳴く。

愛騎が身代わりになったのだ。

「なっ！お前…………… すまない……………」

ターケナインは涙声で愛騎士に謝った。

「ふー。危なかった。さすがルーテルさんだ」

「茶化すな。任務に集中するぞ」

イレギュラーが発生したものの、ほぼ、問題はなく、そのまま作戦を続行した。

「くそっ!!」

パタジンは壁を蹴る。

先程まで、敵の光弾を防いでいた兵士がいたおかげで、士気が上昇したが、そこまでだった。敵はその兵士に爆裂魔法を浴びせ、吹き飛ばしたのだ。

そして、最後の竜騎士が、敵の鉄竜によって、いとも簡単に落とされたのだ。イラつかない方がおかしい。

「まずい………このままでは突破されてしまう」

その後も、対応策を考えるパタジンであった。

「大隊長。敵、誘引戦力の撃滅を確認しました」

「うむ。さて、次来るとしたら夜襲か………」

大隊長は野営陣地を見ながら言った。

「これだけ派手に野営陣地を作ったんです。引っかかるでしょう」

「そうだな。さて、漆黒の闇を待つとしますか」

その後、太陽が沈み、周りが闇に包まれる。

城壁に呻き声がこだまする。

しかし、それらを見無視し、闇の先にある国防軍の野営地を睨む男が1人。

(夜はあの『鉄竜』も飛べぬようだな…………… 防衛騎士団第3騎兵隊大隊長『夜目のカルシオ』。闇夜が支配するこの時を待っていた。日本国よ、闇に慄くがいい)

「パタジン。俺に行かせろ」

カルシオはパタジンの部屋に入るなり、そう言った。

「カルシオ。お前も見ただろう？ 重装歩兵も、散開突撃も効かない。日本国は計り知れぬ」

パタジンはそう言い、カルシオの案を却下しようとするが、

「いかに日本国が強くとも、奴らも人の子、休息は必要…………… 日本軍の野営地はすでに我が兵が見つけた。ここは俺に任せろ」

そう押し切られて、パタジンは渋々了承した。

第3騎兵隊は、国防軍の野営地まで20kmの位置まで迫っていた。

「…………… やけに静かですね、焚き火の一つもありません」

「気を付けろ。あれだけの大勝で浮かれ声もないとは…………… 気味の悪い連中

よ……………」

「大隊長。総員配置につきました！」

「うし。80迫、特科連隊に通達。照明弾発射用意!!撃て!!」

100万カンデラの明るさを誇る照明弾が上空に点灯する。

「探照灯照射!!」

国防宇宙海軍の貸与品である通称 “最強探照灯” を敵に浴びせる。これで敵は何も見えない筈だ。

「くっ!!これでは丸見えではないか!!」

ダラララララ!!!

ガガガガガガ!!!

ズドオオオン!!!

闇になれた目が突然の光によつて、目が眩み何もできない第3騎兵隊は第8戦車大隊、第21特科連隊、12.7mm、7.62mm、5.56mm弾、小銃擲弾筒が放たれる。

「グアっ!!」

第3騎兵隊はあっさりと壊滅した。

「こんな馬鹿げた魔法など存在せん。できるとしたら魔帝だけだ.....」

魔導師ヤミレイが震えながら言う。



「カルシオ……………!？」

パタジンが破城槌が前進してることに気付く。

「さあ、でかい餌なんだ。釣れないと困る。主砲発射用意！」

「了解！」

「弾種対戦車破砕榴弾！正面射！撃て!!」

40式戦車の120mm滑腔砲から破砕榴弾が放たれる。

ガアアアーーーーーん  
!!!!

「各車、前進!!」

「報告!!破城槌が前進してきます!!」

「鉄壁の正門が……………日本国は今夜でケリを付けるつもりか……………全兵を招

集!!なんとんでも守れ!!」

パタジンは一通り命令すると、魔通を繋ぐ。

「ランド、聞こえるか？正門が破壊された」

『そのようだな』

「俺は正門で日本軍を迎え撃つ。お前はどんな手を使ってでも大王様をお守りしろ!!」

『承知した』

「どんな手を使ってでもか……………」

ランドは近くにいた2人のメイドに目をつける。

「おい、そのメイド。ついてこい、大王様のお役に立ててやる。」

メイドは震えながらもついて行った。

---

#### 40式戦車車内

「まずいですね。ここまで出てくるとは……………」

「だが引くわけにはいかん。最後まで陽動に徹する」

「適当にばら撒いときます」

「そうしてくれ」

40式戦車各車は時速20kmの速度で正門に向かうのを演じ続ける。

---

上空にUH-1Yヴェノム6機と、UH-1Jスコウノトリ6機、戦闘ヘリコプターAH-1Zヴァイパー4機がいた。

「うっし。森の盾、第3段階発動だ……………各員、気を引き締めろ」

「旧日米の仲をなめてもらっちゃ困るぜ」

「降下1分前!!」

彼らは旧アメリカ陸軍、現国連陸軍特殊部隊グリーンベレーと、第1特殊空挺団の合同特殊部隊であった。

「30秒!!」

「降下用意!」

「降下予定ポイントに敵複数! 制圧射撃!!」

ヴェノムから7・62mmミニガンとコウノトリから12・7mm機銃が放たれる。

「グアあああー!!」

悲鳴を上げて倒れていくロウリア兵士達。

「降下! 降下!」

ロープを下に投げ下ろし、隊員達がホイスト降下する。

降りた隊員が円陣を組み、周囲を警戒する。

その間、接近しようとする敵兵士をガンナーが機銃を放ち、押し止める。

「降下完了!!」

「よし、全機離脱後、戦闘ヘリと一緒に歩兵を援護する!!」

そう話してる間にも、進路上の敵兵を機銃で捌り倒していくヴァイパー。

「G O G O O!」

小銃班が敵を薙ぎ倒していく。

そして王城入口に到着する。

「ブリーチング！、3、2、1、発破!!」

ドオオオオオオオオン!

爆発音が城内にこだまする。

ダダン！ダダン！

室内にいる兵士を2タツプで頭を撃ち抜く隊員達。

そのまま順調に制圧していき、王がいるとされる、私室まで後1部屋だった。

「最後だ……………突入！」

隊長に号令で部屋に雪崩れ込む隊員達。

「!？」

先導していた隊員が突然止まる。後に続いた隊員もその光景を見て俄然とする。

「殺さないでください……………殺さないでください……………」

メイド服を着た民間人2人が泣きながら、そう懇願してきたのだ。

「……………」

カツ、カツ、カツ

奥から鎧を着た男が来る。男が口を開く。

「そうか……………やはりお前達はそういう奴なのだ……………ビールズを目にも止め

ず無視し、軍港の被害は、軍船と軍事関連施設のみ…………… お前達は重い規律で縛られてるのだな」

「誰だお前は！」

隊員の1人が口を開く。

「私の名前は—グギャッツ!!」

その男が名乗りあげようとしたとき、後方にいた隊員がダガーナイフを投げたのだ。そしてそれは男の胸に命中する。

「よくやった。このクソ野郎が」

パン!!!

グリーンベレー隊長が拳銃で頭をぶち抜く。

「各員展開！敵は条約を逸脱した、情けは不要…………… Fire」

グリーンベレー隊長が号令すると同時に、柱の裏に、隠し部屋にいた近衛兵を、グリーンベレー隊員が所有していた12.7 m m対物ライフル(!?)と、第1特殊空挺団隊員の5.56 m mトレース弾で撃ち抜く。

「生命反応なし」

「いよいよ本丸か…………… どうだ？」

「中にいるのは1人だけです」

「なら、それが王だ。突入用意…………… 3、2、1、Go!」

扉を爆発させ、吹き飛ばす。

隊員達が一斉に雪崩れ込む。

「!?」

全員が止まる。

「ふっ、ふっ」

逮捕目標である、ハーク・ロウリアがナイフを持ち、腹に当てていたからだ。

「今までの我が罪を許したまえ……………」

グサッ!!

「なっ!!! 衛生兵!! 応急処置を!!」

「どけ!! ますますいまずい!!」

衛生兵がガーゼで出血点を抑えるが抑えられない。

そして腕に輸血用チューブを繋げる。

「こちらウツド01! ホテル01、逮捕目標が割腹自殺を図り、現在治療中! 王城近くに  
着陸してくれ!!」

『ホテル01了解』

「どうだ!?!」

「非常にまずい。もって40分、短くて10分だ」  
想像以上に酷い状況に絶句する隊員達。

ババババババババババババババ!!!

城外からローター音が聞こえてくる。

「担架に移すぞ!! 1、2、3!!」

「急げ急げ!!」

4人で担架を運び、1人が輸血パックを持つ。

「早く早く!!」

ドアガンナーが叫ぶ。

「よし、行け!!」

担架を固定した後、ローターの回転を上げて、上昇する。

「こちらウッド01よりオフィス! 逮捕目標が割腹自殺を図った。現在応急処置をし、  
ヘリで搬送中!」

一通り報告が終わった後、隊長がそばにあった小石を蹴る。

「なんてこった……………」

---

マイハーク人工島 統合司令部

『こちらウッド01よりオフィス！逮捕目標が割腹自殺を図った。現在応急処置をし、へりで搬送中！』

合同特殊部隊からの報告に司令部にどよめきが広がる。

「嘘だろ……………」

「なんてこった……………」

「おい！近くの野戦病院、もしくはここまで来るのにとのくらいかかる!？」

小野司令の問いに、参謀がキーボードを何回か操作すると。

「今の速度、イレギュラーが発生しなかった場合、ここに来るのは27分。野戦病院は38分です」

「ダメだ!!それでは間に合わない!!」

小野が端末に映る、空母を見た。

「これだ!!これなら8分で着く!!おい!!すぐに、ロナルド・レーガンに連絡しろ!!」

「了解!!」

---

ロナルド・レーガン 艦橋



「……………了解」

通信員がインカムを外す、艦長に報告する。

「トーマス艦長、統合司令部からです、コールサインホテル01が重傷者をこちらに搬送することです」

「目標が割腹自殺を図ったか……………作戦成功と言えるか……………いや、言えないな……………医務官は直ちに準備に入れ、移送準備！」

「Yes sir!!」

「どうだ!!」

「なんとか出血は止まった!だが、かなり衰弱してる!急いでくれ!!」

「わかってる!今が最大巡航速度だ!!」

すると、水平線に複数の艦影と、航跡が見えた。

「見えた!!」

『This is Ronald Reagan Air Traffic Control. Hotel 01, please take a direct approach. (こちらロナルド・レーガン航空管制。ホテル01、ダイレクトアプローチをしてください)』

「Hotel 01, 了解」

その後、LSOに従い、着艦した。

機体を拘束具で固定する。

「開けます!!」

扉を開ける。

「ストレッチャーに移すぞ! 1、2、3!!」

合図をかけ、担架からストレッチャーに移される。

「医務官! 準備はいいか!」

『いつでもいいぞ!!』

その後、医務室に運び込み、処置を開始した。

日本国 市ヶ谷 地下統合司令部会議室

国連軍参謀も交えた統合会議に急報が入る。

「確認が取れました! 作戦森の盾第3段階目標、ハークローリア34世が割腹自殺を  
図ったとのことです! 空母ロナルド・レーガンに移送し、治療しているとのことです」

「Oh My God.....」

「嘘でしょ……………」

会議室にいる全員が動揺する。

「ロナルド・レーガンの医療設備ならなんとかなると思います……………」

「直ちに上に上げろ……………」 第3段階は失敗したと……………」

「……………」

「はい……………」

この急報は、上…………… 総理のもとへと、届けられた。

日本国 総理私邸

「あー。何年ぶりの休みだ？俺……………」

「えーとー」

「いや、見なくていいから……………」

箕輪私設秘書が手帳を見ようとしたのを佐山が止める。

すると、佐山のスマホに電話がかかってくる。

佐山が電話の相手を見た時、渋い顔をしていた。

「もしもし…………… 割腹自殺を凶ったか…………… そんなに悔やむな……………」

目標は無事なんだろう?。」

『はい、続報が入り、目標は命の危機を脱したと……………』

「なら作戦は成功だ、すでに第7機甲師団は撤収したんだろ?。」

『はい、一応第3段階の目標は達成したので、すぐに撤収しました』

「ならいい。すまんが詳しいことは明日で頼む」

『はい。失礼します』

ピッ!

「あー。今日だけでも仕事を忘れない……………」

「心中お察しします」

「もう23:00か……………もう下がっていいよ。お疲れ様」

「はい、おやすみなさい」

箕輪が退出する。

1人残った佐山は、情報庁からもたらされた報告書を読んだ。

題名は、『旧世界に取り残されていた国防軍の全てが日本の空き地、又は基地内に出  
現』と、書かれていた。

「もう、転移してから5ヶ月以上経つてるといふのに何故今来たんだ?それなら国が転  
移した時に、まとめればよかったものを……………あれ?俺……………何を言っ

て……………はく、寝よ」

佐山は眠りについた。

ロデニウス大陸沖

連合艦隊旗艦 あかぎ 艦橋

「—命の危機は脱したとのことですよ」

通信士妖精が、あかぎに報告する。

「ありがとう……………中央から何か追加の命令は？」

「追加の命令はありません。ただ、第7艦隊第5空母打撃軍所属艦艇は、直ちに舞鶴へ向かうように指示されています。ロナルド・レーガンの任務は、そうりゆうが引きづきます」

「そう……………後は、講和に向けての作戦ね……………」

「すでに、艦載機が作戦を開始しています」

副長妖精の視線は彼方を飛ば、艦載機に向けられた。

「異世界初の軍事行動、派兵……………私達はこの力を自制できるのかしら……………」

「すべては政府にかかっています」

「まあ、私達が話している問題ではないわ……………集中しましょう」

「はい」

その後、クワ・トイネ公国、クイラ王国、日本国の共同声明で、ロウリア王国に講和会議の開催を呼びかけ、ロウリア王国はこれに応じた。

海軍艦船は全滅、陸軍は40万以上が戦死している。ワイバーンも全て殲滅された。そして、ハークロウリア34世が連れ去られたのだ。

もうロウリア王国に外征能力は残されていなかった。

そして、ハークロウリア34世の容態は問題はなく、その後回復した。

日本国 首相官邸 総理執務室

国家安全保障会議が終わり、佐山、広瀬、白井、荒米が執務室にいた。

「まあ、ほぼ予想通りだな……………」

「負傷者ともかく、殉職者が出たら、辞表もんですよ」

「うん……………それで、例の諜報員達は？」

佐山が荒米に問う。

「はい。現在、本国に移送するのは控えて、特殊作戦群が立てた、プレハブの……………」

すいません、そこから先は言いたくありません」

言い淀んだ荒米を見て佐山が少し引く。

「うん……………察するよ……………で、その諜報員は、うちのことをどこまで知っている？どこの所属かはわかった？」

「ええ。まず、フランス語擬きを話す人物は、ムー共和国という国の技官であることが判明しました。そして、ロシア語擬きを話す方は……………口を閉ざしています」

「うん。知ってた。だが、フランス語……………マイラス・ルクレールは、ずいぶんとペラペラ喋ったみたいだな……………」

「はい。現在、判明してる、ムーの素性は――」

荒米が要点を挙げていく。

・永世中立を宣言している。

・ムーは列強序列第2位。

・技術レベルはWW1のイギリスレベル。

「――です。他にもありますが、印象に残ったのはこれです」

「うーん。まあ、接触してみないことには全く分からないな……………」

「衛星写真では限界がありますからね」

「後で、宇治和に言っとく。国防省……………いや、海保にしようかな……………」

どっちがいいー」

「俺に聞くな」

「え…………… はい…………… じゃあ、艦隊を派遣しよう」

佐山はしょんぼりしながらも、指示をする。

「OKです。後で計画を提出しときます」

白井が言う。

「まあ、とりあえず置いといて、荒米、広瀬、これ…………… どういうことだ？」

佐山が、端末に表示されていた題名を叩く。

「そのままです」

「…………… 部隊は？」

佐山の問いに白井が答える。

「海外派遣に出ている全部隊だ…………… 陸は、コンゴ、南スーダン、ネパール、海賊対

処の基地守備隊諸々に出ている8個大隊、海外に支援物資、航行訓練、海賊対処で出て

いた7隻の艦、同じく海賊対処の哨戒機などの航空機12機が所属の基地へ現れ

た…………… 本人曰く、うちらが消えて、1年近く経ち、そして、国連軍の指揮下に入

り、いつも通り、俺たちからの最後の命令を遂行していた時、突然視界が真っ白になり、

自分たちの所属基地へ、保存していた装備弾薬全て持って現れたようだ…………… 向



「この世界の様子を聞きたい？」

「うーん」

佐山は少しの間考えて答える。

「じゃあ、良い方から」

「……………まず、うちが消えて、世界がかなり混乱に包まれたらしい、だが、国連の権限をかなり拡大させたのが功を奏して、国連が一時的に世界経済をコントロールして、混乱を収めたらしい」

白井が紅茶を一口含む。

「で、いい報告は何一つない」

佐山がずっこける。

「まあ、国一つ消えたんだ、普通そうだろうな……………」

広瀬が白井の話を引き継ぐ。

「まあ、端的に言えば、うちの隊がいたお陰で大人しくしていた軍閥諸々が動き出した。そして、国連軍が部隊を派遣し、秩序を維持した……………そして、国連軍が対応で四苦八苦しているときに、世界で見計らったように各地で紛争が勃発、国連は、各国国軍を紛争調停に向かわせるように言ったらしいが……………」

「その紛争が起こってない国同士で戦争が起き始めたか……………発端はアメリカ

か……………」

「その通り。アメリカが国内の混乱を国外に向けようとして各国紛争に介入したが……………」

「その攻撃が逆に国民の反感を買ったと……………」

「Yes。国連がなんとかしようするときに、こっちに來たらしい……………」

「どうせなら、諜報員も送って欲しかったな……………」

荒米が頭を抱える。人材不足はどこも同じ問題だった。

「何故転移から一年も経った今、国防軍だけがこっちに送られてきたか……………間違  
いなく外的要因…………… 神の御業だな」

佐山の予想に同意する広瀬以下3名。

「そういえば、クワ・トイネ公国にある、リーン・ノウの森に太陽神の使いの遺産がある  
とかなんとか言ってましたね」

荒米が、ふと思い出したように言った。

「太陽神の使いね…………… 気になるな……………」

「学術調査団を派遣しましょう…………… いつかね…………… 今は講和会議の結果を待

ちましょう」

「うむ…………… じゃ、解散、残して悪かったね」

「お疲れ様です」

荒米だけが退出する。

「今夜どこ集合？」

白井が佐山に聞く。

「明日午前中だけなぜか空いてたから……………」

1番に22:50に集合で」

「うい」

その後、広瀬と白井も退出した。

「はく。戦争は嫌いだ」

そう言うと、佐山も執務室から出た。

日本国の異世界初の戦争は圧勝で終わった。

## 講和 忍び寄る魔の手

ハーク・ロウリア34世の逮捕から3週間後

中央歴1935年 西暦2049年 9月10日

クワ・トイネ公国 マイハーク文化会館

ここ、マイハーク文化会館は、日本国の出資により、建造された建物だ。そんな文化会館で講和会議が始まる。

講和会議議長を務めるバリー・ネルソンが登壇する。

(佐山の野郎…………… 仕事を押し付けやがって……………)

バリーの顔には微かに笑みを浮かんでいたが、それとは裏腹に、心の中では煮えくり返っていた。

(俺がいくら日本支部の長だからといって押し付けるのはやめてくれよ……………!!)

バリーは、何を言っても仕方がないと諦めて気を引き締める。

眼前には、日本国、クワ・トイネ公国、クイラ王国、ロウリア王国の全権大使が座っていた。

「では、これより講和会議を始めます。まず最初に私は、国連日本支部局長バリー・ネルソンと言います。本講和会議議長を拝命いたしました。それでは、本講和会議を開始します、すでに任命状などの交換は終了しているので、最初に各国の要求事項の提示をお願いいたします」

クワ・トイネ公国リンスイ全権大使が手を挙げる。

「リンスイ殿、どうぞ」

「はい、我が国はロウリア王国に対して何らの要求をするつもりはありません。一応理由を述べますと、今回の戦争で負傷者、死者が一切出ていないのと、日本国によるハーク・ロウリア34世の事情聴取によつて、我が国とクイラ王国との戦争は避けられなかったという話を聞きました。そしてハーク・ロウリア34世はその事を十分に反省しており、そして裏では亜人保護のために動いていたという証拠を日本国からいただきました、そして今回のロウリア王国への対応は日本国へ一任します」

「わかりました。次にクイラ王国メツサル全権大使、お願いします」

「はい、クイラ王国はクワ・トイネ公国と同様、ロウリア王国に対して何らの要求をしません。以上です」

ロウリア王国パタジン全権大使の顔が驚愕に包まれるのと同時に心の中では、葛藤が激しく渦巻いていた。

(日本国が賠償権放棄を迫ったのか……………だとすると、日本国は我が国に法外な要求を……………)

しかし、パタジンの懸念はすぐに無くなる。

「では、日本国全権大使宇治和殿、お願いします」

(来た……………)

パタジンは身構える。

「はい、我が国の要求事項はこれです」

宇治和がプロジェクターを操作し、項目を見せる。

「なっ—」

そこには……………。

・ロウリア王国は過去の行いを、クワ・トイネ公国、クイラ王国両国に公式に謝罪すること。

・ロウリア王国への内政に日本国が5年は関与できることにすること。

・ロウリア王国はロデニウス連邦構想に参加すること。

その他諸々……………

パタジンは要求事項の少なさにずっこける。

「驚きますよね……………なぜ賠償金を要求しないのか?と……………貴国に支払

い能力がないことはハーク・ロウリア34世の事情聴取で確認済みです。法外な借金を抱えてるようですね……………賠償金は後世に恨みを残すだけ、かと言って貴国には鉱物資源が乏しい。それに、必要な資源は全てクイラ王国から輸入できていますがね……………ですが、貴国はある資源があります。何かわかりますか？」

宇治和がパタジンに聞く。

「……………人……………ですか？」

「そう、人。これは最大限の強みになります。おそらく我が国の支援で貴国はかなりの経済大国になるでしょう。そこに農産物のクワ・トイネ公国、鉱物資源のクイラ王国、人的資源のロウリア王国が連邦を形成すれば……………悪い話ではないと思えますか？」

日本国、クワ・トイネ公国、クイラ王国の3ヶ国は会談を行い、今後のロウリア王国への対応や動向を決めた。

クワ・トイネ公国、クイラ王国はロウリア王国への賠償請求は一切しないことを決めた。

そして、そこに日本国が、ロデニウス大陸各国構成される、『ロデニウス連邦構想』を提案したのだ。

ロデニウス大陸は、各種資源のチート大陸―ボーキサイトとか……………石油、普通、気が遠くなるほどのボーリング調査をやって油田を当てるのに、湧き水の如く湧き出て

くるって………後、クワ・トイネ公国も似たり寄ったりであるため、すでにクイラ王国、クワ・トイネ公国は科学を取り込んでいるため、基礎技術はほぼ習得している。日本国がそこに僅かな支援をすれば化けるであろうと、日本国経済界、政治界はそう読んだ。

「それに、連邦に参加すれば、貴国はロウリアであって、ロウリアでなくなる。まあ、払う払わないは貴国の自由ですが、もし払うのであれば多少の支援はしましょう」

パタジンは息を飲む。あまりにもこちらに有利すぎる内容。内政に干渉など、よほど理不尽でなければ、5年耐えればいいだけだ。

「どうですか？まあ、連邦参加は規定路線ですがね」

「こんなもの、『はい』しかない。」

「………わ、わかりました。ロウリア王国は、日本国の要求を受け入れます」

講和設立。後は、公文書に署名を残すだけだ。

「それでは、こちらの公文書に署名をお願いします」

パタジンは憲兵に誘導され、机に置かれた公文書を見る。

『ロデニウス条約』と書かれていた。

すでに、ロウリア王国以外の大使は署名済みであった。

『パタジン・セウス』と書いた。



「では、一度確認します」

バリーが、しっかりと書かれているか、漏れがないかを確認する。

「……………確認しました」

バリーがそう言うのと、『バリー・ネルソン』と書いた。

「ゴホン……………本講和会議が成立した事を宣言します。そしてロデニウス条約の

締結が決定いたしました」

周りで拍手が上がる。

「では、これにて閉会します」

日本国 市ヶ谷 国防省

「現地部隊の撤退作業は順調に進んでいます。ロウリア王国に駐屯するのは、第7機甲師団から分派する、第21普通科連隊、第51ヘリコプター中隊を考えています」

ロデニウス大陸統一戦争終結を受け、国防軍は派遣した師団を順次撤退させていた。

「ロデニウス大陸に関して以上です。次に……………フェン王国軍祭です……………どうします？」

統合幕僚幹部が全員に聞く。

「どうって言われてもな…………… あんなどころに艦隊を派遣するには多すぎるし、単艦だとね〜」

「やはり、第3駆逐隊に第7艦隊のタイコンデロガ級か、大湊にいる、国連海軍第4艦隊所属のピョートル・ヴェリーキイを旗艦として、同行をお願いしましょうかね？ 250mの巨体ですし、良いのでは？」

宇宙海軍参謀がそう言った。

「待て、核燃料棒は後どれくらいだ？」

そう聞かれた参謀は端末を操作しながら答える。

「えー。転移の1ヶ月前にモスボールを終えて、試験を兼ねて世界一周航海の際、大湊に寄港していました。しばらくは余裕で持ちます。すでに乗組員は国連海軍第7艦隊編入を了承していますので、問題はありません」

ピョートル・ヴェリーキイはロシア北方艦隊の前旗艦であったが、艦齢の高齢化、艦艇の更新に伴い、退役間近であったところを、国連が買収、日本国へ回航し、寿命延長工事、装備転換を行った。そして、国連海軍第4艦隊の重巡棒として所属している。

「そうか…………… では、その方針で進めてくれ」

「はい」

「それで、次に、今戦争において拘束された諜報員、ムー共和国と、グラ・バルカス帝国

の情報ですが、まずムー共和国はWW1のイギリスレベルであることが判明しています。ただ、一部技術はWW1を超えています。見てください」

参謀が、全員の端末に写真を送る。

そこに映っていたのは……………。

「「三笠!」」

「いや、でも敷島型を建造したのはイギリスだから……………」

「そうか…………… 待て、一部技術が超えてると言ったな、まさか金剛擬きが―」

「それについては、今の所確認されていません」

「そうか……………」

「ただ、金剛擬きだと……………」

再び端末を操作し、写真を映す。

「「金剛!」」

「いや、待て、これは回転レーダーだ。回転レーダーがあるということは、PPIスコ―プを開発している…………… だが、金剛そのものだな……………」

「…………… 断定まではいきませんが、日本的な思想設計を持ち、電子技術は太平洋戦争末期の米軍ですかね……………」

「まさか…………… 大和……………」

財前副幕長が内神田空間幕僚長を見る。

「そのまさかですよ。これを見てください」

内神田が手元の端末を操作し、画像を映す。

「すげー!、まじの大和じゃないすか……………しかも最終決戦仕様ですよ!しかも2

1号電探じゃなくて回転レーダー……………ん?砲塔に棒が……………まさかレー

ダー測距儀……………レーダー射撃ができるのか……………」

今言った参謀……………陸軍の参謀なのだが……………」

「本郷、海行つたらどう?」

と、白峰陸上幕僚長が聞くと、本郷陸軍参謀が勘弁してくださいと懇願する。

「船酔いしやすいって言ったでしょう……………」

なんとなしに幕僚会議の空気ではなくなっているが、白井が参加した際、『何でこんな

堅苦しいの?国の滅亡が迫ってるわけじゃないんだからさ……………こう、のんびりと

した空気というか、そういう空気にしよう』と、鶴の一声でそうなった。

「あら、そうだっけ?」

「はい、船酔いが酷いので……………仕方なく陸軍に……………」

その後も、新世界の日本国へ脅威となる国の戦力評価が行われ、『引き続き、要注国  
家への監視を続ける』と、財前副統合幕僚長がいい、統合幕僚会議は終了した。

各参謀、幕僚、関係者らが退出していく中、財前副統合幕僚長と、内神田空間幕僚長の2人が残った。

「で、今日、なぜ総隊司令が来なかったんだ？」

そう、統合幕僚会議に白井が参加しなかったのである。

「理由は聞いてるんだろ？」

内神田が財前に問う。

「…………… 呉に行ったと言う噂は聞いた」

財前の答えに内神田は大体を察した。

少し話した後、2人もそれぞれの持ち場へ戻った。

市ヶ谷で幕僚会議が行われていた時。

呉 某所

空調が効いた室内に白井と、大和がいた。

しかし、快適な室内なはずなのに空気はピリピリしている。大和が、その膨大な艦霊力を解き放っているからだ。

「それで、なぜこんな所に国防軍の現場司令官たるあなたが来たのですか？」

「なぜ俺は艦娘に会うたびに艦霊力をぶつけられなきやいけないんだ？」

この男の過去が原因である。

「まあ、今日はあの話じゃない、世間話に來ただけだ。それに……………」

白井が床に置いていた風呂敷を取り、それを解く。中には――

「どうだ？ 間宮羊羹。好きだろ？」

旧日本海軍給糧艦『間宮』。

その艦の存在は連合艦隊の士気維持のための重要な艦であった。

その間宮羊羹を無言で受け取る大和。

「……………ありがとうございます」

「まだ、あのことを？」

あのこと

坊ノ岬沖海戦で、大和が救助、いや、生き延びたことである。

大和は自分の船体が沈んでいく中、伊藤整一と共に最後まで残ろうとしたが、複数の

妖精が伊藤整一の命令を受けて、大和を船外へ連れ出し、駆逐艦『雪風』に救助された。

当時、大和は雪風に戻るように言ったが、雪風は拒否した。

伊藤整一は、自分が死んでも大和だけでも残そうとしたのである。

「……………私をあそこで……………あそこで……………」

大和の言いたいことが白井にはよく分かった。

「もうこの話はやめるか……………さて、羊羹を食いながらも話そう」  
包装を剥がす。

「おっ！間宮の奴……………」

羊羹を見た白井がぼやいたので、大和も気になり、羊羹の包装を剥がす。

そこには

「菊花紋章……………」

そこには菊花紋章に刻んだ栗を中央に埋めた羊羹があつた。

白井が丸かじりする。

「うん……………チマチマ食べるよりこつちがいいな」

しかし、大和はそれを皿に乗せて、切り分けて食べる。

「今日ここに来た理由だが……………まず艦霊力収めてくれない？」

そう言われて艦霊力を収める大和。

7万t級の艦を操る艦霊力を耐える白井とは一体……………？

「で、これ……………」

白井が大和前に端末を出し、写真を投影する。

「え？」

大和がその写真に見入る。

「これ……………」

「間違いなく大和の船体だ。ただ、日本から3万km以上も離れている所で確認された」

つまり、確証はないが、大和ではないということである。

「話はこれだけだ。長居するとお前に突き出されそうだがらもう帰るな」

白井が立ち上がり、玄関に向かおうとした時、何かを思い出したように止まった。

「あ、そうそう、巫女が横須賀に遊びに来たら？と言っていたぞ。じゃあな」

ブーツを履き、戸を開けて出て行く白井を見送る大和。

遠ざかる白井の背を見ながら大和は、

「横須賀か……………」

と、言った。

---

ムー共和国 アイナック空港

空港応接室に20代くらいの男がソファアに座っていた。

「地獄だった……………」

この男、マイラス・ルクレールは、日本国の調査をしにロデニウス大陸へと渡ったが、



その調査対象である日本国国軍、日本国防軍に拘束されて、思い出すのも嫌になる程あれこれと聞かれて、つい先日解放されたのだ。

そして、アルタラス王国へ渡り、民間路線を使用し、アイナंक空港へと戻った。

「しかし……………日本国の技術体系が全く分からなかった……………他の調査員が撮ってきた魔写だと……………」

マイラスが胸ポケットから魔写を取り出す。

そこに映っていたのは、国連海軍第7艦隊駆逐艦『カーティス・ウィルバー』であった。

（日本国の国旗は白地に赤の丸だったはず……………だが、これは全く違う……………）

「120mmちよいの砲が1基に……………機銃がたったの2門、それになんだかこのマスは？そしてこの目のような物……………」

訳のわからない装備、用途不明の装備、そして何より主砲がたったの1基、しかも120mmちよいしかない……………戦車は120mmの大口径を搭載しているのだから、艦砲も大きくていいはずなのだが……………。

「それにしても……………」

マイラスはそう言いながら頬をさする。

「まだ痛い……………」

マイラスの右頬が微かに腫れていた。

ガチャツ

扉を開く音が聞こえ、反射的に席を立つマイラス。

「立たなくていいよ、かけたまえ」

応接室に入ってきたのはマイラスの上司ウルゲン大佐だった。

「息災だったな。すでに概要は聞いているが詳しく聞かせてくれ」

「はい…………… まず日本国の技術レベルですが……………」

「結構開いてるだろうな…………… 30年つてところか？」

ウルゲンがそう予想したが……………

「いえ、私の私見ですが、100年以上は離れているはずですよ」

予想を超えるレベルの違いに絶句するウルゲン。

そこまで行くと、文明圏外と、列強の差までいく。

「しかし、日本国の技術ですが、これを見てください」

ウルゲンの前に先程マイラスが見ていた魔写を差し出す。

それを見るウルゲン。

「120mm級の艦砲がたったの1門!?…………… マイラス、お前は どう見る？」

「まずこれを見てください。私が見た戦艦の目測ですよ」

マイラスから渡された概要を見るウルゲンだが、次第にその目が開かれていく。「なっ!!これはデタラメではないのか!?!」

そこに書かれていたのは、

船体

・全長250 m

・全幅50 m

武装

・主砲と思われる物 41 cm

・副砲と思われる物 20 cm

・対空機銃 4門

スペック

・速度不明

「こんなもの……最近建造を終えたばかりのラ・カサミ級のスペックを上回るではないか!?!」

自国の最新鋭艦が東の果ての国家がそれを上回るものを作っていることに震えるウルゲン。

「だが……証拠がない」

マイラスは下唇を噛む。

「はい、小官もそう考えていました」

「我が国の兵器を全て上回る可能性のある国がある……………重大な脅威にも関わらず、証拠がないとなると……………」

上層部は恐らく信じないだろう。

上申書が上層部で嘲笑割れるのを容易に想像できた兩名。

「とりあえず、証拠があるものだけを報告しよう」

「はい……………」

裏が取れた事実のみを報告した情報部だったが、この報告書が後に『日ムー友好のきっかけの始まりの報告書』としてムーの歴史に残ることを、彼らは知る由もない。

同日 グラ・バルカス帝国 帝都ラグナ 情報部 通信室

通信室に電子音が鳴り響く。

「……………閣下、ロデニウス大陸にいる諜報員からの報告です」

スツキリとした黒い制服の男が通信士からの紙を受け取り、報告を始める。

「ロウリア王国のクワ・トイネ公国並びにクイラ王国への侵攻は、日本国の介入により、

失敗に終わり、王家は失脚し、民主主義に移行したとの事です」  
「何!？」

いつもは概要を聞くだけで納得し、仕事は部下に任せ、責任は自分がとるといふ——有能なのか分からない——閣下と呼ばれた男の片眉がつまり上がる。

「情報部の分析では、ロウリア王国の圧勝で、ロデニウス大陸全てがロウリアになるはずだったが……………日本という国は聞いたことが無いが……………詳細は？」

「実は、その日本軍を調査していた諜報員が拘束されたようなので——」  
拘束、という単語の反応する閣下。

「馬鹿な！ 蛮族如きに我が帝国の優秀な諜報員が拘束される訳がないだろうが!!」  
あまりの剣幕に耳を閉じる黒い制服の男。

「ですが、データラメなことを報告してくると思いません」

「うっ……………そうだな……………その日本国の情報は？」

「その調査をしていた諜報員が拘束されたことで、情報の精度は怪しいですが、日本国の参戦によって、ロウリア王国の4400隻の大艦隊は、日本の隊に一方的に撃破されました。地上でも、ロウリア兵は日本に傷を負わせる事無く敗れています」

報告は続く

「なお、日本の兵装ですが、ロウリアの首都ジン・ハークでの目撃情報を分析するに、9

000t級の重巡洋艦を目撃し、各巡洋艦には80から130m程度の砲が、たったの1門しか付いていません。しかし、重巡の艦載機はすべて回転翼機とのことですよ」

「固定翼機とか、空母の確認は？」

「固定翼機、空母の目撃情報はありません」

「豆鉄砲が1門か、随分と歪な発展をした軍だな。今までの敵は、これで十分だったのだろう。回転翼機は我が軍でもまだ開発中どころか、構想段階だから、部分的には帝国の技術を超えているのか。だとしたら、戦闘機はそれなりに強力な可能性があるが、アンタレスの敵ではないな。しかし、砲の数と大きさから考えて、軍の運用面を考慮すると、随分と平和な世界に住んでいた国のようだな」

閣下の考察は正しい。ただ、それが自分達と同じ土俵にいるならば、という条件がつくが。

話が続く

「しかし、技術がこの世界の国から比べると、隔絶しているな。この国も、我が帝国のようにならねえだろうが………主砲が1門、しかも豆鉄砲の艦を作るようでは、日本国は恐れるに足りんな。多少の被害が出るかもしれないが、大局に影響は無いだろう」

男は日本軍に興味を無くすが、諜報員が拘束されたことには危機感を持った。

「だが、こんな失態を知られるわけにはいかない」

男は諜報員が拘束された事実を抹消し、その諜報員名簿から名前を消した。この行動が、後に帝国の衰退の原因の一つになることを、男は知らない。

パーパルディア王国 国家戦略局 局長室

「この大馬鹿者がツ!!!」

「申し訳ありません!!!」

パーパルディア王国国家戦略局の局長室で叱責を受けてる男がいた。

「なぜ早々にその存在を伝えなかった!!おかげでこの独断先行が知られるではないか!!は〜」

一頻り喚き散らした後、局長がため息を吐く。

「それで、その日本国の兵力についての情報は?」

「はっ……………現地諜報員からの連絡が途絶えておりまして、戦闘に巻き込まれて死亡したかと……………」

「民間人から情報を聞いたんだろう?」

「はい、入港したロウリア王国の商船などから情報を収集したのですが」

曰く、日本国のワイバーンは音の速さを超える

曰く ワイバーンを1撃で落とす

曰く 鉄の獣がブレスで騎兵をなぎ払い、1撃で城門が粉微塵になった

「ふむ……………」

局長が少し思案した後、答える。

「それは情報操作されたと見ていいだろう。それに現地諜報員が死んでいるなら好都合だ」

意味が分からずに聞き返す局員。

「は？」

局長が暖炉に書類を放り投げる。

「日本国の情報とロウリア王国への支援を記した書類は、一切残さず処分しろ。国家戦略局、自分自身、家族の為にもな」

「は」

礼をしながら退出する局員。

1人残された局長は呟く。

「日本国…………… 一体どういう国なんだ？」

日本国 市ヶ谷 国防省



大臣室に広瀬と白井がいた。

「魔法を利用すべき……………か……………」

「魔法は全ての過程を無視できる技術だ。メリットは大きい」

2人が話しているのは、魔法の軍事利用だった。ロデニウス各国の魔法技術指導で国防軍関係者は、『あれ？科学と魔法組み合わせたら最強じゃね？』という考えに至り、上に上申、今に至る。

「そして、科学要素を一切排除した物だから、文科省の方で、基礎研究が始まっている……………まあ、異世界各国の協力で比較的早く進んでいるらしいがな……………」

「工学艦娘が聞いたら喜んでやりそうな話だな。実際、絡んでるだろうけど」

佐山の予想通り、明石家総員が関わってると言っている。

「夕張もです」

「あ、そうだったな……………なあ、今夜飲みにかん？」

「お前休みは？」

「これでも暇なんだよ、秘書と次官と誰かさんがほとんど捌いてるからな」

佐山の公設秘書と私設秘書、防衛事務次官が広瀬の元に届く書類を選別していて、広瀬の認証が必要じゃないものは白井が認証しているという仕組みだ。

「その誰かさんはさぞ優秀なんだろうね〜」

「本当助かる」

「死ね」

「え？」

「すまん。口が滑った」

「え？」

それから暫く黙る2人。

「そういえば、学術調査団を派遣するとか言ってたな。確かリーン・ノウの森とか言ったか？」

「そういえばそうだな、うちからもかなり派遣された筈だが……………」

リーン・ノウの森

森の入り口前の開けた平野に男女2人のエルフがいた。しかし、この2人はただのエルフではない。ハイエルフと呼ばれる、普通のエルフよりも長生きし、魔力量も桁違いに大きい。

そんな2人が森の入り口で雑談しながら待っていた。

「聖地に人族を入れるのは嫌だな」

ウォルが呟く。別に彼は人間が嫌いという訳ではない、ただ聖地に人間を入れるのが嫌なのだ。

「ウォル！そんなこと日本国の皆様の前で言つちやダメだよ！相手は人族とはいえ、口ウリア王国からクワ・トイネ公国、クイラ王国を救ったんだからね！」

ミーナがウォルを注意する。

「そんなこと言つたてねえ」

ウォルはどこか納得しない様子だった。

「その日本国が本当に『太陽神の使い』と『星の戦士』達と繋がりはあるとは思えないんだよなあ」

「本当だつて！マイハーク沖にある人工島で、軍艦のマストに掲げられていた旗と、ロウリア戦で活躍した日本国の飛行機械に描かれていた太陽の印は、古文書に記されていた古代絵に描かれている太陽神の旗印と同じだったんだからね！それに噂だと日本国と共同作戦を行なつてる軍も存在したらしいんだけど、それが伝承の星の戦士の旗印だったんだからね！」

「偶然じゃないのか？だつて魔王との戦争があつたのは一万年も昔の事だし、太陽神の使いと星の戦士達に関する事も大まかにしか記されていないんだし」

ウォルが言う『魔王』『太陽神の使い』『星の戦士達』とは、かつてこの世界の神話として語り継がれている、ラヴァーナル帝国が残した『魔王ノスグーラ』と、この世界の種族が連合を組んで戦争を繰り返していったという伝承の事である。

伝承では、種族間連合が魔王率いる魔族にフィルアデス大陸を奪われ、当時は神森と言われ、特殊な力を有するエルフ達が住んでいるこの森に追い詰められた際に、長老達は、エルフ達が崇めていた緑の神に救いを求め、それを受けた緑の神が創造主『太陽神』に祈りを捧げた。

彼らの願いを受けた太陽神は、自分の存在と引き換えに異世界から『太陽神の使い』とその盟友の『星の戦士達』と言う二つの戦士達を召喚。

彼等は、ラヴァーナル帝国が保有していたような神の船を使って大地を魔物ごと焼き払い、水中を魚のように進む鉄の鱗を持つ水獣を操り、魔王軍をグラメウス大陸へと押し戻した後に、この世界から去っていたとされる。

今二人が住んでいるこの森は、この時以来、自分達以外の人を森に入れた事は無く、彼らにとっては、これからロデニウス大陸の歴史調査でやって来る日本人の間達は一万年振りのお客様となる。

二人が話していると、目の前の林道の向こうから微かに音が聞こえてきた。

「なんだ？」

暫くしていると、音が大きくなっていき、段々近づいてくるのが分かる。

「おい！あれっ！」

林道の奥から見えてきたのは、緑色に塗られた軽機動装甲車と高機動車、31式特大型トラック、8つの車輪を装着している32式装甲兵員輸送車が車列を形成してやって来る。

「まさか……… 伝承にあつた、太陽神と星の戦士達が使っていた鉄鋼馬車?!」

二人が驚くなか、さらに驚く原因がやってくる。

「ん?」

空気を叩くような音が聞こえてくる。

それを見た2人は、

「まっ!まさか!!空飛ぶ船?!」

『太陽神の使い』の伝承が彼らの脳裏によぎる。

車両隊やヘリコプターは入り口直前で停車、着陸し、自動車から継ぎ接ぎの作業服を来た大学の考古学部と科学部を専攻する名誉教授や、国防軍関係者、国連軍関係者から派遣されてきた21人、クワ・トイネ政府から派遣された立会人が降りてくると2人の前に立つ。

「日本国より参りました、學術調査団代表、日本国内閣府異世界調査部第2課所属、国連

大学日本キャンパス考古学教授、インディアナ・ジョーンズと申します。本日はお忙しい中、我々の突然の申し出と来訪、そして神森の調査へのご協力を我々一同、感謝の念に絶えません」

長つたらしい所属名に困惑する2人。

「は、はい……………」

ウォルとミーナは予想していた日本人の控えめな姿勢に再び困惑する。2人とも、最初は日本人達が横柄な態度をとってくるかと予想していただけに、その意外性に驚きを隠せなかった。

「では…………… 神森へご案内致しますので、こちらへどうぞ」

ウォルとミーナの案内で、考古調査団と護衛の日国連合小隊20人は森に入っていく。

そして2時間が経過し、調査団一行は森の奥地にまで足を進めていた。

「はあ…………… はあ…………… しかし、この森は不思議ですな。方位磁石は狂ったまま様々な方向を示しますし、どの方向を見ても同じような景色が続いて、目がチカチカしてしまいます」

「……は神話の時代に、魔王軍の侵攻を食い止めるための最後の砦でしたから、神の加護の1つである、森の音が聞こえる我々でないと迷ってしまうのですよ」

「なんと！神の…………… 加護が実際に…………… はあ…………… 働いているなんて……………」

インディアナの言葉にミーナが答え、インディアナは驚きつつも納得する。

「しかし、これ程の森を2時間近く歩いているのに、護衛の方々は全く疲れが出ていないみたいですね」

護衛の合同小隊は、重い小銃と装備を担ぎながら平然と着いてくる。

「今回は政府が我々の護衛として、軍の中から精鋭を着けてくれましたが…………… 護衛なんていらぬのに……………」

「成る程…………… 練度の高さがよく分かります」

2人に褒められ、内心嬉しさがある軍人達は表情に出さず、無表情で周囲を見回しながら歩き続ける。

「見えました、あれです」

そうしているうちに目的地へとたどり着いた。

先頭に居たウォルが指差した先にあつたのは、森の中に不自然に開かれた平地に、草で覆われた石造りのドーム状の建物だった。

「石造りのドーム状の建物か…………… これを作った奴は建築技術の天才だぞ。」

「見た所、石の表面には多少のヒビはあるが、殆ど劣化していない。基礎もしっかりして

るぞ。WW2に匹敵する技術だな……………」

「建物を見ながら調査団の面々は手にしていたメモに初見による建物の感想を書き綴る。」

「では皆さん、こちらへどうぞ」

建物前にある、鋼鉄製の扉の前にミーナが調査団を集めると、建物についての説明を始める。

「この中には、私達エルフにとつては無くてもはならない大切な宝物なのです。既にご存じかと思いますが、魔王軍の侵攻により、この森に追い詰められた我々の祖先達は緑の神と創造主に祈りを捧げ、遂に魔王軍に対抗できる二つの戦士達が呼び出されたのです。それが、『太陽神の使い』と『星の戦士達』なのです。彼等はその持てる魔導でロデアニウス大陸内に居た魔王軍をフィリアデス、最終的にはグラメウス大陸まで押し返し、役目を終えてこの世界から去っていききました」

ミーナの次にウオルが説明に入る。

「しかし彼等には、役目を終えて動かなくなつた神の船と鉄の鱗に覆われた水獣が居ました。彼等はこの世界を去る時に、それをこの建物の先と地下にある地下湖に残してきました。祖先達は、今では失われてしまった時間遅延魔法を使い代々それを大切に受け継いでいました」



「伝承では、神の船と鉄の鱗の水獣は共に戦いで自らの血を使い果たし、動かなくなつたとあります」

その説明を聞いて調査団と護衛の軍人達の心拍数は緊張感と期待感によつて徐々に上がつていく。

「ワクワクしますね」

「ああ……………何せこの世界の貴重な歴史を目にできるんだからな。考古学者としてこの時程のワクワクするものはない」

教授達は子供のようににはしゃいでいるが、技術者達は先程の説明に妙な違和感を感じつつも、それを口に出す事はなかった。

「それでは扉を開けますが、その儀式のため少しお時間を頂けますか？」

調査団達はふたつ返事で了承し、ミーナとウォルは両手を合わせながら神に祈るような仕草で呪文を唱えると扉を覆っていた草木が、まるで生きているかのように動き出した。

「草木が……………」

「まるで生きてるみたいだ……………」

調査団達は目の前の光景に目を見開く。

「おお……………扉が開くぞ。」

草木が扉から離れると、扉が音を立てながらゆっくりと開く。

「では行きましょう」

調査団一行は護衛の小隊数人を入り口に残してドームの中へと入っていく。

そして調査団の目の前にエルフ達が宝物と崇める、宝物の一つ目である神の船が現れる。

「これって!?!」

「F-35C ライトニング!?!」

軍事関係者が声を上げる。

目の前の格納庫のように広い場所の左右に置かれた神の船はF-35の他に複数存在した。

まず最初に目に入ったのは、F-35だった。

その隣には、迷彩を施されたヘリコプターがあった。A H-1 S、A H-1 Z、M V  
— 2 2 e t c . . . . .

それらの機体に書かれていたのは . . . . .

「陸上自衛隊!?!」

「アメリカ海兵隊!?!」

「アメリカ海軍!?!」

国防軍関係者、国連軍関係者が漢字を、英語を読むと、ミーナが驚きの声を上げる。

「この文字が読めるのですか?!? この文字は太陽神の使いと星の戦士達が使っていた世界の文字なのです。我々にとつては未知の文字なので誰も読めなかつたのです  
が……………」

そこへ、奥へ先に行こうとして居た国連軍関係者が慌てた様子でインディアナに叫ぶ。

「教授つ!!こつちにもありました!」

「何っ?!」

そしてこちらにも同じく胴体には、この世界には無い文字と星の国籍マーク、白に赤丸の国籍マークが書かれている。

先ほどと同じく、この世界には存在しない英語で『US NAVY』『US MARI  
NE』と描かれている。

「なぜここに自衛隊と米軍の装備品があるんだ?」

調査団一行の空気が重くなる中、ミーナが調査団に話し掛ける。

「あの……………実はこの奥にも太陽神の使いと星の戦士達が使っていた火を吐く鉄の地竜があるのですが、ご覧になりますか?」

「……………是非!!」

彼らが更に奥に進んだ場所には、衝撃的な物があつた。

「これは…………… 10式戦車じゃないかっ!!」

「こつちにはM1A1があるぞ!」

そこには、鉄製の車輪に履帯を備えた車体の上に亀のような形をした砲塔から伸びる長い砲身を持った戦車や、前者よりも箱のように角張った砲塔とより強力な砲を備えた一回り大きな戦車などが4台程鎮座していた。

回りには、陸上自衛隊の87式RCV、10式戦車。

そして米軍のM1A1、M2A3。

「教授……………」

「うむ。太陽神の使いと星の戦士達は間違ひなく、国防軍の前身組織の自衛隊と、米軍だろう。装備から見ても、西暦2030年よりまえの米軍だと見ていいだろう」

調査団の謎が深まる中、ミーナとウォルの案内で、今度は鉄の鱗を備えた水獣が安置されている地下湖へと通される。

調査団一行はドーム状となっている神殿の更に奥、地下へと通じる入り口から入って行く。

「不気味ですね……………」

地下へと続く石の階段を下りながら、インディアナは辺りを見回す。天井からは地下

水の水滴が滴り落ち、地下独特の湿気により壁や地面は濡れており、滑らないように慎重に降りていく。

「ここは神話の時代には地下道により海と繋がっていたのです。太陽神の使い達は、出現した北の海岸からこの奥にある窪地に目をつけて、水獣の棲みかを作ったと言われています」

「今はどうなっているのですか？」

「神話の時代から現代に至るまでに起きた自然現象による土砂崩れと、地震による地殻変動で今は海との繋がりは完全に断たれています。そのため水獣の棲みかは巨大な地底湖となっているのです」

「成る程……………」

インディアナ達は水獣の正体について大方の検討は付いていたのだが、まだそう判断するのは早計として、敢えて口には出さずに居た。

「あれです……………あの扉の向こうに水獣が安置されています。」

やがて最下部にたどり着き、大きな鋼鉄製の扉が現れる。

「ウォルさん、この扉は金属で出来ているようですが、あまり錆が見られませんね。それに最近、開けたような形跡が見られますが……………」

「はい。我々は毎年、水獣に祈りを捧げるために年に一度はこの扉を開けているのです。」

それにこの扉も時間遅延魔法によって作られた当時の状態を保っているのです」

ウオルの言う通り扉の表面には錆は殆ど見られず、鍵となっている鎖を繋いでいる南京錠も同様である。

「ではこの扉の鍵を開けます」

ウオルは懐から、木箱を取りだし、蓋を開けて中から一つの鍵を取り出し、南京錠に差し込んで回す。

「開きました。では扉を開けます」

南京錠を開錠し鎖を退けると、扉を開ける。

扉の向こうに広い空間が有るのは判るが、真つ暗で殆ど何も見えない。

「皆様、手にしている松明の火で中を照らしてみてください。」

言われた通り、松明の火で辺りを照らしてみる。

すると……………

「!？」

ぼんやりと、辺りを青白い、人工の物とは異なる自然に近い光が照らし出した。

「これは我が国の地下において湿気が多い場所に生息する、ヒカリゴケと呼ばれる植物が放つ光です。これは暗闇において僅かな光に反応し青白い光を放つ特徴を持つ我が国独特の植物なのです」

空間内の天井や壁に自生していたヒカリゴケは徐々に光量を強めていき、数分で広い空間を照らすのに十分な光量に達し、広い空間に幻想的な光景を写し出した。

「おい！あれをつ!!」

インディアナが指差した所には、透明な淡水で湖底まで見える地底湖にひっそりと浮かんでいる、黒く巨大な影があつた。

それは誰が見ても明らかに潜水艦だつた。

「これは間違いない！潜水艦です！」

「成る程……………鉄の鱗を持つ水獣とはよく言つたものだ」

「なみしお!」

潜水艦を見た女性の国防宇宙海軍関係者、元海上自衛隊潜水艦艦娘『おやしお』だつた。

護衛小隊の軍人2人とおやしおが先に安全確認のため、セイルに備えられた梯子を伝つてセイル上へと昇つていき、見張り所へと入る。

「どこかに中へ行くためのハッチがある筈だが……………」

「これです」

『なみしお』は『おやしお』と同型艦だ。おやしおにとって自分の家に等しい。ハッチを開けて下に降りる。

「あーちよつと待て！」

おやしおが急に走り出した。

「急げ！」

おやしおが向かった先は艦長室だった。

「どうかしましたか？」

「これ…………… なみしおではありません…………… 有人艦です…………… おやし

お型は全て艦娘運用艦、つまりこれは私たちの次元のなみしおではありません

ん……………」

「あの…………… その根拠は？」

「これです」

おやしおが紙を差し出す。

ライトでそれを照らし、読む。

「第2潜水隊群第2潜水隊所属おやしお型潜水艦『なるしお』艦長…………… 曾根崎裕介2

等海佐…………… 間違いなく有人艦ですね……………」

「はい、とりあえずエンジンルームへ行きましょう」

時々足を止めながらエンジンルームへ案内するおやしお。

そしてエンジンルームへ着いた。



「僅かですが燃料が残ってますね」

機関室に向かった3人が、僅かだが燃料タンクに燃料が残っているのを確認し、機関室に残されていたエンジン始動手順が書かれたプレートを頼りにエンジンを始動させると、艦内にディーゼルエンジンの独特なエンジン音が響き渡る。

それはまるで、一度は失われていた命が再び吹き込まれ、息を吹き返したかのようだった。

「す、水獣が！」

「生き返ったっ!?!」

今まで目の前の潜水艦が動いているのを見た事が無かったウォルとミーナは、ディーゼルエンジン音がまるで心臓の音のように聞こえ、排気口から出てくるディーゼルエンジンの白い排気煙が水獣が息をしているかのように見える。

「おー！」

暫くして、ディーゼルエンジンにて発電された電気が蓄電池を通じて電気系統を動かし、今まで真っ暗だった艦内の照明灯が光り出した。

「1万年ぶりの復活だな」

「よく動きましたね、1万年も経てば電気回路などが腐食される筈ですが………これもある人達が魔法を使用したのと手入れをしたのでしょようね」

だが残っていた燃料ではそれも数分しか保たず、エンジンは停止し、蓄電池にも蓄えられる程の電気が作れず、照明も消えてしまった。

「教授。この潜水艦は間違いなくおやしお型潜水艦なみしおです」

「やはり。太陽神の使いの正体は間違いなく日本人、星の戦士達はアメリカ人だ。それも、我々の前時代のな……………」

調査団はたった一日目で、この世界の考古学者の誰もが突き止められなかった太陽神の使いと星の戦士達の正体を突き止めたのである。

「これはこの世界、ひいてはクワ・トイネ公国にとつては歴史的な大発見とも言える。他にこの潜水艦について分かった事はあったか？」

「艦内の資料と表示板、そしておやしおさんの話だとおやしお型なみしおだそうです……………」

「ただ？」

話すかどうか悩んだ教授の助手だったが話すことにした。

「おやしおさんの話だと、これは我々の次元のなみしおではないそうです」

潜水艦を指で指しながらそう言った助手。

「その根拠は？」

「これを」

教授に紙を渡す。

それはおやしおが艦長室で見つけたものだった。

「艦娘艦ではなく有人艦か…………… うん、納得した。日本の艦娘は旧世界でも世界1位

なのに、これは有人艦…………… 別次元の自衛隊であることは明白だ。

インディアナは、ウォルとミーナに顔を向ける。

「お2人とも、ここにある戦士達の遺産は我が国にとつても貴重な歴史遺産になるやもしれません。今後は調査の規模を拡大し、調査にご協力願わないでしょうか？」

インディアナの問いに2人は互いに顔を合わせ暫く黙り込むと、中村に顔を合わせる。

「インディアナ殿、そして日本の皆様。私たちはここに置かれている歴史遺産のお陰で、こうして再びこの国とそして我々エルフ族が太陽神の戦士達と深い繋がりを持つ貴国と出会えた事を嬉しく思います。」

「貴殿方は間違いなく太陽神の使い達の住んでいた異界の国の方達です。今後の遺跡の調査は我々エルフ族が全面的に支援致します」

2人はインディアナ達と固い握手を交わす。

こうして、今まで謎とされてきた古代遺跡の真相に近づいたクワ・トイネ公国リーン・ノウの森には日本の軍民技術者や考古学者達が集まり、遺跡の更なる調査が開始され

た。

そしてこの情報は日本国政府へともたらされた。

日本国 首都東京 首相官邸

學術調査団の報告書を読んだ佐山はため息を吐く。

「はく。この情報だと、別次元の自衛隊と米軍がこの世界での役目を果たした後、燃料の消耗と損傷が激しい装備品を残して帰還したと……………この装備品が異世界に出回ったら大変な事になるな……………」

自衛隊と米軍が残した装備品はこの世界に置いて隔絶している。それがこの辺境の国にあるのだ、列強が知ったとしたら我先にと接收に来るだろう。その事態は望まなかった。

「しかし、重要なのは別次元の自衛隊と米軍は、元の世界に帰っているということです。それは我々も帰れる可能性が高いということです」

茂木文科相が言う。

「仮にこの情報が本当だとしたら、我々は何かしらの役目を果たせば帰還できる可能性が高いということです」

その後各省庁官僚らがあれこれ言い合う。

佐山は何を言うでもなく、目を閉じて瞑目していた。

(一歩間違えれば国民に犠牲が出てしまう。その中で手に入れた帰還の可能性………。今後のことを考えると、この世界の列強、ムー共和国と接触すべきか………)

「みんな」

佐山の一言で全員が話をやめて佐山を見る。

「この情報は国家最重要機密とし、世間には時期を見て公表する、いいな？」  
全員が頷く。

「それと、ロデニウス連邦の設立支援を急いでくれ」

外務省関係者が頷く。

「そして本題だ………。この世界の列強、パールディア皇国とムー共和国と接触しよう」

閣僚、官僚らがざわめく。

国防軍がムー共和国諜報員の尋問によってムー共和国は比較的温厚な国家であることは判明しており、ムー共和国と接触するのはまだ分かる。

しかしパールディア皇国はその諜報員、そして周辺国の情報提供によって、帝国主

義であることが判明している。

「パーパルディア王国に関しては、消極的な交渉でいい、無理はするな。ただ、ムーは艦隊を派遣しよう」

「積極的な交渉でいいですね？」

「ああ、ただし、相手は異世界列強序列第2位の国家だ。国力はこちらが上だとしても、国際的地位は圧倒的に向こうの方が上だ。十分気をつけるように」

「は」

日本国の異世界列強との接触、吉と出るか凶となるか、誰にも分からない。

そして、過去、自衛隊と米軍がこの世界に来ていて、帰還しているという事実は、日本国政府の空気を重くした。

# 異世界列強ムー共和国

## 列強ムー共和国 その1

中央歴1635年 西暦2049年 12月19日 フェン王国沖

ピョートル・ヴェリーキイは、1986年に起工され1998年に就役した。起工時の艦名は「ユーリイ・アンドロポフ（Юрий Андропов）」である。建造中にソ連が崩壊し、極度の財政難に陥り完成は絶望的だと思われていたが、当時のボリス・エリツィン大統領が訪問し特別財政プログラムが発足した。これにより起工から12年の年月を経て、完成した。

そんな艦が日本の転移に巻き込まれて、国連第7艦隊に移管、そして現在に至る。

フェン王国特別親善艦隊旗艦 ピョートル・ヴェリーキイ 艦橋

「まもなくフェン王国領海に入ります」

「了解。ロナルドレーガンの直掩艦として行動を共にするかと思つたが、まさか軍事演習にわが艦が参加させてもらえるとは……………」

ピョートル・ヴェリーキイ艦長『ミハイル・イヴァン』が呟く。

「まあわが艦だけじゃなく、日本軍の駆逐艦も参加していますかね……………」

副長がディスプレイに映る国防軍駆逐艦を見ながら言った。

「…………… 沖合に待機するしかないな」

ミハイルがディスプレイながら言う。

「その時は駆逐艦に移乗し、港に接岸します」

「今のうちに艦載機の準備をさせろ」

「はっ！」

発令員が『航空機発艦準備』と言う。

艦内格納庫からエレベーターを使用して、甲板上に出るKa—27ATG。

その特徴的な二重反転ローターをさらけ出す。

「護衛艦あきづきにこれから向かうよう言ってくれ」

「はい」

「フェン王国からの誘導船を目視！」

右ウイングより報告が入る。

前方から帆船が近づいてくる。

「両舷前進半速」



テレグラフを半速に下げる。

「航海長。操艦指揮を頼む」

「はっ！」

そしてK a—27に乗り、あきづきに向かう。

## フエン王国

剣王シハンは居間から見えるピョートル・ヴェリーキイ、あきづき、てるづき、すずつき、はつづきのあきづき型四姉妹の5隻を見ていた。

「すごいな……あれが日本の戦船か」

シハンがピョートル・ヴェリーキイを見てそう言う。

ピョートル・ヴェリーキイは全長252mと、大和型戦艦に迫る長さである。

「まあ、あの時程ではありませんな」

騎士長マグレブが言った、*“あの時”*とは、日本国転移当初の艦隊派遣である。その時に国防宇宙海軍第7艦隊がフエン王国、ガハラ神国と接触した時のことである。そして日本との国交を結んだが、シハンは『日本の力を見たい』と懇願。それから一年後の今回の軍祭に参加する運びとなった。

「あれは凄まじかったな……………」

「ええ」

それからシハンはしばらく親善艦隊5隻を眺めていた。

「さて、行こうか」

「は」

シハンは棧橋に向かう。

あきづき 艦橋

「結構多いですね」

双眼鏡で観客席を見ていた航海士がそう言った。

「文明圏外各国武官も来ているとのこと。我々は日本国の存在を知らせる役目も兼ねているのでしょう」

あきづきが言う。

「ホモーン1、着艦アプローチに入りました」

「じゃあ、お迎えに行ってくるね。副長、操船指揮よろしく」

「はい！」

あきづきは艦橋を出て、飛行甲板へ向かった。

「よっ！よっ！よっ！」

年齢に合わない声を出し、ホモンから降りるミハイル。

「！ちらへ！！」

頭を低くし移動するミハイル。

ヘリから安全距離を取ると姿勢を正すミハイル。その視線の先には第2種夏服制服を着たあきづきがいた。

握手をするミハイルとあきづき。

「どうぞ！ちらへ！」

まだヘリのローター音が鳴っているため大声で話すあきづき。

「わかった！」

そして艦内へ移動したあきづきとミハイル。

「どうです？本艦の居心地は？」

「やはり目に新しい物ばかりだ……………我が国、いや、国連海軍には艦娘運用艦が存在しないから……………」

「心中お察しします」

艦娘運用艦は第2次世界大戦以降、減少傾向にある。

その中でも日本国の艦娘運用艦保有率はぶつちぎりの一位だった。

「あきづき艦長、これから2週間程度、よろしく頼む」

「はっ」

あきづきとミハイルは再び握手をした。

あきづきとミハイルはその後艦橋に移動した。

「どう？航海長」

あきづきが左ウイングへ出たのと同時に航海長に聞いた。

「問題ありません」

「了解、両舷前進最微速！」

「両舷最微速！」

護衛艦あきづきの乗員の目の先にはフェン王国民が手を振っていた。

『左、気を付け！』

号令ラッパが鳴る。

『かかれ!!』

「左、帽ふれ」

『左、帽ふれ!!!』

一定の作業を終えて制帽をかぶるあきづき。

「係留よ〜い」

係留策を繋げる。

「係留よろし」

「深度は大丈夫？」

「深度21m、問題ありません」

航海長がディスプレイを見ながら答えた。

「右舷、錨撃て！」

「右舷、錨撃て！」

右舷側の錨の固定が外され、海底に向かって沈降する。

錨が海底に着底し、鎖が止まる。

「投錨終了」

「タラップよろしく。では、行きますか、ミハイル司令」

「ああ」

その後、栈橋にタラップが繋げられる。

そこを降りるミハイルとあきづき。

そして陸に上がるとフェン王国民が大きな拍手を上げる。

「ようこそおいでくださいました！ 儂は剣王シハンという」

ミハイルとあきづきは、まさかのフェン王国国王が直々に迎えるとは予想しておらず、軽く面食らう。

しかし、表情は崩さないのはさすが軍人と言ったところだろう。

「国王直々の歓迎恐れ入ります。私はフェン王国特別親善艦隊司令、『ミハイル・イヴァン』と申します」

ミハイルの英語の挨拶を日本語に訳すあきづき。

「うむ。早速だが、我が城へ向かうとするか……………」

「え？」

シハンの突然の申し出に困惑するあきづき。ミハイルは何を言っているかわからなかった。

「すまん、何を言ったんだ？」

「あ！sorry. Apparently trying to invite us to the castle (ごめんなさい。私達のことを居城へ招待しようとしていらっしゃるんです)」

「Ты сербьезно…………… (マジかよ……………)」

思わず母国語が出たミハイル。

「剣王！それは——」

「よいよい。我が国が無理を言つて、来てもらつとるのだ、それ相応のもてなしをしなければならん」

「「「「「.....」」」」」

ある意味正論を剣王に言われて押し黙る従者達。

「では、行こうかの」

「「「「はい」」」」」

従者とミハイル、あきづきの気持ちは一致していた。

道中ミハイルがあきづきに質問する。

「なんてこつたい..... 歓迎を受けるとは思ったがここまでとは.....」

その後、シハンらの質問攻めや日本食擬きを食せられたりと、散々な目にあつたのだった。

艦娘であるあきづきはまだしも、人間であるミハイルはかなりキツそうである。

艦に戻る頃には既に夕方になっていた。

「は.....」

道中何度もため息を吐く2人。

あきづきが突然歩みを止める。

「どうした？」

質問に答えず、森の中をじつと見るあきづき。

「あなた、銃持つてるでしょ？貸して」

「は!？」

突然の質問に驚くミハイル。

「いや、持つてるには持つてるが………」

「貸して」

上下関係があやふやだがミハイルはそんなことはどうでもよかった。

「わかった」

渋々、コートの内側のホルスターに入れていた『マカロフPM』を取り出し、ロックがかかっていることを確認してあきづきに渡す。

「ありがとう」

あきづきはセーフティーを解除し、森のどこかを狙う。

「うっ………」

あきづきが艦霊力を銃弾に込めているのか、物凄い重圧を放つ。ミハイルが右腕を顔の前に持つてくる。

ダン!!!

乾いた音が周囲に響く。



「グハッ!!」

すると、木の影から人影らしきものが倒れる。

「おい！撃つてよかったのか!？」

ミハイルがあきづきに聞くがそれに構わず影の正体を確かめようとする。

その人影は足に銃弾が当たったらしく足を引きずりながら逃げようとしていた。だ  
があきづきとミハイルに追いつかれそうなのを感じたのか銃らしきものを取り出す。

あきづきが走りながら銃を構えて撃つ。

「グワッ!!」

その人影が持っていた銃に命中させる。

「くっ!」

あきづきが銃を突きつけながら聞く。

「あなたはどこから来た?」

「Я не могу ответить. Эта гробаная женщина  
на」

「なんて言ったの?」

そつと目を逸らすミハイル。

「なんて言ったの?」

「『話す訳がないだろう。このクソ女』だとき」

あきづきの放つ重圧に観念して訳を話すミハイル。

「ふくん、『クソ女』ね……………」

あきづきは銃をミハイルに返す。

「弾代はおごりでチャラな」

「覚えておくわ」

そう言いながら右の手の上に青白い光を形成し、すぐに消した。

「!？」

男が目を見開く。

「クソ女じゃないのよね。まさかグラ・バルカス帝国諜報員がいるとは

ね……………」

「拘束するか？」

「必要ない」

そう言いながらどこからともなく手錠を取り出した。

「なんで手錠なんかを持っている？」

「たまたまよ……………」

絶対たまたまじゃないとミハイルは確信した。

あきづきは手錠をかけて護衛艦あきづきへと男を連行した。

日本国 総理私邸

「無事に改正法案が可決されましたね」

箕輪私設秘書が手帳を見ながら言う。

改正法案とは、『海賊行為の処罰及び海賊行為への対処に関する法律』を新世界情勢に対応させたものである。

普通の海賊と元ロウリア王国水兵などが海賊化したものが、ロデニウス大陸周辺で海賊行為をしていることがロデニウス大陸各国政府より連絡された。それを受けて、政府は『改正海賊行為の処罰及び海賊行為への対処に関する法律』の法案を新世界情勢に対応したものを改正したのだ。

日本国にとって生命線であるロデニウス大陸各国からのタンカーなどに被害が出る  
と重大な事態になることを容易に想像できた野党は、この法案に大多数が賛成した。

「これでかなり海賊行為を減らせるだろう」

「おいす」

「!？」

箕輪が後ろを振り向くと、そこには白井がいた。

「どこから!？」

「正面からだか?」

「……………電子ロック、暗号キー、アナログキー、関係者の網膜、指紋などの

多重ロックがかかっているはずですが?」

「EMPとピッキング、サーバーハックなどで余裕」

「ハッキングされたら通知が来るはずですが?」

「コネ舐めんな」

「……………つくづく呆れます」

「まあまあそこまでにして、で、どうしたんだ?白井」

「フェン王国に派遣した艦隊から連絡が入った。グラ・バルカス帝国諜報員を拘束した  
とのことだ」

白井が端末を見ながら言った。

「ロデニウス大陸で薄々感づいたが、ほぼ全世界に諜報員がいるのか……………」

「フェン王国周辺に潜水艦がいるのは間違いない」

「可能性は?」

「70%」

「ふく。正当防衛のみ許可する、それ以上は現場とお前の責任だ」  
「わかってる」

旧世界 西暦2049年 12月23日 アメリカ合衆国 ハワイ州 オアフ島  
真珠湾

日本国転移から1年半以上が経とうとしている旧世界。

真珠湾にある記念艦ミズーリを見ていた人物がいた。

「これは好都合だわ…………… うん、やろう」

そう言うと、右手を天高く上げた。

「天照大明神の名の下に告げる。異世界に賜りし物、それが異世界に幸あらんことを」

右手に青白い光が形成される。

しかし周囲の人々は気付かない。いや、気付ける筈がない、彼女はこの世界では実体化できないからだ。

ミズーリが青白い光に包まれる。そして一際強い光を放つと、ミズーリは姿を消した。

観光客、見物客がどよめきの声を上げるが、彼女は一切動じない。

「さあ、必要な装備は送ったわ。あとはあなた達次第よ……………日本」

新世界 日本国 東京湾 浦賀水道沖 護衛艦『いなずま』

横須賀港に帰港するために浦賀水道を10ノットで北西に向かって航行していた護衛艦いなずま。

双眼鏡を使い、航路監視をしていた妖精が何かに気付く。

「……………あ!？」

艦の進路上に青白い光が突如出現した。

「最大戦速！面舵一杯なのです！」

艦娘いなずまが回避操舵を指示する。操舵員妖精は復唱する間を惜しんでテレグラフレバーを最大にまで上げて右に舵を切る。

加速感を感じながら、遠心力で微かに左に傾く艦橋。

「CIC！正面1kmの地点でレーダーに反応はあるのです!？」

『ありません！しかし艦外モニターでは捉えています!』

いなずまも自身の双眼鏡で正体不明物体を見る。

青白い光の中に微かに艦のシルエットが見えた。

「急いで横須賀艦隊司令部と中央へ通報なのです！それと全周波数にて緊急事態を宣言するのです！」

いなくすが指示を出す。

全周波数にて、周辺を航行している船に注意喚起をした。そして近隣を航行していた海保の巡視船や護衛艦が集まり、周囲海域を封鎖する。

「なんなのですか？」

すると周囲が突然青白い光に包まれた。

「きゃっ!!」

「「「うううー!!!!」」」

余りにも眩しすぎてうめき声を上げる妖精達。

すると、ガラスが割れたような音を出しながら光が消えた。

恐る恐る目を開けたいなくさま。

そこには……………。

「ミズーリなのですか!?!」

そこには旧世界の真珠湾にあった筈の記念艦『ミズーリ』があった。

「ミズーリに呼びかけるのです!」

通信士妖精が全て周波数、チャンネルでミズーリに対して呼びかけるが応答がない。

「まさか無人なのですか？」

「艦長、中央より連絡です。『ミズーリは我が国の領海を無断航行しており、侵略の危険性がある。ミズーリに対して立入検査隊を突入させよ』とのことですよ」

中央は既にいなくすまから報告を受ける前に事態を把握していた。

「つまり拿捕ということなのです……… CIC、曹長聞こえますか？」

『はい、聞こえています』

いなくすまがCICにいる曹長を呼び出した。

「立入検査隊隊員に呼集を掛けてください」

『了解です』

「副長、しばらくよろしくなのです」

「はい、お任せを」

いなくすまは艦橋を後にし、内火艇収容所へ向かう。

「敬礼！」

いなくすまが入ると、立入検査隊隊員は装備を整えて、点検しているところであった。

「お疲れ様なのです。今回の対象は戦艦ミズーリなのです。おそらく無人だと思われませんが、もし人がいたら保護するのです」

「「「了解」」」



「搭乗！」

立入検査隊隊長、曹長妖精が号令をかける。

「内火艇、下ろし方用意！」

格納庫扉が開き、アームで外に釣り出される内火艇1号。

「ワイヤー下ろします！」

操作員がワイヤーのウインチを操作して内火艇を海面に下ろす。

「離します！」

ボタンを押すと、内火艇を釣り上げていたワイヤーが切り離される。

船体から十分離れたことを確認すると、ミズーリへ向きを変える内火艇。

「気を付けてくださいなのです」

その後、護衛艦いなずまの立入検査隊がミズーリに突入。艦内に残されたカレンダーなどから旧世界が西暦2049年12月23日、日本と同じ時間の進みだと判明した。

そして、ミズーリは呉へ曳航され、ドック入り。近代化改修を日本と国連が行い、国連海軍の所属となるのだった。

後日 日本国 首相官邸 大会議室

官邸の大会議室で、先のミズーリ出現事件が話されていた。

「—であるからにして、間違いなく外的要因、即ち、神が関係していると見て間違いありません」

ミズーリの船体調査を行った国防軍関係者が報告する。

「間違いなく、か……………」

断定まではいかないが、日本国転移も神が関わっている可能性が高まった。

「そしてミズーリですが、艦娘ミズーリは確認されませんでした。現在は呉へと曳航し、ドック入りしました」

「改装案は？」

「現在国連軍と検討中ですが、船体、部品まで全てを分子レベルまで分解し、ミサイル戦艦として運用できる設計を考えています。そして単艦でも着上陸支援、対空戦闘、艦隊防空戦闘、対艦戦闘、護衛任務などを行える汎用戦艦として運用できるようになります。改装項目は後日提出します」

「それ、もはやミズーリでなくなるよな？」

官僚の質問に、

「仰る通りです。ですがミズーリの面影は残します、例えば艦橋などです」

「予算はどうだ？」

「残念ながら、今年度の予算では改装費が足りませんので、補正予算案か来年度の予算案のどちらかを考えています。特に急いでいるわけではないので、来年度に組み入れようと考えています」

すると佐山は今まで持っていた手帳を置くと、

「いや、補正予算を提出しろ」

「え!？」

佐山の言葉に南部財務相が驚きの声を上げる。

「総理ーいくらなんでもそこまでは」

「ああ、焦ることはない、だが、戦艦を一から作るより圧倒的に安い。それに、国連軍が戦艦を保有できるチャンスだ」

旧世界で、国連軍は戦艦の保有を検討していた。第1案は、アメリカに保存されているアイオワ級を買い取る案が検討されたが、アメリカ国民の反発が大きいため没。

第2案は国連が独自に建造するという案。独自と言ったが、国連軍装備品委託会社、日本のブラックウオッチ社に委託するのだが………そういう話になったが、情報がマスコミに漏洩、国連総会でパッシングを浴びたことにより、配備を断念した。

「そして恩返しでもある」

佐山の言った恩返しとは、波動砲艦隊についてのことである。明らかな国際条約違反

の兵器、世界中から非難と情報開示、又は全ての情報の破棄を要求したのだ。しかし国連は一切非難などはしなかった。その時、国連の予算などがほとんど日本に握られているというのもあつたが、国連の権限を拡大できたのは日本国の支援があつたからこそできたのだ。

「あの時、世界中を敵に回しかけたが、各国政府の一部中枢、そして国連が我が国を守ってくれたのだ。それに少しは答えなければならぬ……」

列強ムー共和国に使者節団を派遣しろ、国連も含めてな。そして南部、補正予算案――

「分かつています」

「……すまない」

その後の閣僚会議で、ミズーリの国連軍編入、列強ムー共和国への使節団派遣が閣議決定された。

12月25日 日本国 横須賀市

世はクリスマスで沸いている中、横須賀で出港式が行われていた。

「諸君はこれから異世界列強のムー共和国へ向けて出港する。大変な困難な任務であることが予想される。しかし、どうか成し遂げてほしい。諸官一人一人の更なる献身と健

闘を期待する。以上で任務前の訓示とする」

須佐男宇宙海軍幕僚長が訓示を読み終える。空間幕僚長、宇宙海軍幕僚長の違いは、空間幕僚長は波動砲艦隊を管轄に置いている。宇宙海軍は、宇宙海軍所属の艦艇を管轄に置いている。

宇宙海軍艦艇と、波動砲艦隊はそれぞれ分離し、別々の管轄に置かれている訳は、それぞれ別の任務の違いから別々の管轄に分かれたのだ。

「敬礼!!」

列強ムー共和国派遣艦隊、第1任務部隊司令官、第7機動部隊司令『早乙女 晶』の号令で須佐男宇宙海軍幕僚長に向かって敬礼する。

第1任務部隊の編成は下記の通りだ。

第1任務部隊

国防宇宙海軍

あかぎ型護衛宙母『あかぎ』

うんりゅう型ヘリコプター空母『うんりゅう』

ながと型護衛戦艦『ながと』

同 『ほんこう』

たくみ型防空護衛艦『たくみ』

ふぶき型護衛艦 『ふぶき』

『しらゆき』

『はつゆき』

『みゆき』

『むらくも』

『しののめ』

かげろう型護衛艦 『とね』

同 『ちくま』

同 『まきなみ』

同 『たかなみ』

同 『あさひ』

同 『ゆうひ』

伊号潜水艦 『伊―407』 『伊―408』 『伊―409』

ここに増援艦艇である、国連海軍第7艦隊第5空母打撃群所属のタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦の『アンティータム』とアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦の『バリー』の2隻が加わる為、第1任務部隊の艦艇数は、22隻となった。

「出港用意!!」

各艦の錨が巻き取られて、順番に出港する。

第1任務部隊艦艇は浦賀水道を単艦航行し、東京湾沖で合流し、ムー共和国へ針路をとった。

ワ・トイネ公国　マイハーク人工島　迎賓館

ここ、クワ・トイネ公国マイハーク沖にあるマイハーク人工島迎賓館で、ロデニウス連邦設立祝賀式典が行われていた。

ロウリア王国が条約締結から僅か1年にも満たない期間で連邦加盟ができた最大の理由は、日本国による政治改革だろう。

条約締結後、日本国政府はロウリア王国に監査員を送り、ロウリア王国に対して助言をしたり、補助をする役目を与えていた。

しかし、その監査員の仕事はほとんどなかった。

ロウリア王国が自力で政治改革などを全て成し遂げたのだ。

そして日本はそこに僅かな支援をただけなのだ。

通常ではありえないことだが、魔法文明、異世界だからという理由で日本国政府は納得していた。

迎賓館で食事を楽しむロデニウス大陸各国要人。警備はロデニウス大陸各国からの要請で日本国防軍が担っている。

「いやはや……………この光景が信じられませんな」

ロウリア共和国元首パタジンが言う。

「ですな。一昔、といっても一年も経っていませんが、その時では考えられない光景ですな」

相槌を打つクワ・トイネ公国外務卿リンスイ。

「それもこれもパタジン殿のお陰です」

メツサルが言う。

「いえ、これは我が国の民、そして両国と日本国のお陰でここまで来れた……………感謝しています」

パタジンの『日本国』の言葉に反応する2人。

「彼の国と国交を締結するとき、私は猛反対したな……………だがその心配も杞憂になつた……………」

リンスイが過去を懐かしむ。

「私もクワ・トイネ公国からの紹介があつた時、正直言つて心配でしたね……………しかしその心配も無駄だった」



クワ・トイネ公国はインフラ、ライフラインの整備。クイラ王国は、日本主導による砂漠緑地計画の成果が順調に出始めている。

ロデニウス大陸各国、いや、ロデニウス連邦構成州は日本に対して頭が上がらないのだ。

しかし、それは日本も同じである。

転移当初、異世界との接触でクワ・トイネ公国は日本に対して友好的な対応をしてくれ、クイラ王国と共に日本の活動の源である、資源と食料を輸出して、日本を助けてくれたのだ。

もはや切っても切れない仲となっているのだ。

「我らは日本の科学技術を応用することで民間だけではなく軍も強化できた。しかし、この力の使い所を誤ってはいけない……. . . . . やはり日本国を大東洋諸国会議に招待すべきでしょうな」

「それには賛成です。日本国の地位上昇は我が連邦にとつても利益となる。それにあれだけの国力があるのに、未だに世界には日本国の存在は知られていない」

非公式の会話ながら、日本国を大東洋諸国会議に招待することが決まった。

「そういえば噂によれば、日本国が列強のムー共和国に使節団を派遣したとか？」

リンスイの質問に、

「ええ、私もその噂を聞いたことがあります」

と、メツサル。

「ム一共和国か…… パーパルディア皇国より圧倒的な上位国家だが、日本国はそれを余裕で上回るだろうな……」

「この世界が日本国にとつて第2の故郷に相応しければいいがな……」

その後も、雑談を楽しむ3人であつた。

中央歴1636年 西暦2050年 3月12日 ム一共和国 アイナंक空港

(なぜまた呼び出しを喰らつた?)

空港応接室のソファアにム一共和国軍技術士官マイラス・ルクレールがいた。

(3ヶ月前に来たはずなのに、昨日のように感じる……)

ガチャ

「立たなくていいよ。待たせたね」

入ってきたのはマイラスの上司、ウルゲンと、形から外交官らしき人物が入ってきた。

「彼は外交官のフェンリー・ディッツだ」

「よろしくお願ひします」

2人は軽い挨拶を済ませると、フェンリーが話し始める。

「早速だが…………… マイラスレポートを読ませてもらったよ」

「…………… は？」

フェンリーの言った『マイラスレポート』に心当たりがなく、聞き返すマイラス。

「おっと、すまんすまん。君が3ヶ月前提出したレポートのことを『マイラスレポート』と呼んでいる。そして君はそれに、『日本国』のことを書いたな？」

「はあ？」

「その日本国だが…………… 先日ムー東海岸沖に船団が現れた」

「え!？」

「そしてその船団に日本国の外交官が乗っていた。目的は我が国との国交締結だと言  
う」

マイラスはフェンリーの言うことがわかった。

「自分に探りを入れろと？」

「そうだ」

マイラスは少し瞑目する。

「…………… わかりました。務めさせて頂きます」

「おお!助かる!」

そして、しばらく日本国外交官が話したことをマイラスに話すと、ウルゲンとフェンリーは退出した。

「どんな艦なんだろう………？」

マイラスは展望台へ向かう傍、日本国の艦について考えた。

そして展望台の昇降機を操作し、上に向かう。

「なんてでかい空母だ！」

そこにはアイナंक空港沖合で投錨していたあかぎら、第1任務部隊の艦船があった。

そして空母の隣に視線を移すと、

「ん？………あれはあの時の！」

そこにいたのは、ながとだった。

「おー！しかも2隻もいる………あ！あれは………」

マイラスの興味はタイコンデログガ級に移された。

「あの魔写の国旗と同じだ………日本国の属国軍か？」

タイコンデログガ級のマストに掲揚されている星条旗を見てそう言った。

「急いで戻ろう」

マイラスは小走りで空港に戻る傍、フェンリーの言っていた飛行機械について考えて

いた。

(プロペラのない機体。ミリシアルの天の浮船かと思つたが、エンジン部分が動いたという……) どういう事だ?とにかく見てみないことには……)

やがて格納庫に到着する。

「!?、な、なんだこれは……」

マイラスの目の前にはMV-44コスモシーガルがあつた。

「ミリシアルの天の浮船かと思つたが、全然違う……ん? 翼の部分が若干離れている? 速度を上げたら折れてしまうじゃないか? ……これは直接聞いた方が早そうだな」

マイラスは踵を返すと、日本国外交官が待つてゐる部屋へ向かう。

「ふく。緊張するな……よし」

マイラスは深呼吸し、部屋の扉をノックし、入室する。

中には、5人のスーツを着た男女と、軍服に身を包んだ女性……。

「え!?!」

「あ!?!」

マイラスとその軍服姿の女性の目が合うと2人は驚きの声を上げる。

「あの時の……」

マイラスの視線の先には、こんごうがいた。

## 列強ムー共和国 その2

中央歴1636年 西暦2050年 3月12日 ムー共和国 アイナंक空港

「あの時の……………」

マイラスの視線の先には、黒の軍服を着て、ブラウンの髪を切り揃え、ブルーの瞳を持つこんごうがいた。

「……………」

2人の間に沈黙が走る。周りはヒソヒソと話している。

(何があつたんですかね?)

(さあ……………?)

「こんにちは。日本国ムー特派使節団随行人、こんごうと申します」

今までの事を無かったと言わんばかりにスラスラと自己紹介するこんごう。

「申し遅れました、日本国ムー共和国特別派遣団団長の『芹沢 輝』と申します」

他の面々も自己紹介をする。

「どうも、これから皆様をご案内をするマイラス・ルクレールと申します」

マイラスは激しい動揺を表情から消す。

「では、本日は長旅のお疲れを癒すために、首都にあるホテルへと移動します。私についてきてください。ですがその前に、お見せしたい物があります」

マイラスは空港の駐車場へ行く前に、空港の空軍基地の一角にある格納庫へと使節団を案内する。

格納庫には、1機のマリンが格納されておりマイラスは、日本の技術関係に探りを入れるため、マリンについての説明に入る。

「これが我が国の主力戦闘機マリンであります。最大速度はワイバーンよりも速い360 km、航続距離850 km、武装は7・7 mm機銃を2基備えています」

「……………」

日本国使節団の全員が沈黙する。一部を除いて、『何これ？何で翼が2枚？』という状態であった。

「……………」 イギリス軍のソードフィッシュにそっくりですね……………」

「こんごうが発した言葉にマイラスは反応する。」

(そっくり…………… それにイギリス軍?)

マイラスは探りを入れる。

「そのイギリスというのは?」

それにこんごうが答える。



「言つても理解していただけないでしょうから……………機会を見てお話しします」  
「そうですか……………芹沢団長らが乗つてこられた飛行機械ですが、あれは魔法を使  
用しているのですか？それとも純科学製ですか？」

マイラスはコスモシーガルの事を聞く。

「魔法は一切使用していません。科学と魔法を組み合わせれば、かなり相性がいいと、学  
会などで提唱されているのですが……………如何せん未知の技術ですからね。難航  
を極めていきます」

マイラスはコスモシーガルのエンジンが純科学製であることに、知っていたとはいへ  
驚く。

「全て科学で……………他にも種類はあるのですか？」

「ええ、ですが理解していただけないと思います」

「こんごうの答えにマイラスは『やはり』と言つた表情となる。

「成る程、貴国にも航空機向きのエンジンがあるのですね。是非ともその構造や性能を  
見てみたいです」

「我が国と国交を結んで頂ければ、法律が許す限り貴国に対して技術に関する輸出が出  
来ますよ」

マイラスは更に探りを入れるため、こんごうと芹沢にカマを掛ける。

「ところで貴国の航空機は一番速い物でどれくらいか？」

その質問に関して芹沢とこんごうは目を合わせた。芹沢が『ご自由にどうぞ』と視線を送り、『了解です』と答えるこんごう。

「我が国の主力戦闘機の最高速度はマッハ7です」

「……………は？」

「マツハ7です」

「……………」

マイラスは絶句を通り越して発狂寸前だった。

(マツハ7だって!?、一撃離脱戦法どころの話じゃ無い！)

「そ、そうなんですか……………」

マイラスはもう少し探りを入れるつもりだったが流石にこれ以上の事を聞くと、シヨックが大きいとして、聞くのはやめた。

「では、オタハイトにあるルーズトウーホテルへ案内します。どうぞこちらへ」

空港の駐車場へ向かい、そこで迎える車に分かれて乗る。

滞りなく乗る使節団を見てマイラスは、

「やはり貴国にも車はあるのですね」

「二世帯に一台はあると思ってもらって結構です」

どれだけの車があるのだと想像するマイラス。

「それだと結構な数がありそうですね」

「まあ、想像を絶する数値です」

具体的な数を聞きたいと思ったが、プライドがズタボロにされると思ったマイラスだった。

（それにしても極東の文明圏外にこんな国がいきなり現れるのか？）

マイラスは日本の起源について聞こうとしたが、

「そろそろ到着です」

と、運転手に言われ、口を閉じたマイラス。

「よいしょ」

最後の1人が降車する。

「ではこちらへどうぞ」

マイラスについていく傍、使節団は周りをキョロキョロと見ていた。

「…………… 厳重な警備ですな。極東の僻地から来た国の使節団なのに……………」

「ロデニウス大陸統一戦争後に我が国の存在はムーに知られたと推測しています。彼らが、自分たちから接触するか、来るのを待つかの時に、私達が来たのでしょうか」

ホテル周辺を警備していたのは、ムー共和国陸軍だった。

「安心できませんね……………」

列強たるムーが国軍を動員してまで警護する使節団はこの国かと、野次馬が集まり始める。

「人が集まっていますね……………」

その後、部屋へと案内され、礼儀作法などを一通りマイラスから教えられた使節団は、今後の交渉に備えて英気を養った。

同日 ムー共和国 オタハイト ルーズトゥーホテル 深夜

「こんごうは充てがわれた部屋で誰かと話していた。

「ねえ! どういう事!」

『バレた?』

「バレたじゃ無いわよ!」

「こんごうは声を抑えながら怒鳴る。

「どう考えてもおかしいよね!」

『まあ頑張れ』

「あちよつ!—ブツツ!」

「こんごうは衛星電話をしまうと、大きいため息を吐く。

「あの野郎……」

こんごうは祖国がある方向を睨みながら寝た。

翌日 ルーズトウーホテル ロビー

使節団が服装などを整えてロビーに着いた時には、既にマイラスがいた。

「あ、おはようございます。昨晩はゆっくり休めたでしょうか？」

「ええ、とても快適に過ごさせて頂きました」

芹沢が代表して答える。

「そうですか。では早速今日の予定を説明します」

マイラスは使節団に今日の予定を話した。

「ーです。何か質問はございますか？……… 無いようですね。では早速向か

いましょう」

使節団は車に乗り、海軍基地へ向かう。

48分後

ムー共和国首都防衛隊所属艦艇が停泊している港へ到着した。

「綺麗ですね」

使節団の1人が岸壁から海を見て言う。

「見えてきました。あれが我が国の最新鋭戦艦のラ・カサミ級一番艦『ラ・カサミ』です」

「「おおおー！」」

使節団の一部が『ラ・カサミ』を見るなり声を上げる。

「記念艦『三笠』そのものですか」

「あの方が見たら何というか」

「本人の目の前で言わないでくださいね」

「分かっています」

「こんごうから注意され、頷きながら答える団員。

「外部から見ると、大きな違いはありませんね」

「こんごうが言う。

「素人から見ても違いはありませんね……………」

使節団の話にマイラスが付いていけず、芹沢に質問する。

「あのー、その記念艦『ミカサ』？というのは……………」

「おっと、失礼しました。三笠は我が国にある記念艦です」

「記念艦……………」  
「どれほど前に建造されたのですか？」

「えーと……………」

芹沢がこんごうに視線を送る。

「三笠…………… 敷島型戦艦4番艦の三笠は、イギリスのヴィッカーズ社で建造されました。竣工したのは1902年の3月1日です。今私達の時代で言えば、148年前になりますね」

「148年前……………」

マイラスは、日本国との技術格差はそれなりにあると思っていたが、その数十倍の数百倍も差はがあると、認識を改める。

「あの、こんごうさん……………」

芹沢とこんごうが何かを話すとこんごうが頷く。

「マイラスさん。貴国の最新鋭兵器を見せてくれたので、私達も貴官の望む艦艇の搭乗を許可します」

「え!? よろしいのですか!?!」

「ええ、貴国の最新鋭兵器を見せさせて頂きましたからね」

「ありがとうございます!」

マイラスは気分が高揚し始めた。

「では、次にマイカル市内にある、歴史資料館へ移動しますが、よろしいでしょうか?」  
「はい、構いません」



「では移動します」

マイカル市内にある歴史資料館へと移動した。

使節団はマイラスから説明を受けながら資料館内で展示されている資料や展示品を見て回る。

「では我が国の歴史についてのご説明に入ります。まず、各国には神話とか言い伝え程度としか信じて貰えていないのですが、我が国は元々この世界の住民では無いのです」

「え？」

「つまりどう言う事なのですか？」

「実は我が国は、12000年程前に、この星に大陸ごと転移してきた転移国家なのです」

マイラスの言葉に耳を疑う使節団。

しかしその疑いもマイラスの次の言葉で消える。

「そして、今私の手元にあるこの地図は、我が国が元居た惑星を表した物であります」  
マイラスが資料館の職員が資料室から持ってきた『ある物』を取り出す。

「これは、惑星にある大陸を示すための……………」

「地球、ですね」

「え?……………芹沢殿、今なんと?」

「地球です。この地図に記されている大陸は間違いなく地球の物です」

マイラスは、自分達しか知らない故郷の惑星の名前と地図を芹沢が、使節団全員が知っている事に、驚きで表情が固まってしまった。

「これは……………大陸の配置に少し差異があるが、間違いなく地球の物に間違いはない！」

「見てください芹沢さん。ここに知らない大陸がありますよ……………こんな大陸、前世界にありましたか？」

オーウエンが見覚えのない大陸を指差す。

「マイラスさん、この大陸は一体……………」

「……………あ、ここは我が国がある、いや、あったムー大陸で、南にあるこの大陸はアトランティス大陸です。前の世界ではこのアトランティス大陸にあったアトランティス帝国は我が国と世界を二分する程の国力を持っていました。しかし我が国が居なくなつて、前世界はアトランティスが支配しているでしょうね。因みに、ここにある小さな列島はヤムートと言つて、我が国唯一の同盟国でありました」

マイラスが指差したのは、ユーラシア大陸の下に位置する小さな列島だった。

「これは……………間違いない！日本列島……………我が国だ！」

「確かに……………間違いありません、日本です」

芹沢ら使節団の驚きようにマイラスは疑問の表情を浮かべる。

「芹沢殿、このヤムートについて御存じなのですか？」

「ええ…………… マイラスさん、突然ですが我が国の説明をさせて頂くと、貴方が指差したこのヤムートと呼ばれる列島は、我が国…………… つまりこれは日本国なのです」

「えっ!？」

芹沢の説明にマイラスは全身が固まるような衝撃が走った。こんごうが手にしていたバツクから端末を取り出し、世界地図を表示して机の上に乗せる。

「ありがとうございます。これが前世界における我が国が居た地球を示す世界地図です。ご覧ください、貴方がヤムートと言ったこの小さな列島は我が日本国なのです」

「……………」

「そして先程説明して頂いたアトランティス大陸は、陸地の形状から今は南極大陸と見て間違いありません。おそらく貴国が消えた事で地軸が相当ずれて、今の位置に動いたのでしょうか」

マイラスは興奮し驚いていた。

何せ、いま目の前に居る芹沢の話が本当なら、これは国を揺るがす程の歴史的発見であるので、嫌でもそうなる。

「もしお二人の話が本当なら……これは……歴史的な……時空を越えての大発見になりますよ!!日本国がかつてのヤムートなら、我々の出会いは12000年振りの再会となります!」

マイラスは芹沢の手を取る。

「この事を直ぐ上に報告いたします! かつての友好国と再会できたとなれば、政府は貴国との国交開設に前向きとなるでしょう!」

直ちにマイラスは外務省へ直通電話にてこの事を報告し、外務省を通じてムー国王や議会にもこの事実が伝えられ、政府は直ちに使節団が国王と会談するための準備を始める事となった。

使節団はアイナंक空港に戻ってきていた。

「ではマイラスさん、国王陛下や政府上層部との会談はまだあるので、早速ですが見に行きますか?」

「是非!」

「ではこんごうさん、時間ギリギリまで案内をよろしくお願いします」

「わかりました」

格納庫へ向かう2人。

マイラスは移動中こんごうの事をずっと見ていた。

(綺麗だな……………何というか、人間離れしている……………)

「マイラスさん。何か考えていませんか？」

「ひゃい!?!い、いえ何も……………」

声が裏返りながら答えるマイラスだったが、こんごうは気にも留めず、真っ直ぐ格納庫に向かい、格納庫の入り口に到着した。

「あれ? 機体が変わってる?」

「あ、班長」

「どうも。コスモローと交代しました」

「あ、そういう事……………早速だけど、あかぎに向かって飛ぶわよ」

「……………なるほど、分かりました」

こんごう艦載機の機長がマイラスを見て察したように話した。

「よし、飛ばすぞ!」

ムーの整備士に協力してもらい、格納庫の扉を開ける。

「艦長」

「はい。いくわよ……………1、2、3!!」

人力でSH-60Kを格納庫の外の駐機場まで押す。

「はぁぁぁぁぁ。お疲れ」

「ありがとうございます……… いちいち格納庫に人力で出し入れするのは面倒ですな」

「まあ文句言わないの」

不満げな機長を宥めるこんごう。

「はい。おし！準備に入るぞ！」

「「うし!!」」

エンジン始動の準備に入る。

と言っても、ボタン一つ押すだけで起動できるが、舵の確認、アビオニクスの確認などをする必要はある。

「右、左、前、後、問題なし……… アビオニクス確認よし。エンジンをスタートする！周囲確認！」

『問題なし！』

外にいる整備士妖精から返事がくる。

「エンジンスタート！」

ボタンを押す。

APUの起動音が鳴り、しばらくしてコスモターボシャフトエンジンの独特の音を鳴り響かせる。

「近づくな!!」

ムーの整備士が不用意に近づこうとしたのを制止する。

「テスト項目チェック終了。離陸する」

パイロットがコレクティブピッチをゆつくりと上げていく。

アイナंक空港に管制塔が存在しない為、ほぼ勝手に飛ぶことができるが、離陸した後の管制はあかぎが担当している。

『This is Akagi Air Traffic Control. No aircraft fly around. Allow any navigation. (こちらあかぎ航空管制。周辺を飛行する航空機はありません。任意の航行を許可します。)』

「Roger」

マイラスはパイロットのやり取りに聞き耳を立てていたが、未知の言語を使用している為、聞くのをやめて、窓の外を見た。

「デカイ…………… 400m以上はあるか?それになんだ?あの斜めの甲板は……………」

エレベーターが側舷に3つと密閉式が1つ? 側舷にエレベーターなんかつけたら波で海水が入っちゃうじゃ無いか……………」

ムーでも、パーパルディア王国が数年前、竜母を開発開始の報を受けて、新型空母の開発を開始。つい最近、最新空母が竣工したばかりだが、この空母を見る限り、自国の空母の数世代は先を進んでいる。

パイロットが再び無線で交信する。

少しやり取りした後、巨大空母に向かってアプローチに入る。

SH-60Kは、斜めの甲板へ着艦した。

「マイラスさん、外に出たら、頭を低くして歩いてください。じゃないとミンチになりますよ」

「わ、分かりました」

「開けます!」

デツキクルーが近づいてきたのを確認すると、扉を開ける。

マイラスは指示通りに頭を低くして安全範囲まで待避した。

「デカイ艦橋だ………これだけの船体だとせいぜい18ノットか………?」

マイラスがあかぎの細部を見ていると、男が1人近づいてくる。

「お疲れ様です!こんごう艦長」

(ん!?!艦長!?)



その男がサラツと言ったことに驚くマイラス。

「お疲れ様。副長、副司令あかぎから聞いているだろうけど、この人の案内をよろしく。できる範囲でいいから彼の質問に答えて」

「了解です！それと、あかぎ艦長から艦長室へ来るようにと……………」

「分かったわ」

そう言うと、こんごうは艦長室へ向かった。

「ではマイラスさん。どこから見たいですか？」

マイラスは暫く考えて答える。

「まずこの艦のスペックを教えてください……………」

「いいですよ。ただ、ここだと作業の邪魔になるので中の食堂へ向かいましょう」

食堂へ移動した2人。

「ではこちらををご覧ください」

副長がそう言いながらマイラスの前にタブレットを差し出す。

「これは……………」

マイラスがタブレットを指さす。

「これは……………そうですね……………無線が進化したものだと思います」

「い」

「はあ」

「これが我が艦のスペックです」

副長が自身の端末を操作し、マイラスに差し出したタブレットにスペックを表示させる。

「…………… なっ!？」

マイラスは目を見開く。

そこに表示されていたのは。

### 船体

- ・全長 444 m
- ・全幅 114 m
- ・全高 56 m

### 機関

- ・次元波動エンジン 1基
- ・ケルビンインパルスエンジン 2基

### 速力

- ・水上航行時、機関全力運転の場合、128ノット

・水上航行時、普通航行の場合、45ノット  
搭載機

・F-4B 98機

・E-8J 9機

・SH-60K 12機

・MCH-101K 3機

合計122機

武装

・CIWS 42基

・重力子スプレッドランチャー 2基

・多目的ミサイル発射管 複数

「何なんだこれは………」

そこにあつたのは信じられない数値と、理解不能な単語が複数あつた。  
ただこれだけは言える。

『ムーはどう足掻いても日本には勝てない』と言うことである。

「信じられない……………」

「まあそうでしょうな。自分達でさえ頭が逝かれてる数値だと思っておりますから……………」

「…………… 戦艦も見せてくれますか？」

「いいですよ」

副長が再びタブレットを操作して表示させる。

「…………… ドサツ!!」

マイラスが倒れてしまった。

「え!? マイラスさん!! マイラスさん!!」

マイラスは医務室へ運び込まれたのであった。

---

あかぎ 艦長室

「失礼します」

「こんごうが艦長室へ入る。」

「来てくれてありがとう。早速だけど、彼はどう?」

「その前に質問よろしいでしょうか?」

「いいわよ」

「あれはどういうことですか!?絶対仕組みましたよね!」

「思わず耳を塞ぐあかぎ。」

「ねえどういふこと!?ねえ!ねえ!」

「何のことかわかりません」

「……………」

「こんごうは顔を更に真っ赤にしながらかまくしたてる。」

「絶対司令か総隊司令の入れ知恵でしょ!」

「サアーナンノコトカナ」

「もういいです!」

「そう言ううと艦長室から出て行ったこんごう。」

「まさかあそこまでいくとはねえ」

「これ以上からかうと自分の身を滅ぼすと思ったあかぎだった。」

---

『ハ、ハハハは……………』

マイラスの目が覚めると、そこには燃え盛る王城があつた。

『陛下！うっ!!』

マイラスが王城へ走ろうとした時、何かにつまづく。

『……………!?!』

マイラスがそれを見た時、体が震えた。

『へ、陛下!?!』

そこには見るにも無残なラ・ムー国王がいた。

ピカツ!!!

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

突然、目を覆うほどの光が発生し、巨大な炎球、キノコ雲が出現した。

『あれはなんだ……………!』

すると、猛烈な衝撃波が到達した。

『グツ!!』

何とか耐えたマイラス。

だが次の瞬間、想像を絶する暑さに見舞われる。

『あああああああ……………!?!?!?!?!』

「あああああああああーーーーー！！！！」

「はあ、はあ、はあ」

マイラスが周囲を見渡す。

「( )は？」

ガチャ

「あ、起きたんですね」

部屋に1人の女性が入ってくる。

「あれ？汗が……………」

そう指摘されて初めて気付いたマイラス。

「うわ……………」

服が肌に張り付いて気持ち悪い。

「シャワーを浴びます？」

「はい、お願いします」

マイラスは個人室へ案内され、そこでシャワーを浴びる。

浴びながらマイラスは先ほどの事を考えていた。

(さっきの夢……………夢にしては現実的過ぎた……………オタハイトが壊滅的

な被害を受け、そして謎の巨大な爆発……………)

マイラスは自分の手を見る。

(どうなっているんだ……………)

シャワーを浴び終え、着替えて外に出ると、あかぎがいた。

「こんにちは。副司令兼艦長のあかぎと申します」

「ああ、この艦の……………何かご用でしょうか？」

「いやね、副長が案内していた所、突然倒れてそのまま2日間寝込んでいらしたのでね。

そのお見舞いに。これ、どうぞ」

あかぎがマイラスに紙袋を差し出す。

「あ、ありがとうございます」

「では、お大事に」

そう言うとかあかぎは持ち場に戻っていた。

「2日も……………2日も!」

マイラスはようやく現実に戻る。

「まずい!! 帰ったら処罰ものだ!!」

使節団を政府中枢との会談の案内をしなければならぬのに、あろうことか2日も寝

込んでいたのだ。

「除隊確定だな……………いや! せめて有用な情報を持ち帰らないと!」



自らの軍人生命の危機に全力で任務に当たると決めたマイラスだった。

後日 ムー共和国 オタハイト 議会

ムー共和国議会で、日本国との条約締結について議論されていた。

「あの国は我が国より遥かに先を進んでいる技術を有している！確かに『技術流出防止法』が制定されておるが、少なくとも国交だけでも締結すべきだ！」

そう言ったのはムー共和国政府与党の筆頭、『ハイリフォン・サーモ』である。彼は日本国との友好派閥の筆頭である。

「そう言うが！仮に国交を締結し、通商を開始したら、我が国の産業が軒並み倒産するぞ！！」

そう日本国との国交締結を反対したのは、日本国との国交締結反対派筆頭の『アルゲイン・クラーク』である。

「確かに、日本国と国交を締結すれば、我が国の産業は壊滅的な被害を受けるだろう。しかし！日本国との国力・技術力の差は、この資料によれば、150年近くの差がある！そして、ムー統括軍情報局局員の『マイラス・ルクレール』の報告によると、あの『神聖ミリシアル帝国』の全てを上回るといふ報告が入っている！つまり、日本国と国交を

締結すれば、あのミリシアルを上回れるということだ！」

日本が『技術流出防止法』の緩和をする可能性は限りなく低いが、それでも国交を締結しといて損はないとある。という考えである。

「それは将来的には我が国の技術レベル、国力は上昇するだろうが、それは民心を失うものになるぞ！」

日本の国会と違うのは、どちらも真に祖国の事を思っていることである。

議会が白熱を増してきたところで、議長が、

カンツカンツ!!

「そこまで！両者の意見は分かりました。なら直接日本国に使節団を派遣しましょう。幸いにも、日本国の使節を乗せてきた艦隊はまだオタハイトで停泊中。すぐにでも使節団を編成し、彼らの帰国と一緒に使節団を派遣すべきだと、私は思います。いかがでしょう？」

議長が、日本国の情報が圧倒的に足りない判断し、使節団をすぐにでも派遣する事を提案した。

その後、賛成が過半数を占めて、日本国へ使節団を派遣することが決定し、日本国使節団へ通知した。

西暦2050年 3月18日 日本国 東京都 八王子市

「ここにくるのは……………何十年ぶりかな……………」

「敗戦後から来た覚えがないな。それにしても、崩御日に来なかったとは何事じゃ」「すみません。どうしても仕事が付付けられなくて……………」

東京都 八王子市 昭和天皇 武蔵野陵にいたのは、白井と大巫女、そして三笠であつた。

しかし、白井はいつもの姿でなく、髪が微かに白みがかつていた。そして瞳は深青だ。「さあ、参ろうか」

大巫女の言葉に無言で頷く白井と三笠。

道中、一般参拝客に容赦なく視線を浴びせられたが、大巫女と三笠はかの海戦を生き延び、そして大戦を過ごした強者である。

そして白井もほぼ同じである。

3人は皇族拝所へ行く。

「変わらんな……………」

二礼二拍一礼をする。

しばらくして、陵へ向かう。

「あの時は、ありがとうございました」

白井が言う。

「はあく。いつもそれだけか……………」

三笠がため息を吐きながら言う。

「これしか言うことがないので」

「まあ、良いではないか三笠」

「この天命が尽き果てるまで見守らせていただきます」

「ふっ、抜かしおる」

そして一通りの作業を終えた3人。

帰り道、三笠が白井に思い出したかのように聞く。

「そういえば、お主はここに来ていいのか？政治的な問題もあろうが……………」

「ご心配無く。問題はありません」

「そうか……………」

「白井は昼を食べたか？」

「いや、まだです」

「では、どこか食べに行こうか？」

「いいですね。大巫女の支払いで」

「食えん奴め」

3人の笑い声が周囲に響いた。

### フエン王国

使節団がマイラスの案内でムーの各所を見ている時、フエン王国では軍祭が始まっていた。

最初は各国の木造船による艦隊運動の披露。そして陸戦の模擬戦。そして最後の、今年の軍祭の目玉と言える日本国による海上標的への攻撃だ。

ガハラ神国風竜騎士団長スサノウは、隣国、フエン王国の首都上空を飛行していた。今日は、フエン王国が3年に1回開催する『軍祭』が行われるため、その親善の代表として、3騎で上空を飛ぶ。

軍祭は、文明圏外の各国の武官も多数参加し、武技を競い、自慢の装備を見せる。各国の、軍事力の高さを見せる事により、他国をけん制する意味合いもある。

文明圏の国も呼びたいが、『蛮国の祭りには興味が無い』のが本音らしく、『力の差を見せ付けるまでもない』といった考えもある。

そこまで文明圏国家と文明圏外国家は国力が隔絶しているのだ。

スサノウは、上空から下を見た。

常軌を逸した大ききの灰色の船5隻がいて、そのうち1隻は周りの船よりもデカい。  
『やはりまぶしいな』

相棒の風竜が話しかけてくる。

「大丈夫か？」

『大丈夫だ。支障はない』

上空では、このような会話が行われていた。

ピョートル・ヴェリーキイ 艦橋

「時代錯誤にも程がある……………」

艦長のミハイルが呟く。

周りにはピョートル・ヴェリーキイを近くで見ようと、小型船や大型船で近づこうと  
していた。

「警告汽笛、拡声器、魔信にて警告を」

近づかれて接触事故でも起こされたらたまらない。

『本艦へ接近する船舶へ。接触の危険性あり、直ちに回頭、進路を変更されし』

それを受け、すべての船が距離を取る。

「信号旗、こちらの世界では意味がないのでは？」

「その通りだな」

「艦長。時間です」

ミハイルが腕時計を見る。

「うむ。教練対水上戦闘用意！」

「正面砲戦。CIC指示の目標！」

「Стреляй！（撃て！）」

ピョートル・ヴェリーキイのAK—130からF—44調整破片弾が毎分90発の速度で発射される。

5隻あつた廃船はわずか数秒で全てが粉微塵になった。

「全弾命中！標的の沈没を確認！」

全弾命中の報告がはいっても、ミハイルは表情を変えなかつた。

「つまらん」

ミハイルはそう呟いた。

しかし、このつまらない訓練を覆す事態が起こる。

あきづき ソナー室

水測員が海中の音に気を配っていた。

「……………」

海中には様々な音が聞こえる。

海流の音、鳴き声などなど。

そこでは機械的な音が目立つ。

「……………」 水測長。本艦右舷90。微かな機関音、スクリー音を探知

「潜水艦と思われる」

「了解。未確認音源を $\alpha$ とする。以降警戒を厳となせ」

「了解」

「こちらソナー室。本艦右舷90。報告に潜水艦らしき音源を探知。距離不明」

『了解。そのまま追跡を続行せよ』

あきづきが得た情報は直ちに艦隊へ共有された。

ピョートル・ヴェリーキイ 艦橋



「どう考える？」

「間違いなく、グラ・バルカス帝国の潜水艦かと」

「だよなあ……………司令部からの通知はなんだったつけ？」

副長が端末を操作する。

「艦隊が攻撃を受けた場合、国籍の確認、警告なしでの反撃を許可する』と来ています」  
「なるほど……………このつまらん演習を本物に変えてやろう」

ミハイルが笑みを浮かべながら言った。

いくら国連海軍の所属となったからといっても、ミハイルは北の厳しい寒さに耐え、そして地獄のような訓練を全て達成してきた優秀な人物であった。そしてミハイルが求めていたもの。それは『実戦』である。

ロシア海軍は実戦経験、小型艦艇などの実戦はあったが、ピョートル・ヴェリーキイのような大型艦の実戦はほぼなかったのである。

「いっちょやったりしますか」

「旗艦より全艦に通達。対潜戦闘用意！」

すずつき CIC

『旗艦より全艦に通達。対潜戦闘用意！』

ピョートル・ヴェリーキイより命令が下る。

「合戦準備、対潜戦闘用意」

砲雷長の号令を発令員が復唱する。

「合戦準備、対潜戦闘用意」

対潜戦闘の電子音になる。

「各部配置よし」

「ピョートル・ヴェリーキイが艦隊前衛に入るのか……………ミハイル艦長は自分で殺るつもりみたいね……………」

「あの人はかなりの武闘派と聞いています。血が騒ぐのでしょうか」

先日、あきづきに見せた姿から想像はできません。

「それにしても、この大東洋だけでも4隻以上の潜水艦の存在が確認されています。鹵獲した潜水艦の調査の結果、見た目は『伊号400型潜水艦』であり、防音設備は潜水艦登場時レベルということ。伊号400型だと、航空機が格納されているはずですが、格納庫らしきものは確認されたが、そこには何もなかったということ」

「未だに世界の情勢、構成国家が不明な状況なのよ。その中で予想するのは困難だわ。もう……………」

「はい。航空機は発艦させなくていいのですか？」

「出さなくていいわ。いざとなったらあれを使います」

「すずつきの言葉に帽子を目深に被り直す副長。」

「できれば使わない事を祈ります」

???

「それにしても馬鹿でかい艦だ。グレード・アトラスター並の大きさはあるかもしれん」  
男が潜望鏡を覗きながら言う。

「しかし、宣戦布告していない相手の軍艦を撃沈するのはいかなのでしょうか？」

「副長。この私に逆らうのか？」

「いえ…………… 決してそのつもりでは……………」

「確かに副長の言う通りだ。だが、今帝国では蛮国諸島を併合し、パカンダ王国と言ったか？その国との交渉は決裂寸前だという。それが失敗すれば、皇帝陛下はすぐにでも世界征服を命じるだろう。だから今のうちに撃沈し、それを後々報告すれば大手柄になるぞ」

副長は帽子かぶり直す。

(馬鹿だ……………もはや帝国軍人としての意義がない……………)

そう思いながらも表面には一切出さない副長。

「魚雷発射用意！」

破壊の槍を発射する準備を始めたのであった。

ピョートル・ヴェリーキイ CIC

ゴボポポオオオ

扉が開く音と、気泡が弾ける音が聞こえてくる。

『こちらソナー室。潜水艦は魚雷発射管に注水をした模様』

ソナー室より、淡々とした報告が入る。

「取舵一杯、右の腹を敵に見せるぞ。主砲発射用意」

ピョートル・ヴェリーキイの艦橋が右に傾く。

『魚雷発射音探知。数8』

ミハイルは自分の手元に表示されている、航走データをみる。

「角度5。で8線か……………本艦を仕留めるには過剰だが……………」

「2本が命中コースです」

「主砲発射用意！目標、本艦へ接近する魚雷」

「え？対魚雷用魚雷は使わないのですか？」

「相手の腰を抜かしてやろう」

「了解です」

「命中まで、20秒！」

「砲術長」

「はい！」

「外すなよ」

砲術長は笑みを浮かべる。

「お任せを」

砲術長がディスプレイを見て、タイミングを図る。

「Стрелять！（撃て！）」

砲術士がトリガーを引く。

艦首にあるAK—130より2発のF—44調整破片弾が放たれ、1つの魚雷に命中する。

「艦尾主砲、Стрелять！」

艦尾にある主砲からもF—44調整破片弾が放たれ、これも魚雷に命中する。

「排除成功！」

「第2目標、敵潜水艦！」

「艦首、艦尾主砲、目標補足！」

「全力射撃！」

AK—130の連装砲から毎分90発×2の速度で発射される。

次々と、海面に水柱が乱立される。

「射撃やめ！」

砲撃が止まり、砲身から冷却用に取り込んだ海水が出る。

「ソナー、どうだ？」

しばらくして報告が入る。

『圧壊音と共に、着底音…………… あつ、爆発音を探知』

『こちら艦橋。海面に油膜、何かの部品を確認しました』

「撃沈、ですな」

砲雷長がそう言いながらミハイルを見ると、今まで見たことがない笑みを浮かべていた。

「うむ。ご苦労」

満足そうに頷きながらそう言うのだった。

「すい……」

ピョートル・ヴェリーキイが潜水艦を始末するのを見ていた観客、各国武官、軍人は身を震わせる。

「なんだあの魔導砲の連射速度は……」

「それにあの速度、そして旋回性能。日本国恐るべし」

各国武官は、本国に帰った後、すぐに日本国と国交締結するように求めるのであった。

フエン王国軍祭も最終日を迎えた。

各国は軍の装備品を展示などを行っているが、日本艦隊は、あきづきの公開。そして、各艦の給食員がブースを出して、手作り輪投げや食事などを全て無料で提供した。

「うまい……」

トーパー王国武官のサイモンがカレーを食べてそう評する。

「程よく辛味が効いている……… それにしてもこれだけの量をタダで配るとは……」

サイモンは別のブースを見る。

そこでは輪投げが行われていた。





一斉に声を上げる。

「綺麗ですね〜！」

親善艦隊の甲板などから乗組員が自身の携帯、ビデオをなどで写真、動画を撮る。

花火の光で時折船体が色とりどりに照らされる。

それから10分以上花火が打ち続けられた。

そして翌朝、フェン王国軍祭の閉会が宣言された。

この軍祭は日本国のイメージを各国に強烈に植え付けることとなった。

日本国 首相官邸 総理執務室

ムー共和国政府が使節団へ通知した内容が政府へ伝えられた時の話。

「ーとのことです」

「想定外、でいいのか？」

「まさかすぐに使節団を派遣してくるとは……………」

「目的はやはりうちの超技術だろうな」

官僚があれこれ言い合う。

「しかし、ムー共和国と通商をすることができれば、我が国の物品は飛ぶように売れます

ぞ」

経産相が言う。

「まあそれは置いといて、国防省。何か言いたいことがあるんじゃないか？」

佐山は広瀬を見る。

「ええ、実はロデニウス大陸通商ルートにクラークンの存在が確認されました」

「「「「……………は？」「」」」」

「クラークンです」

「あのイカ？タコ？がいると？」

「ええ、間違いなく確認されています。今のところ被害は出ていませんが、のさばらせ

ていると被害が出るかもしれません」

「草案は？」

「白井……………白井？」

広瀬が白井に合図を送ったが返事がないので後ろを見ると、居眠りしていた。

ブチブチ

誰かの血管が切れる音が聞こえたが気のせいだろう。

「凄いですな。会議中に寝れるなど」

閣僚、官僚は別の意味で感心する。

隣に座っている参事官が揺するが反応なし。  
「爆睡ですね」

「……………ん？髪が白くなってませんか？」

1人の言葉で白井の髪に注目する。

「本当だ」

「どうして白になっていくんだ？」

ガッツ！

「ヘッ!？」

広瀬に叩き起こされた白井。周りを見てすぐに状況を把握する。

(やべ……………寝てたし、姿が昔に戻りかけてる……………)

髪の色が黒に戻る。

部屋の注目が白井に集まる。

しかし何人かは素知らぬ顔が続けている。

「……………なんでそんなに俺を見る？」

「なんで髪の色が変わるんですか？」

官僚の1人が代表して聞くが、

「ゴホン、話を戻そう。白井、クラーケン対策の草案を」

「はい、現在は応急処置として船団護衛を行なっていますが、それでは根本的な解決にはならないので、クラーケンの駆除を検討しています。そうすれば、船団護衛をわざわざ組む必要がなくなり、隊員の疲労軽減、そして各国への貢献へと繋がると考えています」

「有害鳥獣駆除を適用するのか……」

「もはや害獣ではなく怪獣ですな」

官僚の言葉に笑う閣僚、官僚ら。

「なら、旧自衛隊時代から続く伝統、怪獣退治を頼む。法整備は後ほどやる」

「はい」

国防省関係者が頷く。

後に、『怪獣対策法案』が施行され、ネットでは、『ゴジラ法案』と呼ばれるようになったのは後の話である。

## 列強ムー共和国 その3

ムー共和国 アイナंक空港

ムー共和国議会が使節団派遣を決定して数日。

アイナंक空港で使節団のメンバーが集まることになっていた。空港の待合室には既に数人の姿があり、その中にマイラスの姿もあった。

「多彩なメンバーだなあ〜」

ガチャ

待合室に新たな人物が数人入ってくる。

「あれ？マイラス？」

「ん？おおー！ラッサンじゃないか！」

ラッサンとマイラスは士官学校時代の同級生であった。

「お前も選ばれたのか？」

「じゃないとここにいないだろう？」

「それもそうだ」

2人は雑談に花を咲かせていると、どんどんメンバーが部屋に入ってくる。

そして最後に入ってきた男が皆に声を掛ける。

「全員集まったようだな。私は日本国へ派遣される使節団の団長、『オレール・アベル』だ。既に聞いていると思うが、私達は日本国の真の姿を確かめる。まあ、といつても一部の人間は厄介者扱いされているが、各分野の縦割りを気にせず務めを果たしてくれ」  
全員が無言で頷く。

「じゃあ早速行こうか」

使節団は迎えの飛行機が駐機されている場所へ向かった。

「「「おおー」」」

使節団が駐機場に着くなり、声を上げる。

「美しい」

技術陣の一部がコスモシーガルを見てそう言った。

「こんにちは！機長です！」

「ん？名前はないのか？」

アベルが聞く。

「まあ名前はありませんが、階級は3佐です」

「名前がないと不便では？」

「自分達は……………」

そう言うとパイロットが黙り込んだ。

「そうか、すまなかつた」

「感謝します」

副機長が使節団を機内へ案内する。

使節団は2つに分かれる。

「では離陸します」

今回は滑走路を使わずに垂直離陸する。

「なっ!?!」

垂直離陸したシーガルに目を開くマイラス。

(翼が微かに繋ぎ目があったのはそういうことか!)

先日見た時に分からなかったことが分かり、納得するマイラス。

「よく分からん艦だな……………空母ということは分かるが……………」

アベルに限らず、一部のメンバーは軍事に関しては全くの素人である。

「マイラス君からの報告を何十回と見たが意味不明だ……………」

シーガルはアングルド・デッキに着艦する。

「速いな……………」

ラッサンが着艦から移動までの時間を測りながら言う。

「この斜めの甲板と側弦のエレベーターがここまでの速度を実現しているのか……」  
だが、これほどの大型機だ。発艦する為の速度と揚力が足りない筈……」

ラッサンがレールのような物を見るために近づこうとした時、

「不用意に動かないでください！」

乗組員が注意すると同時に、小型の車両が目の前を通り過ぎた。

「おっと……」

「あまり動かないください！ミンチになったり、プラスチックで揉みくちやにされて焼肉になりたいなら別ですかね……」

ゾワッ！

「はい……すみませんでした」

「ではこちらへどうぞ！」

艦内へ案内される。

中へ入ると、暖かすぎず、寒すぎずの調子で温度が保たれていた。

「快適だな……夏は暑く、冬は寒いというのが普通なのに……」

海軍関係者が言う。



その後、2士妖精がそれぞれの部屋へと案内する。

「もしお困りでしたら艦内電話でここに掛けてください。担当が来ますので」  
「はい。ありがとうございます……………」

アベルは部屋全体を見渡す。

「綺麗に手入れされている……………艦の中とは思えんな……………」

綺麗に手入れされてる部屋を見て海軍関係者が泡を吹きながら倒れる。  
空調付き、そしてホテル顔負けの設備。倒れるなど言うのがおかしい。

一方、軍関係者は艦内を、マイラスの時のように案内しつつ、端末でスペックなどを  
見せていた。

「なんと！このような物は我が国でも……………」

「……………無理です……………」

ムー海軍関係者、士官妖精が口を揃えて言った。

「まずこの艦を作るだけの設備が我が国にはありません。後、工作精度もそうですが……………すいません、少しお借りします。この部品を見てください。ぱつと見、工作誤差100分の1mm以下の精度が要求されると思います」(工作誤差100分の1mm以下は適当な数値です。感想などで指摘してくれば修正します)

「100分の1……………」

「無理だ……………」

造船関係者が呟く。

「この40ノット以上の速度を、この馬鹿でかい艦で実現するなどすごいな……………」

あかぎの案内を終えた後、各々の部屋へと戻るのだったが、アベルは1人残り、士官妖精が女性と会うのを見ていた。

『あ、お疲れ様です、艦長』

『そっちこそお疲れ様。どう？使節団は？』

『絶望的な顔を浮かべてましたよ』

(あの女性がこの艦の……………)

アベルはあかぎに近づく。

「あのみ」

「はい」

2人同時に振り向く。

「今の内と言ってはなんだが、日本国の簡単な歴史、概要を教えてくださいませんか？」

2人は顔を見合わせる。

「え、ちよつとお持ちください。担当に聞きますので」

あかぎが耳につけていた何かに手を触れる。誰かと話しているようだ。

「はい……………じゃあすぐに準備をお願いします。確認が取れました。本艦の士官室で簡単な歴史を紹介します。良かったら皆さんも呼んできてください……………ただ」

「ただ？」

「嫌なことを見ますので軍関係者のみの方がよろしいかと……………」

「……………わかった」

あかぎの忠告にただならぬ恐怖を感じたアベルであった。

士官室

「これはなんなんだ？」

アベルがプロジェクトを指さす。

「まあテレビが進化した物と思ってください」

「はあ」

士官妖精が操作して映像を投影する。

映ったのは『日本の歩み』と題された映像だった。

「では、皆さん。お静かに」

映像が流れる。

日本の起源、それからの歴史が簡単に紹介される。

文明開化、日清戦争、日露戦争の日本海海戦、203高地の戦い。第一次世界大戦。  
そして……………

「第二次世界大戦……………」

映像を見ていた全員が驚愕する。

第一次世界大戦だけでも、ムーの平時予算が全て吹っ飛ぶ程の額、そして人命が失われているのに、それを2回も繰り返しているなどと……………。

最初は大日本帝国の快進撃が映されていたが、ミッドウエー海戦の敗北による、各戦線の敗退、そして米軍の飛び石作戦。

「ああー」

思わず声を上げる。

ムーのような複葉機ではなく、単葉機が出撃し、そして敵の船へ体当たりしたからだ。  
「こんな馬鹿げたことが……………」

「酷い……………あまりにも酷すぎる」

そして、B-29による無差別爆撃、沖縄戦……………そして……………。  
飛行機から撮っている物と思われる映像が流れていると……………。

「なっ!?!」

マイラスが、一足先に声を上げる。

「……………」

絶句。

「なんだこのキノコ雲は……………」

時々、理解不能な言語が聞こえてくる。

「2発も……………」

映像が切り替わり、更地となった広島、長崎の写真が流れる。

「うっー！」

何人かがハンカチで口を押さえる。

そして、映像は東京湾へ移る。

「戦艦……………降伏か……………」

戦艦『ミズーリ』の艦上で降伏文書に日本側代表が署名をする。

そして戦後日本の復興が始まる。

連合国の支援、そして各業界、海外の著名な要人が復興に尽力する姿。

「自衛隊？」

警察予備隊から保安隊へ、そして自衛隊へと姿を変えた。

「高度経済成長期……………」

そして21世紀へ。

「21世紀……………」

「……………」

そして佐山内閣組閣。

「自衛隊から国防軍……………」

そして日本国の国連権限拡大活動。海外派遣などの貢献活動が流れる。

「凄……………」

外務省関係者が唸る。

ムーも周辺国と『融和』の方針を取っており、他の文明圏と比べると、第2文明圏は比較的発展傾向にあるが……………」

「PKO……………ODA……………」

軍がその国に入り、その国のインフラなどの整備をし、そして現地民にその維持管理や、重機の操作法を、そして宿营地と現地民による交流や、利益循環などが紹介される。

「こんなこと、我が国はおろか、世界でも不可能だろう」

そして『西暦2048年 日本国転移』で、締めくくられた。

「……………」

衝撃的な歴史だった。そう言うしかない。

「……………」

部屋が明るくなるが、雰囲気は暗いままだった。

「あゝ」

アベルが水を飲み、大きく息を吐く。

「うん……………」 私が想像していた倍以上の歴史だった」

使節団が感想を話し合う中、1人だけ物思いに沈んでいるものがいた。

(あの巨大なキノコ雲…………… 私が夢で見たものとよく似ていた……………)

「どうしたんだ？ マイラス」

隣にいたラツサンが声を掛けてくる。

「いや。日本国の技術について考えていたんだが、“あの映像”が気になっ  
な……………」

「奇遇だな。俺もだ…………… あの1発で都市1つを廃墟に追い込む程の威  
力……………」 もしかしたら日本国も持っているかも知れないが……………」

ラツサンは周りの様子を少し見る。

「そんなこと言わなくても全員が理解している」

あんな物、世界を破壊へと誘う物に違いない。

「だがな、それ以外でも改めて日本国との差が浮き彫りになったよ。軍事面だけではな

く、国家面においてもだ……………」

「ああ、追いつける筈がない……………」

「では皆さん！ついてきてください！」

再び移動する。

「おー。広いな」

（感謝状？）

一部が壁にかけられた物を見る。

「凄いな…………… 30枚以上貰ってるのか……………」

各都道府県知事、市長などからの感謝状。海外派遣の際に州知事などから授与されたものや、なんと国王自らの授与もある。

「はあ」

何人かが感嘆のため息を吐く。

「では皆さん、席にお着きください」

席に着く。

「文化は似通っているな…………… だが、なんだ？このコップは……………」

アベルが紙コップを指さす。

「紙のような物で出来ているようですが、ただの紙ではないようです」



技官が紙コップを注意深く見た。

「どうぞで」

アベルら、使節団の前にカレーが配膳される。

「ふむ……………魚介類が入っているな……………それに微かにスパイスが

効いている」

文化調査官がカレーのルーを一口飲んで、そう言った。

「……………うまい」

「しかし、これは相当な真水を使うぞ……………この艦の乗組員数がだいたい300

0人とすると、相当な真水を確保する必要がある……………」

使節団は新しい発見に高揚感を覚えるのと同時に、屈辱的な気分も味わっていた。

「日本国……………認識を改めないといけません……………」

「改めるどころじゃない。意識を180。まで変えんといけな……………」

「……………は……………」

使節団全員のため息が食堂に響いた。

あかぎ 艦橋

「まもなくランデブーポイントに到達」

羅針盤妖精が言う。

「重力震を検知。艦隊右舷、反応1」

モニターを見ていた航海士妖精が報告する。

何人かが双眼鏡でその地点を見る。

(しかしなんで『あきづき』が……………?)

『あきづき』がワープアウトし、着水する。

「ワープアウトを確認……………航海長、あきづきが艦長と司令を呼び出していま  
す」

「なんで司令と艦長を? まあいい……………司令、聞こえますか?」

航海長が司令を呼び出す。

『ああ聞こえる』

「先程ワープしてきたあきづきが司令と艦長をお呼びなっています」

『……………』

「司令?」

『……………すぐ行く。あかぎには俺から話しく』

そう言うと、通話が切れた。

「何があつたんだ？」

しばらくして、司令とあかぎが艦橋に入ってくる。

「マイクを」

「どうぞで」

司令があきづきとしばらく話し込んだ後、通信を切る。

「……………飛行班長、聞こえるか？」

『はい、バッチリ』

「すぐにSH—60Kを1機、あきづきに飛ばしてくれ。俺も乗る」  
「え？ちよつと待つて。なんであきづきに乗るの？何かあつたの？」

状況が分からずに司令に聞くあかぎ。

「すまんが、本国に帰還するまでの指揮を頼む」

そう言い、艦橋を出て行こうとした司令の襟を掴むあかぎ。

「うげっ」

倒れる司令。

「理由を教えてくださいないならあなたの中を直接見ます！」

そう言いながら艦霊力を左手に収束させていく。

「ちよつと待てちよつと待て！わかった、言うから!!」

そして早乙女が艦橋にいる全員に事情を話す。

「……………それだけですか？」

「それだけです……………あきづきも詳しいことは知らず、ただ命令を遂行しに来た

ということですよ……………」

「……………分かりました」

「分かってくれて何よりです」

服装を整えながら早乙女は艦橋から出ていった。

「艦長。まさかあそこまでするとは……………」

「さすが赤城……………」

艦橋要員がボソツと言った言葉に反応するあかぎ。

「何か言った？」

笑顔で、しかも一般人が見たら鼻血が出るのではないかというレベルの笑顔で聞いた。

「いえええー!!何も言っておりません!!!」

敬礼しながらそう答えた妖精。

「そう……………ならいいのよ。航海長、副長が来るまでの指揮継続をよろしく」

「了解です」

あかぎは艦橋から出ていった。  
航海長は水平線を眺める。

「どうも2人は少し距離を開けたままだ……………」

あきづつき 艦橋

あきづつきの飛行甲板からあかぎ艦載機のSH-60Kが離艦していく。

「司令、入られます！」

2士妖精が声を張り上げる。

「ご苦労」

早乙女に全員が敬礼する。

「各部より配置完了報告です。ワープ点検問題ありません」

「機関長、連続で機関をぶん回してるけど問題なし？」

『はい！バッチリ問題なしです!!』

機関長の元気な声が返ってくる。

「補助エンジン、出力最大」

「補助エンジン、出力最大」

補助エンジンの出力レバーを最大まで上げる。補助エンジンは水上航行時にも使用されるが、基本的には全力運転は行われない。(理由はお察しください……………)

「フライホイール、接続まで、10、9、8、7、6、5、4、3、2」

「フライホイール、接続、点火！」

「あきづき、発進！」

あきづきのメインエンジンが点火され、後方に猛烈な水飛沫を巻きながら海面から離れる。

「ワープ準備！」

「機関全力運転準備よろし」

「機関全速!!」

エンジンが青白い光を発する。

「ワープまで、5、4、3、2、1」

「ワープ！」

(ここまで、ヤマトのワープシークエンスなどのSEを脳内再生でお願いします)

「あきづきのワープを確認しました……………次元航跡をトレース中……………成

功です」

あかぎに限らず。各護衛艦に安堵の息が出る。

「しかし、中央からの直接出頭命令とは……………何かあったんですかね？」

「さあな、まあ俺たちはゆっくり帰るぞ」

「はい！」

第1任務部隊は22ノットの巡航速度で祖国へと進み続けた。

神聖ミシリアル帝国 帝都ルーンポリス 情報局局長室

世界最強と呼ばれている神聖ミシリアル帝国。使節団がムー共和国国王や、議会などと会談していた頃、その帝国の情報機関の局長が自室で頭を悩ませる。

(ムー共和国アイナंक空港沖に未知の艦隊が停泊、か……………)

その男はムー共和国内に潜む諜報員からの報告書を見る。

(警備が厳重でその未知の艦隊の内容は把握できず、アイナंक空港も民間路線は閉鎖され、陸軍が警備していると……………文明圏外国家相手に過剰警備じゃないか?)

この時、神聖ミシリアル帝国内では、極東の国家『日本国』の存在が僅かながらも知られていたが、その認識は、

曰く

『東方の蛮国である』

曰く

『調子に乗っている蛮国』

などなど、全員が東方の蛮国であるという認識だった。

「だが、あのムー共和国が陸軍を動員してまで警備をする使節団………興味深い」

神聖ミシリアル帝国一部技術人は、『ムー共和国は完全独力で我が国に匹敵する力を持ちつつある』と口を揃えて言う。ミシリアル帝国は、古の魔法帝国の遺産を発掘、解析、コピーすることで今の状態となっている。しかし、中身は酷かった。

『なんだこの銃は!? 魔力回路が暴走したじゃないか!!』

『主砲を発射しようとしたら魔力しか放出されなかったぞー!』

とまあ、各軍からの批判続出だった。今では魔導技術の発展により、そのようなことは少なくなったが、古の魔法帝国の技術水準と比べると、赤子と博士、のレベルである。だが、長年の研究解析などで基礎技術の形成、そして発展を遂げてきた所を見ると、それなりのレベルは有しているが………。

アルネウスは次の報告書を見る。

ロデニウス連邦建国

ロデニウス連邦建国の知らせが届いたのだ。



(ロデニウス連邦…………… ロデニウスでの戦争でロウリア王国が敗北し、その講話でロデニウス連邦の設立が決定された…………… 第三国の介入の可能性高しか……………)

この世界で連邦など、一部の例外はあるが、それでも第3文明圏外国家が連邦など、ほぼ有り得ない話だった。

「まさか日本国が……………？」

もし日本国がこの戦争に介入していたとして、少なくとも、ロデニウス大陸国家よりも技術レベルが高く、ムー共和国が対等だと認めた相手ということになる。

「興味深いな……………」

アルネウスは、日本国をマークすることに決めた。

---

日本国 首都東京 首相官邸 総理執務室

執務室に複数の男女がいた。

「宇治和、これはいつ？」

「先程、ロデニウス連邦特使『ヤゴウ』様より頂きました」

その視線の先にあるのは、一枚の書面だった。

## 大東洋諸国会議へ招待

と、題されたものだった。

「しかし……この会議に入ったら、間違ひなく盟主になりますよね？」

宇治和が言う。彼の懸念はこれが金食い虫になるのではないか？という懸念である。

「ですが、この世界としては唯一の、原始的とはいえ地域共同体です。うまく発展させていけば莫大な金を生み出せます。外務省、経産省、特に財務省にとってはいい話でしょう？」

大きく頷く財務省関係者。

「道を踏み外さなければ莫大な利益を生み出すことができます」

「じゃあ、後で閣僚会議に出すが、一応は招待を受けることでもいいな？」

全員が頷く。

「分かった。じゃあ例のメンバー以外は解散。お疲れ様」

部屋からぞろぞろと退出する。

残ったのは国防省関係者と情報庁関係者が残った。

「ミズーリはどうだ？」

佐山が聞く。

「すでに公試段階に入っています。まあ国連軍の拡張は、我が国の支援なしでは、ほぼ不

可能なので、内の隊員からの国連軍に出向になりますかね……………」  
参事官が答える。

国連軍の構成しているのは、各国政府が国連に出向させている軍から成る。そしてその装備品が国連規格へと統一される。一部特許技術などには手を触れていないが、それでもかなりの改修などが行われる。

「そして本題です」

佐山が端末を見ながら話す。

「ミズーリが出現した浦賀水道で各種調査を行った所……………ミズーリが通ってきたと思われる回廊が、地球に繋がっていました」

「[[[[:]]]]」

「回廊を丁寧に通っていったので、かなり時間がかかりましたが、間違いなく地球に繋がっていました」

「じゃあ帰還の可能性」

「無理です。大陸、いや、列島を移動させるほどの容量はありませんでした」

「……………つまり、我が国を移動させられる程の容量がある回廊を開けば帰還できる

とっ。」

「可能性は低いですが、まあそういうことです」

僅かに出てきた『帰還の可能性』。

「ですが計画をするとなると、数十年単位の長期計画となります」

「十分だろう。僅かな帰還の可能性だが、計画を練つといてくれ」

「は。それと、この惑星、アマールと称させて頂きますが、アマールと地球を結ぶ回廊の長さは…………… 32万8千光年離れています。そして波動砲艦隊による艦連動望遠鏡調査を行った所…………… スクリーンに映します」

スクリーンに映った物は……………。

「地球…………… 約32年前の……………」

そこには、日本列島がある地球の姿だった。

「どうしますか？」

「…………… もう消してくれ」

「はい」

スクリーンの電源を切る。

「では、帰還の可能性は以上です。次は、『潜水艦』についてです」

ロデニウス連邦とのシーレーンにクラークンが出現していることは知っているが、潜水艦とはどういうことか？

「宣戦布告されていないにも関わらず、通商破壊を仕掛けてくるとは……………」

「先のロデニウス大陸統一戦争の際に鹵獲した潜水艦ですが、『グラ・バルカス帝国』の潜水艦とみて間違い無いですか？……その……」

「見てもらった方が早いので、そちらに送った写真を見てください」

手元にある端末に写真が送られる。

「……………伊号400型……………あの『航空巡洋潜水艦』なのか？」

そう、あの潜水艦である。

理論的には、地球を1周半航行可能という長大な航続距離を誇り、日本の内地から地球上のどこへでも任意に攻撃を行い、そのまま日本へ帰投可能であったという潜水艦だ。

「あのイカれてる潜水艦がいるのか……………確かグラ・バルカス帝国軍の電探技術は太平洋戦争末期の米軍と同等だったっけ？」

荒米が広瀬に聞く。

「見てくれはそうです……………鹵獲した潜水艦を調査した所、太平洋戦争末期レベルの潜水艦用の小型レーダーが確認されています」

「ん？艦載機の『晴嵐』擬きは無いのか？」

情報庁職員が旧日本軍の伊号400型のスペックを見ながら聞いた。

「『晴嵐』はありませんでしたが……………『これ』がありました」

広瀬が職員に合図し、頷く職員。

端末に表示されたのは……………。

「『二式水戦』?」

何人かが声を揃えて呟いた。

「ええ、ですが新品同様です。配備からごく僅かか、この世界では必要だったのかは分かりませんがね……………」

地球の存在を確かにしたメンバーはその後、いくつかの点を話し合い、解散した。

その後の閣僚会議で、大東洋諸国会議の参加が決定された。

同日 市ヶ谷 国防省 31階 海軍会議室

海軍会議室の入り口に第7機動部隊司令の早乙女の姿があった。

「は〜」

早乙女は部屋の前にある鏡を見ながら服装を整える。

「よし……………」

制帽をかぶり直す。

部屋の扉を三回ノックし、官姓名を名乗る。

「第7機動部隊司令、早乙女 晶、出頭しました！」

「入れ」

部屋の中から声が聞こえたが、早乙女は嫌な予感しかなかった。

「失礼します」

中に入ると、白井と宇宙海軍の幕僚らが座っていた。

(望月幕僚長はともかく、なんであの鬼がいるんだ!?)

「聞きたいことが山ほどあるだろうから、好きなだけ聞いていいぞ」

望月海上幕僚長が言う。

「では遠慮なく……………なぜ自分を、わざわざあきづきを使ってまで出頭させたの

ですか？」

すると、望月は笑みを浮かべた。

「なんでだと思おう？」

早乙女はしばらく考えて答える。

「……………何か重大なことがあった、としか考えられません」

「その通りだ。君、いや、全ての艦隊司令も出頭しているが、軌道エレベーターに行つて

くれ」

「ハシラジマにですか？」

ハシラジマは軌道エレベーター基地がある、伊豆諸島鳥島南西沖31km人工島だ。国防軍関係者でも、波動砲艦隊関係者、その他一部高官しか入れないという。

「ああ、総隊司令も一緒に行く」

早乙女は白井の顔を見た。

「分かりました」

「では、すぐに向かつて貰う」

そして、国防省メインエントランスへ向かう。

ID認証を通り過ぎて入り口へ向かうと、国防省公用車が停められていた。

「? 運転手がいらないようですが」

「ん? ああ、俺が運転するんだよ」

早乙女が驚いて白井を見つめると、

「なんだその目は? 俺が車を運転しないような物見だぞ」

そして車が進む。

「……………法定速度、遵守するんですね」

「ああ、そのおかげで後続車からフラッシュを浴びせられるがな……………」

早乙女はチラチラと白井を見る。

(この人は一体……………?)



「俺の正体が気になってるんだろ？大丈夫。あのジャーナリスト艦娘が俺の正体を知ろうとしているからな。いずれ分かるさ」

「はあ」

(なぜ今までこの人の正体を気にしなかったんだ?)

どこか違和感を残しつつ黙る早乙女だった。

〜1時間後〜

「どうも」

2人は国連軍横田基地の守衛所まで来ていた。

「お疲れ様です。白井様ですね」

守衛兵が白井からIDを受け取ると、それを自身の端末にかざし、認証をする。

「…………… 問題ありません。どうぞ」

自走式バリケード『エクスカリバー』が自動的にずれる。

「お疲れ様。君、家族は大事にしろよ」

「はあ」

「頑張れよ」

そう言うのと、白井は車のアクセルを踏む。

遠ざかる車を見ながら守衛兵は呟く。

「なんで赤ん坊が生まれた事を知っているんだ？」

「…………… どうやって隊員全員分の家族関係などを覚えているんですか？」

早乙女が先程のことを白井に聞く。

「簡単さ。この無駄になつていゝ容量を使つた、それだけさ」

白井が自分の頭を指しながら答えた。

「着いたぞ」

窓の外を見ると、2人の冬服第3種制服を着た隊員がいた。頭には特徴的な国連軍の制帽を被つていゝ。

「こんにちは。案内の任務を承つた『レイモンド・H・イエーガー』大尉です！」

「同じく、『ウィリアム・F・ケネディ』大尉です！」

「うむ。ご苦労」

「では、こちらへどうぞ」

早乙女は白井の後ろについていく。

やがて滑走路脇にある駐機場へ到着した。

「お、V—22か」

「ええ、『アメリカ』の艦載機を借りていゝます」

「我々も暇してゝいますからね」

国連軍日本駐留部隊は、アジアへの部隊展開支援などを行ったりする。

しかし、転移によってそれも無くなったわけだが。

オスプレイが離陸する。

「しかし、柱島は関係者以外は入れないんじゃない？」

「No problem。君のIDはいくつだ？」

「……………5です」

「なら問題ない」

早乙女は向かいにいる海兵隊の2人のIDを見る。早乙女と同じく『V』とプリントされていた。

それからしばらくして、

「見えてきました」

バイロットが言った。

「お、軌道エレベーターか」

見えてきたのは、遙か彼方の空まで伸びる一本の線。

「いつ見ても驚かされます……………」

レイモンドが呟く。

「あの、どうして軌道基地に行くんですか？」

「あ、言つてなかつたか……………君、いや、君たちにある物を見て欲しくてね……………」

「はあ？」

そしてオスプレイは柱島の滑走路へ着陸した。

「私達はここでお待ちしています」

と、レイモンドが言つたが、

「いや、君たちも来て構わんぞ？」

「いや、自分の任務は——」

「君たちの上官には私から話しておく。何、気にする必要はない」

2人は顔を見つめ合わせた後、レイモンドが答える。

「では、お言葉に甘えて」

「じゃあ行こうか」

軌道エレベーターの入り口へ向かう一行だった。

# 来訪、ムー共和国！

西暦2050年 旧世界 アメリカ合衆国 ニューヨーク 国連本部

日本国が消失してから2年が経つ世界は、普通の日常を取り戻していた。「—では、これにて通常会期を終了します」

国連総会議長『モルト・S・ハリー』が終了を宣言する。

「お疲れだな。ダレン」

英国連大使が米国連大使ダレンに声をかける。

「ああ……………」

ダレンがある席を見る。

その机の上には一羽の折り鶴が乗せられていた。

「……………」 日本が消失してから2年か。早いな〜」

「その言い方だと、日本がいなくて嬉しいと見られるぞ」

英国大使の忠告にダレンは肩をすくめる。

「すまん。だが、世界経済の大黒柱の1つがすつぽり抜け落ちて、この世界はよく持ったよ……………これも日本のおかげだな」

「ああ。だからこそ、核兵器を全廃させるべきじゃないのか?」

「……………それは無理だ。Presidentからの命令だ……………」

「そうか。アメリカは孤立の道を選んだか……………」

そう言うと、会議場から出て行つた。

その後ろ姿を見ながら、ダレンは、

「私だけじゃ、どうしようもないんだ……………」

新世界 中央歴1636年 5月10日 ロデニウス大陸北西沖

ムー共和国使節団を乗せた第1任務部隊はロデニウス大陸の北西沖を航行していた。

その第1任務部隊の前衛艦隊旗艦を務める『うんりゆう』の艦載機から、CICに通報が入る。

『こちらうんりゆうスワロー05。艦隊右舷後方、距離20マイルの地点で未知の音源を確認』

水測長が聞き返す。

「待て。なぜ今まで探知できなかった？」

『それが、このあたりの海流が激しく渦を巻いていて、そして磁場の乱れも激しく、発見が遅れました』

「分かった。後続の本隊に連絡する。そのまま追跡を続行されたし」

『了解』

「通信士。あかぎに緊急連絡」

「はいー」

うんりゆうが得た情報は、共有情報システム、そして緊急連絡によって全艦隊が状況を把握した。

あかぎ      C I C

うんりゆうからの情報を見たあかぎは焦る様子を見せることなく話す。

「ふんん……………」

隣にいた砲雷長があかぎの顔を見ると、にやけていた。

「艦長。顔に出ていますよ」

「わざとよ」

「何を考えていらつしやるので?」

すると、あかぎは再び笑みを浮かべ、

「使節団の軍関係者を呼んできて」

「はっ」

しばらくして、C I Cにムー使節団の軍関係者が入ってくる。

「な、なんだこれは……………」

C I Cに入ってくるなり、その意味不明用途不明の装備品を見て驚きの声を上げる。

「では皆さん。こちらへ座ってください」

「[[[?]]」

何が起こるのかと考えながら椅子に座る。

「あの?これに映ってるのは?」

海軍の1人がレーダー情報を映しているディスプレイを指しながら聞いた。

「これは本艦を中心としたレーダー情報など映しているものです。A E Wのカバーもあります。3000kmは探知できます」

「はっ」



「……………」

海軍関係者が絶句する。それはこちらがコソコソと動き、奇襲を敢行しようとしても、すぐに探知されるからだ。

「先程から言われてるレーダー？は、なんだね？」

「まあ詳しい説明は後ほどしますので」

「これが正しいとすれば艦同士の間隔は数十kmは離れていることに……………ん？艦隊右舷のところに、ポツカリ穴が空いているようだが？」

「これからお見せするのはそれに関係しています」

「艦長。各部、係留物固定完了しました」

攻撃指揮官妖精があかぎに報告する。

「しかし艦長。来ますかね？」

「今までの報告を見る限り間違いなく来るわ」

攻撃指揮官妖精は帽子を被り直す。

「願わくばこないことを祈ります」

だが、攻撃指揮官の願いはすぐに散る。

「対潜担当艦『みゆき』の潜望鏡探知レーダーに反応ありとの連絡」

通信士妖精が報告すると同時に、レーダーにフリップが映る。

電子戦士官妖精がレーダー波を検知する。

「…………… unknown。レーダー波を照射中」

「本艦との正確な距離を測っているのですかね?」

『こちらむらくもCIC。敵潜水艦が魚雷発射管に注水した模様…………… 発射されました』

すると、魚雷航送データが映る。

「雷数8。3線は外れますが、5線命中コースです。速度48ノット。本艦に真っ直ぐ、斜角3度で近づきます。命中まで2分」

「航海長。舵もらうわ!」

『了解です』

「エンゲージ」

あかぎの霊力が爆発的に上がり、それを受けた妖精たちは活力を得る。

そしてあかぎの船体に光が走り、艦首、飛行甲板にイデア・クレストが浮かび上がる。

「警報! 雷撃回避運動!」

「総員、シートベルト点検!」

各員が緩みがないかを確認する。

ムー共和国軍関係者のベルトは既に締められていた。



「もどくせ〜!!」

そして舵を再び面舵に戻す。

海上に巨大な“S”を描いた。

そして魚雷は次元排水量10万トン越えの航跡に突っ込み、3本はもみくちやにされて、あらぬ方向へと進み沈降し、残りの2本は信管が誤作動し、爆発した。

「ふ〜。舵、戻すわよ」

『はい』

舵があかぎから艦橋に渡される。

「警報解除します」

「了解」

攻撃指揮官が警報を解除する。

そして旗艦が攻撃を受けたことで付近にいたむらくも艦載機SH-60Kが、うんりゅうスワロー05の情報を受け取り、反撃を開始する。

むらくも艦載機 SH-60K

副機長が爆発した魚雷を目視する。

「どうやら弾き飛ばしたようだな」

「誘導魚雷じゃなかったただけマシだろう。ソナーマン、反応はどうだ？」

機長が後方にいるソナーマン妖精に聞いた。

「3番ブイの感が大きい……………再装填中の模様。位置を送る」

敵潜の位置情報が機長のHUDに表示される。

「了解した。TACCO！」

「はい！」

「38式を使うぞ」

「既に準備済みです。データも入力してあります！」

「よし。アプローチするぞ！」

高度と進路を調整する。

「いぐざー！」

「進路、速度このまま。38式、投弾よーい。投下！」

TACCOが発射ボタン押し、パイロンから38式次元短魚雷を投下する。パイロンから切り離された38式は、パラシュートを展開し、海面へと着水する。

海面へと着水した後、しばらく沈降し、ジャイロによつて姿勢を整えて探信音を一回放つ。



フリップが「撃沈」になる。

「艦長。警報解除します」

「はい」

「警報解除。対潜戦闘用具収め」

「警報解除。対潜戦闘用具収め」

警報が解除され、対潜装備に安全装置が掛けられる。

あかぎが後ろにいる使節団の軍関係者を見ると、

「あら？」

口から泡を吹いて気絶しているもの。目をぐるぐる回らせているもの。白目を剥いているものと、一部を除いて全員がそれぞれ気絶している。

「ごめんなさい。医務室へ運んであげて」

「了解です」

「……………」

マイラスとラツサンはあの急軌道に必死に耐えた後、考察していた。

(デカイ癖に凄まじい加速性能……………我が軍の軽巡に匹敵する。これだけの機動性があれば砲弾を避けることもできるだろう)

(この巨艦をどうやってこれほどの機動性を出せるんだ?)

マイラスとラツサンは、『戦術』『技術』のそれぞれの見方で考察を続けた。

「どうでしたか?」

あかぎが2人に感想を聞く。

「なんとも言えません。この部屋もそうですが、全てにおいて我々の概念とかけ離れています」

ラツサンが答える。

「そうですか。では、マイラスさんが気になっている『レーダー』について説明します。『八木アンテナ』と呼ばれる、指向性電波送受信器が始まりです。それから世界各国はこれらの技術を発展させました。昔は大型艦など、限定的な運用しか出来ませんでした。真空管から半導体となり、戦闘機に搭載されるまで小型化されました」

そして説明が終了し、CICを退室した後、2士妖精の案内で飛行甲板に移動する。マイラスとラツサンはムー共和国軍の既存の戦術では、日本に敵わないことを改めて知る。

「しかし、どう思う?」

2人はしばらく黙っていたが、ラツサンが口を開く。

「既存の運用思想を根底からひっくり返すな」

「既存と言っても、今のムーの技術じゃ実現できないよ」



そう。ムーは一部突出している技術があるとは言え、ほぼWW1イギリスレベルである。対して日本は、一部オーバーツが混じっているが、2050年代の技術である。単純計算でも1世紀は離れている。

「ああ、それどころか、追いつくことすら不可能だろう」

2人は再び黙る。

そして飛行甲板へと着いた。

「広いな……………」

「ああ、今さつき分かったが、斜めの甲板は着艦のためにあるんだな」

「あれで航空隊の離着艦の効率は高まるだろうな」

すると、艦載機のF-4Bが発艦するためにカタパルトの発進位置につく。

「色分けされているのも効率化を図るためか」

ラッサンが、色とりどりのジャケットを来た乗組員を見てそう言った。

しかし……………」

「それにしてもどうやってあの大型機を発艦させるんだ？」

F-4B程の大型機をどうやって発艦させるのか。それが気になっていた。

「……………」  
ラッサン。そう言えばここに来た時、あのレールのようなものが気に

なっていたよな？」

「え? ああ、あれか、詳しく見ようとしたけど、見れなかった奴だな」

「もしかしたらそのレールは航空機を発艦させられるほどの速度まで加速する装置かもしれない」

「嘘だろ!? たったの数メートルしかないんだぞ! 離陸に足りる速度

まで加速するんだったら相当な出力が必要だぞ!」

「ああ、我が国の今の技術じゃ不可能だろう。だが日本国とムーの差は1000年を軽く超える。1000年の差があるならできるはずだ」

「…………… 確かに。そのレールさえあれば、あのような大型機でも発艦させられるということか」

「戦術の幅が大きくなるだろうな」

大型機を打ち出せるということは、その分、武装搭載量などを増やせることにつながる。

「…………… しかし、詳しいことを知りたいのは……………」

「やはりあれか」

2人は水平線の彼方を見る。

「この艦隊の前衛を務めてる戦艦を見てみたい」

ラッサンがそう言った。

ムー共和国の海軍の戦略は、基本的に戦艦同士の殴り合いを想定している。空母はあくまで制空権の確保を目的とした補助艦艇扱いだ。

なぜ空母が補助艦艇扱いなのか。

それは、『航空機では戦艦を沈められない』と、世界が思っているからである。無論これは間違いではない。旧世界でも空母が補助艦艇扱いの時があったのだから。

だが、航空機が複葉機から単葉機、そして高速化、爆弾の高威力化によってそれは覆された。

空母機動部隊の有効性を証明したのは、我が大日本帝国の真珠湾攻撃だ。

空母艦載機の集中運用によって強大な打撃力を生み出したそれは、いくら奇襲とはいえ、大多数の戦艦を撃沈したのだ。

「だが、俺はその戦艦のスペックをみただけで気絶したぞ。衝撃的なスペックだった」「マジかよ……………」

マイラスが、あかぎで『ながと型護衛戦艦』のスペックを見て気絶したことを思い出していた。

「だが頼めば見せてくれるということだ。早速行くか。お願いします」

「はい」

2 士妖精が頷き返す。

そして艦橋に移動して、あかぎ直々に頼み込む。

「お願いします!」

2人はあかぎに頭を下げる。

「いいですよ」

ラツサンの顔がパツと明るくなる。

「私もながとに行くところでしたから。飛行班長」

あかぎは近くにいた飛行班長に声をかける。

「はい」

「私他に、2人も追加で」

「了解です。伝えておきます」

「出発は1730です。遅れないように」

そして2人は早速飛行甲板へ移動する。

「おい!マイラス!あれ!」

ラツサンが艦尾の方を見るなり、マイラスの事を呼んだのでマイラスが振り返ると、

「なっ!双発機!」

着艦しようとしていたのは、双発機—E—8J早期警戒偵察機であった。

「…………… ミシリアルのようなエンジンなのか」

「あの皿みたいなのは何だろうな？」

2人の注目は、E-8Jの胴体上部にあるAN/APY-11へと向けられる。

「…………… うーん。さっぱりだ」

用途が全くわからない2人。

「熱心ですね。2人共」

2人の後ろから声が聞こえてきた。

2人が後ろを振り向くと、

「あ、どうも」

あかぎが、飛行班長妖精を連れて立っていた。

「熱心ですね。お二人とも」

「ええ。まあ」

「では早速行きましょうか」

4人は、SH-60Kに乗り、ながとへ向かう。

ながとが夕日に照らされる。

「…………… なんかスリムだな」

マイラスがながとの姿を見て言う。

ラ・カサミ級のように、ゴツゴツしている訳ではなく、コンパクトな印象を受ける。コ

ンパクトと言つても、全長250mは超えているが……………。

「お。光つた」

不意に艦の端の部分が赤や緑などに点滅する。

「この船、夜戦もこなせるのかな?」

「マイラス。それが本当だとしたら、この世界で無敵を誇るぞ」

ラツサンがこう言つたのには理由がある。

まず敵の発見に関する問題だ。いくら航空機があるとはいえ、夜間の視界はかなり悪い。月明かりを頼りにして探すか、艦からの投光器で敵を探すかなどがあるが、天候に左右されやすいし、投光器などを使えば、いい的だ。これはムーだけに限らず、ミシリアルにも言える。

「だが、あのレーダーというのを使えば、敵をかなり遠方で発見できるんだぞ? 遠くで発見できる分だけ、準備に時間を使えるし、直掩機の誘導も効率化できる」

直掩機の誘導は、列強だけではなく、対空魔振装置を艦船などに搭載している国家に共通して言える: 言えるが、この対空魔振装置は『パッシブ式レーダー』なのである。つまり、ムーのように、魔力を一切使わない純科学製だと人の魔力を探知、判別するしかないのである。加えて、魔力が大量に放出されている地域だと、これはただのガラクタ同然になる。迎撃の効率化は図れたが、外的要因に左右されやすいという、最大の欠点

を抱えていた。

「それはそうだが……………」

ラツサンは向かいに座っているあかぎを見る。

(綺麗な人だ……………。しかしなんで艦長と、艦の名前が一緒なんだ?)

「どうしましたか?」

「え? いや…………… どうして艦長の名前と艦の名前が同じなのか、気になつて……………」

「…………… そうですね。今ここで説明するのは難しいので、後ほど」

「はい」

どんな事情があるのか更に気になるラツサンだった。

そしてヘリはながと飛行甲板へアプローチに入る。飛行甲板が間近になり、信号士官が着艦の合図を送ると、「ドン!」と、勢いよく着艦した。

R A S T がヘリを拘束する。

機長が、スロットルを下げる。

「扉、開けます!」

外から扉が開けられる。

ヘリから素早く降り、退避する。

「ふ〜。ん?」

マイラスが視線を上げると、男が1人立っていた。

「お疲れ様です!」

敬礼しながら挨拶する妖精隊員。

「どうぞこちらへ!」

艦内へ入るために格納庫を通る。

「ん?」

マイラスが格納庫に入る直前、ながとの飛行甲板に近づいてくるヘリが見えた。

そして偶然国籍章が見えた。

微かに見えたただけだったので、脳内に念写する。

(おかしい。日本の国籍章は赤丸だったはずなのに。どういうことだ?)

「マイラス!早く来い!」

ラッサンから声をかけられて現実に引き戻される。

「すまん!すぐ行く!」

そして艦内へと入る。



「……………やはり明るい」

ラツサンが明るく照らされてる通路を見て言う。

「さつきもそうだったけど、空調が効いているな」

「うん。とても快適だ」

たがが空調に驚く2人。

やがて艦橋に到着する。

「艦隊副司令入ります!!!」

その声に呼応し、敬礼する隊員妖精。

その迫力に思わずたじろぐマイラスとラツサン。

「お疲れ様。副長、ながとはどこに？」

隊員妖精を労いながら、副長にながとの居場所を聞くあかぎ。

「はあ、それが、副司令が来ると分かった途端、艦長室に行かれました」

「……………勘がいいわね。分かったわ、ありがとう。それと、この方達に説明をよ

ろしくね」

「了解です」

敬礼しながら返事をした副長。

あかぎは艦長室へ向かった。

「航海長。指揮を頼む。では、どこから見たいですか？」

2人は少し顔を見合わせると口を揃えて、

「主砲からお願いします」

と答えた。

ながと 艦長室

艦長室の扉の前であかぎは服装を整えていた。

そしてノックをしようとすると、

「入れ」

と、中からながとの声が聞こえてきた。

中に入るあかぎ。

「なんの用だ。わざわざ副司令が来るなど」

ながとの開口一番の質問にあかぎは微笑むだけだった。

「……………ここにきて正解だったようだ」

「ふふ。相変わらずのながとね」

「どうも」

「それじゃあ本題だけどー」

あかぎは机の前にある椅子に座りながら話す。

「潜水艦について、ながとはどう思う？」

真面目な表情になったあかぎに、ながとも気を引き締める。

「…………… はつきり言うなら、国際法、と言っても、この世界にまともな国際法は

ないが…………… 宣戦布告すらしていない相手の軍艦に攻撃を仕掛けてくる時点で、そ

の軍人は腐っていることになる。既に国交を締結した一部の第3文明圏国家の商船の

被害も確認されている。正直言って、対応は政治的判断になる」

ロデニウス大陸周辺の潜水艦は、クラークン排除のついでに殲滅している。だが、第

3文明圏国家、特に、シオス王国の商船に被害が出ている。

日本政府は、シオス王国に基地を建設することを検討しているらしい

が……………。

「シオス王国に基地を建設するとなると、パーパルディア皇国を間接的に脅かすことに

なる」

「そうよね……………」

「ところで、旦那がいなくて寂しいか？」

ながとの質問にあかぎはカッと赤くなる。

「ねえ。なんでそんなこと聞くの?」

「いや、なんとなく。というか旦那だと認めるんだな」

「なっ!?!」

艦長室周辺に悲鳴が響き渡った。

ながととあかぎが艦長室で騒いでいる頃、マイルスとラツサンはながとの第1主砲の前に行った。

「これが41cm……………」

「でかい上に長砲身だな。どのくらいの射程があるのですか?」

ラツサンが副長に聞く。

「具体的な数値は申しませんが、40kmは軽く超えますね」

「……………は?」

「40kmです」

「……………」

ラ・カサミ級の射程を、倍以上を超えている。

「口径は?」

「62口径です」

「62……………!?」

「……………」

もはや戦艦同士の殴り合いでも勝てないと絶望しているラッサンだったが、あることに疑問を持っていた。

「あの、どうやって40km先の目標に当てるのですか?」

そう。最大の疑問はそこにある。

いくら長射程を誇っていても、敵に当てられなければ意味がない。大和型戦艦がいい例だろう。

「私たちの場合、それぞれの砲塔にある、これですね。FCS-4というレーダー測距儀兼主砲専用射撃指揮装置です」

「レーダー測距儀?射撃指揮装置?」

測距儀や射撃指揮装置はムーにもあるが、レーダーを利用するものではなく、測距儀は人力で距離を算出する。射撃指揮装置は、その数値をもとにした仰角をとる機械があるだけだ。レーダーなどは一切利用しない。

「しかし、もしそのレーダーにて得られた情報をもとに砲撃するとしたら、計算速度が尋常ではない速度が必要になるのでは?」

「その通りです。しかし高性能コンピューター……………電算機で計算された情報

をもとに砲撃を行います」

「すまんマイラス。電算機つてなんだ?」

ラツサンが電算機の意味が分からずに聞く。

「確か、どこかの大学が試作しているという、真空管というのを利用した電気計算機のこ  
とだと思うが……もし実現できた場合、ビル60階分レベルの大きさになるら  
しい」

マイラスはチラリと艦橋を見る。

「だが、この戦艦が使っている電算機はビル程の大きさもないようだな」

短時間で電算機の概要を思い出すマイラス。恐るべし。

「なあ、マイラス。俺たちも——」

「無理だ」

「ですよね」

ガツクリうなだれるラツサン。

「あはは」

副長は顔を引きつらせながら笑った。

「あの、話が変わるのですが、先程着艦しようとしていたヘリコプターでしたっけ?の国  
籍章らしきものが、あなたたちの赤丸とは違ったような気がしたのです

が……………」

マイラスが思い出したように副長に聞く。

「ああ、あれですか。あのヘリコプターは、『アンティータム』艦載機ですね」

「アンティータム？」

今までの日本の軍艦の名前を考える限り、有り得ない名前だ。

「それは、属国軍ですか？」

ラツサンが聞く。

「え？ いえいえ、違います。アンティータムは、国連海軍第7艦隊所属の巡洋艦です。現在はこの任務の応援艦として艦隊に加わっています」

「国連海軍？」

「国連海軍とは、各国政府が国連軍に拠出している艦船などから構成される軍です。まあ多国籍軍と思っていただいて結構です」

「多国籍軍……………」

「すごいな。だとしたら各国の仲は相当いいんだろうな」

ラツサンがふと漏らした言葉に、

「いえ、そうはいきません。何せ仮想敵国同士の軍隊も含まれていましたからね。当初は拠出という形を取っていましたが、現場での軋轢が生まれ始めて、国連事務総局は、国

連軍に所属している全ての部隊を正式に国連軍として定められました」

要するにNT（殴

「しかし、その所属の部隊の不満はどうなんです?」

「確かに、当初は離脱する部隊もいましたが、一部の隊は残りました。そのうちの1つがあの増援艦が所属している第7艦隊です」

『ロナルド・レーガン』は第7艦隊、第5空母打撃軍の所属であり、在日米海軍として、横須賀を母港としていたが、日米安保条約自動延長終了に伴い、アジアでの米軍のプロセス低下が、米国の何よりの懸念だった。別地点候補として『韓国』『台湾』『フィリピン』の主には3つが候補に挙げられたが、韓国は敵と近すぎ、そして海軍戦力展開には向かない。台湾もほぼ同じ理由であった。そしてフィリピンも、島すぎた。フィリピンのあの諸島なら、海軍戦力展開に向いているが、フィリピン軍の戦力が脆弱で、そして上陸が行われたら、その島1つを取り返すのに、多大な労力を払う必要があった。しかし米国は、日本に軍、又はそれに準ずる組織を欲していた。確かに米軍が大陸へ展開するのに、格好の日本であったが、その基地を守るために米軍が日本へ駐留するのであれば、結局は金を払うことになる。そしてそれが警察予備隊、保安隊、そして自衛隊となるのである。自衛隊の設立後、米軍はかなりの割合で支援を行った。自衛隊が赤の津波を止められるほどの戦力があれば、日本防衛の為の諸費用がかなり浮くのだから。日本は米



軍にとって最高の基地だったのである。

「あれだけの艦隊を手放すなんて。その国はかなりの太っ腹なんですネ」  
ラッサンが言う。

もしそんなことがあれば、喉から手が出るほど欲しい戦力だ。

「まあ、当初は原隊復帰命令が出ていましたが、当時の司令が『我々は独立する』と言い、全ての第7艦隊所属艦艇、及び、人員などと一緒に国連軍の軍人となりました」

「え？それはつまりクーデターということですか？」

ラッサンが聞く。

「ええ。実質そうです」

思ったよりもヘビーな問題に絶句する2人。

「これ以上詳しい話をする、1時間以上はかかりますので、また後ほど」  
気になる2人だったが、話を強制的に打ち切られて内に仕舞い込む。

その後、副長の案内で、護衛戦艦ながとの各種装備を見学した2人であった。

中央歴1636年、5月15日。西暦2050年5月15日。ムー共和国使節団は佐世保へ降り立った。この時、日本、いや、世界に新たな歴史が刻まれた。

『ムー共和国。文明圏外国家へ使節団派遣』

と。

## ムー共和国の調べ

???

「しかし、シヤマシユ。なぜこっちの日本を召喚したんだ？」

男性とも女性と取れる、中性的な見た目をしたものが、白髪を腰まで伸ばした女性に聞く。

「うん？だって、この日本を召喚したところで、あの魔帝を倒すのは規定路線としても、その後の世界が悲惨な状況になるからね。だったらある程度行動力の大きいこっちを召喚した方がいいんじゃないかな？」

大きくため息をしながらそれに返す。

「全て終わった後の始末はお前に任せるが、アスタルテのようなことにはなるなよ」

その忠告に、

「それは分かっているわ」

と、返したシヤマシユだった。

---

中央歴1636年 5月29日 日本国 首相官邸

数台の黒塗りの公用車が官邸の守衛所を通過する。

「ここが、日本の政治の中樞……………」

文官関係者が言葉を漏らす。

「趣を感じるな」

「あの白い服を着て武装しているのは、軍でしょうか？」

団員の1人が疑問にした白い服を着た者達は、保安隊である。

「まあ、それは置いといて、この後の会談に備えましょう」

使節団は、車から降りて、大会議室に案内される。

「緊張しますね」

外交官の1人が言う。

「決して粗相の無いようにしないと……………」

アベルがネクタイを締め直しながら言った。

スツ

扉の向こう側に気配を感じ、姿勢を正す使節団。

扉を開けて入ってきたのは、各閣僚、官僚だった。

「ムー共和国使節団の皆さん。お待たせして申し訳ありません。私は日本国内閣総理大臣『佐山 譲二』と言います。今回はよろしく願います」

佐山のおっとりとした雰囲気、気が緩む団員たち。ただ、アベルは気を緩めるところか、更に気を引き締める。

（こいつ。腹の裏にとんでもないことを抱えてやがる！）

佐山は、クワ・トイネ公国使節団に見せた時とは違い、ムー共和国使節団に、裏の圧を掛けていた。

（他は気付いていない……………くっ！まずいぞ！）

アベルは佐山の激しい圧に耐えていた。

「では、早速ですが、両国にとって初となる会談を始めましょう」

「はい……………」

その後、国交締結や、貿易などに関する話が行われた。

〜2時間後〜

「では、ここにサインを」

貿易に関する条約は後回しにされたが、国交締結の条約の公文書に佐山とアベルの名が記名される。

「アベルさん。これからよろしくお願いします」

「はい。ハッちらいそ」

2人は硬い握手を結ぶ。

後に、ムー共和国は日本国にとって重要な友好国となるのであった。

2日後 横須賀港

ムー共和国軍関係者は陸海空それぞれの分野に分かれて行動するのではなく、一緒に見学することを選んだ。

「…………… 壮観だな」

マイラスが双眼鏡で沖合にいる戦艦2隻を見て、そう言葉を漏らす。

「しかし、あの戦艦の砲撃を今日は観れるんだぜ！これほどいいことはないな！」

「ですな。しかし、41cm砲の威力…………… 楽しみです」

海軍士官がこれからのことを楽しみにしていた。

すると、こちらに近づいてくる小型艇が2隻。

「こんにちは。今回案内をさせていただく、『室蘭 桜』1等宙佐と申します」

「はい。本日はよろしくお願ひします」

一行の中で最上級の将校が代表して挨拶をする。

「ではこちらにどうぞで」

全員が搭乗したことを確認すると、出るように伝える。

映像が風で飛ばされないよう手で押さえながら桜は話す。

「今回は、各艦隊の一部の艦が定期的に実施する検査に同行していただくことになりま  
す」

「分かりました」

検査なら護衛艦の定期メンテナンスですればいいじゃないかと思うかもしれないが、これはその護衛艦の一斉技能検査も兼ねている。

しばらくすると護衛戦艦『ながと』のタラップが見えてきた。

「よつと」

小型艇からタラップへと飛び移る。

そして階段を登る。

「どうぞでこちらへ」

艦内へ案内される。

「戦艦の中とは思えんな……………」

ムーの軍艦に限らず、通路は基本的に狭い。

やがて艦橋に到着する。

「おお……………」

マイラスとラツサン以外のメンバーが艦橋に入るなり声を上げる。

見たことのない機械などがズラリと並んでいる。

「浦賀水道に入ります。両舷前進強速」

「両舷前進強速。赤黒なし」

すると、ながと前方2 kmに海保の巡視船『いなさ』が航路哨戒に入る。

「巡視船『いなさ』航路哨戒に入りました」

「航海長。今日は混んでいますね」

「ああ、おそらく、第3文明圏国家からのコンテナ船だろう。第2ASF第2対潜艦隊

が護衛してきた船団が一斉入港しているんだろうな」

船団護衛という、非効率な護衛を行なっている理由は、潜水艦や魔獣などに各国が対

処できないからである。

そこで中央は、船団護衛という、コストが最もかかる船団護衛方式で輸送船を保護す

るという策を取っていた。

「艦長。今日演習に参加する隊はどこでしたっけ？」

「確か……………本艦の他に、それぞれの艦隊にいるたくみ型と、ロデニウス連邦

海軍駆逐艦が3隻参加する筈」



「あの駆逐艦ですか？」

「そのようだ」

「皮はお古、中身は化け物か……………」

（どういうことだ？）

マイラスは、先程のやり取りを聞いてて、『皮はお古、中身は化け物』という文言に引っかけたかかっていた。

「それはどういう意味ですか？」

マイラスが室蘭に聞くと、室蘭は自身の端末を見ながら答える。

「ロデニウス連邦海軍の最新鋭駆逐艦です。外側はフレッチャー級駆逐艦、中身は最新鋭機材で固められた艦です」

武装は海上自衛隊時代の動態保存品、そして国連軍装備品統一規格に規定されている、MK45、5インチ、mod4が4門と、対潜武装として、イギリスが開発したヘッジホッグを改造したもの。そして533mm 5連装魚雷発射管を搭載し、『ウイロ級駆逐艦』として量産が開始されている。

いくら日本国が継続的な支援をロデニウス連邦に行っているとはいえ、なぜここまでオーパーツの装備品を運用できるのか？理由は、『魔法しか知らなかった』からである。

日本国は現在、文部科学省を中心に、魔法の基礎研究を行なっているが、難航を極め

ている。科学が足枷となつてゐるからだ。

対して、ロデニウス連邦は、すぐに『科学』を理解した。魔法とは違い、素質のある者だけが使えるわけではなく、学さえあれば、誰にでも使えるからだ。ただし、最初は難航した。魔法とは、先の話でも説明した通り、『過程を無視して現象を発現させる』のである。つまり、酸素が燃えて、二酸化炭素を排出して燃える、といったものを、『必要な魔素さえあれば、火をつけれる』と、過・程・を・無・視・し・て・現・象・を・発・現・さ・せ・るのである。つまり、過程は知らないと言ふことである。なら、魔法の要素を一切考えずに行けばできるんじゃないやね？という結論に達し、今のレベルまでロデニウス連邦は到達していた。

「そのフレッチャー級というのは？」

「旧世界でのアメリカ合衆国海軍が採用した、量産型駆逐艦です。建造されたのは175隻——」

「「1」は？」

「だいたい20隻位だと予想していた見学隊は、予想外の数に間拔けな声を出す。

「175隻です」

「どうやったたらそれほどの数を建造することができるのか……あの国に常識は通じないのだよ、君。」

「175……………」

もしそれほどの数をロデニウス連邦が建造していたとしたら、ムー共和国の艦船数を、その『アメリカ合衆国』の、たかが駆逐艦だけで上回られることになる。

「まあそんな艦です」

そんな艦だけでいい占められる程の数じゃない！

そう見学隊が思っているのに気付かずに室蘭は話を切り替える。

「浦賀水道抜けました。『いなさ』航路哨戒より離脱しました」

「了解。両舷前進第1戦速。黒5」

「両舷前進第2戦速。黒15」

出力を第1戦速まで上げる。

そして演習海域の手前に到着した。

「おっほ。たくみ型勢揃いですな」

それぞれの艦隊に一隻は所属しているたくみ型護衛艦10隻が全て勢揃いしていた。

「……………　　なんか先進的な見た目だな」

ラツサンがたくみ型護衛艦を見てそう言った。

たくみ型護衛艦は、ドレッドノート級の準同型艦なので、見た目はドレッドノートに見えるが、中身は完全に別物になっている。



「すごいな。あの小さな的に当てているのか……………」

「あの的は、直径10mの、自走式デコイです」

「直径10m……………」

それほど小さな的に、20kmも離れた位置から正確に射抜く技量……………」

「……………」 あの艦の口径はどうですか？」

「62口径200mm3連装速射砲です。たくみ型には2基搭載されています」

「……………」 艦体の大きさに武装が割に合わないのでは？」

「確かに、貴方達からすれば少ない武装に思うかもしれませんが、それだけ別の兵器にリソースを割いているということです」

「……………」

別の兵器とは何か？見学隊は映像を見ながら考えるが、何か分からない。

「すごいな。全て正確に撃ち抜いている」

映像を見ている限り、全て正確に撃ち抜いている。時折外している時もあるが、全体的に見れば誤差の範囲だ。

ここでマイナスがあることに気付く。

「……………」 なあ、あの砲身、ずつと的を追尾していないか？」

「……………」 言われて見れば……………」 確かにそのようだ」

隊員妖精が砲身の部分を拡大する。

「……………波と自身の動きに合わせているようだ」

「スタビライザーというやつか？」

ムーにも一応スタビライザーはある。但し、日本国と比べてはいけない。

「ですが、私達のものより高性能そうです」

見学隊が話している間にも、たくみ型護衛艦は訓練を続けていた。

「終わったようですね」

たくみ型護衛艦全てが技能検査項目を終わらせる。

「……………副長。本艦に訓練開始命令です」

（来た……………）

見学隊は身構える。

「艦長。本艦に検査開始命令が来しました」

『了解』

無線越しにながとの返事が来る。

『教練対空、対水上、対潜戦闘用意！』

発令員の号令がかかると、電子音が鳴る。

「各部配置よし」

「了解。最初は水上目標だ。砲術長、外さないように」

それに砲術長は笑みを浮かべながら答える。

「任せてください。私達は大砲屋ですからね」

レーダーに輝点が3つ映るのと同時に艦橋からも報告が入る。

『こちら艦橋。本艦左120。水上目標3個を視認。距離約30km』

「各砲塔、照準完了次第発射」

砲雷長が号令をかける。

「了解。発射管制は手動にて行う」

砲術長が各砲塔担当員に命令を伝える。

主砲副砲の砲術員の配置は、主砲1つに、2人の管制員が入り、副砲は1人が担当するという方式を取っている。

砲術員が、振り分けられた目標を、ジョイスティック型コントローラーを操作して狙う。

目標はそれぞれ分散している為、3つある主砲がそれぞれの目標を狙う。

「発射用意」

警報が鳴る。

「撃ち方始め！」

砲雷長が命令を発し、それを砲術長が復唱する。

「弾種多目的榴弾！ヒト発！撃て！」

「発砲！」

砲術員がジョイスティックに備えられているトリガーを引く。

それぞれの第1砲身から多目的榴弾が放たれる。

レーダーに弾道の線が映る。

「着。空中飛翔中の目標なし」

『こちら艦橋。目標に命中を確認』

たくみ型護衛艦の時と違い、41cm砲が的を自走式デコイごと消滅させた。

「了解。次は対空戦闘だ。各武装をチェック」

その頃艦橋では、見学隊が身をガタガタと震わせていた。

「これが41cm砲……………」

艦橋においても振動を感じる程の威力。

「うむ。勝てんな」

海軍将官が言った。

「だが、空軍の急降下爆撃ならあるいは……………」

空軍将校がそう言うが、マイラスの一言で沈黙する。



「それは無理です」

『何故だ?』と言おうと口を開いた時、艦内通達が入る。

『対空戦闘用意!』

警報が鳴り響く。

「いよいよだ……………」

この艦の対空能力を確かめられる機会だ。見学隊はその光景を頭に植え付ける。

「……………」

CICは静寂に包まれていた。

そしてその静寂が打ち破られる。

「!、レーダーに反応あり!全方位から対艦ミサイルと思われる飛翔体が本艦に向かって急速接近!距離600km!数は不明!」

「よりによって飽和攻撃か……………」

実弾を使用する訓練として、滅多にできない飽和攻撃対処訓練。だが使用される対艦ミサイルは模擬弾ではない。

使用されているのは、90式SSM、17式SSM、ASM-2、ASM-3、つまり、旧自衛隊の余剰装備品が使用されているのである。

自衛隊から国防軍へと改組したとき、自衛隊装備品をそのまま使用していたが、ある

致命的な問題に気付く。

それは、『守りに特化しすぎた』と言う事である。そこは別に問題ではないが、敵地攻撃能力の低さは更に致命的であった。改組直前に試作品が完成目前を迎えていた日本初の国産巡航ミサイル、TCM-1で、ようやくまともな敵地攻撃能力を得る事ができる……………はずであった。

そこに米国の傀儡である、当時の防衛政策局長である、『相口 謙也』が計画にSTO Pを掛けた。

曰く、『国産開発よりも、アメリカのトマホークを採用すべき』と鶴の一声で中止となった。しかし、ここに米国の意思は絡んでいない。むしろ国産開発を後押ししていた局面がある。

しかしなぜ相口は止めたのか？

それは防衛商社との蜜月関係にあった。

防衛商社は、日本の防衛装備品などを手がけるが、それよりも重要な事があった。

『アメリカ軍事産業。米国防省との強力なパイプ』の存在である。

防衛省と国防省との関係はもちろんあるが、防衛商社と比べれば貧弱なパイプであった。

そして、国産巡航ミサイルの開発終了目前との情報を得た米軍事産業は、直接圧力を

掛けて、開発を中止にさせた。

その後、憲法改正、そして防衛省が改組された際、ほとんどがスライドする形でポストに入っていたが、数年後、人事再調査で相口の数々の汚職が発覚、相口が逮捕されると芋づる式に続々と汚職が発覚、改組してまもない国防省の一大スキャンダルとなったが、当時の局長、そして国防大臣が全て辞任、それで一応の幕引きを終えた。

そしてそこから国防省は、国産兵器の開発を強力に推し進めていくこととなる。今回訓練に使用されている対艦ミサイルは、90式、17式SSMが使われている。それが約300発。

「両舷対空戦闘用意！」

既に戦闘配置を終えているため、隊員の気持ちは整えられていた。

「全力応戦だ。前部VLS、1番〜16番までのSM-6、発射よーい！」

「1番〜16番までのSM-6、データ入力！」

「発射用意よし！」

「てえー！」

ミサイル員が発射ボタンをタップする。

1秒間隔で16発のSM-6が目標に向かう。

「続いて、17番〜33番までのVLS、発射よーい！」

「てえー！」

その間にも、ミサイル群は距離を500kmを切っていた。

「主砲副砲、対空戦闘用意！」

「全砲塔に重力子スプレット弾を装填、2斉射！」

主砲の射線の隙間を、副砲が埋める。

「射線方向障害物なし！撃ち方始め！」

「発砲！」

トリガーを引く。

（SE音は、アンドロメダ級の重力子スプレット弾の発射音と、3式弾の発射音を足して2で割ったのをイメージしてください）

発射された後の砲身から青白い光が漏れ出た。

その間にも、ミサイル群は400kmを切る。

「てえー！」

何回目か分からない斉射で、ついにVLSの全てを撃ち尽くす。

「煙突ミサイル発射よーい！」

「てえー！」

ながとの煙突からミサイルが8発放たれる。

「CIC、艦橋バラストタンク調整、アップ10」

『バラストタンク調整、アップ10』

次元バラストタンクが排水され、喫水線が上がる。

それまで海面に隠れていた側舷ミサイル発射管が姿を現す。

「てえー！」

10発ずつ、計20発のミサイルが放たれる。

「敵ミサイル群、重力子網に突入……………残存29！」

「インターセプト10秒前—マークインター、!?. 敵ミサイル、全てが本艦の対空ミサイルを避けました！」

「は?。」

ミサイルの自立回避機能は、旧世界でロシア軍が開発に成功した、『ミサイル自立回避機能』が最初である。

そこから続々と各国も開発に乗り出して、成功させた。

しかし、その機能は西暦2037年以降のミサイルにしか搭載されていない。

「まさか45式……………」

「議論はやめだ！現在距離150km！」

「ミサイルは撃つな。ギリギリまで引き付けて主砲で撃ち落とす」

「了解！」

じわじわと迫るミサイル。距離が120kmを切ったところで、主砲発射準備を下命しようとして砲雷長が号令を掛けようとしたとき、ながとの一言で口をつぐんだ。

「砲雷長。火器管制権を移譲」

「はっ！ You have FCP！」

「I have…………… エンゲージ」

ながとが淡々と言うと言うと、額にながとのアイデア・クレストが浮かび上がる。そして船体にも光の線が走り、艦首艦尾側舷にアイデア・クレストが浮かび上がった。

「距離110km…………… 100km！」

「主砲。仰角55。」

「主砲、弾種超重力弾。近づく目標。Fire」

（三式弾SE音）

「着弾まで、10、9、8、7、6、5、4、3、2、マークインターセプト」

『爆発閃光視認』

「残り11。距離70km」

既にながとの間合いに入った。

「主砲弾種変更、多目的榴弾」

『弾種変更。多目的榴弾!』

「交互撃ち方始め」

そこからながとの主砲による全力射撃が行われる。

「くそっ! 器用に避けやがる!」

「まさかロシア製のやつか?」

「F群、G群全滅。残り4! 距離30km!」

副砲も連続で砲撃を行うが、ミサイルはその全てを最小の動きで回避する。

「距離10km!」

「RAM発射!」

ながとに4基あるうちの2基が起動し、接近するミサイルを狙う。

だがそれも回避されてしまう。

「距離5km!」

「CIWS。オープンコントロール!」

CIWSが起動し、自動でミサイルを追尾する。

「落ちろ!」

砲雷長が呻く。

「1km!」

「総員衝撃に備え!!」

全員が歯を食いしばり、机の角を掴む。

ゴオオオオオーンンン!!!

CICに微かな爆発音が聞こえてきた。

「目標撃墜!」

「応急長!被害状況報告!」

しばらくして応答がくる。

『被害特にありません!』

「ほっ……………」

ながとは400発近くの対艦ミサイルの飽和攻撃を防ぎ切ったのだった。

CICに歓喜の空気が流れているのに対して、艦橋の空気は重かった。

「……………」

その原因はムー共和国軍関係者であった。

「……………次元が違う。いや、違いすぎる」

徐に口を開いたのはラッサンであった。

「交戦距離、使用兵装。どれを取っても違いすぎる……………」

ながとが使用した対空兵器。ミサイルというらしいが、目にも止まらぬ速さで、空の



彼方へ飛び立ち、対艦ミサイルというのを撃墜する。しかも視界外で、だ。

「対艦攻撃能力、防空能力。やはり次元が違う」

恐怖に身を包まれる海軍に対して、空軍は絶望を味わっていた。空軍は、戦闘機による制空権、航空優勢の確保や、爆撃機による爆撃など、*“飛行機”*を使った戦術が基本である。この世界では、『戦闘態勢の戦艦を撃沈することはできない』という概念があるが、この艦はまさしくその言葉を体現した言つても過言ではない能力を保有していた。

「うむ。無理だな」

全員が諦観を持つ。

陸軍も海や空のことは完全に門外だが、あれほどの大口径砲を、艦砲射撃にでも使われたりしたら、一軍団が簡単に壊滅するのが目に見えていた。

それに加えて、戦艦に陸軍ではダメージを与えることができない、ということもあった。

「副長、入電です。『検査を終了する。結果は後日通達する』と」

「ふ〜」

副長が大きく息を吐くと、艦橋の空気が緩くなる。

「対潜もあつたら精神的にきついですね」

模擬弾ではなく、実弾を使用した訓練。気を抜いたら、最悪死者が出ることになる。

『対空、対水上、対潜戦闘用具収め』

「対空、対水上、対潜戦闘用具収め」

硝煙の匂いがまだ引かぬ中、護衛戦艦ながとは太陽の光を浴びていた。

中央歴1636年 6月21日 クワ・トイネ公国 マイハーク

クワ・トイネ公国である会議が開催されようとしていた。

それは

大東洋諸国会議――

大きな出来事が起きた場合に臨時的に開かれる会議である。参加国は文明圏外の国々で構成される。

それは元々会議の提唱国が文明圏外の国であったため、列強のパーパルディア皇国や、第3文明圏の国々は『会議は必要が無く、無意味』として不参加となった。

簡単に言えば、文明圏外国家の会議に文明圏内国家が参加することは無い、ということである。

なので、会議に文明圏の国々はいないため、過去に開かれた会議では、国同士の会議としては珍しく、比較的に本音を交わすオープンな会議が行われてきた。

今まで行われた会議では、列強パーパルディア皇国の動向等が会議の主題となること

が多かったが、今回は違う。

今回の大東洋諸国会議の目玉は急遽現れた新興国家、『日本国』についてである。

「これより大東洋諸国会議を開催します」

司会役が開催を宣言する。

「事前に告知した通り、今回は日本国から派遣された特使、『菅原人吉』殿が参加します。本日はよろしくお願ひします」

菅原は起立する。

「日本国より来ました、外交官の菅原と申します。今回はこのような会議に招待くださったロデニウス連邦に感謝を示すのと同時に、会議参加を受託してくださった皆様に御礼を申し上げます」

菅原が綺麗な60の礼をしている時、各国大使の内心は正反対な気持ちを抱いていた。

(ふん。どうせ裏で何か考えているに違いない)

と、日本国と国交を結んでいない大使が考えているのに対して、日本国と国交を結んでいる国の大使は、

(次はどのようなことをするのだろうか)

と、日本国が言うであろう、これからの発言に期待していた。

「では、我が国はロデニウス連邦からある程度の事前教養を受けていますが、まだ新参のため、最初は聞くのみに留めたいと思います。私の存在を気にせずお話ください」  
気にせずに話せるか、と各国大使は抱く。

国交を結んでいない国家は、日本が自分たちがパールディア皇国に対して様々なパールディア皇国人の前で言えば、なぶり殺しにあう程一言動を報告するのではないか？、そう疑念を抱いていた。

「シオス王国大使、どうぞ」

シオス王国大使が挙手し、司会が指名する。

「では、最初に、我が国がアルタラス王国経由で得た情報ですが、近々第3文明圏北方にある、ウーヴェ王国を侵攻するとの情報を得ました」

「ウーヴェか……………」

ウーヴェ王国は、シオス王国大使が述べた通り、第3文明圏北方にある、地図にも載るか載らないかギリギリの国家である。しかし、内陸国なのと経済力が小さい為、この会議に参加はしていない。

「面子の為か……………」

どこかの大使が呟く。

あの国に戦略的にも、戦術的にも何ら利点はなく、資源も無い。それでもウーヴェを侵

攻する理由は、『パーパルディア皇国の面子』と『世界征服の為』である。

「あの国は最近横暴すぎる。件のウーヴェもそうだが、吹っかけてきては服従を迫る」  
「……………」

各国大使の空気が重くなる。

まだパーパルディア皇国に従属していない国家は次は自分達だと、暗い影を落としていた。

「くそーあいつら、列強という名を利用してやがつてー！」

誰かがパーパルディア皇国の事を罵る。

「パーパルディア皇国の動向は把握しました。次は日本国の事について話しませんか？」

ロデニウス連邦大使が暗い雰囲気を変えるために話題を転換する。

「では、まず各国の日本の印象を述べてください」

最初にロデニウス連邦大使が挙手する。

「どうぞ？」

「我が国は現在日本国の支援で前とは比べ物にならない程発展を遂げました。国民の対日感情は極めて友好であります」

クワ・トイネ公国と日本国の接触、そしてそこから始まる、クイラ王国を交えた友好

関係の話が続いた。

(うくむ)

各国大使は悩む。

ロデニウス連邦はその建国経緯から、先程の話を半分程しか信用していなかった。

「我が国の建国経緯のせいで、我が国の信用度はかなり低いと自認しています。しかし、建国経緯の如何に関わらず、連邦を結成した事によつて、莫大な経済利益を得ています」それは事実であつた。

『講和 忍び寄る魔の手』にて述べた通り、ロデニウス大陸には、『人』『鉱物』『農産物』と、これからの経済発展に必要なものを全て揃えている。つまり、チート資源大國なのである。

「今の発展の機会を与えてくださった日本国には感謝の気持ちしかありません」

そう言いながら着席した。

「そうですか……………」

ロデニウス連邦大使の言っていることは本当のようだ。

各国大使は考えを改める。あの犬猿の仲とでも言うべきクワ・トイネ公国、クイラ王国、ロウリア王国の対立が嘘のように、戦後、連邦を結成し、第3文明圏に置いて有数の経済国を持つようにさせた日本国の手腕は評価に値する。

「なるほど。よく分かりました……………ですが日本国から直接自分の事を話して欲しいですな」

ゴーマ王国大使が菅原を見ながら言った。

「……………分かりました。まず、我が国が転移国家というのは皆様ご存知かと思いますが――」

「ここで幾人かが目を見開く。どうやら知らなかったらしい。

「旧世界では、我が国は列強国の枠に入っていました」

「列強……………」

「この世界では誰もが一度は夢見る列強。その列強に、旧世界とはいえ日本国が入っているとは……………」

「信じられません……………しかし日本国の発展具合を見る限り、その旧世界は相当な成長を遂げているようだ」

「そして旧世界とは転移によつて物理的な繋がりが絶たれてしまいました、それでもクワ・トイネ公国を初めとした、友好関係でなんとか持ち直すことができました」

その後、日本国の簡単な説明を終える。

「しかしなぜこのような会議に？貴国はこのような会議のレベルではあるまい？」

「ええ、その通りです。しかし、この世界の事を我が国、そしてこの世界も我が国の事を

ほとんど知らない状況で行動するのは早計と判断されました」

思ったよりも冷靜的な民族らしい。

「そうか……………では貴国のこの会議の参加目的を教えてください」

きつく問い質される。

「……………では率直に申し上げます。我が国の目的は――」



## 『地域共同体の設立』

「—にあります」

その一言で大使の目の色が変わる。

「地域共同体だ?!?!?」

この世界に地域共同体、いや、マジカライヒなどの例外はあるが、それでも、国同士

の共同体は存在しない。なぜならこの世界が「差」がありすぎるからだ。

国同士が自身の面子のための、格下の国家へ不平等条約などを結ばさせるなど日常茶飯事。そして文明圏外国家同士でのドングリの背比べ。

なのになぜ戦争が起こらないのか。

それは文明圏外と圏内では超えられない壁があり、列強と文明圏内の間にも絶対に超えられない壁がある。そのおかげで、日本が確認できている限りでは大きな、世界大戦が起きていないのだ。

「そんな事不可能だ」

「ええ、確かに不可能ですが、地域共同体の利点はかなり大きいです」

「具体的には？」

カクカクシカジカ

「……………一度検討させて欲しい」

「ええ、元より今ここでの返答は求めていません。できれば1週間後にここで検討の結果を話してもらいたいです」

「分かりました」

その後、世界の動向が話された後、会議は終了した。

誰もいなくなった会議場で、菅原が一人頭を抱えていた。

「はあ。なんで俺がこんな役目を……………」

彼の手元にある資料にはこう書かれていた。

『大東洋条約機構（GOTO）構想』

と。

## ムー共和国の調べ その2

この話は日本国が大東洋諸国会議に参加する少し前に遡る。

中央歴1636年 6月7日 グラ・バルカス帝国 ラツクル島 ラグニュー海軍基地  
地 グレード・アトラスター 艦隊司令官室

ここ、グラ・バルカス帝国のラツクル島にあるラグニュー海軍基地に、帝国史上最大最強の戦艦が停泊していた。

名は『グレード・アトラスター』。

既存の戦艦の戦訓を基にして、帝国の技術の結晶体である戦艦だ。そんな艦の艦隊司令官室に2人の男がいた。

ぱつと見年齢60歳の男が資料を黙々と読んでいた。

「…………… またやられたのか」

その男が持っている資料の題名は、『撃沈報告』であった。

「既に10隻近くが喰われています。既に各秘密基地から増援要請が入ってきています」

「どことも戦争していないのに、なぜこんなにもやられているのだ？」

「それは小官にも分かりません。カイザル閣下」

「……全て極東か」

「極東……まさか」

そこでカイザルは後ろを見る。

「やはり君もそうだったか。ラクスタル艦長」

ラクスタル、このグレード・アトラスターの艦長が頭を掻きながら答える。

「ボロが出てしまいました。まさか閣下も私と同じとは……」

カイザルは天井を見上げる。

「敗戦へと確実に進んだであろう祖国を、再び同じ目に合わせてはいけなと思い行動したのだがなあ」

「再び同じ道を進み始めていると……」

「しかし、微妙な差異がある。本来ならこの世界の中央歴1638年に転移したはずだが、1630年に転移、そしてどこも侵略する動向は無かったが、ここ最近きな臭い」

「では……」

「ああ、後1年ほどでパカンダ事件が起こるだろう」

「祖国が道を踏み外す原因となった事件ですな……」

「ああ、だが残念な事に、私の力ではそれを止めることができないが―」

カイザルは天井から資料に視線を移す。

「方法は一つある」

ラクスタルは考える。

政治的工事は不可能、かと言って武力で脅すことは……………

「まさかクーデターを!?!」

「落ち着け。流石にそこまでではやらんが…………… 最終手段として検討しておく。も

う下がっていいぞ」

ラクスタルはカイザルの背中を暫し見つめた後、退室する。

「ああ、なんと恐ろしい……………」

カイザルの脳裏に浮かんだのは、グレード・アトラスター艦橋に迫り来る、日本国の誘導噴進弾であった。

あの時、手も足も出なかった。つまり祖国は確実に敗戦の道を歩んだのが目に見えてくる。

その悲劇を繰り返す訳にはいかない。

中央歴1636年 6月28日 クワ・トイネ公国

この日、大東洋諸国会議にて各国政府の結論が話された。  
結果は………

「各国の意見は、賛成多数、になりました」

結果は賛成多数で、地域共同体の設立がほぼ決まった。

「では、発案者である日本国が盟主を務めるということで、よろしいでしょうか？」  
全員が頷く。

「では日本国を盟主とします」

それから暫く拍手が続く。

「ありがとうございます。では早速、発表をさせて頂きます」

そう言いながらプロジェクトを操作する。

前文

この条約の締約国は、すべての国民及び政府とともに平和のうちに生きようとする願望を再確認する。

締約国は、民主主義の諸原則、個人の自由及び法の支配の上に築かれたその国民の自由、共同の遺産及び文明を擁護する決意を有する。

締約国は、大東洋地域における安定及び福祉の助長に努力する。

締約国は、集团的防衛並びに平和及び安全の維持のためにその努力を結集する決意を有する。

よつて、締約国は、この大東洋条約を協定する。

### 第一条

締約国は、それぞれが関係することのある国際紛争を平和的手段によつて、国際の平和及び安全並びに正義を危うくしないように解決し、並びに、それぞれの国際関係において、武力による威嚇又は武力の行使を、いかなる方法によるものも慎むことを約束する。

### 第二条

締約国は、その自由な諸制度を強化することにより、これらの制度の基礎をなす原則の理解を促進することにより、並びに安定及び福祉の条件を助長することによつて、平和的かつ友好的な国際関係の一層の発展に貢献する。締約国は、その国際経済政策における食糧を除くことに努め、また、いずれかの又はすべての締約国の間の経済的協力を促進する。

### 第三条

締約国は、この条約の目的を一層有効に達成するために、単独に及び共同して、継続的かつ効果的な自助及び相互援助により、武力攻撃に抵抗する個別的の及び集团的の能



力を維持し発展させる。

#### 第四条

締約国は、いずれかの締約国の領土保全、政治的独立又は安全が脅かされているといずれかの締約国が認めたときはいつでも、協議する。

#### 第五条

締約国は、大東洋における一又は二以上の締約国に対する武力攻撃を全締約国に対する攻撃とみなすことに同意する。したがって、締約国は、そのような武力攻撃が行われたときは、各締約国が、個別的又は集団的自衛権を行使して、北大西洋地域の安全を回復し及び維持するためにその必要と認める行動（兵力の使用を含む。）を個別的に及び他の締約国と共同して直ちに執ることにより、その攻撃を受けた締約国を援助することに同意する。

#### 第六条

第五条の規定の適用上、一又は二以上の締約国に対する武力攻撃とは、次のものに対する武力攻撃を含むものとみなす。

(i) 第3文明圏におけるいずれかの締約国の領域、大東洋条約機構加盟国におけるいずれかの締約国の管轄下にある島

(ii) いずれかの締約国の軍隊、船舶又は航空機で、前記の地域、いずれかの締約国の

占領軍が条約の効力発生の日に駐屯していた他の地域でも適用される。

### 第七条

この条約は、大東洋条約機構加盟国たる締約国の憲章に基づく権利及び義務又は国際の平和及び安全を維持する、国際連合安全保障理事会の主要な責任に対しては、どのような影響も及ぼすものではなく、また、及ぼすものと解釈してはならない。

### 第八条

各締約国は、自国と他のいずれかの締約国又はいずれかの第三国との間の現行のいかなる国際約束もこの条約の規定に抵触しないことを宣言し、及びこの条約の規定に抵触するいかなる国際約束をも締結しないことを約束する。

### 第九条

締約国は、この条約の実施に関する事項を審議するため、各締約国の代表が参加する理事会を設置する。理事会は、いつでもすみやかに会合することができるように組織されなければならない。理事会は、必要な補助機関を設置し、特に、第三条及び第五条の規定の実施に関する措置を勧告する防衛委員会を直ちに設置する。

### 第十条

締約国は、この条約の原則を促進し、かつ、大東洋地域の安全に貢献する地位にある他の第3文明圏の国に対し、この条約に加入するよう全員一致の合意により招請するこ

とができる。このようにして招請された国は、その加入書を日本国政府に寄託することによつてこの条約の締約国となることができる。日本国政府は、その加入書の寄託を各締約国に通報する。

### 第十一条

締約国は、各自の憲法上の手続に従つて、この条約を批准し、その規定を実施しなければならぬ。批准書は、できる限りすみやかに日本国政府に寄託するものとし、同政府は、その寄託を他のすべての署名国に通告する。この条約は、署名国の過半数の批准書が寄託された時に、この条約を批准した国の間で効力を生じ、その他の国については、その批准書の寄託の日に効力を生ずる。

### 第十二条

締約国は、この条約が十年間効力を存続した後に又はその後いつでも、いずれかの締約国の要請があつたときは、その時に大東洋地域の平和及び安全に影響を及ぼしている諸要素を考慮して、この条約を再検討するために協議するものとする。

### 第十三条

締約国は、この条約が二十年間効力を存続した後は、日本国政府に対し廃棄通告を行つてから一年後に締約国であることを終止することができる。日本国は、各廃棄通告の寄託を他の締約国政府に通知する。

## 第十四条

この条約は、世界共通語及び日本語の本文とともに正文とし、日本国政府の記録に寄託する。この条約の認証謄本は、同政府により他の署名国政府に送付される。

「以上が私共が考えた『大東洋憲章』であります」

大東洋憲章などと言っているが、NATOの憲章を魔改造したものになっている。(なんだこれは……………)

既知のどの条約よりも、相互防衛を考えた条約。

「ここに記載されている通り、参加国家の半数の署名、批准を得られたら、その時点でこの条約が発効されます」

「確かに、魅力的な案であるが……………我々文明圏外が固まってパーパルディア皇

国、いや、文明圏内国家に向かつて、齒が立たないぞ。そこはどうするつもりだ？」  
 「初期は我々が各国の防衛を担当しますが、いずれは自分たちだけでも防衛できるように、我々も力を貸します」

旧式装備品の押し付けである。

「ふむ……………」

確かに、初期は日本軍の駐留を許すかもしれない。だが将来的には日本の兵器を手

入れられる可能性がある。目先のは不利だが、将来は旨味がある。

「なるほど。ですがその費用もタダではありませんな?」

「ええ、それに見合う代金をお支払いしていただく必要がありますが、これを批准し、参加すればなんらかの配当はあると思います」

なんらかの配当。もしそれが日本の兵器の格安提供だったら………。各国大使は思いを巡らせる。

「そしてこの条項は軍事に関することのみ記述していますが、経済に関する協定も後ほど説明いたします」

(軍事に関することだけでなく、経済も………)

既知のどの条約よりも、相互防衛を意識した同盟だ。

その後、経済関連の条項が説明される。

「ううむ」

最初の負担は大きい。だが将来はその負担分を超える利益が戻ってくるのは間違いない。

「では再び、1週間――」

「その必要はない」

菅原が1週間後にその批准書を提出してもらおうよう口を開けた時、それを誰かが遮

る。

ロデニウス連邦大使であった。

「既に各国の答えは出ている。そうではありませんか？」

「その通りです。それに我々は全員が全権委任大使です。この場で署名をすることができぬ」

うんうんと、各国大使が頷く。

「……………分かりました。では早速」

その後、すべての国家が署名し、日本を盟主とする大東洋条約機構が設立された。この同盟、経済協定によって各国は発展を遂げていく事になる。

日本国 呉市

ムー共和国軍視察団の姿は呉にあった。

「これが……………日本国の最新鋭戦艦」

海軍関係者が唸る。

ドックにいたのは、汎用戦艦ミズーリ護衛であった。

本日はミズーリの自衛艦旗授与式である。

「それにしても」

「ん？」

「最新鋭戦艦の就役を間近で見れるなんて最高だな！」

「そうだな」

視察団は海軍艦船の視察を終えた後、V-22に乗り、呉市まで来ていた。

その日がちょうどミズーリの自衛艦旗授与式だった為である。

「引渡式」

司会が宣言すると、ミズーリを建造<sup>改修</sup>を担当した『ブラックウオッチ』横須賀工廠長が

『自衛艦引渡書』を読み上げる。

『護衛艦『ミズーリ』をお引渡し致します。令和3年6月28日。ブラックウオッチ横須賀工廠長』

引渡書を受け取る広瀬国防大臣。そして受領書を取り、読み上げる。

『護衛艦『ミズーリ』を受領致しました。令和3年6月28日。国防大臣『広瀬 治』受領書を工廠長に渡す。

『社旗降下』

国防宇宙海軍呉音楽隊が奏でる演奏と共に、マストに掲げていた社旗、国連の旗にある、オリーブの間に弾丸と銃が描かれた社旗、国連の一機関であることを示す社旗が降

下される。

『自衛艦旗授与』

艦長が授与台まで歩き、広瀬に対して敬礼する。

三角形に折り畳まれた自衛艦旗を渡す。

艦長は受け取り、折りたたむと、左手に持ち替えて頭より高く上げる。

敬礼しながら元の位置に戻り、副長に渡す。

『乗組員乗艦』

司会がそう言うのと、『軍艦行進曲』が奏でられる。

「前へへ進め！」

タラップを伝い、艦に乗り込む。

全員が乗艦を終えたところで、次の行程に入る。

『艦長乗艦』

ピー！

1士隊員が号笛を鳴らす。

艦長乗艦を終えると、国防大臣による艦内視察を行う。

そして自衛艦旗掲揚に入る。

『敬礼!!!』



艦長が号令をかけるのと同時に乗組員が敬礼し、2士妖精がポールに自衛艦旗を君が代の演奏に合わせてゆつくりと上げていく。

掲揚が終わり、国防大臣の訓示が始まる。

『本日、ここに護衛艦『ミズーリ』就役を迎え、自衛艦旗を授与し、その最初の掲揚を威風堂々で行えたことは、隊員職員と喜びたいと思います。本艦は、将来、国連海軍の強力な打撃力としての担い手を期待されており、1日も早く任務に即応しえるよう、日々の訓練に精練してください』

訓示を終えると、拍手が起る。

そして艦長が下艦し、花束を受け取る。

その後、幕僚幹部や大臣の前で艦長挨拶を行う。

「国民の生命、財産、名誉を守るために、一刻も早く任務に即応しえるよう練成して参ります」

短い、それだけでも十分意志が籠もっている。

「護衛艦ミズーリ、任務の為、出港致します！」

敬礼すると、それに答礼する。

音楽隊が奏でる音楽とともに、乗組員が『帽ふれ』で挨拶をする。

沖合に出たところで、汽笛が3回短く鳴らされる。

ミズーリは国防宇宙海軍第2戦隊の所属となるが、しばらくの訓練を終えたのち、国連海軍第7艦隊に編入拠出部隊される。

『以上を持ちまして、護衛艦ミズーリの自衛艦旗授与式を終了致します』  
式が終了した。

自衛艦旗授与式を見ていたマイラスは、あることが気になっていた。

（今まで見てきた日本の軍艦はすべて丸平みを帯びた字名だったが、このミズーリという艦は、角張った字カタだった………何か特別な艦なのか？）

「あの、すいません」

案内役の日本国外交官に質問をする。

「あのミズーリという艦なんですが、何か貴国の軍艦と違うような感じがするのです  
が………」

「おお、よく分かりましたね。仰る通りです。あのミズーリは、原因は未だに不明なのですが、突如浦賀水道に出現したのです」

「突如出現………」

「これはまだ発表していない事案なので内密に、政府はミズーリが通ってきたとされる回廊の逆探知を、国防軍に調査を命じ、その結果………祖国、地球へと繋がっていることが確認されました」

「ツ!!」

「政府は艦を改修し、就役させ、国連軍へと編入することに決めました」  
「国連軍……………」

聞いた限りだと、どの国家でも国連軍へと部隊を抛出できそうである。

「その国連軍という軍に我が国も抛出することはできるのですか?」

「いえ。国際連合に加盟していないと不可能です」

「じゃあその国際連合の加盟することは——」

「現時点で、国際総会は、異世界国家の加盟を認めるつもりはないようです」

総会がこの世界の国家の加盟を認めない理由。それはこの世界の思想が根本的に国連憲章と相容れないからである。

この世界の常識は、武力を持って相手の優位に立つ。

あからさまな武力の誇示、行使が日常茶飯事である異世界が国連に加盟したところで、その和の空気が乱されるのは確実視されていた。

それが例え列強であろうと……………。

「そうですか……………」

その後、再びV—22に乗り、岐阜航空基地へと向かった一行だった。

1時間後

視察団は岐阜基地へと降り立った。

「3000mは有にありますね」

「しかも3本あったぞ。それに昼間であつてもよく見える誘導灯まで……………」

ムーにも初歩的ではあるが、誘導灯が空港にも、軍用限定であるが、誘導灯が備えられているが、日本と比べてはいけない。

「ではこの車に乗ってください。ここから先はお願いします」

外交官が隊員に後の案内を頼む。

「了解しました」

隊員が敬礼しながら答える。

視察団が車に乗り込んだのを確認し、車を発進させる。

「おお、色々な機体があるな」

駐機場に大小様々な機体が駐機されている。

「今一番手前にある4発機は、C-3という輸送機です。我が国にあつたC-2を元に大型、改良した機体となっています。積載量は90tです」

「90t!!?」

もはやムーの爆撃機すら凌駕する積載量だ。

「あのエンジンがそれを可能としているのか……………」

積載量90tと、あの機体を飛ばすだけの重量を空に浮かばせる出力。想像できない。

「面白い航空機だな」

しばらくして臨時の観客席に到着する。

「今回はデモ飛行を見てもらいます。最初は我が国の主力戦闘機、F-4Aの飛行です」  
そう言うと、轟音とともに滑走路スレスレを飛行してくる。

(推奨BGM TOPGUNより Danger zone)

「すごい！まるで稲妻だ!!」

凄まじい加速で遙か上空へと飛び去っていく。

すると、視界の端から新たなF-4Aが2機現れる。

1機がまっすぐ飛び、その周りをぐるぐる回る、コークスクリューを行う。

そしてその機体は赤と白のトゥーンカラーであり、翼端などはオレンジ色などに塗装させている。

「あんなことマリリンでは不可能だ!!」

空軍将校が興奮気味に叫ぶ。

「すいー！」

今度は、2機が相対しながら真つ直ぐ突つ込んでいく。

「ぶ、ぶつかる!!」

だが予想に反し、衝突しなかった。

「今2機は1mの距離で通過しました」

「1m!!あの速度で!!」

お互いの信頼がないとできない芸当だ。

「……………」

第1独立飛行団のアクロバット飛行を終えた後、定期便の国連空軍のC-117が滑走路に向かってアプローチする。

「あれもでかい……………」

C-117が着陸すると、逆噴射を行う。

「ん?ノズルの部分が開いた?」

C-117は、約400m滑走路を進んで着陸をする。

「あんな短距離で着陸したのか……………」

すると、尾翼に描かれている国籍章に気付く。

「あれも国連軍という軍の所属なのか……………」

国連軍に関しては謎が多すぎる。

後で詳しく聴こうと決めるマイラスであった。

その後、岐阜基地名物の異機種編隊飛行を行い、デモ飛行は終了した。は終了した。

(この日は岐阜基地航空祭ではありません)

そして今度は対地射撃に移る。

ただし、クワ・トイネ公国使節団と同じ反応をしたため、割愛させて頂く。

「次は、試作機展示となります」

「試作機？」

どうやら日本の次期主力戦闘機の試作機が見られるようである。

「あそこです」

隊員が格納庫を指さす。

格納庫から出てきたのは……………プロペラ機であった。

「???。なぜレシプロ機を?日本の戦闘機ならあのジェットエンジンで良くないか?」

「確かに、ジェットエンジンタイプの研究も進んでいます……………機体寿命の

問題があります」

「……………あ」

「ここで空軍将校、海軍将校、技術員が気付く。

「この世界において、我が軍は他の国家と隔絶、いや、隔絶しすぎています」

そう。この世界の文明圏外国家の戦闘機はワイバーンとかいうトカゲが主力だ。そして列強の戦闘機は、ミシリアルとムーを除くと、ワイバーンロードとかいうワイバーンの改良種らしいが、相手ではない。

つまり敵がない。

「はつきり言いますが、この世界の列強、例えあなた方やミシリアルが相手でも負けることはありません。交戦距離が違いますからね」

ミシリアルとは国交を締結していないのに、なぜある程度把握できているのかというと、日本の鷲の目がミシリアルを観察していたところ、ジェット戦闘機擬きが確認されたのだ……。ただ今のところ確認できている範囲では、時速500km未満らしいが……。

「ロデニウス大陸統一戦争後、国防省はジェット戦闘機ではない機体の開発を開始しました。それから約1年で完成したのがあれです」

駐機場に牽引されたプロペラ機、TXF-5が機体の最終チェックを行っていた。

「ん？尾輪式ではなく、3点式なのか……」

「何かレシプロエンジンの音とは違うような……」



「8枚プロペラ!?それに単葉機……………すごい、数世代先は進んでいる」

自国の最新機『マリン』よりも先の世代の姿を見て興奮する。

やがてチェックを終えたTFX-5が滑走路へとタキシングする。

「離陸します」

TFX-5は離陸すると、あっという間に空の彼方へ飛び去った。

「は、はやい!!すごい上昇速度だ!!」

「時速700kmは出てるか?」

そして滑走路ギリギリを飛行する。

「……………美しい」

マイラスがTFX-5を見てそう呟いた。

TFX-5が力強くそのプロペラを回し、空へ羽ばたく。

その後、TFX-5のデモ飛行が終了する。

「あれだけの出力……………レシプロエンジンでどれだけの出力を……………」

マイラスが口に漏らした言葉に案内役の隊員が反応する。

「あの機体のエンジンはレシプロではありませんよ」

「え?」

「ターボプロップエンジンというのですが、そうですね……………噴進発動機と言っ

た方が分かりやすいでしょうか。先程見た輸送機のエンジンにプロペラを付けた物と思ってください」

「噴進発動機……………」

「まあアメリカのライセンス生産ですがね」

隊員の言った通り、エンジンはアメリカの物をライセンス生産したものである。しかしあくまで今回視察団が見たのは、試作機第1号に搭載されているだけであり、試作機第2号機では国産のエンジン、コスモターボフロップエンジンが搭載される予定である。

「……………あの噴進発動機、マリんに搭載できないかな？」

「無理だろ……………」

マイラスの希望はラツサンによって簡単に打ち砕かれる。

「あれは全金属製だ。それはお前が一番わかっているだろう？」

「分かっているさ。だが……………」

マイラスの目は希望に満ちていた。

「あの機体のスペックを教えてくださいますか？」

「いいですよ。ええと、こちらになります」

隊員が懐から棒のようなものを取り出し、端末でそこに立体映像を映し出す。

## 速度

・最高速度 910 km/h

・巡航速度 825 km/h

## 航続距離

・戦闘行動半径

1000 km

・フエリー飛行時 7020 km

## 高度

・最大上昇可能高度 15000 m

## 武装

## 固定武装

・25 mm機銃2門

## 追加武装

・AAM-4 4発

・AAM-5 8発

・MK-82 4発

・AGM-114 6発

・ASM-4 2発

・70mmハイドラポット 4基

「わーお。こりゃ無理だ」

一部の士官が思考を放棄する。

アビオニクス

・ アクティブ・フェーズド・アレイレーダー

・ RWR (レーダー警報受信機)

・ FLIR (前方監視型赤外線)

「意味不明」

「訳分からん」

「つまりー」

「――絶対無理」

ついにほとんどの視察団員が思考を放棄する。

エンジンや機体構造は兎も角、何をどうやったらこのようなスペックを実現できるのか。それにマリントとの交戦距離が違うことが一目見て理解できる

「それほど強力なのかあのエンジンは……………」

TXF-5のデモ飛行とスペックの提示は視察団に深い影を落とし、空軍視察を終え

た。

日本国 首相官邸 総理執務室

「…………… トーパ王国か」

総理執務室で佐山はトーパ王国の概要の内、地理的情報を見ていた。

トーパ王国は軍祭直後からの接触があったが、ほかの国家の使節団もほぼ同時に来ていたため、後回しにされていた。

「…………… すごく地理的状况だな。この地峡に運河を作れば、トーパ王国にとって莫大な利益をもたらすだろうなあ」

人工海峽、もとい運河。前世界ではパナマ運河やスエズ運河が有名だろう。天然の海峽とは何が違うのか？それは…………… 通行料の徴収、だ。多大な労力を払い建設した運河は、その利権がその国家に与えられる。それをこのトーパ王国に建設すれば、利益率の一部を日本が貰える―ほぼ確実―だろうという魂胆だった。

「現状、第3文明圏南方を迂回、喜望峰を迂回する感じですね。そのルートしか存在していません」

「現状国交を有するのは第3文明圏国家のみとは言え、西方国家との距離の問題がある

からなあ」

この世界の比率は、7:3<sup>海陸</sup>である。ただし、惑星の直径が2.5倍程度となつていゝ。「ムーとの通商も確實視されていますからね……………」その運輸能力が壊滅して「いますね」

転移によつて失われたタンカーなどは、政府主導の量産型タンカーの建造を民間企業に優先発注を掛けてゐる。しかしそれでも今後も不足していくと予想されてゐる。

「はあ。ムーとの通商か……………頭が痛くなる」

「間違ひなく向こうの産業を全て倒産させますからね」

日本の製品は既にバカ売れしてゐる、いや、しすぎている。

「黒字倒産は各企業がなんとか回避してくれてゐるが、ムーとの関係が始まれば……………」

「こつち<sup>日本</sup>は黒字倒産。向こう<sup>ムー共和国</sup>は赤字倒産になりますね」

先進国と後進国が通商条約を——平等かでないかは関係なく——締結すると、後進国の産業が軒並み倒産することは、我が国の歴<sup>日本修好通商条約</sup>史が証明してゐる。

そうなるとその国の産業、そして労働者を敵に回すことになる。日本とムーの差を考えれば捻じ伏せることもできるが、日本はまだ新参者。ここで列強序列第二位のムー共和国を敵に回せばどうなるかは容易に想像できる。

「即ち、この世界における日本の立場消失、か。各省に伝えといて」  
「承知しました。ではこれで」

補佐官が退室するのと入れ替えて広瀬と白井が入室してくる。

「乙です」

「それ、最高司令官に言う言葉か？」

「少なくとも上司とは思って無いんで」

「おい」

「冗談です」

佐山は白井の目を見る。

白井の瞳が、奥底で微かに青白く光ったのが見えた。

「この手の輩は扱いつらいと思つてませんか？」

「当たり前だ」

広瀬と白井が椅子にドカつと座る。

「で、何の用？」

広瀬が切り出す。

「……………単刀直入に言おう。パーパルデア皇国と戦争になるかもしれん」

「……………」

戦争、と言われても2人は一切動じ無い。

「少なくとも3年後だと予想している……………理由は分かるだろ？」

「我が国が第3文明圏外国家から求心力を集めているから」

「正解」

パーパルディア皇国の行動は原作通りなので割愛させていただく。

「それだけ？」

白井が佐山に聞き出す。

「……………実はな、今期で総裁選に立候補をするのをやめようと思う」

総裁選、即ち党首の選挙に参加しない、総理大臣にならない、と言うことである。

「ほう。どうして？」

「疲れたなんて言うなよ」

「当たり前だ。まあ理由は、この長期政権にピリオドを付けようと思つてな。野党の政権獲得の動きが激しい、いや、激しすぎるからな。この際、総裁選に立候補しないことにした。少なくとも2〜3年は議員として活動してくよ。既に幹事長には話を付けてある」

佐山の長期政権、超長期政権は、6年2ヶ月、約2252日となる。長期政権TOP 10入りを果たし、尚且つ、29歳という絶対にありえない且つ、伊藤博文の記録を圧



倒的に破る記録となっている。

「だとしたら後6ヶ月くらいか」

「次の衆議院選挙は激戦になるだろうねえ」

白井が他人事のように言う。

「お前は気楽でいいよな。俺らは議席取るために必死の活動だよ」

「シビリアン・コントロールの特権だよ」

白井がニヤつきながらそう言った。

「まあいいや。そういうことだ………あ、後白井」

佐山が椅子から立ち上がろうとした時に、ふと思い出したように話す。

「ん？」

「例の奴がお前のことを探ってるぞ」

「ははくん。辿り着けるものなら、な」

その後、3人の雑談は終了した。

佐山の総裁選不立候補は後の歴史に重大な鍵の一つになるのだが、誰にも予想は出来なかった。



# ムー共和国の調べ その3

西暦2050年 某日 都内

室内に机を指で叩くような音が響く。

その音源を発している主は艦娘青葉であった。

「…………… 戸籍国籍その他諸々の証明書。何も穴がない……………」

青葉が調べていたのは、『白井 圭』の公式情報。そして一般人が得られる情報。コネを利用した調査を行なったが何一つ不審な点は見られない。

ただ、何も収穫がなかった訳ではない。

しかしその収穫したものが問題だった。

『白井圭の情報は全て偽装されたものである可能性が高い』

戸籍、国籍などの証明書に青葉が言った通り一切穴はない。

ただ、作られた書類の感じがするのだ。

もしその収穫―仮説―が本当だとしたら『白井 圭』は誰なのか。

「やばいもの引いちゃったかもしれないです」

しかしここまでできて青葉に『止める』という選択肢は無かった。

同日 日本国 国防省 統合幕僚会議室

「……………レーガンか」

望月海上—宇宙海軍—幕僚長が自身の端末に表示されている情報を見て呟いた。

「後半年程でオーバーホールに入ります。BW社によれば、『どんなに短くしたとしても、3年はかかる』とのこと。ですが米国のオーバーホールと同等のものを行う必要があるので、4年はかかると見ていいでしょう」

「4年も空母が不在になるのか……………」

ニミッツ級原子力航空母艦の艦載機は旧世界中進国の空軍力に匹敵すると言われている。この世界においては無敵を誇る戦力になるが……………その打撃力を保有する空母が4年も不在というのは流石にまずい。

「国連軍の友人も嘆いていましたよ」

「空母という外洋遠征部隊の代わりが務まるとしたら……………やはりあの部隊か」

「ロングレンジ部隊ですか……………」

ロングレンジ部隊。

正式部隊名は、長距離戦略打撃群（Long Range Strategic Strike Group, LRS SG）。その名の如く、敵地へ浸透し、攻撃を加える事を主任務とする。その部隊のためだけに空中管制機<sup>A<sub>W</sub>A<sub>C</sub>S</sup>と空中給油機が所属しているほどののだ。

A W A C S を基幹とし、各軍の協力を得て世界中どこでも72時間以内に攻撃を加えることができると言われている。

そして近々、新たな無人機運用母機がそこに加わると言われている。

しかしそのロングレンジは、空域を周回している無人給油機、MQK-979の援助があつてこそそのロングレンジである。

「やはり軍事的だけではなく政治的にもかなりまずい状況だろうな。俺から上に挙げておく」

「ありがとうございます」

望月らがロナルド・レーガンのオーバーホール問題を話している頃。別の場所で全く同じ事を話している人物がいた。

「レーガンの代わりが務まるとしたら……………やはり『アメリカ』しかないな」

そう話したのはジエームズアジア方面軍司令官であった。

「やはりクルーが遊び駒化するのは流石に不味いか……………」

ジエームズの対面に座る白井がニヤつきながら話す。

「ニミッツ級と同等規模の空母が欲しいか？」

「そんな魔法みたいなこと言うなよ……………ニミッツ級の代わり、合っているか

は分からないが、やはりロングレンジ部隊しか務まらないな。『アメリカ』は搭載機数  
 たったの20数機。この世界に於いては最強だが、数が少ない」

「また拠出しなきゃならんのか……………」

「そっちの事情もわかるが、なんとかならんか？」

「……………金さえあれば」

「はく。じゃあこうしよう……………んん、上官として命ずる。『なんとかしろ』、以  
 上」

「ひどい。差別だ。クズだ。ゴミだ」

「それ、元アメリカ陸軍特殊部隊司令官に言う言葉か？」

「自分でも元だつて言ってるじゃないか」

「もう一度言う。『なんとかしろ』」

「無理」

「……………」

しばしの沈黙の後、ジェームズが立ち上がり、柵の引き出しからあるものを取り出す。  
「それでどうするつもりだ?」

ジェームズが手にしたのはM1911コルトガバメントであった。

「脅す」

そう言いながらジェームズは白井の眉間を狙う。

「殺人罪になるぞ?」

「それで空母が得られるならお釣りが来る。YES? or NO?」

「NO」

引き金を引く。

ガチン!!

金属音と共にスライドロックがかかる。

「冗談だよ」

「知ってた」

笑いながら話す2人。

銃を引き出しの中に戻しながらジェームズは話す。

「白井。頼むぞ」

「最善を尽くします」

静岡県 御殿場市 東富士演習場

ムー共和国視察団の姿はここ、御殿場市にある国防軍東富士演習場にあつた。

「ついに陸軍か……………」

「…………… もう嫌な予感しかしない」

そんなこんなで演習が始まる。

最初は国防陸軍の主要装備の演出が行われる。

80迫と120迫、FH-70<sup>155mm榴弾砲</sup>が車両に牽引され、射撃準備に入る。

そして38式自走200mm榴弾砲も射撃準備に入る。

今回は、展示が入るとはいえ通常の訓練の為、アナウンスなどは一切ない。

「あれデカくないか!？」

「200mm級…………… 巡洋艦レベルの主砲を搭載しているのか!？」

視察団の注目は38式に映る。

「しかも無限軌道!我が国ではようやく開発が開始されたものだ!」

「だがあの主砲のデカさと車体だ。相当大きな重量なはずだ…………… それだけの重



量を支えられる無限軌道、そしてエンジン…………… 一体どれだけの出力が必要なんだ？」

すると、各砲の旗が緑から赤に変わる。

ズドォーン!!!!

そのあと、数発立て続けに射撃が行われる。

「すごい！全弾命中しているぞー！」

「それに発射速度も速い！」

『全車陣地転換！』

離れた場所で見学している視察団の耳に、微かに怒号が聞こえてきた。

迫撃砲、FH-70が車両に接続されて移動を開始する。38式もそれに続く。

陣地転換を終えた各砲が再び射撃に入る。

ここでも数発撃つ。

そして陣地転換を行い、撤退する。

次は「狙撃」に入る。

その時、ムー陸軍の士官があることに気付く。

「ん？…………… あの兵士、何かおかしくないか？」

その兵士をよく見ると、さながら「幽霊」のようであった。

「なんだあれは？」

「あれは環境追従型迷彩2型と呼ばれる、旧世界のアメリカが開発したものをライセンス生産したものになります」

解説役の隊員が答える。

「環境追従型迷彩？」

「ええ。その名前の通り、周囲の背景の情景を特殊な装置を使い、迷彩化します。それによつて完全までとはいかなくても、あのように同化できます」

「……………」

そんなものがあれば——実際にあるのだが——ムーは敵を発見することができないだろう。

「……………」　なあ、あの距離を狙うのか？」

ざつと1000m以上は離れていそうである。

「ん？撃つたのか？」

緑の旗から赤に変えられたことでようやく気付く。

するとおよそ1200m離れた赤い風船に命中する。

「おお！すごい！」

「あの距離で当てたのか！」

「すごいなああの銃は……………ライフルだというのは分かるが……………」  
 ここでも解説が入る。

「先程の隊員が使用したのは、米国製のM24A2をライセンス生産したM24J1と  
 呼ばれる狙撃銃です」

開発国の性能を上回るという、ここでも日本のお家芸が起こっている。

ちなみに、先程話した環境追従型迷彩2型はカモフラージュパターンが日本仕様に変  
 更されているだけで何も変わっていない。

隊員が撤収する。

それと入れ替わりで17式装輪装甲車2台とLAVが侵入してくる。

軽機動装甲車

「今度は22式軽対戦車誘導弾の射撃に移ります」

22式軽対戦車誘導弾とは、01式対戦車誘導弾を魔改造したものになっている。

1番の改造点は01式が赤外線画像誘導なのに対して、22式はASM-3のシー  
 カー技術を応用した、赤外線画像、アクティブレーダーの複合方式を採用している。

これにより、戦車などから放たれる発煙弾などにも騙されることなく命中することが  
 できる……………ただ、旧世界でロシアが戦車でも運用可能なCIWSを搭載し

たせいで命中数が少なくなると予想されている。

「最初はダイブモードの射撃です」

「ダイブモード？」

「まあ見ててください」

緑の旗から赤に変わる。

パシューーー!!!

間抜けな音が発生するが、その音源は間抜けではなく殺戮の槍である。

「あのように上昇し、目標に向けて降下します」

ドオオーン!!!

「……………なんのためにそうする必要があるんだ？」

なぜ一旦上昇するのか理解出来ずに士官が聞く。

「戦車という兵器があるのですが、貴国にもありますよね？」

「……………なんだそれは？」

まさかの返事に解説役の隊員は軽く驚く。W W 1のイギリスレベルなら戦車——  
いつでも菱形戦車だが——を保有していてもおかしくないと考えていたからだ。

しかしここで軽く認識の差が発生している。

確かにムー共和国の技術レベルはW W 1のイギリスレベルだが、一部技術はそれを突  
出している。

例えば『マリリン』などがそうである。

そして一部WW1より前の技術がある。

ムー共和国内で、ある意味、パラダイムシフトが起こっているのである。

「そうですか……………後程登場しますので説明を省略します。その戦車というのは、基本的に上の部分が弱点となっています。正面からの射撃では装甲に防がれる可能性があるため、より撃破の可能性が高い部分を狙うために、ああいう方式を採用しています」

ラツサンはここで確証を得た。

『日本軍は誘導弾を基礎とした戦術を採用している』と。

パシユー!!!

今度は低伸弾道モードで発射される。

「……………あれでは避けようがないではないか」

もちろん命中だ。

17式とLAVはすぐさま撤収を開始する。

それと入れ替わりで16式B型MCV2台と25式偵察警戒車2台が侵入してくる。

「そ、装輪だ?!しかもあの砲、100mmはあるぞ?!」

ぱつと見で大体の能力を把握するムー共和国陸軍士官。

「8輪駆動式……………機構が複雑になるだろうに……………」

そしてあることに気付く。

「あの砲身、ずつと何かを追尾していないか？」

そう言われて全員が砲身を見る。

士官の言った通り、砲身がどこか一点を狙っているようで、揺れなどに合わせて追尾しているようだ。

ドン!!!!!!

120mm滑腔砲が放たれる。

16式の主砲は105mmライフル砲、つまり、旧自衛隊が使用していた74式戦車と互換性があるが、105mmライフル砲専用の弾の劣化が問題となり、16式の改良案が出た。

16式を大型化、そしてエンジンも全て新型に換装し、主砲も10式戦車などの弾と互換性を持てるよう120mm滑腔砲に変更された。

16式最大のメリットは、『展開速度』と『重量』である。

その利点を殺さない程度の、能力の向上が望まれた。

C-2輸送機で搭載可能な重量を、そして高速道路、一般道路の荷重制限を守りつつ、攻撃力と防御力の上昇と、かなりの無茶振りであったが、苦勞に苦勞を重ねて開発に成功したのがB型なのだ。

それが16式B型である。

そして砲弾が5cm×5cmの正方形の的を撃ち抜く。

「すごい！あんな小さな的に正確に当てたぞ！」

そしてスラローム射撃も披露する。

「あんな蛇行をしながら……………よっほど良い砲なんだな」

「忘れてはいけませんよ。我が国と日本の差は150年近くもあるんですよ」

マイラスのたったの一言で場が凍りつく。

そう、150年も離れているのだ。その差は計り知れない。

ババババババババ!!!

30式偵察警戒車が25mm機関砲による、16式撤退援護射撃が行われる。

「……………なんて連射速度だ」

30式偵察警戒車とは、『侵攻阻止』にて登場した、30式指揮通信車30式ファミリーと同系列なた

め、部品相互性が7割を超えている。

16式が撤収したのを確認すると、30式RCVも撤収する。

「次は戦車火力です」

隊員がそう言うのと同時に40式戦車が侵入してくる。

「あれも120mmくらいか……………」

ドン!!!!

砲弾が放たれる。

「やはり当てるか……………」

100発100中という現実離れしている性能に視察団の何人かが気絶する。

しかし気絶していることに他のメンバーは気づけなかった。

「やはり思想が違いすぎるな……………」

ラツサンがようやく口を開く。

「やはりあの誘導弾か？」

「ああ。あの誘導弾を使えば、戦争の常識が根底から覆る。そしてお前が痛めつけられたロウリア王国戦でその一端が行われたのか……………」

「ロウリア王国」と聞いて、マイラスの背筋に悪寒が走る。

「やめてくれ。今でも嫌なんだから……………」

「すまんすまん。だが我々の、兵器の進むべき方向性がこれでハッキリした。まず、誘導弾を前提とした戦術構築。航空機のJET化、とかまあそんなところだろう。時間はかかるだろうけど、この国と長く付き合えば、いずれはミシリアルも越えられるだろうぜ」

目をキラキラさせながら話すラツサンに、大きくため息を吐くマイラス。

「いいか？そこまでの道のりは途方もないぞ？プロペラ複葉機からいきなりJET機に



できるわけじゃない。そこまでの過程が必要なんだ。技術レベルがある程度近ければ、無視することもできるが……… まあ150年近くの差があるから無理だな」

技術は過程が必要である。

なぜそれができるのか？それを理解しながら技術を発展させていくためである。

「輸入という―」

「無理だ」

「なぜ？」

「『技術流出防止法』があるだろ？」

「……… そうだった。なんとかして緩和などしてくれないかなあ〜」

ドン!!!!

40式戦車の砲撃で、強制的に話が打ち切られる。

「戦車を作ろうとしたら、あんなものは100年かかっても不可能だよ………」

実際100年以上離れているけどな」

40式1台による展示を終え、シチュエーションを開始される。

新たな40式戦車が5台侵入する。3台はすでに侵入している40式の元へ着き、他の2台は日本戦車の『伝家の宝刀』とでも言うべき、〃油気圧サスペンション〃による姿勢制御で前傾姿勢を取り、稜線射撃態勢に入る。

そしてこの姿勢制御がマイラスの目に止まった。

「おい！あれ見ろ!!」

ラツサンの肩を掴みガンガンと揺らすマイラス。

「なんだよ……………前傾姿勢？」

ラツサンの目には戦車がお辞儀しているようにしか見えなかった。

「そうなんだがそうじゃない！あれは自力で姿勢を制御しているんだ！」

「姿勢制御……………あれなら地形に関係なく射線を確保できるのか」

「仮にあれを我が国の戦車に導入したらかなり役に立たないか？」

ラツサンが手を口に添えてしばらく熟考した後、口を開く。

「確かに役立つが……………我が国は大陸国家だぞ？ここは列島だ。導入しても通

じるだろうが……………陸軍において、戦艦みたいな殴り合いを我が国は想定して

いない……………」

ムー共和国軍の、特に陸、空軍の戦闘教義《ドクトリン》は内戦戦略という、本土に  
 侵攻されることを前提とした戦力構成となっている……………海軍はWW1の口

イヤルネイビー並みを誇っているが、それはカウントしない。

「そして、日本の戦術は、全て未来技術を元にした技術ということだ」

技術面の望みを戦術面で打ち砕き、戦術面の望みを技術面で打ち砕かれるというのを

何度も繰り返す。

「新しいのが来たな……………」

その眩きによつて2人は議論をやめる。

「40式戦車さっきのと比べると、コンパクトだな」

新たな戦車、10式戦車が2台侵入してくる。

しかしここで40式戦車のスペックを提示する必要がある。

40式戦車

・全長9・80 m

・全幅3・41 m

・全高2・35 m

・重量48 t

・最高速度80 km

武装

・40式55口径120 mm滑腔砲

・12・7 mm重機関銃 リモート R M 2

・24式7・62 mm機関銃

と、至つて普通であるが、ある装置が40式戦車に搭載されている。

それは、

A D S

『アクティブディフェンスシステム』と、

G K

『ゴールキーパー』である。

A D Sは自衛隊時代から開発が続けられてたものが使用されているが、『G K』はドイツ製のもので採用されている。

A D Sの機能は皆様が予想されている通りの性能なので省略させていただきます。

そして気になるであろう『G K』は、正式名称『戦車搭載型近接防衛システム』である。

それは戦車と一体化するようになっている。

戦車の天板から突き出る小型トッププラーリーダーが目標を探知すると、その情報を元にレーザー照準装置がM2機関銃と連動し、迎撃するというシステムだ。

しかしデメリットがある。

電力が足りない、である。

ある意味、国産戦車の宿命でもあった。

しかし、自衛隊時代からの開発の賜物である、『リチウムイオン超小型電動モーター』である。

自衛隊は、戦車の居住力不足―空調とか―をなんとかしたいと考えていた。しかし、予算の制約がある中で、それは実現不可能であった。

しかし、国防軍へと改組されたことで、予算の制約はある程度緩和された。

そして『リチウムイオン超小型電動モーター』の開発に成功したのである。

なお、上述した装置は戦車と一体化されるように収納されているため、実際のスペックとは差異が生じている。

（説明になりませんでしたすみません）

「あの戦車も姿勢を制御できるのか……………」  
ドン!!!

10式と40式が同時に砲撃する。

40式が超信地旋回で向きを変え、砲撃を行いながら撤収を開始する。10式がそれに支援砲撃を行う。

40式戦車の撤収を確認すると、10式も姿勢を元に戻し、撤収する。

「これで前段演習は終了です。この後、一部の車両が展示されますのでしばらくお待ちください」

しばらくして、装備品の展示準備が完了する。

「どうぞお入りください」

隊員の指示に従い、ロープを超えて演習場敷地に入る。

マイラスとラッサンは真つ先に40式戦車の元へと向かった。

「……………やはり力強いな」

「120mmの主砲も魅力的だな……………」

マイラスが戦車の側に立っている隊員に近づく。

「すいません。先程の姿勢制御を見せて頂けませんか?」

隊員は2つ返事です承する。

前後左右、斜め、車高の制御を見せて実演を終了する。

「……………やっぱり役に立つよな?」

「役に立つが、その場面が問題だ」

役に立つ事がないという意味では無く、使用するタイミングがわからないという意味である。

「言えてるな」

2人は横に展示されている38式の前に移動する。

「これが155mm……………」

「さつき聞いたが、最高時速60kmだそうぞ」

「時速60kmか……………」

展開スピードもムーとは桁が違う。

「我が国のカノン砲にも応用できそうだな」

「だが、あれは命中精度に難があるぞ？そこはどうするつもりだ？」

「命中精度に関しては、ある程度妥協するにして、問題はその展開速度だ。中央軍に配備

すれば、その展開速度を活かせるだろう」

「…………… まあ理解はできる。だが……………」

「日本と長く付き合えば、いずれはできると思うよ」

「だけど、どうやってあれほどの命中精度を…………… 考えるより聞いた方がいい

な。すいません」

「はい、なんででしょうか？」

「この砲の射撃管制はどういうもののですか？」

「そうですね……………」

近年の砲兵戦では、対砲迫レーダー、火光標定、音源標定、

無人偵察機などの各種観測装置を戦術データリンクによつて情報を共有し、その情報をもとに射撃を行います」

無人偵察機は海軍視察の時に知つたので驚きはなかったが……………

「対砲迫レーダー？」

「対砲迫レーダーとは、レーダー装置で弾道を解析することにより、砲弾の発射地点を特定するためのものです。現在採用されているのは、対砲レーダ装置 JTPS—F10、32式対砲迫レーダー車が採用されています」

「……………確かに、砲撃陣地は敵に見つかったらいい的だからな。だから『自走砲』が生まれたわけだ」

「しかしレーダー技術がここまで役に立つとはな……………」

電探技術も発展すればここまでいけるといふ事だ。

「帰つたら上申書を提出するか……………」

レーダー技術の恩恵は計り知れない。導入して日本からのノウハウと独自のノウハウを蓄積していければ成熟するだろう。

2人はレーダーの重要性を再び理解し、横に展示されている17式装輪装甲車の前に移動する。

「『装輪装甲車』か……………展開スピードを重視した設計だな」



「しかし8輪か。その分機構も複雑になるはずだが、やはりそこは時代か……………」  
「うちに配備するとしたら中央軍配備だな……………」

「だな」

「あれを見に行くか……………」

30式RCVの元に向かう。

「なんか愛着が湧くな」

「…………… しっかし、25mmぽつちの豆鉄砲じゃ役に立たないんじゃない？歩兵制  
圧には使えるだろうが…………… すいません」

「はい」

「なぜこんな豆鉄砲を使っているのですか？」

「確かに砲口径は25mmと豆鉄砲です。ですが、この車両の目的は、先程の16式MC  
Vと連携した威力偵察、単体での偵察、情報収集などを目的としているため、大口徑砲  
は不要なのです」

「…………… 装甲化された戦力を倒すことはできないのか」

一応、APFSDSがあるので不可能では無い。

「あれを見に行くか……………」

2人は17式装輪装甲車の元へと移動する。

「…………… 8輪駆動か。機構も複雑になるだろうに…………… 改めて感嘆するよ」

約100年先の兵器を目の前で見られることに感嘆のため息を吐きながら話すラツサン。

「やはり展開スピードを重視した設計だな」

「装輪のメリットはここまであるのか……………」

2人はその隣へ移動する。

そこに展示されていたのは、16式MCVB型であった。

「さっきのひとななしきと同じ車体を使っているのか？」

17式装輪装甲車は98式装輪装甲車は96式装輪装甲車の後継として開発された。しかし、あくまで16式の車体を流用しただけであり、中身は大幅に変更が加えられている。

「みたいだな」

「…………… 120mm、駆逐艦並みの主砲が搭載されていることに驚きだ」

「何度も驚いているだろ？」

「そうなんだが…………… 約100年の差がこんなにも大きいとは、流石に予想

外だったよ」

世紀換算で、約1. 5世紀は離れているが、純粋な科学のみでここまで発展させてきた日本に驚く。

「我々も、あなた方の技術に関して予想外のものがありました」

後ろから声をかけられて、2人が後ろを向くと、そこには旧陸上自衛隊の迷彩服三型に、ノンフレーム眼鏡を着用し、防衛装備庁の人員であることを示すロゴが描かれた帽子を着用した人物が立っていた。

「初めまして。私は国防軍防衛技官の米内2尉と申します。いや、なんとか間に合いました」

「はあ?」

腑抜けた声を出しながらマイラスは握手に応じる。

「本来なら私が付きつきりで解説をするはずだったので、突然の仕事が入り、そしてその連絡も代理の者に連絡がいかず、こうなってしまうました……. …… まあそれはともかく、分からない事があつたらじゃんじゃん聞いてください」

「では……. …… この『ひとりくしき』が開発された経緯を教えてください」

「はい。当時、島嶼部に対する侵略事態やゲリラ・特殊部隊による攻撃などの多様な事態に対処するため、優れた空輸性および路上機動性などの機動展開力、敵装甲戦闘車両な

などを撃破可能な火力を有する機動戦闘車を開発する計画が立てられました。陸上自衛隊の戦闘部隊が装備し、普通科部隊に対する前進掩護および建物への突入支援などを担うことを想定されました。陸上自衛隊の当時の現有装備である74式戦車および89式装甲戦闘車は、被空輸性や路上機動性が不足するため、戦闘地域へ迅速に展開することが不可能でした。一方、87式偵察警戒車や軽装甲機動車などの装輪装甲車では、軽戦車などを撃破する火力や目標発見後速やかに射撃する能力が不足するため、普通科部隊への火力支援が困難でした。ほかの代替手段については、アメリカなどにおいて同様の戦闘車両を装備していましたが、いずれも要求性能を満たすものはありませんでした。また、将来装輪戦闘車両の研究成果を反映する可能性を考慮すると諸外国からの導入は非効率であることから、本装備の開発が決定されました。……

要約すると、空輸できて高速道路一般道路を走れて戦車並みの火力を保有する装輪戦闘車を開発した、ということですよ」

「なるほど……………」

「聞いてたんかい！」

おそらく半分も聞いていなかったと思っていた米内が思わず突っ込みを入れる。

「ゴホン。それで、この16式はB型と呼ばれる、初期16式の改良型です。主な変更点は――」

・エンジンを新型に換装。

・主砲を105mmライフル砲から120mm滑腔砲に変更。

・車体の大型化による装甲圧の増加。

「―になります」

「105mmでさえ強力なのに、さらに大口徑に換装するとは……………」

「滑腔砲というのは？」

「滑腔砲とは、砲身内にライフリングが無い砲のことを言います。ライフリングがある砲は滑腔砲に比べて、弾道の安定性が増加するというメリットがありますが、装弾筒付翼安定徹甲弾と呼ばれる、砲弾を運用するには不都合でした……………」

あく小俣

2曹、実物頼めるか？」

「了解です」

弾薬庫出入口を開き、タッチパネルを操作し、装弾筒付翼安定徹甲弾を取り出す。

「こちらになります」

「あれ？これ訓練仕様？」

本来の装弾筒付翼安定徹甲弾との違いに気づき質問する。

「いや、あなた技官でしょ？」

小俣2曹が突っ込みを入れる。

「あ、そっか…………… やっぱ内地だと限界があるか…………… まあ仕様はほぼ一  
緒だし大丈夫か…………… これを見て何か気付く事がありますか？」

2人はその砲弾を眺める。

「…………… 先端が槍のようになっている？」

「that's right. 今は覆われて見えませんが、この中にタングステン製の  
槍が入っています。それがあなた方の徹甲弾に当たります。この槍の速度  
は…………… 確か1, 615 m/secだっただけ…………… うん合ってる」

「1, 615 m/sec…………… もしかしたら我が国のラ・カサミの装甲すら  
貫けるのか？」

「理論上は可能でしょう。しかしこの砲は直射のみで曲射を想定していないため、射程  
が約3 kmと短いのです。それに、常識的に考えて戦艦と戦車が撃ち合うような状況は  
あり得ないでしょう」

「いずれ、脅威が水上艦だけではなく、陸までに増えるのか……………」  
「他は——」

米内が『他にあるか』と聞こうと口を開いた時、小俣がそれを遮る。

「まもなく後段演習に入ります。車両を転回させますので席に戻ってください」

「ありや、もうそんな時間か…………… 演習を見ながら解説でもさせてもらいましょ

う」

しばらくして後段演習が開始される。

「最初は水際防衛線を想定した訓練ですね」

すると、オートバイが猛スピードで侵入してくる。

それに続いて軽機動装甲車2台が侵入する。その後、12式改地对艦誘導弾と19式自走装輪155mm榴弾砲が侵入する。

「まあこれに関しては展開訓練の方が強いですね。こんなの日本じゃ撃てませんので」

国防軍となった現在でも、長射程兵器、実弾をフルに使用した訓練はアメリカの演習場で行っていた。

しかし転移によってそれも不可能となったため、ロデニウス連邦政府と協議し、クイラ州の砂漠地帯を借用し、大規模な演習場制作を決定している。

「陸軍も艦船に攻撃が可能なのか……………」

今まで艦船への攻撃は、同じ艦船でしか—この世界では『航空機では戦艦を沈められない』が常識—対応できないとされている。

しかしこの誘導弾を使えば、陸地に接近できずに艦船が沈められるだろう。

「戦術の幅が広がるな……………あの装輪車も同じ155mm榴弾砲なのか……………」

「19式に関しては、155mm榴弾砲をトラックに乗せたものと思ってください。そしてあの箱のような物を搭載しているのが、12式改対艦誘導弾と呼ばれる兵器です。射程は約300kmです」

「300km!?!」

さらつと言われた12式の射程距離に驚愕するマイラス。

対してラツサンは冷静そのものだった。

「300か……………」

しかしそのラツサンの冷静さを失わせる言葉が米内の口から出る。

「あの12式の最大の特徴は『地形追随機能』です」

「地形追随機能?」

「簡単に言えば、山の斜面や起伏に沿って、低空で飛行できるのです」

「なるほど。電探に捕捉されないようにするためですね」

「その通りです。陸地から発射して、可能な限り発見を遅らせて海上に突入します」

「艦砲の射程にすら入れず撃沈されると……………」

「しかし、あいつの出番は、最後の最後、水際防衛戦の時です」

そして12式が敵水上艦に攻撃を加え、敵艦船から発射された反撃のミサイルを03式改中距離地对空誘導弾が撃破したというシナリオが達成されたと解説される。



そして順次撤収を開始する。

今度は敵部隊が上陸したという設定で戦闘に入る。

最初に侵入したのは、16式を中核とする即応機動火力部隊が侵入する。

「最初は中距離多目的誘導弾による攻撃です」

茂みに紛れているトラックを見つけた。

「あれか……………」

「中距離多目的誘導弾とは、対舟艇、対戦車誘導弾システムです。誘導方式は、2種類の光波ホーミング誘導、及びセミアクティブ・レーザー・ホーミングの併用による第3世代方式で、照準は赤外線画像またはNEC製ミリ波レーダーで行ないます。1秒間隔の連続射撃で同時多目標への対処能力と撃ち放し能力を有しており、また、発射後のロックオンが可能です。市街戦や対ゲリラコマンド任務を考慮して、舟艇、装甲・非装甲、人員、構造物などに対して対処可能です」

「自己完結型ということか……………」

「その通りです」

マイラスの想像以上の理解力の高さに驚く米内。

パシューーー!!!

中多の発射と同時に16式が主砲を発射する。

もちろん、全て命中だ。

「次は普通科による携行対戦車火器による敵装甲戦力の撃破です」

「携行対戦車火器？」

「歩兵が持てるロケット砲と考えてください」

84とLAMが発射される。

「普通科の撤退支援に17式の12.7mm機関銃と、96式40mm自動てき銃による制圧射撃を行います」

バババババ!!!

17式による軽火器制圧を行なっているその間、普通科の隊員が17式の後部ドアから乗り込む。

全員が乗り込んだのを確認し、17式が撤収する。

「先程の攻撃で敵が侵攻を停止しました。そしてここにはいませんが海自旧自衛隊時代から所属している隊員は国防軍ではなく自衛隊と呼称する時がある。による艦砲、SSMによるミサイル攻撃。そして空自による空爆の統合火力による敵戦力の撃破を行ったという設定です。その後増強火力部隊による敵戦力の撃滅を狙います」

AH-64J2機が最初に侵入し30mmとヘルファイアを発射する。その間にCH-472機とUH-60J2機がヘリボーンを行うため侵入する。そして40式、1

0式がそれぞれ4両ずつ侵入し砲撃を行いながら接近する。

そしてお決まりの発煙筒を発射し、訓練は終了する。

「すごい……………」

日本軍の演習はマイラスが言った通り、『すごい』の一言に尽きる。圧倒的な火力投射量、展開スピード。既に分かっていたことであるが、視察団全員が軍事力の差を五感で感じ取った。

「如何でしたでしょうか？」

「……………」

「すごい、の一言に尽きます」

統括軍参謀が代表して答える。

「でしようね。では装備品の展示に移ります」

く以下省略く

装備品見学を終えた視察団は各自車両に分乗して移動していた。

「しかし、これにて日本軍の見学は終了ですか。もう少し色々見たかったですな」

「あ。忘れてた。そのことですが、使節団団長のアベル氏から滞在期間の延長が申請されました。よってあなた方は我々の調査を継続することができますよ」

米内が助手席から後ろに座っている視察団員に伝える。

「え？　じゃあ……………」

「はい。まだ私達国防軍のことを調べられますよ」

「おお！流石アベルだ！」

大はしやぎの視察団員に対して、マイラスとラツサンは静かであった。

「今度はどんなものを見せてくれるんだろうな？」

「さあな」

マイラスは窓の外の遠くにある富士山の影を光のない瞳で見つめていた。

マイラスはC―2改に搭乗した後、すぐに眠ってしまうのだった。

???

『う……………ん？』

マイラスが目を開けるとそこは大海原であった。

『ここは……………どこだ？』

辺りを見渡そうと後ろを見たら、そこには約50mもあるう艦橋があった。

『高い！50mはあるか？』

そして更に周囲を見渡すと、巨大な主砲と副砲が合わせて3基があった。

『でかい』

マイラスはそれに近づく。

『副砲は15cmくらいか……口径は50〜60か……そしてこつちか……』

マイラスは副砲よりも明らかに巨大な砲塔に近づく。

『口径はざつと40〜50か……大きさは……48cm位か？それが3連装とは……』

マイラスは改めて艦橋を見上げる。

高く聳え立つ艦橋はムーにある高層ビルに匹敵する大きさでありながらも、一種の感動を覚える。

『……それにしてもここはどこだ？』

マイラスが再びあたりを見回すと、舳先の近くに置かれたテーブルセットに座る人影を見つけた。

現状、人がそのテーブルセットに座っている人物しかいないのでマイラスは話しかけることにした。

『あの……すいません』

『……』

『すいません』

なんの反応もない。

『マイラス・ルクレールね?』

『はい。え?』

突然話始めた上、自分の名前を1発で当てたことに驚くマイラス。しかし彼方の水平線を眺めながら話しているため、どのような人物なのかは分からない。

『イテイリスの民がここに来るのは初めてかしらね……………』

『イテイリス?なんのことですか?それにここはどこですか?』

『ここは私の想イマジネーション像よ。そしてこの戦艦は、私の分霊とも呼べる、ある戦艦よ』

『戦艦……………』

『その戦艦の名前は、大日本帝国海軍戦艦『大和』よ……………そして私の名前は—』

「—らす。マイラス!」

「んん?」

マイラスはラツサンに揺すられて起こされた。

「もうすぐ着くぞ」

「あれ?.....」

「浮かない顔をしてけど、大丈夫か?」

「.....」

「体調に気をつけろよ」

「ああ」

それからマイラスは何も話さなかった。

視察団を乗せたC—2改は百里基地へと到着した。コスモシーガルへと乗り換える  
為だ。

速やかに乗り換えた後、シーガルは洋上へと飛ぶ。

「米内さん。今度は何を見せてくれるのかね?」

「今度は機動艦隊の各種訓練を見ていただきます」

「おお。あの時の空母が見れるのか」

日本に向かう際に乗船した、あの超巨大空母をじっくりと見れると知り、俄かにざわ  
つく。

しばらく飛行していると、米内が声を上げる。

「見えて来ました。左前方を見てください」

「おい、何が見える?」

右側に座っていた者が左側に座っていた者に様子を聞く。

「な!」

「嘘だろ!」

左側に座っていた者がざわつき出した。

「おい、何が見える?」

だが何も答えず、埒があかないため直接見ることにした。

その窓から見た光景は……………。

「浮かんでる!!」

「いや、空を飛んでいるのか?」

「米内さん。あれは一体……………」

すると、米内は笑みを浮かべながら答える。

「日本国防宇宙海軍、第5機動部隊旗艦、あかぎ型護衛宙母『すいかく』……………」

日本で最強の空母の最終艦です」

「最終艦……………」

視察団を乗せたシーガルは、大気圏内航行する『すいかく』へと着艦する。

「本当に飛んでいる……………」



艦が空を飛ぶということが信じられず、顔面蒼白になる視察団。視察団は艦橋へと案内される。

「こんにちは。当艦『ずいかく』の副長です」

ずいかく副長妖精が敬礼しながら挨拶する。

一通りの挨拶が終わった後、マイラスが一番最初に質問をする。

「すいません。この艦はどうやって飛んでいるのですか？」

誰もが一番聞きたいことを聞くマイラス。

「メインとなるのは次元波動エンジンの莫大なエネルギーを使用したエンジンを使います。そして空中を航行する際は慣性制御をすることにより艦を維持しています」

「か、慣性制御？」

慣性制御という聞き慣れない言葉を鸚鵡返しするマイラス。

「艦の中の重力を操作したり、艦の周囲の力場を変えたりすることです」

「……………つまり、その慣性制御というのは重力を操作できると？」

「簡単に言えばそうなります」

ざわめく視察団。

どうやって自然の一部である重力を操作できるのか。それが一番気になることではあったが、到底理解できない物だと判断し、マイラスはそれ以上追求しなかった。

「本日ここに来ていただいたのは、本艦の本来の力をお見せするためです」

（空母だけが空を飛ぶ？……………いや、それだけではないはず。護衛艦も浮かせる必要があるはず……………嫌な予感がする）

空母だけではなく、その護衛艦も随伴させる必要があると推測したラツサンは手を大きく上げる。

「なんででしょうか？」

「日本軍の艦艇は……………全て空を飛ぶのですか？」

しばらくの沈黙の後にでた答えは……………。

「全てではありませんが、戦闘艦は全て飛びます」

大は空母や戦艦、小は駆逐艦まで、全て空を飛ぶということに絶句する視察団。

「そ、速度は？」

嫌な予感を感じつつも質問をするムー共和国海軍将校。

「……………貴国の戦闘機より速い、そう思っていただけで結構です」

何人かが泡を吹いて倒れる。

ムーの戦闘機、つまりマリンよりも速いということなのだ。

「おまけに戦闘機との殴り合いは想定していても、空中にいる戦闘艦を攻撃することは想定していないぞ……………」

むしろそんなことを想定している変態がいてたまるか。

「まあ普通はそうです」

その後、『ずいかく』の詳しい説明を受けた後、実演を見せてもらった視察団。  
「あははは。まさかこれほどまでとは……………」

そう言いながら統括軍参謀が倒れる。

倒れた参謀を隊員妖精が担架に乗せて運ぶ。

最後まで立っていたのはマイラスとラッサンだった。

「……………」 戦い方が根本的に違うとは思ったが、戦う場所が違うね」

「だけど、これほどの艦を浮かばせる技術は魅力的じゃないか？」

「確かにそうだ。軍艦のデメリットである展開速度も補えるしな」

「ただ……………」

「ただ？」

「日本と我々の時代が違いすぎる」

「うん。それは仕方ない」

単純な計算でも150年近く離れているのである。これまで見てきた兵器だけでもその差は窺える。

「そして精神的にも違う」

これまで何人もの隊員と出会い、それを肌で感じ取っていた。

ムー共和国の軍人は、やはり列強という驕り、そして自国主義を取る軍人もいる。しかし日本軍は簡単に言うとは、己の立場を弁えていた。

マイラスが試しに政府のことを聞くと、『私は武官です。政治に関与してなりません。それは無関心ということではありません。逆に厳しい目で政府を見ています』と答えた。

そしてマイラスはそこにもう一つ質問をした。

『自国が一番だとは思わないのですか?』と。

そして隊員はそれに笑顔で答えた。

『自国が一番だと思っただら奢ってしまいます。そうなったら国として終わり、いや世界の終わりです』と。

「技術だけではなく、人としても差があったな……………」

その後、視察団は飛行甲板へと移動し、コスモシーガルへと分乗する。

マイラスがシーガルへと乗る前に『すいかく』の艦橋を見上げる。

「立派なアイランドだ……………」

視線を下に戻すと一人の人物が近づいてくる。

「ん?」

「どうやら女性のようだ。帽子を目深に被っているためどのような顔なのかは分からないが。」

「“灯台”、私も行きかけたわ」

それだけを言い残すと、その女性は艦橋に戻って行った。

「？」

困惑するマイラス。

「急いでください！予定時刻が迫ってますー！」

そう急かされマイラスはシーガルに乗る。

シーガルはカタパルトによって大空に打ち上げられる。

飛行するシーガルの中でマイラスは先程の言葉を思索していた。

（“灯台”とはどういうことだ？　これから行く先と何か関係があるのか？。それに今まで見てきた全ての艦艇の名前と艦長の名前が一緒ということが気になる。何か訳があるのだろうか……………）

「おい。何をずつと考えているんだ？」

ラツサンがマイラスの事を小突きながら聞く。

「いや……………　なんで艦の名前と艦長の名前が一緒なのかが気になつてな……………」

「言われてみればそうだな」

ラツサンが腕を組みながら答える。

「艦長の名前が艦艇の名前になるとか？」

「いや。この国の命名基準がわからないからなんとも言えないが……………それはないと思う」

「じゃあ一体なんなんだ？」

マイラスは外を見ようと窓に目を向けた時、差し込んできた夕日に目を眩ませる。

「うっ」

思わず手を翳したマイラス。

すると夕日の中に一本の線が見えた。

「線？」

「どうした？」

「いや。夕日の中に線が見えたような……………」

ラツサンが身を乗り出し夕日の中を見ようと目を細める。

「……………確かに何か見えるな。おい、あそこ」

「ん？」

ラツサンが指さした方向を見る。

黒い点が5つあった。

「鳥か？」

その影が徐々に大きくなり、やがてその正体が明らかになる。

「！ 戦闘機か!？」

その影の正体は、マイラスの言った通り戦闘機であった。

5機の戦闘機はコスモシーガルを中心に編隊を組む。

マイラスがその戦闘機をじっくりと観察していると、あることに気づく。

「……………窓が無い？」

そう。窓が無いのだ。

「じゃあ操縦者はどうやって……………」

ラツサンが機上整備員の横に座っている米内に近づく。

「すみません。ちよつと来ていただけませんか？」

米内は2つ返事で了承する。

「あの戦闘機は？」

「ああ。あれですか。あれは国連空軍所属の無人戦闘機ですね。CAPを終えて帰還するついでの護衛でしょう」

「む、無人戦闘機!？」

「はい。読んで字の如く、無人の戦闘機です」

「では、どうやって操縦を？」

米内が無人機に視線を向けた後、再びマイラス達に視線を戻す。

「そうですね……………あれは自立状態、つまり、*“機械が自分で考えて飛ぶ”*ということです」

「自分で考えて飛ぶ？」

「はい。少し語弊がありますが、そう考えてください」

無人戦闘機であれば、パイロットを育成するのに必要な、何年もかけて訓練を行う必要がない。

それに撃墜されても、その分のリソースが失われるだけで、貴重な人材を失うことはない。

「しかしどうやって自立飛行をさせるんだ？ 自身の安定性も考慮しなければならぬのに……………」

マイラスが自分だけの世界に入ったことを確認したラッサンは、大きくため息を付くと米内に質問をする。

「あの無人戦闘機。所属が国連軍だと言いましたが、これから向かう場所は<sup>国連</sup>その管理下なのですか？」



「その通りです。旧地球上、世界で一番高い建造物でした」

「はあ？ どの位の高さなんでしょうか？」

「今は延伸されましたが、大体10万kmでしょうか？ もっと長かったかな……」

新世界、日本政府非公式呼称『アマール』の惑星の大きさに比例して、静止軌道が上昇した為、延伸工事が行われた。」

「は？」

10万？10万？10万？10万？10万？10万？

「10万？」

何かの聞き間違いかと思い、もう一度聞くラツサン。

「10万kmです」

「嘘だろ？ そこまで行ったら宇宙だぞ……」

ラツサンは天井を見る。

「あの空の先、宇宙までたどり着いていると？」

「ええ。まあ、建設されたのはつい最近ですけどね。我が国と複数の国との国際プロジェクトで建設されました国連主導。参加国、『日本国』『アメリカ合衆国』『ロシア連邦』『中華人民共和国』『一グレートブリテン及び北アイルランド連合王国』『イギリス』『フランス共和国』『ドイツ連邦共和国』

「国際プロジェクト……………それだけ平和な世界だったのか……………」

「まあ語弊がありますが、一応平和でした」※ライバルだらけの平和な世界☆

（そして日本国はそのプロジェクトに入るだけの実力を保有している……………

旧世

界上の列強だったのか……………）

「見えてきました。あれが旧世界上に於ける、世界の希望とも言うべき建造物。〃灯台

〃です」

全員が窓の外を見る。

「あれが〃灯台〃……………」

太陽が水平線の彼方に沈み、当たりがダークブルーに包まれる中、その建造物はその

色に溶け込まず存在感を解き放っていた。

〃灯台〃

それは旧世界上の平和の象徴の為に建造された。

# 灯台

## 灯台

それは国連主導のもと、世界各地に作られた。

日本は伊豆諸島鳥島南西沖31kmにそれは建設された。

それは世界各地に10箇所作られた。

## “灯台”

正式名称 往復型軌道エレベーター

維持は担当エリア国に委任されるが、管理権は国連の新機関である『世界軌道エレベーター機構』が担当する。

そして軌道エレベーターは、分かりやすい標的<sup>テロ</sup>の為、国連軍が警備に当たっている。

その規模は、

国連陸軍 一個連隊

同 空軍 無人機飛行隊 五個中隊

同 海軍 無人戦闘艦 5隻

となっている。

この規模の警備が旧世界に存在したそれぞれの軌道エレベーターに配置されている。視察団を乗せたコスモシーガルが1000m級滑走路に着陸する。

マイラスがコスモシーガルから降りると、軌道エレベーターを見上げる。

「ここが灯台……………」

暗闇の中でも、それは存在感を解き放っていた。

赤、緑、白の航空障害灯が、チカツ！ チカツ！ と点滅していることも存在感を解き放っている理由であった。

「なんて高いんだ……………」

「首が痛くなる」

「では皆さん、ここから先はこちらのレジーナ・ソフィア中尉が案内します。自分は技術的なことにだけ説明をさせていただきます。では」

それまで米内の一歩後ろにいたソフィアが前にでて、敬礼をする。

「こんばんは。今回、軌道エレベーター案内を務めさせていただきます、レジーナ・ソフィア中尉です。よろしくお願い致します」

「よろしく願います」

統括軍参謀が代表して答える。

「では皆さん、こちらにお乗りください」

ストライカー装甲車に分乗する視察団。

「速いな……………」

車内にいても感じれるほどの加速を感じる。

しばらくして、視察団を乗せたストライカー装甲車は、軌道エレベーターの根元にあ  
る建物に到着する。

「ん？ 紋章？」

視察団が建物の壁に打たれたロゴを見つける。

「……………」

「皆さんこちらへ」

ソフィアの後ろについていく。

「視察団案内任務で入ります」

「了解です」

入り口の前に小銃を下げた警備していた守衛が敬礼をすると、入り口の横にある電子  
端末機にカードキーを差し込み、パスワードを打つ。

「びー！！」

という電子音と共に入り口のロックが解除される。

「宜しい」

「では皆さんお入り下さい」

統括軍参謀は移動中思索に耽っていた。

(随分と警備が厳しい……………道中に5個程カメラの様なものがあつた……………それほどこの建物とあの昇降機エレベーターが何か重要なのか?)

しばらく歩くと、大きな扉の前に着く。

「中にお入り下さい」

ソフィアが中に入るよう促す。

中に入ると、そこには大きなホールがあつた。

「おお。広いな……………」

子供のような感想を口に出す団員。

「自由にお座り下さい」

そう促され、各々が選んだ席に座る。

「では……………本日は軌道エレベーターの概要と、その目的についての話をさせていただきます。時間も既に夜となっていますので、説明のみとさせていただきます」

部屋の証明を落とすように指示するソフィア。

それと同時にプロジェクトアクターを操作し、映像を投影する。

「軌道エレベーター。それは旧世界では平和の象徴でした」

(え?)

突然、ソフィアが大陸共通語からムー語フランス語に切り替えた為、軽く驚く視察団。

「この建造計画は、向こうの暦で、西暦2029年に計画が開始されました。しかし計画は一筋縄ではいきませんでした」

「今では私が所属している国連軍前にも説明した通り、常設国連軍。各国からの拠出部隊。または、国連軍への志願者から成るが編成されるほどの関係になりましたが、当初、旧大国の軋轢は酷いものでした」

「しかし、その状況はある事件を境に、それはほぼ無くなりました」

「欧州同時多発テロの発生です」

欧州同時多発テロ

西暦2029年後期に欧州各地で発生したテロ。

国際テロ組織、『*International Revolution*』が、欧州主要国で爆発テロを起こし、ドイツの

シウトウツトガルトにあるアメリカ欧州軍司令部を電撃的に占領。そして欧州各地にある各国軍事基地を襲撃、装備品を鹵獲し、各国軍を攻撃した。

しかし問題は、これだけの規模なのに、どこの諜報機関も察知できなかったことにあ

る。

いや、I Rの存在、そして活動は監視していた。

だがそれでも察知できなかったのだ。

なぜ察知できなかったのかは、今でも謎に包まれている。

襲撃に晒された各国軍、米軍は各地で敗走を重ねた。

米軍は一時的に欧州から撤退、そして欧州各国政府は比較的被害の浅いイギリスへと政府機能を移転させる。

その後、米軍を中心として反抗作戦を実施。

この時点で、“テロに対する戦争”ではなく、“戦争”になっていた。

反抗作戦は順調に成功し、多大な被害を出しながらも“I R”支配地域を解放していった。

その後、欧州全土の開放に成功するが、ある地域にてあるものが発見されるが、それは後に話す。

そして、国際司法裁判所が初の強制逮捕命令を発出、“I R”の本拠地があるアフガニスタンを多国籍軍NATO中心が攻撃した。

しかし、リーダーであるハッサンは自殺、残りの幹部も全て取り逃すという事態が発生する。



幹部はロシアを経由して国外へと逃亡していたのだ。このことも常設国連軍創設の一因になる

これが災厄の一步手前までの原因になった。

残された幹部は2つに分かれた。

一つはアメリカ軍戦略軍のコンピュータに侵入し、その照準をホワイト・ハウスへと向けた。

幸いにも、一人の命と引き換えにその発射は阻止された。

そしてもう一つは日本に来ていた。

上記で話した、あるものを奪取に来たのだ。

その名は『Lーウイルス』。

死者を生者へと変質させるウイルスであった。

これが日本にある理由。それはNATOであった。

ウイルス研究を当時の日本に押し付けたのだ。

幸い、米特殊作戦群隷下の部隊、『V I O S』<sup>バイオス</sup>と日本国陸上自衛隊特殊作戦群、日本警

察の奮闘により、『Lーウイルス』を奪還。幹部は全て射殺という結果で幕を閉じた。

しかし、その後も“IR”残党によるテロが世界各地で続いた。

「当時の国連事務総長のマレリア・ライアは舵取りに悩んだと伝えられています」

国連は対応に迫られていた。

I Rを完全に潰すには世界各国が連携して、世界各国に潜むI R残党を特定、殲滅しなければならなかった。

だが、そのために多国籍軍を結成しても、どこかしらの国が反対することは明白であつた。

「そこに現在の内閣総理大臣、佐山が首相に指名されたことにより風向きが変わります」とんどもを費やすという事態が発生しました。そこで苦渋の決断を致しました。これ以降の話のカットさせて頂きます。今回のこの行動により、読者の皆様を裏切るようなことをしてしまい、申し訳ございませんでした。

軌道エレベーターの概要、国連軍の設立経緯を聞いた視察団に何回目か分からない暗い空気が漂っていた。

「今まで簡単説明を聞いて、ある程度理解していたつもりだったが……………」

「その理解でも足りない程の出来事があつたな」

「ああ」

「それに我が国の故郷、地球があればどの経験をしていようとは……………」

ソフィアはここでハツとする。

そう。目の前のいるのは混血が進んだとは言え、かつて地球上での大国の子孫だったのだ。

そして転移によりこの世界に来てしまったが、もとの故郷は地球。

少しは地球のことが気になるようだ。

「現在、日本に駐在する国連軍は旧在日米軍がそのまま国連軍にスライドし、そこに国連からの人材派遣も複数回ありましたので、人数だけで言えば大体6万5千人もの人員がいますね」

「6、万?」

「その規模が日本に?」

もはや占領軍とも言える規模であった。

「我が国は米国のアジア戦略、そして国連軍が編成された現在でも我が国の戦略的重要性はアジア最高峰です」

前にも話した通り、国連軍が日本に駐屯している現在でもその戦略価値は失われてはいない。

ここでマイラスが手を挙げる。

「どうぞで」

「その………外国軍——と言っても多国籍軍ですが、なぜ駐屯を許しているの

すか？ 戦略的価値だけではないような気がします……」

「鋭いですね。国連軍が駐屯する理由は、平和のためです」

その平和のための行動が微妙に矛盾していることに気づき、視察団の一部が眉を寄せ  
る。

「これを聞いただけでは矛盾しているように感じますよね。では、これを見てください」

ソフィアが合成樹脂製のボードを操作し、新たな画像を表示させる。

「これは……… なんのグラフだ？」

「これは世界で起きたテロ事件の発生件数です」

「ハ、こんなに!？」

グラフはあるところで爆発的に増えていた。

IRによるテロ事件が終結した一年後であった。

「国連の決断した平和維持、それは武装平和でした」

国連、ひいては佐山の最終理想、世界規模共同体の設立―地球連邦構想―に行き着く  
ためには紛いもの、それが白地に絵を描いたものだとしても平和を維持する必要がある  
た。

「日本に来る際、艦で紹介映像を見たと同っています。人類史上最大の愚行の一つであ  
る、世界大戦を2度も起こし、そして地球を何回も滅ぼせるほどの核兵器が製造されて

いたのです。だからこそ人類は悟りました。『次に大戦が起これば間違はなく人類は滅ぶ』と。そして国連の権限拡大により、その平和は更に盤石になりました」

「そ、その何回も滅ぼせるほどの核兵器を日本と国連は保有しているのですか？」

なぜこんな簡単な疑問が思い浮かばなかったんだと内心そう思いながら、統括軍参謀が聞く。

「いえ。我が国連軍は保有していません。そして日本は………米内さん、説明をお願いします」

「はい。我が国は非核三原則というのがあります」

「非核三原則？」

非核三原則

国民の誰もが一回は絶対聞いたであろう単語。

非核三原則とは、『核兵器をもたない、つくらない、もちこまない』という三つの原則からなる、日本の国是。当時の首相、佐藤栄作が打ち出したものである。

「……………なるほど。法制化されていない、言わば慣習法みたいなものですか」

「簡単に言うとうそになります」

「しかし、その核兵器の原理——を応用した、平和利用は我が国に存在します」

謎の間に視察団が頭に疑問を浮かべた。

「その原理……… というのは？」

「申し訳ありません。話すことができません」

核分裂のことを米内が言わなかった理由は、『ムーが核武装する可能性』に思い当たったからである。

WW1レベルのイギリスと同等の技術を有するムー。この国の技術が発展すれば、約38年で原爆を開発することになる。

原爆と核兵器、同じように見えて両者は全く違う。

しかし、原爆の開発に成功した場合、核兵器開発までの時間はそうそう掛からない。ただし原爆も核兵器も、その開発と維持だけでムーの国家予算の数倍掛かる。これを大量配備して<sup>主に常任理事国</sup>る国は頭おかしい。

「はあ………」

これ以上聞くと、自分の身を滅ぼすことになるかと直感した団員はそこで詮索をやめにする。

「何度言ったかは覚えてませんが、地球は私たちの予想を上回る歴史を辿ってきたのですね………」

「軌道エレベーター、そして国連軍の説明が終了したので、軌道エレベーター警備部隊の見学に行きましょう」

視察団は建物の外に出て、ストライカー装甲車に乗り、移動する。

「あの無人機を見れるのか……………」

マイラスはこれから見れるであろう無人機戦闘機を楽しみにしていた。視察団を乗せたストライカーは滑走路脇にあるエプロンへと到着する。

「まもなく無人機が来ます。しばらくお待ちください」

しばらくすると、滑走路にアプローチする機体を発見した。

「お？ あれか……………」

無人機は順番に着陸し、視察団から数十m離れた場所に駐機する。

ソフィアがその無人機の元へと歩き出したので、それについて行く。

「はく。なんかのつぺりとしてるな。しかも小さい」

「こちらは国連軍が世界で初めて採用した無人戦闘機です。この戦闘機の最大の特徴はこのサイズです」

全長 8.25 m

全幅 7.22 m

「あの……………戦闘機なのに武装がないようですが……………」

——ゴオオオオオ——!!!

戦闘機の轟音にマイラスの声が掻き消されしまう。

「…………… すいません。もう一度お願いします」

「戦闘機なのに武装がないようですが!!」

「ああ。すいません。ウエポンベイを開けてもらえますか?」

整備員が機体にコードを繋げると、ボタンを操作し、ウエポンベイを開ける。

「中に収納されてる?」

「はい。そうです」

「なぜ中に収納する必要が? 空気抵抗の関係ですか?」

「まあ空気抵抗はこの機体に於いて2番目に重要ですが、それよりも重要なことがあります」

「それよりも重要なこと?」

「レーダーの話は聞きましたね?」

「はい。電波の跳ね返りを画面に投影すると聞きました」

「基礎的なことは聞いてるか…………… 電波の跳ね返りを受信しますが、その電波の

反射を抑える技術、ステルス技術というのがあります」

「「え?」」

ムーの技術者陣が声を上げる。

レーダーを導入しようと考えていたのに、その対抗策が既に日本にあったことが分



かったからだ。

「まあこのステルス技術は、平時に於いては邪魔な機能なので……………ここを見てください」

ソフィアが翼と胴体下部の下を指さす。

翼の下には長方形の何かが、胴体下部には丸っこい何かが出っ張っていた。

「胴体の下にあるのは、胴体一体型の増槽タンクです。機体の下に付いているのはハードポイントといいます」

「……………表面積を増やす？」

マイラスが考えたことを口に出す。

「え？……………よく分かりましたね。その通りです。レーダー反射断面積、略称RCSといいますが、意図的に面積を少なくしたり、増やしたりすることで、RCSを調整します。この無人機がレーダーに映った場合、鳥にしか見えないでしょう」

150年という差が、改めて絶望的であると分かり、視察団全員が目眩を起こす。

「もうすつかり日が暮れたな……………」

（国連軍……………言うなら、地球軍。各国の協力なくてはできない代物だな……………）

ラッサンは軌道エレベーターを見上げる。

（このエレベーターもだ。いずれこの世界は魔帝の復活で団結せざるを得なくなる。それまでに日本の胴体までは成長したい）

ムーにおいて、魔法帝国の存在は疑問視されているが、ミシリアルにて時折報じられる発掘品のその技術力の高さから、ラッサンはその存在を信じていた。

「？」

ソフィアが米内に何か耳打ちをしている。

しばらく何かを話した後、米内が2回大きく頷く。

「では……………皆さん。あの上へ行きましょうか」

「あの上?……………このエレベーターの頂上に？」

「はい。新世界に転移してから、初めて外部の人間が軌道エレベーターに立ち入ります」  
ちなみに視察団がいる場所は軌道エレベーターの基幹を支える人工島である。

「私達が初……………」

視察団は再び車に乗り、地下トンネルを通りエレベーターの昇降場所へと到着し、エレベーターに乗る。

「これにしっかりと掴まってください」

エレベーター整備員が視察団一人一人に説明しながらシートロックを下げる。

当初は疑問に思っていた視察団だったが、『これを付けないと重力に潰されますよ』

と、笑顔で言われて疑問は消えていた。

「上に着くまでどのくらいですか？」

マイラスがEEに聞く。

「旧世界だと15分程度でしたが、新世界だと……………大体25分程度ですかね」

「え？ 10分も違う？」

「ええ。新世界の静止軌道の高さが倍近くになったため、延伸工事が施工されました。それに比例して時間も長くなっています」

「……………」

しばらくしてエレベーターの出発準備が整ったことをEEが伝える。

「では皆さん。先程説明した通りにお願ひします」

「25分か。軽く休めるな」

マイラスは姿勢を楽にし、これから起こることを予想していた。

(間違いなく軌道エレベーターの頂上には何かがある……………これだけの技術を  
使用した建造物だ。予想を遥かに超えるものに違いない)

視察団を乗せたエレベーターは日本エリア宇宙基地に到着する。

「着きました。皆さんこの中にお入りください」

少し狭いが部屋に全員が入る。

プシューーーー!!!!

空気が抜けたような音が聞こえた後、扉が開く。

「これからご覧頂くものは我が国のものだけではなく、旧世界にとつても最重要機密です。ここで見聞きしたことを話すのは自由ですが、紙に書き起こす、写真を撮るなど、記録を残すことは許されません。どうか心に留めておいてください」

ソフィアが扉の前に立つとそう言った。

視察団全員が頷く。

「ではお入りください」

後にマイラスは、日本が旧世界に帰還した後、報告書にこう記した。

『その扉を潜ると、そこは摩天楼であった』  
と。

まず最初に目に入ったのは、真正面にある窓の外の景色であった。

「これが………宇宙………」

統括軍参謀が呟く。

「地球は青かったのか………」

どこその宇宙飛行士とほぼ同じ感想を言う統括軍参謀。

ソフィアが移動を開始したのでついでに行く。

オートウオーキングに乗る。

「そういえばなんで重力があるんだ？」

「言われてみればだな………やっぱり、あの空中空母の時に言っていた慣性制

御って奴じゃないか？」

「重力を制御って、改めて考えるとすごいな。そしてこの軌道エレベーターの利用価値

は無限だな」

そう。この軌道エレベーターの利用価値は無限に等しい。

軍事利用然り、平和利用然り。

しばらくすると、再び扉の前に着く。

「お久しぶりです。ソフィアさん」

「久しぶりね」

守衛が端末にカードをかざすと扉が開く。

「どうぞお入りください」

「お疲れ様」

中に入ると、その部屋は青白い光に包まれていた。

「ここはこの軌道エレベーターの頂上に位置する基地の司令室です。少しお待ちください」

「い」

ソフィアが司令室の真ん中辺りにいる男に声をかける。

男は視察団を一瞥するとこちらに近づいてくる。

「どうも視察団の皆様。私はこの基地の司令を務めています、みづくに光圀と言います」

光圀の所属は国防宇宙海軍の『宇宙作戦隊』と呼ばれる、主に宇宙基地のような宇宙関連施設の管理を担当する隊である。

そしてもう一つの所属先がある。

『国連宇宙軍』であった。

国連宇宙軍の肩書は、『軌道エレベーター日本エリア宇宙基地司令』。

ちなみに、内神田空間幕僚長も、国連宇宙軍の副司令を兼任していた。

「この役割は、宇宙空間に確認されている物体の監視、そして人工衛星の直接管理、そして航宙管制を担っています」

それからしばらく、光圀は宇宙基地の役割を説明する。

「この司令室、様々な人種がいるな」

マイラスとラツサンの小声が聞こえてたらしく、光圀が答える。

「我々は国連軍の所属となっておりますが、元はと言えば各国からの拠出部隊で国連軍は成り立っています。世界192カ国の人材が国連にはいました」

統括軍参謀は誰にも聞こえないほど小さく溜息を吐く。

（仮に国連とやらの宣戦布告した場合、実質的に日本がいた世界を敵に回すことになるのか……………）  
そして日本だけに宣戦布告した場合でも、国連が味方した場合も一緒か……………）

光圀が色々説明していたが、その声は視察団の耳には届いていなかった。

「—では皆さん。当宇宙基地の最大の目玉を見に行ってもらいます。ソフィア中尉、頼む」

「了解。行きましょう」

「え？ はい」

ようやく現実に戻った視察団。

「当基地は10箇所ある軌道エレベーターの中で、本格的な宇宙基地としての機能を備えた港です。なぜ10箇所もあるのに当基地だけが宇宙基地としての機能を備えているかというところ……」

段差気をつけてください」

「おっと！」

ソフィアの後ろを歩いてきた統括軍参謀がつまづく。

「なぜここだけ段差が……」

「実は延伸工事の際、そこが切られたのです」

「切ってこここの高さまで？」

「はい。その通りです」

「無重力というのもあるだろうが、この空間での工事は困難な筈。ましてや延伸工事を切って伸ばすなどと突拍子もない工法……」

話しながら歩く視察団をよそに、マイラスは窓の外を見る。

宇宙基地の通路が複雑に絡まり合い、迷路のような構造になっていた。

そしてその隙間から赤い何かが見えた。



気になるマイラスであったが、迷子になったら迷惑を掛けると判断し、視察団を足速に追いかける。

「なにやつてたんだ？」

「ちよつと景色をな……………」

「ふ〜ん」

ラッサンが聞いてくるが、そつなく躲す。

「今まで当基地を見ていただきましたが、ここから先は完全な機密条項となります。重ねて申し上げますが、ここで見聞きしたものは―」

「絶対に話すな書くな、ですね」

「お願いします」

ソフィアはカスタマーIDを胸ポケットから取り出し、端末に翳す。

「ピーー！　という電子音とともに扉が開く。」

ちなみに普段は、関係者が近づくと自動認証システムが働き、IDを使わなくても入れる。

「うん？」

扉を潜ると、再び通路であった。

「まだ歩くのか……………」

がっかりした気持ちを隠しもせず話す統括軍参謀。

「はは……でも30秒も歩かずに着きます。もう少しだけ頑張ってください」

「はい……」

実際には10秒歩いたところに斜め上に上がる通路があった。

「ここから先は宇宙空間となります。下手に動いたら無限の大宇宙を彷徨う羽目になりますので気をつけてください」

さらつと恐ろしいことを言うソフィア。

作業員の助けを借りて宇宙服を着る視察団。

「開けます」

部屋から空気が抜かれる。

マイラスは人生初となる——こんな体験、二度とできないだろうが——宇宙へと来ていた。

最も、慣性制御というのが働いているのか、重力をしっかりと感じていた。

埠頭のようなものを歩いて行く。

「っ!?!」

マイラスは思わず目を疑った。

「せん……… かん……… なのか?」

(推奨BGM 夕日に眠るヤマト)

「ここからは私が。これは日本国が設計開発した史上初の宇宙艦艇、その名は『やまと』です」

『『ヤマト』?』

「その通りです。現在は国連宇宙軍と日本国防宇宙軍の両方の管轄に置かれている、ある意味奇妙な艦ですがね……………」

「宇宙の戦艦…………… そんなことが……………」

やまとが惑星の向こうに沈みかけてる太陽の光を浴びる。

『やまと』艦尾にある特徴的なノズルが目に入る。

「これもジェットエンジンで? いや、真空であるはずの宇宙ではジェットエンジンを使えない…………… まさか、これも波動エンジン?」

「それにでかい主砲だ。41cmはあるんじゃないか?」

「いや。41cmどころじゃない…………… 最低でも46cmはある。」

「大量の対空機銃があるな」

「なんていう艦だ。こんな…………… こんな非現実的なことが……………」

マイラスは激しい心の動揺に襲われていた。

—もし、もし日本を敵に回したら。

マイラスはムーがたった一隻の宇宙戦艦になす術なくやられて行く未来を予想していた。

「では皆さん。こちらの艦に乗りましょう」

無言で付いて行く視察団。

「ふ〜」

ヘルメットを外し、息を吐くソフィア。

ソフィアはロシア出身だ。

恐らくそれだけで察した人もいるだろう。

—綺麗だ。

マイラスがじっと見ていると、少しだけキツく睨まれた。

恋愛経験が無に等しいマイラスは少しだけビビる。

「お疲れ様です。『やまと』舷門当直員です。皆様のエスコートを務めさせていただきます」

統括軍参謀が代表して握手をし、挨拶をする。

舷門当直員の案内で艦内を歩く。

「オートウォークがあるのか……………」

「はい。本艦は最大全長333mある上に、艦内構造が複雑になっています。あかぎ型ほどではないにせよ、迷ったら終わりだと思ってください。では歩きながら………。本艦の種別は護衛戦艦、BBY-01となっています。BB、バトルシップ<sup>艦</sup>。Yはやまとの頭文字から取られています。国防海軍のながと型護衛戦艦はBBNとして表されます」

原子力動力船と区別するため原子力船の表記は日本独自の表記が取られている。

例 CVn など。事実上形骸化している。

「本艦に搭載されている武装で、最大の特徴はなんと言ってもあの目立つ主砲でしょう。本艦の主砲口径は54口径48cm三連装主砲が3基。副砲として62口径127cm三連装砲が2基搭載されています」

「対空火器としてCIWSが40基、近接防空ミサイル<sup>S P a c e R A M</sup>8基、VLSが96セル、煙突型ミサイル発射システム8基、その他魚雷発射管を艦首と艦尾にそれぞれ6門ずつ備えています」

「そして本艦の主機が波動エンジンと呼称される、BW-DWE-2030です。そして補機にアメリカ製の核融合エンジンをライセンス生産したものを2基備えられています」

「ながと型の主砲が40.6cm砲なのと比べると、その差がお分かりになるでしょう」

「40.6cm砲? 41cmの筈では?」

マイラスはながとで見たスペック表を思い出しながら聞く。

「41cmは便宜上そう付けられているだけです。ながと型本来の主砲口径は50口径16インチ砲となっています」

「16インチ?」

「まあ……………色々な事情がありましたね」

「現在本格的な宇宙艦艇は本艦を含めて10隻あります」

「10隻? 少な—少ないが質が桁違いか……………」

「桁違いというレベルではありませんがね……………あれ?」

舷門当直員が視察団の後ろにいる何かに驚いている。

マイラスが後ろを見ると、身長180cmはある男がいた。

「うわっ!」

「驚かせて申し訳ありません。自分は宇宙戦艦やまと艦長の、きさらずりよう木更津遼と申します。敏

迎しますよ、皆さん」

差し出された手をマイラスは握り返す。

無骨な手であったが、人間の温かみは感じた。

「当直員、私に構わず続けてくれ」

「は。先程もご説明した通り、当艦の所属は国連宇宙軍と国防宇宙軍の両方の管轄に置かれています」

「それだと指揮権の混乱が起こるのでは？」

「仰る通りです。ですが指揮優先権は我が国防軍にあります。地球の有事の際は国連宇宙軍に優先権が移ります。まあその境界線が未だに曖昧なので、御指摘の通り、指揮権の混乱が起こるでしょうね」

その時はその時と、国連宇宙軍も国防宇宙軍も割り切<sup>割り切れてない</sup>つてる。

「しかし、他の艦も気になる……………」

「あ、はい。今一隻が寄港していますので後ほどご案内します」

「他の艦はどこに？」

「あ……………艦長」

舷門当直員が艦長に振る。

「現在艦隊はある任務に就いています。ただ詳しいことは言えません」  
「分かりました」

波動砲艦隊は現在、艦連動望遠鏡を行い、周辺惑星の偵察を行なっている。  
後々、驚愕の事実が判明するがそれは後の話である。

(これだけの事業が成せる地球……………昔、我が祖国がいたという地球。その国家

である彼らと会えたのは幸運なのだろうか……（  
統括軍参謀が帰国したら日本との友好関係構築を強く進言しようと決意した。  
太陽が沈む……



# 世界の鼓動

## 第八帝国

やまとの詳細な説明、見学を終えた視察団はドレッドノート級5番艦、『広東カントン』に来ていた。

ドレッドノート 恐れを知らないを意味する言葉。

D級は日本とイギリスが共同建造した日本以外で初の波動エンジン搭載艦として就役している。

ドレッドノート

全長260 m

全幅62.3 m

全高99.0 m

武装に、

40.6 cm三連装砲三基

多目的VLS 64セル

魚雷発射管 6門

S—RAM 6基

多連装ミサイル発射機 6基

このドレッドノートエンジンのエンジンなどに関しては日本製、船体はイギリス製となっているが、武装に関しては各国との共同開発であった。

40・6cm砲 日本担当

多目的VLS 米伊担当

魚雷発射管 英国担当

S—RAM 独仏担当

多連装ミサイル発射機 中露担当

という具合に分けられていた。

そして中進国でドレッドノートに付けられた渾名は……『リツチな戦艦』と付けられた。その運用コスト、その他諸々を含めると、中進国の国家予算レベルのコストとなっている。

いくら全てが共通化されコスト低下に繋がってるとはいえ、先進国の中でも先進国でしか運用できないものとなっている。

だがドレッドノート級を導入すると、国連宇宙軍から運用コストの補助金が出される。その訳は、他国で建造された波動エンジン搭載艦の詳細な運用情報を手に入れるた

めであった。

国連宇宙軍は所謂、沿岸海軍となっている。しかも太陽系より先に出たのは—有人限定—航海試験などで両手で足りるほどの数しか行われなかった。

そして国連宇宙軍の当座の目標は、『天の川銀河を出ること』であった。

数百年レベルの計画と予想されていたが、人類の更なる繁栄のために国連は努力を惜しむつもりはなかった。

視察団は『広東』に乗る。

「ようこそ『広東』へ。私は『広東』艦長の思スーキュアン?です」

「ムー共和国視察団のムー統括軍参謀です」

「はい。話は伺っております。立ちながら話すもなんですからね。こちらへどうぞ」

思?は歩きながら『広東』について話す。

「本艦は中華人民共和国として初の戦艦、そして初の波動エンジン搭載艦として就役しました」

中国がまともな海軍力を保有し始めたのは、20世紀末からである。

そして空母も2000年代に就役した『遼寧』から大型艦の保有がスタートしている。

そして戦艦に関しては『広東』が初となる。

「2030年代、我が中国は厳しい道歩んできました」

“世界の工場”から “世界の市場”へと変貌した中国の発展は目まぐるしいものであった。

しかしある事故がその発展をとめることになる。

台湾海峡地震による原子力発電所の水蒸気爆発であった。

これにより半径50 kmの範囲が帰還困難区域となり、その影響は中国の主要経済地区だけではなく、周辺諸国にも影響を及ぼした。

そして事故一年後、IAEAはこの事故をレベル7とする声明を発表する。

チェルノブイリ、福島に続き、寧徳がリスト入りしたのだった。

「地震を発端とする原子力事故、経済の低迷、その影響は果てしなく重いものでした。しかし世界各国からの支援で祖国は元の水準になんとか戻りました。そしてその復興の証としてできたのがこの “広東”です」

「日本もそうでしたが、中華人民共和国も壮絶な歴史だったのですね」

「ええ。お入りください」

視察団は例の如く会議室へと入る。

そして説明される。

そして何人かが気絶する。

そして絶望する。

そして説明を聞き終え戻る。

そして感想を話し合う。

「国際共同開発というのが信じられませんか」

「ですが他国で生産された部品を使用できるといのはかなりのメリットです」

「共通化されていけば、戦場で規格が合わないということもない……………」

「ただ、我々の工業レベルが日本の足元にも及ばないということを除けば、ですが」

そう。共通化するにしても工作誤差精度が規定以内ということが求められる。

ムーは航空機技術がある程度発展しているため、平均と比べるとある程度高い水準にあるが、日本の足元にも及ばない。

「国連軍。今まで聞いたこともない軍種です。世界各国の部隊からなる多国籍軍だというのが印象に残っています」

「日本から学ぶべきことは沢山ある。後は我々がそれをどう活用するかです」

視察団はエレベーターに乗り地上に戻った後国連空軍のC-17に乗り、本土へと戻る。

水平線から太陽に日差しがでる。

（あの “やまと” という艦。夢に出てきた巨大戦艦に若干だが似ていたな……………）

マイラスは夢で見た戦艦のシルエットを“やまと”に重ねる。

(あの戦艦を先進的なフォルムにしたものが“やまと”なのか?)

「どうしたマイラス?」

険しい顔をしているぞとラツサンに言われ思索をやめる。

「……………日本国。世界の希望の国家」

「急にどうした?」

「いやな……………なんとなくその言葉が浮かび上がったんだ」

「そうか」

C-117は横田基地に着陸、視察団は東京の宿泊施設に戻り、そこで日本文化などを調査していた文官組と合流、意見を交換した。

その後数週間以上に渡り、視察団は日本の更なる詳しい調査を実施、その後日本国艦隊に搭乗し、ムー本国へと帰国。

ムー共和国政府は約1ヶ月後、日本国との国交締結、通商条約を締結、本格的な交流が始まった。

時は進み中央暦1637年4月21日

ここグラ・バルカス帝国の帝都ラグナは薄暗い天気であった。否、工場から吐き出さ

れる排気ガスなどが光学スモッグなどの公害が多重発生していた。

しかしグラ・バルカス帝国臣民はこれを科学の結晶の賜物であると誇りに思っている。これに適應できないもの公害被害者は非国民であるという風潮が生まれていた。

グラ・バルカス帝国 帝都ラグナ郊外 とある料亭

グラ・バルカス帝国帝都ラグナより少し離れた場所にその料亭はあった。

料亭の大部屋一つを貸し切り、宴会を行っている集団がいた。

「昇進おめでとうございます。長官」

そう言ったのはグラ・バルカス帝国海軍『グレード・アトラスター』艦長のラクスタルであった。

「ああ、ありがとうな」

それに返事をしたのはグラ・バルカス帝国海軍東方艦隊司令官カイザルであった。

彼は東方艦隊の長の為中将という階級を与えられていたが、既にその地位に付いてから5年近くも経過したこともあり、今回見事に大将へと昇進したのだ。

それを祝う為、各艦隊の司令や艦長が集まり祝宴会を開いていた。

（しかしなぜ昇進祝いなのに費用が自分持ちなんだ？）

そう。

昇進祝いなのに費用持ちがカイザルなのだった。

お陰で周りからは、『昇進を祝ってもらいたい自尊心の塊』と言われてしまっている。「しかし長官。まさかこの会の費用を全部払うとは……………」このハルゼー、感服の至です」

そう言ったのは東方艦隊所属、第八八艦隊司令『マーレイ・ハルゼー』であった。

ハルゼーは今回の昇進に際し、『いや〜。遂に元帥の一步手前まで詰めましたな。更に昇進するためにここは一つ〜』などと、カイザルはうまくハルゼーに乗せられてしまいい、全ての支払いをカイザルが受け持つことになってしまったのだ。

「ハルゼー。恨むぞ」

「何のことでしようか？」

—しらを切りやがって。

内心カイザルはそう思ったものの、30年近くの付き合いということもあり強く言えない。グラ・バルカス帝国海軍士官学校の同期

(あの策士やろうめ……………)

そんなカイザルを他所に、宴会参加者は賑やかに話を交わしていた。

「そういえば閣下。先の御前会議で融和を奏上したとか……………」

ラクスタルがふと思いついたように話す。

カイザルの答えを聞くために周りが話を止める。



「ああ。だが他勢に無勢だったよ。首相を中心に陸軍が反対している。なのに融和意見は俺とフラッツ海軍大臣と他少々だ」

カイザルは先日の御前会議にて新世界に於いての帝国の行動指針の意見を現場武官代表として招致、参加していた。

カイザルはそこで、『基本方針は融和を追求すべし』と奏上、一部もそれに同調していたが、首相、陸軍が猛反対。帝国の方針は正式決定したわけではないが、『侵略路線』がほぼ決定してしまったのだ。

「陛下は？」

「何もだ……………陛下はこの国と国民の安寧を願っている。それは確かだ。だが、陛下はご自身の影響力をしっかりと理解している。だからこそ直接の発言、政治への大幅な介入は避けてられているというのに……………」

カイザルは拳を握りしめる。

「やはり、最後の手段は——」

「—よせ！ SSがどこからか聞いてるかもしれない、この場では話すな」

「も、申し訳ありません」

一人の艦長がラクスタルによって遮られる。

「気をつけたまえ。だが我々は我々にできる、最善を尽くそう」



ギリギリの所で襲撃者の攻撃を回避するが無事とはいかなかった。  
「くっ!!」

あまりの激痛に顔を顰しかめる。

その元を見ると、左手の人差し指中指が切れていた。

カイザルは襲撃者を見る。刃渡り30cmあるう刃物であった。

「覚悟オオオ!!!」

再び攻撃を仕掛けてくる。

(まずいー)

そう思った瞬間、カイザルと襲撃者の間に誰かが割って入る。

その人物は突き出してきた刃物を持っている腕を掴みそのまま投げ飛ばす。日本  
という合気道に遠くて近いものだった。

「ぐわっ!!」

襲撃者は見事に地面に叩きつけられる。

襲撃者はその人物を一瞥すると住宅街に逃げていく。

「大丈夫ですか、閣下?」

「あ、ああ。それより君は……………」

「自分は『グレード・アトラスター』副長のレイア・レントです」

「！ 副長か。すまん、助かった。だがどうして……………」

カイザルは差し出された手を右手で掴む。

「艦長から閣下の事を守ってくれと……………部下を呼んでくれていたらしいのですが、間に合いそうになかったので急いで割り込みました」

「そうか。君は陸戦隊出身か」

『グレード・アトラスター』の副長であるレイア・レントは海軍陸戦隊から戦艦の副長に転属するという異例中の異例であった。

「！ 閣下、指が……………」

「なんのこれしき、この程度ならかすり傷だよ」

「長官！」

「閣下！ ご無事でしたか!？」

「ラクスタル……………」

相当急いで駆け付けたのか、肩で息をするラクスタル。

「……………一足遅かったですか。申し訳ありません、長官」

「いや。命が助かっただけでも大儲けだ」

「しかし、奴はなぜ閣下を？」

副長の問いにカイザルは静かに答える。

「分からん」

「ですが状況から考えて親衛隊か陸軍の雇われ者である可能性は高いです」

レントは息を大きく吐きながら腕を組む。

「融和派をなんらかの形で排除してくるとは薄々思っていました、まさか実力で排除しようとは……………」

「―痛ッ!」

「我慢してくださいよ。かすり傷なんでしよう?」

カイザルは止血帯を強く結ばれたことで声を上げてしまう。

「はく。君たちに虚勢を張るべきではないな……………」

「はい、終わりました。ですがあくまで応急処置です、無理な動きは不可能です」

―ブロロロロ

カイザルらの真横に車が止められる。

「カイザル! 無事だったか!」

車の運転席からハルゼーが降りてくる。

「……………」 指が! すぐに連れて行く、レイア、ラクスタル、一緒に乗れ! 他は

後で話す! 今日帰れ!

ラクスタルとレイアは指示通りカイザルを後部座席に乗せてから乗る。

他は車が見えなくなるまで見送った。

「大丈夫かしら……………」

グラ・バルカス帝国海軍唯一の女性司令である、ミシエル・ハワードがカイザルの身案を案じるが、カイザルとの付き合いが長い他の司令が大丈夫だと言う。

「あの人は運命戦争の時、装甲艦『バゼルギウス』に搭乗し生還した人だ。簡単にくたばらんよ」

「そうですか……………」

この襲撃で、カイザルは指を失うことになってしまったが、命に別状はなかった。

#### 同国 帝都ラグナ

グラ・バルカス帝国帝都ラグナにある帝国親衛隊本部の本部長がカイザルを襲った襲撃者から報告を受けていた。

「なんだと！ 指を切り落としただけなのか!？」

本部長の怒鳴り声が裏路地に響く。

「も、申し訳ありません。ですが約束を果たしましたので、か、家族の命をどうか……………」

「…………… ああ、あの世ので会いな」

物陰から2人の男が現れ、1人が襲撃者の動きを封じ、1人がナイフで喉を切る。

「ゴツ！」

襲撃者はそのまま動かなくなった。

「後始末は任せた」

「了解です」

本部長は通りに止めてある車に向かう。

「どうだった？」

後部座席から本部長に向かって問う者。

「は、長官。カイザルの指を2本切り落としただけです、申し訳ありません。しかし事が事なだけに正規員を使うわけに行きませんでしたので……………長官の忠告に従っていけば……………」

本部長は一連の計画に当たって長官から計画の基本を固めろと忠告を貰っていたのだ。

「やはりあの幸運の塊を始末するのは難しいか……………できればもう少し重大なものがあったが、まあいい。指を2本切り落としただけでも十分だ。後は海軍大臣だが、そちらは失敗していないだろうな」

長官は語気を強める。

「は、抜かりなく。海軍大臣は瀕死の重傷、外務次官も同じくです。最低でも一年は政務、軍務に関われません」

「実に良き。全ては皇帝陛下、帝国、首相閣下の為に」

長官の目はどす黒く染まっていた。

(これでいい。陛下、首相閣下の覇道を邪魔するものは全て排除だ)

帝都ラグナに暗い雨が降る。

翌日、帝都ラグナの政界は騒然となっていた。

「海軍大臣と外務次官が重傷だ?!」

「それだけじゃない。東方艦隊司令長官のカイザルもやられたという話だ」

「嘘だろ……………」

「狙われた全員が融和派のリーダー的存在だ……………」

この騒動は政界だけではなく民衆にも伝わる。

「号外号外! 海軍大臣が暗殺未遂事件に遭ったよ!」

その日の号外はすぐになくなり、追加の物も奪い合いとなった。



「大臣だけじゃない、外務次官もやられている……………」

「だ、誰がこんな事を……………」

「そんなの決まつてるだろう、SSだ」

民の視線は至る所に貼られているポスターに向けられる。

「また一人反逆の疑いで連行されたらしい」

「もうよそう。そろそろ連中が来る」

「気をつけてな」

民衆は解散する。

グラ・バルカス帝国の未来は黒く染まりつつあった。

数日後、今回の事案を受けて緊急大本営会議が行われた。

「まだ掴めていないのか!!」

開口一番に怒鳴ったのは海軍軍令部総長であった。

「東方艦隊司令長官、大臣がやられたのだぞ!」

「ですが、分からないものは分からない。それに事が事なだけに捜査も慎重に行なっています。成果はすぐには得られません」

軍令部総長にそう反論したのは帝国親衛隊長官「ゼリウド・ギムレー」である。

「軍令部総長、少し落ち着きたまえ」

アベルト・セムラー首相が嗜めると、大きく息を吐き、『申し訳ありませんでした』と軍令部総長が一礼する。

「ギムレー君、すぐにとは言わん、同胞が暗殺未遂に遭ったのだ、できる限り早く犯人を突き止めてくれ」

「は」

首相は大きく息を吐くと陸軍大臣に視線を向ける。

「万が一のことが考えられる。戒厳令布告に備え、出動準備を行なってくれ」

「はー！」

その様子を会議室の端でじつと眺めている者がいた。

その者はこの中にいる人の中で唯一の女性であった。

「茶番だな」

外務大臣が小さく呟いたのを彼女は聞き逃さなかった。

彼女の名は「シエリア・オウドウイン」。瀕死の重傷を負った外務次官の代理としてこの会議に参加していた。

「そして外務大臣、また失敗したとか？」

首相は外務大臣に標的を変える。

「申し訳ありません閣下。行く先々で足蹴にされておりました、芳しくありません」  
「やはり侵略路線に変更すべきでは？」

陸軍大臣がそう言ったが首相はまあ待てと言う。

「仮に侵略するとしても、もう少しこの世界の詳しい情勢を知りたい。外務大臣、しばらくは継続してくれたまえ」

「は」

（もう既に決定しているのに石橋を叩いて渡るかのような慎重さ、首相らしくないな）

これがユクドであつたら首相は間違ひなく即座に侵攻を命じていただろうが、この世界に来てからというものの慎重さが増していた。

（一体何を企んでいる？）

シエリアは外務次官としての職務をこなしつつ、過激派と呼ばれる派閥の目的を推察する。

「シエリア、険しい顔をするな。折角の美貌が台無しだぞ」

「え、あ、え、も、申し訳ありません」

外務大臣から指摘され少し動揺するシエリア。

「一同、一度休憩しよう」

「はい」

首相がそう言うのと会議は一時中断され、休憩に入る。

「シエリア、すまん」

外務省関係者に充てがわれた部屋に入るなり大臣がそう言う。

「お前の言う通りだった………まさか実力で排除してこようとは………」

「気にしないでください。これからどうするかです」

大臣はコップに注がれた水を飲む。

「ああ。まず首相が言った融和交渉はそのまま続けろと言うのが気になるな」

「ええ、御前会議で世界征服は事実上決定したも同然なのに………」

（なんの為に？ この世界の情勢が知りたいのは理解できる。だが、他に目的があるよ  
うな気がしてならない）

「それに融和派の筆頭である海軍大臣、東方艦隊司令長官、外務次官が狙われたのに、私  
たちが狙われなかった理由もです」

「セムラー………いつもそうだが、何を考えているか分からない」

ガガ！

雑なノックとともに外務省職員が中に入ってくる。

「失礼します！ あの、非常に言いにくいのですがたつた今、外務次官が亡くなられたそうですね」

「……………」

「ご苦労。下がってください」

「へ？ あ、失礼します」

外務大臣が恐ろしいほど冷静に、そして静かに言ったので少し挙動不審になる職員。別に彼が冷酷という訳ではない、容体からすぐに亡くなるだろうと察していただけであつた。

「彼から見たら、私が残酷な大臣だと思つただらうな」

「仕方ありません。それで私が次官になることに？」

「ああ、次席は君だ」

しかし事態は覆る。

「君を外務次官暗殺の容疑で逮捕する」

外務大臣は銃を突きつけられていた。

時間はほんの少し遡る。

休憩を終えて会議は再開されたが、最初に首相が外務次官に対し哀悼の意を捧げると、外務大臣に対し――

—君は暗殺騒動の時間帯、外出していたそうだね

武装した親衛隊が2人、外務大臣に近づく。

『君を外務次官暗殺容疑で逮捕する』

この時の首相の表情はまさしく暴君であったと、後のとある著書に記されている。

「な、なんだと!?! 首相、何かの間違いでは!?!」

「現実だよ、外務大臣」

首相が深刻そうな表情を作りながら言った。

外務大臣が一步踏み出すと親衛隊隊員から銃を突きつけられる。

「っ!!」

「連行します。大人しくしてください」

外務大臣は部屋から出る前にシエリアにアイコンタクトをした。

『帝国の未来を頼む』

という意思を込めて。

シエリアは大きく頷いた。

会議は一時波乱にまみれたものの、なんとか終了する。

「お疲れ様です、シエリアさん」

車に乗ると運転手から労いの言葉が掛けられる。

「ありがとう……………今回は今まで一番酷いものだった」

「ええ。大臣が暗殺容疑で逮捕など……………信じられません」

「……………帝国がは闇に包まれつつある。何か一つ起これば、それは闇ではなく悪魔へと変わるだろう」

シエリアの独り言に運転手は敢えて触れなかった。

（二度目ではカイザル司令は比較的温厚ではあったが、この世界では融和派と呼ばれる派閥に所属している……………やはり……………）

シエリアは今後どうするかを考える。

帝都に暗闇が混じれつつあった。

数週間後 ノフォーク海軍工廠

ここ、ノフォーク軍港はグラ・バルカス帝国でも最大規模の海軍造船所となっている。そして、*「グレード・アトラスター級」*が唯一ドック入りできる工廠でもある。

そしてグレード・アトラスター級専用のドックで新たな艦命が生まれつつあった。

「三番艦か……………」

ラクスタルが工廠内を歩きながら言った。

「ほんとほんと。この馬鹿でかいものを作ってどうするんだか。艦隊のローテーションのために最低4隻必要ということとは理解できるが……それを実行しようとす  
る気にはならんな」

工廠長が苦笑しながら言う。

「東方艦隊と西方艦隊にそれぞれ2隻、そして1隻が特務軍所属となる計画だ。既に四番艦の着工間近だ」

「四番艦の名前はどうかご存知で？」

「それを決めるのは艦政本部だ。俺たちじゃない」

「すいません、不躰な質問でした」

工廠長は『あ、そうそう』と言う。

「ある噂なんだが、四番艦の船体をそのまま使い、航空母艦に改造する話が出ているらしい」

ラクスタルは少し面食らう。

「空母に、ですか？」

「ああ。噂は噂でしかないが、もし本当なら全く信じられん」

工廠長は腕組みをする。

「グレード・アトラスター級三番艦『ローカルシート』、もしかしたらお前が帝国海軍最



後の戦艦になるかもしれん。ゲホツ！」

工場長が酷く咳をするのでラクスタルが心配する。

「大丈夫ですか？」

「ああ、この公害帝国の空気を吸い続けてきた末路だよ。だが決してこのままではくたばらん、この命の炎はまだ消えてない」

工場長がラクスタルの肩を両手で強く掴む。

「いいかラクスタル。俺は造船屋だ、祖国を変える力を持つていない。だがお前にはグレード・アトラスターがある。この祖国を………どんな方法であれ、良い方向に導いてくれ！」

工場長がそう言い切ると、踵を返す。ラクスタルは制服を脱ぐと、階級章が縫われた肩を見る。

くしゃくしゃになってしまったが、帝国の未来を託す、という強い意志が込められているように感じた。

「この祖国を………できるのか？」

ラクスタルは帝国国旗を見る。

工場から吐き出される黒煙により、煤に塗れていた。

「……………」

ラクスタルは制服を着直すと、車を停めた駐車場に向かった。

その日の夜、グラ・バルカス帝国全土で酷い大雨が降っていた。

カイザルは自宅の書斎の窓から外を見る。

「酷い雨だな」

土砂降りと言うべき大雨であった。

カイザルは窓の外をボーッと眺めながら一度目の世界の出来事を振り返る。

(帝国の異世界転移、パカンダでの皇族殺害事件を機に……………いや、大元はレイ

フォルを下した時点か……………それを防ぐためにはやはりパカンダでの事件を未然

に防ぐ必要がある。だがどうすればいい？ 一番手っ取り早いのは砲艦外交だが、それ

では軍令部の融和派が承知しないだろう——)

ここでカイザルはある可能性に思い当たる。

(まさか奴ら、皇族がなんらかの危険な目に遭うことを承知で……………いや、その可

能性は未来を知っているから出る可能性だ。今回は分からないが……………いや、前

世の記憶がなかったとしてもあり得ることだ。だとしたらかなりまずい)

カイザルは机の上に置いてある新聞記事を見る。

『外務大臣 外務次官暗殺容疑で逮捕！』

と、大きく見出しが載っていた。

「政府の中で融和派の筆頭とも言うべき人物が狙われたのに、融和派の外務大臣が狙われなかった理由はこれか……………海軍大臣が奇跡的に生きていてくれたことが幸いではあったが、もう政治的な力は残されていないと……………」

カイザルは今後の予測を立てるが、あまりにも膨大なものとなってしまうため作業を切り上げる。

すると、玄関の扉がノックされる。カイザルは玄関の灯りを付けずに覗き窓から外を見る。

扉の前にいたのは傘を差し、フードを目深に被っている者がいた。

カイザルは腕時計で今の時刻を確認する。針は23と41を指していた。

（誰だ、こんな時間に？）

刺客の可能性が高かったが、カイザルは応じることにした。扉を開ける。

「どちら様ですか？」

と、聞くと、フードが外される。その正体は――

「夜分に申し訳ありません。私の名前はシエリア・オウドウィンです」

シエリアの名前は軍人のカイザルでさえ聞く程の有名な人物だ。

「……………お入りください」

「失礼します」

シエリアが傘をパタパタと動かして水滴を払う。

「で、この老いぼれに何用ですか？」

シエリアにお茶を出すなりカイザルは単刀直入にそう聞いた。

「カイザル・ローランド。日本への懲罰作戦にてグレードアトラスターに座乗、日本との交戦にて戦死…………… どうですか？」

「それは一度目の……………」

シエリアはやはりと言った表情になる。

「私も同様の転生者、と言うべき存在です。もうお分かりですね」

「この二度目の世界に転生して、ずっと未来を知る者達を探してきましたが、片手で足りるほどの人数でした。ですがまさかあなたも同じだとは……………」

シエリアは表情が緩むがすぐにキリツとなる。

「この祖国をどうお考えですか？」

カイザルはシエリアの目を見る。その目は帝国の惨状を知る目であった。

「二度目よりも複雑怪奇と言わざるを得ない。転移の時期、政体、一度目と何もかもが違う。そしてこの調子だとパカンダ事件が起きかねない」

「やはりそうお考えですか。先の大本営会議にて首相が対話を続けるように下命したの

です」

「そのことですが、もしかしたらパカンダ事件を故意的に起こそうとしているのかもしれませんが……」

「故意的……融和派である皇族のハイラス様の処刑がこの世界でも起きると？可能性は低いのでは？」

「ああ、それは未来を知るが故の可能性だと思つてはいるのだが……何かとても嫌な予感がする」

その後、シエリアはあることを切り出す。

「実は私、一度目の世界では恐らく暗殺されたのです」

「暗殺？」

「はい。カイザル長官の戦死された後、日ム、そして第二文明圏の連合軍によりグラ・バルカス帝国領レイフォル州は陥落。帝国とレイフォルを結ぶ補給線の重要拠点であるイルネティアも日本艦隊により包囲、イルネティア征統府は降伏。そしてグラ・バルカス帝国本土にミリシアル帝国を中心とする連合陸軍が本土上陸、帝国陸軍は連合軍に被害を与えはしましたが、やはり日本軍が……そして帝都ラグナに連合軍の刃が突き付けられたことにより帝国は無条件降伏。その後連合軍により占領状態に……」

「その後、帝国は民主化を果たしましたが、軍がそのまま残ったツケを……」  
シエリアはその時の様子を鮮明に思い出す。

シエリアは戦後内閣首相と帝国軍の動向について車の中で話し合っていた。

「やはり時計の針を戻そうとしているか……」

「ええ。外務省の独自ルートの情報になりますが、間違いありません」

首相が苦虫を噛み潰したような顔になる。

「敗戦から目が覚めたと思つたら再び過去へと戻ろうとしているのか。どれだけ戦争をしたんだ一体、連合軍に歯向かおうなら今度こそ直接占領、分割統治になってしまう」  
「日本の慈悲によって残された命を粗末に扱うことになってしまいます。なんとかしなければなりません」

「うん、分かっている。だが下手に動けば軍を刺激することになる。ここは日本にも裏から協力を……」  
ん？ おい運転手！ まー」

—パンパンパン!!!!

乾いた銃声が車の中でも聴こえて来た。

「かはっ!!」

シエリアの胸に鋭い痛みが走る。そこを見ると銃弾が胸に1発当たっていた。

「閣下……………」

シエリアは首を動かし、隣にいる首相を見るが弾丸が頭に命中し、息絶えていた。  
「くそっ……………」

どうやら運転手も被弾したらしい。ハンドルを握っている手が覚束ない。

「!!」

シエリアが最後に見た光景は目の前に迫りつつあるロケット弾だった。

「そんなことが……………」

カイザルは信じられないという表情でシエリアの話聞き終えた。

「そこで記憶は絶え、グラ・バルカス帝国外務省に入省したところから始まります」  
「似たり寄ったりですな。私も同じ様なものです」

話題は他の転生者に移る。

「外務省だけでなく他の省庁にもそれとなく探りは入れてみましたが、やはり一人も……………」

「そうですか。俺の他はグレードアトラスターの艦長である—」

「ラクスタルですか?」

シエリアが名前を当てたことに軽く驚くが、国際会議にてシエリアはグレードアトラ

スターに座乗していたことを思い出す。

「そういえば国際会議にてグレードアトラスターに乗られていたのでしたね」

「はい。ですが転生者がこうも少ないとは……………」

「融和派も一定の勢力を保持していますが、今回の疑獄事件によって削がれてしまった。外務省事務次官はやはりあなたになるのですか？」

「……………」

突然シエリアが黙り込むのでまさかとカイザルは言った。

「別の者に？」

シエリアは静かに頷いた。

「な、なぜ？」

「私も前外務次官暗殺の疑念が掛けられているからです」

「うそ…………… だろ？」

シエリアは首を横に振る。

「残念ながら事実です。既に辞令も出しました」

カイザルは軽く落胆する。外務省事務次官の席に近い人間が転生者だったのだ。少なくとも帝国の意向に軽い影響を与えられる、そう考えていたのだ。

「申し訳ありません」



「いや大丈夫だ……… やはり負けることでしか祖国は目覚めないのか？」

それはカイザルの自問自答であった。前世では合理的思考の持ち主であったが、連戦連勝が重なり盲目的になっていたのは否めない。そして今回の帝国は恐怖で帝国を締め付けている。

「どうすればいい………」

帝国の未来を憂うカイザルとシエリアであった。

## 動乱の予兆

中央暦1638年 5月15日 日本国 東京 首相官邸 総理執務室

この日、佐山は情報庁長官荒米から報告を受けていた。

「すごい地形だな……………何をどうやったらこうなる?」

佐山の視線は手元にある写真に注がれていた。その写真に写っていたのは、中央に巨大な大陸、そしてそれをぐるっと囲むように巨大山脈があった。

「写真の分析のみになります、噴火や地殻変動でできた大陸や山脈ではないそうです」  
「当たり前だ。もしこれが自然現象だとしたら天災レベルだぞ……………いや、転移も十分天災か」

そういえば、と荒米が佐山に言う。

「総理は去年ぐらいいにパーパルディア皇国と戦争になる、と言われてましたよね? どうしてそう思ったのですか?」

「……………なぜ知っている?」

「とある方から親切に教えて頂きました」

とある方、佐山の頭に浮かんだのは1人しかいなかった。

「あいつか……まあい。パーパルディアと戦争になる理由は、経済的対立だ」

「荒米は頭に？を浮かべる。」

「なぜ経済的対立で？」

「昔の日本も同じような経緯だろう？」

「そういえばと荒米は納得する。」

「失念していました。第三文明圏外国家を中心とした地域共同体、経済軍事同盟を我が国が設立し、法律の許す限り全面支援を行っていきますからな……」

太平洋戦争で軍部が暴走する原因となったのはあらゆる不況が重なったとも言えるし、勢力を拡大したい、あらゆる理由が複合的に重なった結果起きたものとも言える。

「まだパーパルディア皇国の実情を詳しく知っているわけではないが、国交締結をした第三文明圏外国家の話から推測された国家像は、謂わば弱肉強食を体現化した国とも言えるものだった。そして技術レベルは魔法補正を加味しても一部19世紀初頭のそれに匹敵するものがある」

「一部とはいえ19世紀ですか、国防軍と国連軍の敵ではありませんが脅威ですな。そんな国家が日本の目と鼻の先と言っている距離に存在すると……」

荒米は髪を搔く。

「となると最前線になるのはここ、フエン王国とアルタラス王国ですか。フエン王国は既に大東洋条約機構に加盟しているので問題はありませんが、アルタラス王国は未加盟です。もし我が国が軍事行動を起こすとなると、邦人保護法を名目に行うしかありません」

### 邦人保護法

各国に何らかの形で滞在している日本邦人保護のために施工された法律。

その承認条件は、『各国に何らかの形で滞在している邦人が生命の危機に瀕し、その邦人がその国家の援助を受けられないと判断した時、内閣閣議決定で発動できる』とされている。

現状、日本国が一番武力行使しやすい法律となっている。尚、この法律が過去数十回発動されている。

「後は国連の安全保障決議だな。だが国連非加盟国、オブザーバーですらないというのが痛い……………」  
 パーパルディアが何か非人道的なことでもしてくれれば……………」

「本音出てますよ」

佐山は荒米の指摘を受け、軽く咳払いをする。

「んん。まあ情報庁のほうでもパールディア皇国に関する調査は続行してくれ」

「わかりました。それと国防軍の方からも報告はあつたと思いますが……例の通商航路に時折出現する潜水艦ですが……どうやらこの無人島を拠点としていたそうです」

荒米は第三文明圏南西、ロデニウス大陸に程近い島であつた。

「伊400型擬きとはいえ、航続距離が無限なわけではないからな。どこかにあると思つたがまさか経済的<sup>ロデニウス連邦</sup>重要拠点の真前にね……」

「言っておきますが、潰すなんて考えないで下さいよ」  
「分かつてるって……」

コンコンコン

ドアがノックされる。

「どうぞ」

扉を開けて入ってきたのは国防大臣の広瀬であつた。

「経済連の反応はどうだった？」

「予め聞いていたそうですが、それでも結構驚いてましたね……後2週間か」

「組閣から長いようで短かつたものでしたな。ついにこの長期政権に終止符をと……まあ穴はでかいが、あの老獪な幹事長ならなんとかするだろう」

「発表はいつするので？」

「俺がしなくとも、定例会見でプレスが聞いてくるさ」

佐山の予想は当たっていた。

定例会見の報告の質問が終わった後、記者らの質問は次期総裁選関連に移る。

「読読新聞社の前澤です。総理は次期総裁選に立候補されるのですか？」

会見室がシンと静まり返る。

「私は次期総裁選に立候補は………。しません」

突如として発せられた佐山の爆弾発言に一同騒然となる。

「驚いてますな」

「当然だ。誰もがこのまま続投すると思っていたんだ、衝撃は大きい」

官僚が口々にそう言う。

「どうして立候補されないか決められたのですか？」

佐山は表情一つ変えずに答える。

「まず転移による日本のあらゆる混乱が収束に向かいつつあることと、私の理想でもあった地球共同体政府の設立が事実上不可能、そして先程も述べた通り、混乱が収束しつつあるのが最適だと判断したためです」

スラスラとペンを走らせる音、タタタタという合成樹脂のボードを叩く音が鳴り響

く。

あるブースでは記者2人が話していた。

「な〜んか胡散臭いな……………」

「どうしました？ 先輩」

先輩と呼ばれた方はペンを額に当てながら答える。

「地球共同体の設立が事実上不可能と言ったが…………… はつきり言ってしまえばこの世界でも可能な筈だ」

「なるほど……………」

先輩記者は腕を組む。

「裏で何か動いてるかもな」

会見は終了する。

その2週間後、佐山政権は終了し、次期総裁である上野尚人うえの なおとを首相とする内閣が組閣された。しかし、総理が変わっただけで、他の閣僚は殆どが続投した。

「しっかし、首相首相が変わっただけで体閣僚はほぼ変わらずか」

広瀬は市ヶ谷の国防省の大臣室で呟く。

「なあ白井……………」

「ん？」

広瀬は部屋に設置されたソファで資料を見ていた白井に声を掛ける。

「ずっと生きていくってどうなんだ？」

白井は資料から目を離さずに答える。

「それを望むものは多い。実際、艦娘になろうとする希望者は一定数いる。だが現実には残酷だ。自分より若い兄弟らが先に老いて召されるのだから。そして俺はもうどのくらいなのか忘れつつある」

「絶望か……………」

「横須賀の大巫女に限らず、あの日本海海戦にて覚醒した艦娘は世界初の艦娘。そして生きている年数もそれ相応だ。日本を誰よりも近くで見えてきて、そして裏で支えてきた連中だ。もし甘く考えているならすぐに訂正した方がいい」

広瀬は部屋に掲げられている日章旗を見る。

「そうだな。我々はこの世界が道を違えることがないようにしなければならぬ。我々が味わってきたものを……………この世界も味わう必要はない」

白井は資料を読み終わると制帽を被り直し、無言で大臣室から退室する。冷たい反応ではあったが、それは彼なりの意思表示でもあった。



「ここ、パーパルディア皇国の主に第三文明圏外国家を担当する第三外務局の応接室で2人の男が会談、否、その立場が明確に分かれている会談が行われていた。」

「何？ 奴隷の抛出を拒否だと？」

パーパルディア皇国の外交官がその大使が言った言葉に眉を顰める。

「はい。我が国は貴国に対しての奴隷抛出をもうやめようございます」

『ほう』と言い、パーパルディア外交官は少し語気を強める。

「それは我が国の支援を受け入れないということか？」

パーパルディア皇国は属国に対し、奴隷の抛出を要求し、その対価でパーパルディア皇国で製造された部品、大は船、小はネジなど色々。

—原作通りなのでこれ以上は割愛させていただきます。

その国の大使、トーパ王国大使は震えながら答える。

「か、構いません。我が国は奴隷の抛出を拒否、き、貴国は我が国に対しての支援を止める、こ、これでよろしいでしょうか？」

「ふん。その判断、後悔することになるぞ」

するとトーパ王国大使は薄く笑みを浮かべる。

「フツ…………… 我が国はあの日本と国交を締結しているのです。それではこれに

て」

そう言うと、トーパ王国大使は部屋から出て行った。

「クソツ!!! これで8ヶ国目だ……………」

「!」

部屋に1人残されたパーパルディア外交官は悪態を吐く。パーパルディア皇国に対して奴隷抛出を拒否したのはこれで8ヶ国目であった。

「口々に『あの日本』『あの日本』……………」

「ふざけやがって!」

机をドンと叩く。

一頻り喚き散らした後、外交官は部屋から退室する。外交官はその後第三外務局長、カイオスの元へ報告しに行った。

「そうか……………」

やはり『日本』か」

カイオスは髭を摩りながら報告書を読む。

「はい。今回のトーパ王国で8ヶ国目です。このままだと……………」

「他の属領も追従する、か……………」

ひとまず日本国の詳しい情報を集めてくれ。まずは日本がどういう国なのかを調べなければならん」

「は!」

「そういえば最近貿易商人からも日本国のことをよく聞くな。後で日本の品物を取り寄せておくか」

カイオスはその仕事上、貿易商との関係が密接な為、第三国経由で日本の製品などを調べようとしたのだ。

（数日後）

貿易商は日本製品をすぐに入手、カイオスの元へと送ってくれた。

そしてカイオスは驚愕する。

「こ、これが靴だと？」

カイオスが手に取っていたのは、ランニングシューズ、所謂ランシューであった。

この靴にパーパルディア皇国の様な優雅さは一切ない。だが、この機能性、そして何より軽いということが―下手したらムーの懐中時計より軽いのではないのだろうか。

「何をどうやったたらこんなのを作れる？ 明らかに我が国のレベルを超えてるぞ……………なるほどな、それが次々に奴隷抛出を拒否する理由か」

そしてカイオスは貿易商人から送られてきた資料を見る。『日本、第三文明圏外国家と対等な関係構築』と書かれていた。

一応、部下の外交官に日本の調査を命じてはいるが、未だに報告が上がらない。その点、商人は他国に許可証さえあればほぼ自由に出入国できる。そしてその取引先の伝手から情報を収集することも容易い。カイオスにとって重要な情報網の一つであった。

「対等な関係ということは奴隷の抛出を求めていないということか……………情報が

少ないが、もしこれが本当だとしたら我が国より日本との付き合いを深める方を選択するわな………報告するには少し確度が低いな。もう少し情報を集めてから報告するでしょう」

日本の情報を集めて皇帝陛下に報告することになるのはしばらく後であった。

数週間後 同国 第三外務局

「なんだと!? どちらの案も拒否された!？」

カイオスは部下の報告に思わず耳を疑う。

「はい。フェン王国は献上、租借のどちらも拒否しました」

「くそ。アルタラスの対応もあるから同時対応は非常にまずい。とりあえずフェン王国に対して圧力を掛けつつなんとかして譲歩を引き出せ」

「はー!」

「優先的に対処するのはアルタラスだが………まさかフェンがすぐに突っぱねようとは………やはり日本か」

自身の予想が甘かったことに歯噛みするカイオス。

「アルタラスは予定通りなのだな?」

「はい。次はシルウトラス鉱山の献上ですが、少しの期間を空けて要求しようと考えていますが、よろしいでしょうか」

「分かった。だが来年までには必ずな」

「は！」

部下は恭しく一礼すると、局長室から退室する。

「やはり日本か……… 幸いなのはアルタラスまで日本の手が及んでいないということか」

カイオスは髭を摩る。

「まずいな。これは陛下に報告しなければ………」

カイオスは予定を切り上げてパーパルディア皇帝陛下、ルディアスへと報告することを決めた。

「ふむ。事態は理解した」

第三文明圏の頂点であるパーパルディア皇国皇帝「ルディアス」は、カイオスの報告に特に怒るというわけでもなく話す。

「カイオス、貴様は余が二カ国同時に対応する<sup>戦争</sup>ことは、どのような事態であれ避けてきたのは知っているな？」

「は」

「そうと知っておきながらも今回の事態、どうするつもりだ？」

ルディアスは手を頬に当てながらそう言った。

「つ…………… 申し訳ありません。全て私の予想が甘かったせいです」

カイオスは自らの非を全面的に認める。

「そうか。余は貴様を高く評価している。これ以上失望させるでないぞ。アルタラスは予定通りに侵攻を行う。だがフェン王国は監察軍独自で対応せよ」

下がってよいと言われ、カイオスは恭しく一礼をし、王の間から退出する。

（完全にやらかした…………… だが後始末をうまくつけられなかったらもつとまずい！）

カイオスは足早に第三外務局に戻り、指示を出す。

西暦2052年 内宇宙 日本政府非公式呼称『アマール』 大気圏外

アマールより更に外、宇宙に“それ”はいた。

（宇宙戦艦ヤマト アンドロメダのテーマ2202版）

『全艦、そのまま隊列を維持』

それは麾下の艦に指令を下す。

「エリア558の偵察終了、続いてエリア559の偵察に移る」  
「了解」

それは全長444mと、日本国防宇宙海軍あかぎ型航空母艦とほぼ同等の大きさであつた。

その名は『アンドロメダ』。国連宇宙海軍旗艦であつた。

「ふ〜。地味な作業だな」

アンドロメダの艦長である、『ジェイコブス』は艦連動望遠鏡による周辺の天体観測任務に不満を抱いていた。

「これではNASAと変わらん」

ジェイコブスがこう言う理由、旧世界のアメリカ航空宇宙局<sup>N A S A</sup>の宇宙飛行士であつたからだ。

経歴は—

国際宇宙ステーションでの搭乗勤務

月

火星

—を10年間の内にこなすなど、超が付くほどのベテランの宇宙飛行士であつた。そ

の後はN A S Aからアメリカ宇宙軍（軍種）へと出向、そのまま軍属となる。そしてアンドロメダの経歴を紹介する。

前衛武装宇宙艦<sup>A</sup>アンドロメダ

ドレッドノート級が実質的にイギリス、世界主要国との共同開発なのに対して、アンドロメダは日米両国のみでの共同開発であった。

そして波動エネルギーを全面的に活用した武装となっている。

主砲 1<sup>4</sup>6<sup>0</sup>インチ三連装砲<sup>c</sup>3基

副砲 8<sup>2</sup>インチ三連装砲<sup>c</sup>2基

多目的V L S 128セル

多連装ミサイル発射機 6基

重力子スプレッド 4基

その他多数。

副砲については8インチ砲が採用されることはすんなり決まったが、主砲についてアメリカ側が強固に20インチ砲の搭載を主張していたが、日本は宇宙戦艦ヤマトに関するコストを全て開示した。



宇宙戦艦ヤマト―それはメリットもあるが、デメリットが多いものでもあった。

その一つが………コストであった。

建造費もあるが、何より運用、維持、その他諸々を含めるとアメリカ海軍の原子力空母以上のそれに匹敵するものであった。

そして16インチと20インチ砲のそれぞれを採用した場合の試算も提示した。これを見て流石にアメリカ側も冷静になり、そして軍事企業からもたつた一隻のために全てを一から作る必要性を疑問視された為、アメリカ側も16インチ砲で妥協することになる。

そしてこれが後々のヤマトを超える戦艦を作り出すアメリカの動機の一つとなる。

―説明終了

ジェイコブスはNASAの時となんら変わらない任務に不満を抱いていた。そして実際の観測は全て艦連動望遠鏡に接続された量子コンピュータが全て行っていた。だから暇潰しとまで行かなくとも、艦長席に送られてくるデータの再精査をしていると、ジェイコブスはあることに気づく―

「……………ん？」

―太陽の反対側の重力数値が微妙に歪んでいることに。

「観測員。まだ太陽の裏側に手は付けていなかったな」

『は！ 太陽系外の調査を優先してはいますが……… 太陽系内の調査は既に完了して  
います。何かありましたか？』

「いや……… 太陽の裏側の重力数値が若干歪んでいてな………」

『……… 分かりました。ワイオミングを動かして調査をしましょう』

自身の僅かな発言で取るべき行動を察してくれた観測員に心の中で感謝するジェイ  
コブスであった。

ドレッドノート級二番艦『ワイオミング』

ワイオミング艦長はアンドロメダの命令を確認するとそれをすぐに実行に移す。

「旗艦より新たな命令だ。太陽の裏に行くぞ。艦連動解除、反転180度、両舷前進強  
速」

「反転180度、補助エンジン、両舷前進最大戦そくく」

航海士が復唱し艦が180度回頭、速度が14Sノットまで加速する。

「まもなく太陽湾曲を抜ける」

ワイオミングが太陽の影から出ると――

「つーっ、恒星の反応があります！」

「惑星ではなくか？」

「間違いありません。恒星です」

「艦外カメラが捉えました。メインパネルに出します」

艦橋のパネルに映像が表示される。

「おい。これって地球型の惑星じゃないか？」

表示されている映像には間違いなく地球のような環境を持つ惑星があった。

「なぜこんな簡単な物に今まで気付かなかった……………」

まさに“灯台下暗し”であった。

「太陽系外に意識を向けすぎましたかね」

航海長は制帽を被り直しながらそう言った。

「…………… 取り敢えずアンドロメダに報告だ」

「了解」

「さて、どうするか……………」

アンドロメダからの返信は『単独で惑星調査を実施せよ』であった。

「まあ予想通りでしたね」

航海長は苦笑いをする。

「ふ…………… では本艦はこれより惑星調査を実施する。大気圏を掠めるぞ」

「Sir, YES, Sir!」

ワイオミングは惑星調査を、一部のみの限定調査を実施。大陸などの地球型の惑星に必要な物は全て確認されたが、植物以外の生命体は何も確認出来なかったという報告を上げる。

そしてこの報告は直ちに国連宇宙軍、日本政府へと伝えられることとなる。

後日 日本国 首相官邸 総理執務室

「—学術的に考えてかなり珍しい物です。同じ軌道を共有する、謂わば二重惑星であるなど……………」

天文学者が興奮気味に上野に話す。対して上野は学者に冷ややかな目線を—浴びせてはいなかったが、心の中で浴びせていた。

「それで、要点は?」

政治家というものは、どれだけ相手が回りくどい言い方をして最初から最後まで聞かなければならないが、上野はそういった回りくどいやり方を嫌う人間であった。

「すいません。まだ僅かなデータなので詳しいことは不明ですが、この惑星は誕生してからおよそ数十億年が経過しています。そして本題は……………生命体が国連宇宙

軍が観測した通り、生命体の反応が一切無いのです」

「何も？」

いくら専門外とはいえ、ここまでのレベルになれば異常に気付く。

「そう何も、です。本来ならありえないことです。これだけの環境を持ちながらも、植物などを除いた生命体が何も確認できないというのは……………」

天文学者はハンカチで汗を拭く。

「有り得ないことですが、私独自の仮説があります」

上野は視線で続きを話すよう促した。

「……………この惑星―いや、この太陽系は……………人工的に作られた物なのではないかと……………」

「人工的に？」

総理執務室にいた全員がクエスチョンマークを浮かべる。

「人工的と言うよりも、もはや神の意志が介在しているようにしか思えません」  
執務室にいる全員が有り得ないと思っていたが、ふと現実に戻る。

―『転移はどう説明する』  
と。

転移だけではない。

・ミズーリの出現

・アマールの質量の小ささ

・そして旧世界の太陽系と酷似している星系

などなど、挙げたらキリが無い。

同じ次元に存在する星系としてはもはや異質としか言いようがない現象であった。

「神の意志か………だとしたら相当な嫌な人だな」

上野がブラインダーが掛けられた窓を見ながら言う。

「日本でなくとも、アメリカ、ロシア、中国を転移させれば良いのに………」

複数の官僚、特に外務省関係者が深く同意していた。

世界警察役が如何に面<sup>アメリカ</sup>倒<sup>馬鹿みたいなコスト</sup>なことを側で見届けて来ただけであつて、よく理解し

ていた。

無論、この世界に轉移し利益が上がっているのは事実であることは誰もが認めていた。

「………この情報はあらゆる動乱の予兆になるかもしれません」

天文学者がそう最後に付け加えた。

「………は。これはまた面倒なことになりそうだ」

上野の呟きは全員の耳に入る。

「説明ご苦労」

「はい。ではこれで失礼します」

天文学者が執務室から出たのを確認すると宇治和外相が切り出す。  
「申し訳ありませんが総理、一つ報告したいことがあります」

外務大臣の宇治和が如何にも申し訳なさそうな表情で上野に話す。

「シオス王国の大使館経由である国から接触がありました」

「ある国？」

「……………アルタラス王国からです。内容は――」

—軍事支援要請です



## 混乱

。 前回の日本に対する軍事支援の要請をアルタラス王国が出す前、1週間ほど前に遡る。

アルタラス王国 アテノール城

ここ、アルタラス王国は世界有数の魔石産出国であり、それを輸出することで発展してきた国である。その為、第三文明圏外国家としては珍しく文明圏に匹敵するレベルを保持している。

そんなアルタラス王国の王の間でアルタラス王国国王、ターラー14世が外交官従者からの報告を受けていた。

「それは……誠か？」

ターラー14世が信じられないという表情になる。

「は。誠に御座います」

ターラー14世は手元にある文書を読み直す。

『シルウトラス鉾山割譲要求』

と、題されていた文書であった。

『アルタラス王国はシルウトラス鉾山を皇国に献上すべし。実行期限は文書到着時より1ヶ月以内に履行するものとする』

王国の中でも三本指の中に入る程の魔石産出鉾山の献上を皇国は要求している。ただこれは分かる。問題は次であった。

『アルタラス国王王女ルミエスを奴隷として献上すべし』

「一国の王女を奴隷として献上だ?!」

パーパルディア皇国の非道な行いはアルタラス王国でも有名であったが、一国の王女を奴隷として献上するようなことは一度も無かったという。

「これは……………やはり皇国は我が王国を狙っていたのか……………」

ターラー14世はしばらくの間思索に耽ると玉座から立ち上がる。

「文書の真意を確かめに行く。付いてこい」

「はー!」

ターラー14世と外交官はパーパルディア皇国在外公館に到着する。しばらく待った後部屋に通される。

「なんの用だ。ターラー14世」

在外大使カストが手を背もたれに掛け、足を机の上に置くという無礼の極みで応対する。

「文書の真意を確認しに来ました」

無礼には無礼で返すため、挨拶抜きで話に入るターラー14世。

「そのままの通りだが？」

カストはさも当然のように答える。

「シルウトラス鉱山は我が国有数の魔石産出地です。なんとかなりませんかでしょうか？」

「無理だな」

ターラー14世の願いを一刀両断するカスト。

「…………… わかりました。では我が娘、ルミエスを奴隷として献上というのは？」

「あ？ それは俺が味見をする為だ。まあ飽きたら市場へ売るがな」

カストは舌なめずりをしながら答える。

「は？」

カストの予想外の答えに間抜けな声を出してしまふ兩名。

「…………… それを1ヶ月以内に履行せよと？」

「そうだ」

もはやその会話に国家と国家の対等な関係はなく、搾取する側とされる側がはっきりと分かれていた。

「あまりにも——」

「無茶だろ？　だから1ヶ月の猶予を与えている。必ずやれ、いいな？」

それ以上の会話は無駄だと言わんばかりに部屋から追い払うカスト。

「くそがっ!!!」

王城に戻るなり騒ぎまくるターラ14世。周りにいる大臣らはおどおどしながらその様子を見守る。

「奴らは自分達以外を人間とは見ていない！　もはや家畜以下の扱いだ!!」

一頻り騒いだ後、大きく息を吐き気持ちを落ち着かせるターラ14世。

「戦争の準備だ！　1ヶ月後の戦争を見据え、すぐに準備をせよ！　そして外務卿！」

「は——」

「日本国に軍事支援を要請せよ！　彼の国の実力が本物なら、列強であるパーパルデア皇国の脅威を跳ね除けてくれるだろう」

「恐れながら陛下。我が国と日本国との間に国交はありませんし、何よりルミエス様の

亡命受け入れ国家策定は……………」

「うむ、分かつておる。できれば日本国に我が娘を保護してもらいたいところであるが、国交すら締結していないのだ。受け入れてくれる可能性は低いであろう……………」

「……………」  
「分かりました。すぐに取り掛かります」

外務卿は早速仕事に取り掛かる。

「シオス王国に駐在している大使に日本国大使と会談を設けて貰うように伝えろ」  
「分かりました」

外務卿の命令は迅速にシオス王国に駐在している大使に届けられる。

「—そして今に至ると……………」

シオス王国駐在日本大使がアルタラス王国大使の説明を聞き終える。

「はい。最初に申し上げた通り、アルタラス王国は貴国の軍事支援を希望します」

アルタラス王国大使の希望に日本大使は難しい顔を浮かべる。

「貴国の気持ちはわかりました、本国に伝えておきます……………」  
ただ現行法の解

釈では貴国の支援のために派兵するというのはかなり難しいと言わざるを得ません」

「な、何故ですか？　ロウリア王国戦では派兵したと聞きましたが？」

「ロウリア王国戦の際は、集团的自衛権の行使であり、何より我が国から多数の日本邦人がクワ・トイネ公国、クイラ王国に滞在していた為です」

後々の国会に於いても、『邦人保護出動』『集团的自衛権の行使』日本と密接な関係にある他国への武力攻撃により日本の存立が脅かされ、国民の生命・自由および幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険がある（存立危機事態）、（２）日本の存立を全うし、国民を守るために他に適当な手段がない、（３）必要最小限度の実力を行使すること、を挙げている。の観点から国防軍の出動は正当であると認められている。

尚、必要最小限度の実力であったかどうかは今も論争が続いている。

そしてクワ・トイネ公国からの要請を必要としたのは、免罪符の一つとするためであつた。

「そ、そんな………では集团的自衛権の行使は………」

「はつきりと言わせて頂きますが、貴国、アルタラス王国とは国交を締結もしていない、邦人が滞在していると言うわけでもない。そして国際連合加盟国でもない。先程も言いました通り、本国に連絡はさせて頂きますがね」

がつくりと項垂れるアルタラス王国大使。

「話はこれだけでしようか？」

「はい………では失礼します」

非情とも捉えかねない日本大使の対応ではあったが、国交すら無い国の要請を本国に伝えてくれるだけでも十分な成果であった。

そして時系列は前回の総理執務室での会議に戻る。

「一向こうも無茶振りであることは承知のようです」

宇治和は淡々と言った。

「…………… 広瀬君。どうだ？」

上野は広瀬に視線を送る。

「現行法、いや、今回の事態に関する法律があつたとしても、国交を締結していないので、クワ・トイネ公国の際は邦人保護出動、そして資源、食料の輸入が途絶えると死に絶えるという観点から集団的自衛権の行使に当たるからこそできたものです」

「つまり派遣は不可能ということか……………」

「国交があるならばなんとかなりますが、我が国はこの世界での立場がまだ定まっています。もしパーパルディア王国を敵に回した場合…………… 敵を無条件降伏まで追い詰める必要があるかも知れません。それに他の列強、神聖ミシリアル帝国はこの世界で最強と名高いのです。それと関係が悪化した場合、我が国やこの世界が望まない結果となるでしょう」

「…………… 周りくどいが、派遣に反対だな？」

上野は少し広瀬を睨みながら言った。

「はい」

「そうか……………」

「私も同じ意見です」

次々に賛成意見が上がる。もはや結果は決まったも同然であった。

「…………… 宇治和君。要請を拒否する旨を伝えてくれ」

「…………… 分かりました」

　　後日 シオス王国 日本大使館へ

「貴国の要請を拒否させて頂きます」

日本大使は淡々とそう言った。アルタラス王国大使は今にも叫びたくなる衝動を抑えて声を震えさせながら答える。

「分かりました……………」

アルタラス王国大使はトボトボと自国の大使館へと戻り王国へ結果を伝えるのだった。

アルタラス王国 アテノール城



外務卿からの報告に王の間に集まった官僚らの表情は暗くなる。ターラー14世も例外ではなかった。

「やはり国交がないというのが大きかったようです……………」

「……………で、あるか。分かりきつてはおつたが、そこまではつきりと断絶の意思を示されるとちと心にくるな……………」

「それで我が国の今後は？」

官僚の1人がターラー14世に問う。

「……………」

長い、長い沈黙の後、ターラー14世は答える。

「もはや我が国はパーパルディア皇国にとつて家畜以下の存在と化している。それはもはや国ではない！ それに、一国の王女を奴隸として抛出するのを断じて認めん！！ 徹底抗戦の準備だ！」

王の間にいる全員が踵を鳴らし、王国式の敬礼をする。

「「アルタラス王国万歳！！」ターラー14世万歳！！」

アルタラス王国首脳の決定は国民にも広く知られることになり、その経緯を知った国民はターラー14世への支持を表明した。

## パーパルディアア皇国 パラデイス城

「なるほど。そこまであからさまに反抗的な態度を見せてこようとは……………」

皇帝ルディアスは従者からアルタラス王国の戦争準備行動に特段驚く様子はないが、それでも列強である皇国に対し、ここまで反応を見せてくれるとあつて軽く驚く。「猶予は後1週間だったな？」

「は。その後に再びアルタラス王国の意思を確認、命令を拒否するならば、即座に侵攻を開始致します」

「……………アルデアよ」

ルディアスがアルデアの名を呼ぶと後ろに控えていた人物が一步前に出る。

「は！ 既に皇軍の出動準備は整っております。恐らくやつらは監察軍が出てくると思っっているでしょうが、今回相手するのは栄光ある皇軍であります。奴らの度肝を抜いてやりましょう」

「頼もしいな。期待しておるぞ」

「ははっ!!」

パーパルディアア皇国が予想した通り、アルタラス王国は命令を拒否。皇国はその場で

アルタラス王国に対して宣戦を布告するのであった。  
ルミエスの亡命に関する話はほぼ同じなので割愛させていただく。

アルタラス王国とパーパルディア王国との戦争に、日本は護衛艦2隻、無人機を複数使用してこの戦争を見届けようとした。援助はできなくても、せめてその戦争を見て見ぬふりをせず、最後まで見届けようという意見が出たためであった。

国防省は戦闘情報収集のため、西暦2051年に就役を果たした最新鋭艦、多目的情報収集艦「しょうなん」と護衛艦「たくみ」を派遣する。

「しょうなん」は魔法を使用する国家の通信の傍受など。新世界に対応した装備品を多数装備している。そしてこの「しょうなん」は、テストヘッド艦も兼ねていた。

「たくみ」は非武装船である。「しょうなん」が万が一にでも戦闘に巻き込まれた場合、その脱出援護の為に付けられた。

とまあ、戦闘情報収集のための最低限度かつ、その中でも戦闘係数が高い護衛艦が派遣されることとなった。

派遣口実は『調査研究の為に護衛艦派遣』とされた。

護衛艦などが到着してから僅か1週間後、アルタラス王国は降伏した。

たったの1週間で終わった戦争であったが、パーパルディア王国が使用する魔導周波

数の解析、具体的な戦術の確認など一定の成果を挙げたのだった。

そして時間は少し進み、アルタラス王国対パーパルディア皇国の戦争が始まって2週間後の旧ロウリア王国沖の群島に場所と時間を移す。

アルタラス王国商船　タルコス号

アルタラス王国王女、ルミエスを乗せたタルコス号はロデニウス連邦北西沖の群島を通過していた。

航海距離の長さ、船体規模が比例していない為、乗員の疲労はピークに達しつつあった。

—尚、原作と同じやり取りのため割愛する。

するとマスト上部にて周辺の警戒を行っていた乗員が、群島の影から出てくる帆船3隻を見つける。そのマストには誰もが分かりやすいようにドクロが描かれていた。

「右舷より海賊船が3隻！　真っ直ぐ来る!!」

その報告を受けて乗員が戦闘配置を整える。

「姫様、早く中へ！」

リルセイドが王女が船内へ避難したのを確認すると自身も帯剣する。

そして戦闘が始まった。

―尚、原作（以下略）。

国防宇宙海軍 第一護衛隊群 第一護衛隊所属 護衛艦『かげろう』

国防宇宙海軍所属のかげろう型一番艦『かげろう』は、海賊対処法に基づき旧ロウリア王国海域のパトロールを行っていた。

「レーダー探知、群島より9.7km。数4……………内3隻は艦隊行動を取っている模様。本艦との距離、約200km」

レーダー士官がCICから報告を上げる。

「……………通行申請のない船舶の模様です。P-1Bが急行しています」

船務長が今日分の通行船舶の確認を行い報告した。

「了解。SH-60Cも向かわせろ、本艦も急行する。航海長、進路変更。面舵20、第二戦速」

副長が操艦指示を行う。

「面舵20。第二戦速、黒10」

操舵員が復唱しテレグラフィバーが第二戦速に合わせられる。機関出力が上がり、約

38ノットまで加速する。

「ゴツドアイ<sup>P</sup>より情報通信。『民間船1隻が海賊船3隻に攻撃を受けている』です」  
「急がないといけないな……」 両舷前進最大戦速、黒10」

「両舷前進最大戦速！ 黒10！」

機関出力が更に上がり、最大船速である43ノットまで加速する。

「艦長入られます！」

艦橋に艦娘かげろうが入る。

「ご苦勞様。状況は？」

「は。先程哨戒機より『海賊船が民間船に攻撃を行なっている』と送ってきました」

「了解です。合戦準備、対水上戦闘用意」

『対水上戦闘用意！』

発令員が復唱すると、警報が鳴り、戦闘準備が整えられる。

「立入検査隊要員は所定の行動を取れ」

『対水上戦闘用意よし』

かげろうは全速力で現場海域へ向かう。

アルタラス王国王女、ルミエスは目の前で繰り広げられている命の奪い合いに、ただ

呆然と眺めていた。

「何をしておられるのですか姫様あ!!!」

リルセイドの叫び声すらルミエスの耳に入らなかつた。ただある存在を除いて――  
「?」

怒声があたりに響く中である音が聞こえてくる。

――キイイイイー!!!

妙に甲高い音を鳴り響かせながら、白いそれは辺りをグルグルと飛び回る。

「なんだああいつは?」

「お頭あ! あいつはなんすか?」

ここで海賊もリーダーの異変に気付く。

「おい、オメエら、覚悟はできたか?」

「どういうことでつさ?」

「あいつは……… あいつは『灰色の悪魔』を呼ぶぞ!!」

「は……… 『灰色の悪魔』!?!」

『灰色の悪魔』

およそ4年前に突如として現れた灰色の巨大船のことを例えた言い方であつた。そう呼ばれる所以は、海賊を片っ端からポコポコにしていき、そして全員が連れ去られて

いるからであった。

すると白い羽虫も現れてくる。『灰色の悪魔』が出現する前兆が次々と起こる。そして――

「巨大船が来やした！」

――灰色の悪魔が現れる。

「くそっ！ 迎え撃つしかない！」

今更ながら、自身の判断が甘かったことを呪う海賊のリーダー。かげろうが海上サイレンを鳴らし、呼び掛ける。

『こちらは日本国防海軍。直ちに停船せよ！』

人の声とは思えない声量でこちらに呼びかけてくる。おまけに何かをピカピカと光らせている。しかし彼我の船速が違いすぎる為逃げ切ることとはできない。よってリーダーは迎撃を命ずる。

「該当船舶、停船命令を拒否。真っ直ぐこちらに近づく」

どうやら指示を聞く気は無いらしい。かげろうはそう判断し指示を下す。

「主砲警告射撃、撃ち方始め！」

「主砲警告射撃、撃ち方始め！」



手動にて主砲が3発発射される。3発の砲弾は海賊船の10 m先に着弾する―が、海賊船は尚もこちらに向かつてくる。

「CIWS、有効射程に入りました」

「CIWS、警告射撃。射撃始め！」

CIWSが手動にて発射される。今度は海賊船の舳先を掠める、ギリギリを狙う。

「最終警告終了。海賊船は依然として本艦に向かいつつあり。対不審船機銃射撃用意」  
『射撃用意よし』

無線にて準備が整ったことが報告される。

「射撃開始！」

今度は警告ではなく、沈めるための攻撃となる。

戦闘という名の蹂躪戦は1分で終了した。人に当たれば体をズタズタにする12.7 m機銃が木造船に射撃された時点で察しである。

海上に漂う海賊を引き上げて、ノックアウトシールを貼り、ギャーギャー騒ぐ海賊たちを黙らせる。

そしてようやく民間船舶へと接触できる。

「かなりやられているわね…………… 負傷者の確認を」

魔信にて負傷者の有無を確認すると、どうやら複数いるらしい。

「曹長。内火艇、複合艇を降ろして負傷者を收容、ついでに向こうのお偉いさんも連れてきて」

『了解です』

立入検査隊長の曹長妖精が元気な声で返事をする。

しばらくして、負傷者の收容を終えるのと同時にタルコス号の代表者と名乗る人物と、その護衛と思わしき人物を合わせて2人が貴賓室に案内された。

(綺麗な人ね……………)

かげろうはルミエスを見てそう思った。自身も並大抵の美貌では無いが……………。

「こんにちは。私は日本国防海軍所属の護衛艦“かげろう”の艦長を拝命しているか  
げろうと申します。早速ですが、貴船の航行目的、国籍を教えてくださいませんか？」  
すると2人は顔を見合わせて何かを話している。―何か隠しているのか?と、かげろうがそう思った時、身なりのいい服を着こなした女性がばたりと倒れる。

「姫様あ!!」

護衛と思わしき人物が姫様と大声を張り上げる。かげろうは姫様というのが気になつたが、取り敢えず後回しにする。

ルミエスのことをよく見ると、左腕に包帯が巻かれていた。かげろうは慎重にそれを解くと、傷跡から微かに透明な液体が出ていた。

「この傷は？」

リルセイドに見覚えは無いらしく、分からないと答えられた。

（動悸が狂っているわね―）

「もしかして毒?!」

考えたことが思わず口に出るかげろう。考えるよりも先に体が動く。

「こちらかげろう。飛行班長、ヘリの状況は？」

かげろうは無線にて飛行班長と連絡を取る。

「は？ 今収容作業中ですが―」

「作業中止！ すぐにエジエイの病院へ向かって！ 要人一名が毒でかなりまずい状況

よー！」

『了解しました!』

「毒!? まさかあの時に……………」

若干混乱しているリルセイドにかげろうは言う。

「後で『姫様』という意味をお聞きしますがよろしいですね？」

その後ルミエスは、SH-60Cにてエジエイにある日本病院へ運び込まれた。

―その後は原作と同様の為以下略。

## 日本国 とある料亭

日本国内閣総理大臣上野は料亭にて経済連会長と会食を行なっていた。

「調子はどうだ？」

会長が鍋を突きながら言う。

「はは…… 佐山の跡継ぎ政権とも言われていますが、何分前任者が優秀すぎましたので、わたしには過分なものとなっています」

「ふ…… そう謙遜するな」

仮にも総理大臣になっているのだ。その実力は計り知れない。

和やかに話をしていると、障子を開けて政務秘書官が入ってくる。

「お食事中失礼します。その……」

政務秘書官は上野に耳打ちをする。上野の顔が今までの和やかな表情から、苦虫を潰したような顔になる。

「会長、申し訳ありませんがこれにて失礼します」

「ああ、構わんよ」

上野らはそそくさと退出した。その姿を見送った会長は部下に話しかけられる。

「どうお思いですか？」

「なに……………中継ぎ政権の長としては珍しくできているが……………これを見たまえ」

会長は足元に置いてあつた紙の束を渡す。受け取つた部下はそれを見るなり驚愕する。

「……………これは……………」

次々とページを捲つていく。

「す、全ての金の動きを……………!?!」

会長はニヤリと笑う。

「どうやら一悶着起こるかもしれない」

料亭を出た後、上野は車に乗り、詳しい報告を聞く。

「アルタラス王国王女が日本国内の病院へと移送されました」

その報告に上野は思わず歯噛みをする。

「誰が命じた?」

「外務大臣です……………」

「あいつめ……………派遣に反対と言つておきながら火種を拾うような真似

を……………! 宇治和はどこにいる?」

「本庁です。今向かっています」

上野を乗せた車は外務省に到着する。

「総理!？」

衛守が政府公用車のナンバーを見るなり慌てる。

「どうされましたか？」

衛守の問いに答えず足早にエレベーターへと向かったのだ、それについていく。一国の主が護衛もなしに来たのだ。慌てるなど言われても慌てるしかない。

上野は大臣室へと到着し、ノックなしで入る。

「宇治和君! どういう…………… こと……………」

上野の言葉は大臣室の光景を見たことで打ち切られる。

「お、お前は誰だ?」

大臣室にいたのは、見た目14歳の少女であった。

「なんじゃ…………… 最近の元首は儂のことを知らないのか?」

知らないから聞いているのに、神経を逆撫でするようなことを言ってくる少女。

上野はその顔をよく見るが、見覚えは全く無い。

「あれ? 首相、どうされましたか?」

後ろから声を掛けられる。後ろを振り返ると宇治和がいた。

「か、彼女は？」

そう聞くと宇治和は驚いた表情をする。

「彼女のことを知らないのですか？」

—どいつもこいつも同じことを言いやがって。

と思う上野だったが、そんなことは表に出さず口に飲み込む。

「彼女は三笠様ですよ」

三笠、それを聞いただけで上野はハツとする。

「三笠だとい！」

ここ最近、表舞台に出てきていなかった為その存在を忘れていた上野。そして少し憎悪を込めた視線を三笠にぶつける。

旧日本の政治に介入していた軍人の一人であったという認識のせいであった。

「じゃ、これにて失礼するかの」

そう言うのと三笠は大臣室から出ていった。大臣室には宇治和と上野、そして他の何人かが残る。

「宇治和、聞きたいことが山程あるがまずは一つはつきりと聞きたい。なぜアルタラス王国王女を日本国内の病院へ移送した？」

宇治和は椅子に座らず立ったまま答える。

「王女は海賊のものと思われる毒矢を喰らい、危篤の状態でした。それに一国の王女です。ロデニウス連邦の病院も国内と同水準の医療レベルを誇っていますが、日本のように治安がいいかと聞かれるとそうは言えません。なので私の権限で移送させました」

宇治和の言うことに非がない為、上野は矛を収める。

「そうか……………では彼女はなぜここにいる？」

「彼女が突然来たのです。そこを見てください」

宇治和が指さす報告を見ると囲碁盤があつた。

「囲碁？」

「ええ。まあポコポコにされましたがね」

宇治和が言う通り、要所は全て抑えられ、全滅に近い被害が出ていた。

「……………そうか」

上野はそう言うのと大臣室から出て行つた。部屋に残された政務秘書官がおどおどしていたので宇治和は聞く。

「何かカツカしているようだったが、何かあつたのか？」

「会食中に王女移送の件にて少し苛立っていたようですが、それとは何か別のことで何

か……………」

「……………」



宇治和は政務秘書官の答えにしばらく考え込むと、『ありがとう』といい、退出するよ  
う促した。

アルタラス王国王女を実質的に保護してしまったことは日本政府にとってそれなりに大きな衝撃となつてしまった。

---

## 日本国 国防省

「護衛艦かげろうが保護した民間船舶に一国の王女、しかも滅ぼされたアルタラス王国ときた……目的は話していなかったな？」

「話してはいませんが、亡命目的で間違いないでしょう」

統合幕僚幹部がアルタラス王国王女の件について話し合っていた。

「……最悪の想定は皇国がルミエス王女の身柄を要求した時です。我が国は現在国際的な地位をほとんど持ち合わせていません」

ほとんどと言ったが、それには少し語弊がある。ムーとも国交を締結し、通商条約を結ぶばかりか、日本企業が少しずつムーへと進出している。その甲斐あつて、第二文明圏国家や、情報に聡い国、日本と関係がある国は事実上の列強であると認めていた。無論ムーでもある。

「主権的な侵犯を犯さない限りは政府は強くは出れないでしょう。それに外務省はルミエス王女を亡命希望者として受け入れるつもりはないでしょう」

幹部が言った通り、外務省はルミエスを最近制度を制定した異世界留学生の一員として保護するつもりであった。

「先程、最悪の想定と言いましたが、それ以上に最悪なのが、列強の一員であるパーパルディア皇国と戦争状態となった時です。その経緯の如何では我が国はこの世界での立場などを全て失いかねません」

「いずれにせよ、全ての判断が総理に掛かっている。我々は我々にできることをやろう」雲野副防衛総隊司令がそう締めくくった。『そういえば』と宇宙海軍統合運用官が付け加える。

「フェン王国主催の軍祭ですが、まもなく護衛艦が到着します。何も無いといいんですがね」

数週間後 アルタラス王国 ル・ブリアス

パーパルディア皇国によってアルタラス王国は降伏、王族やその親族を全て処刑したが、1人その生死が未だに不明な人物がいた。アルタラス王国王女ルミエスである。

アルタラス王国王族処刑から数週間経った現在でも消息が掴めないことにアルタラス王国統治機構長官、シユサクは苛立っていた。

「まだルミエス王女の居場所を掴めていないというのか!」

「はい…………… ターラー14世については長官もご存知の通り、戦場にて騎兵隊を率いて突撃したのを確認しています。他の王族についても海外などに出向いている王族は1人もいないことを確認済みです」

「…………… やはりどこかに亡命したか?」

部下は静かに頷く。

「列強の一員である皇国と敵対した王国の王女を保護するとなると、文明圏外や文明圏国家ではありませんまい。おそらく神聖ミシリアル帝国か、ムー共和国でしょう」

シユサクは歯噛みする。もしそれが本当だしたら皇国は手出しできない。相手は列強序列第一位と第二位だ。

「…………… 本国にこのことは?」

「既に伝えてあります。もちろん亡命の可能性も伝えました」

「了解した。本国も調査をするだろうが、一応こちらにも調査をするように」

「はっ!」

## 同国 第三外務局

第三外務局の局長室にはカイオスと監察軍司令の姿があった。

「懲罰艦隊は出港準備を整えています」

「すぐに出る。フェン王国の懲罰をすぐに開始しろ」

「はー」

そう言うのと監察軍司令は局長室から出て行った。

皇国の軍港から魔導戦列艦22隻がフェン王国懲罰のために出撃する。ワイバーンロード20騎はそれに少し遅れて出撃することとなった。

フェン王国 アマノキ

今年もフェン王国の軍祭に参加する日本はかげろう型『くろしお』と、同じく『ながなみ』、そして一時米軍に原隊復帰中のタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦『チャンセラービルズ』が派遣される。長期メンテナンス明けでその就航試験を兼ねて米国より派遣された。

今回の艦隊旗艦はチャンセラービルズとなっている。転移した現在、そして在日米軍

から国連軍へとなつた今でも日本と国連軍在日米軍の合同演習は続いている為、はつきり言つて米軍の指揮下に入るのはなんの抵抗もない。むしろ大歓迎であつた。作者世界の日本はスーパーハイパーインフレが掛かっているが、実戦経験は圧倒的に米軍が上であつた。だからである。

「入港用意！」

入港用意のラッパが鳴り響く。フェン王国の港湾施設は日本と比べれば天と地の差だが、その水深は超大型タンカーレベルが停泊できるレベルまで掘り下げる工事をしたため、前回の軍祭よりも停泊しやすくなつていた。

「現在水深40m……… 余裕ですね」

「明日の軍祭まで待機になるみたいやから交代で休ましといて」  
「了解です」

「おおく。やはり巨大ですな。しかも前回のとは別の鉄船と来た」  
シハンの従者が言う。

「うむ。やはりあの鉄船を見るだけで頼もしい。日本軍はパールディア皇国の脅威を跳ね除けてくれるだろう」

「そうですね……… 気がかりと言え、パールディア皇国の要求を断つてからなん

の音沙汰もないことです。懲罰をするのかと思いきや、なんの反応もなし。逆に怖いですね」

「ああ、だが今は軍祭に集中しよう」

「御意」

剣王シハンはパーパルディア皇国の影に恐怖を感じつつも、軍祭を乗り切ることを決意する。

---

フエン王国沖 パーパルディア皇国監察軍

「フエン王国懲罰か……一年以上も空いてしまったから、おそらく奴らはそのことをすっかり忘れているだろうな」

皇国監察軍東洋艦隊司令ポクトアールが呟くと、艦長がそれに反応する。

「そうですね。しかし我々は勤めを果たさなければなりません」

「うむ。進路そのまま。フエン王国へ向かう!!」

パーパルディア皇国監察軍東洋艦隊はフエン王国を攻撃するために突き進む。

## Battle of Fen

タイコンデロガ級巡洋艦『チャンセラービルズ』を旗艦とした親善艦隊は、前回の軍祭同様、廃船に対して砲撃を行う。ワンシヨットワンキルであった。

他にも複数の演習項目をこなした後、『チャンセラービルズ』のレーダーがフェン王国に接近する空中目標を20探知した。

「対空目標、こちらに向かって飛行中。距離267km、速度350km」

「ガハラ神国ではないな？」

「はい、本艦より南東40kmを4騎にて飛行中です」

「…………… パーパルディア皇国のワイバーンか」

「だとすると、かなり不味いですな」

「念のためにフェン王国を確認を、日本の駆逐艦に戦闘配置命令」

「Yes Sir！」

チャンセラービルズの命令は“くろしお”と“ながなみ”に届く。

「現在接近中の空中目標に対して警報が発令、チャンセラービルズの戦闘配置命令受領を確認。対空戦闘用意！」

発令員が復唱し、対空戦闘準備に入る。

「チャンセラービルズのレーダー察知は早いね。さすがSPY-6」

「防空能力強化型なだけではありません。レーダー設備や指揮装置では本艦は遠く及びませ  
ん」

「いいな。たくみさん達はあれをつけているなんて……」

『フェン王国に接近中の目標、全艦の誘導弾の射程に入りました』

CICにいるレーダー士官が報告してくる。くろしおはインカムのスイッチを押し  
て答える。

「了解。チャンセラービルズからの命令を待つてね」

『了』

親善艦隊の空気は緊張に包まれる。

場所はチャンセラービルズの艦橋に戻る。

「フェン王国から応答が来ました。『軍祭に招待した国家の中で飛竜を参加させている  
国家は、ガハラ神国のみ。軍祭参加国にあらず』です！」

「了解。くろしお、ながなみに連絡しろ。くそ……際どいな」

何が目的なのか全く不明な状況下のため、戦闘配置を指示したものの、敵か味方なの  
かが分からないのであった。



『飛行物体、依然として接近中、本艦との距離、192 km。速度変わらず』  
しばらくの間沈黙が漂う。

『本艦との距離、150 km…… SM-2の射程です』

超音速ミサイルを撃たれたら僅か数分で到達する距離だ。

『本艦との距離、100 kmを切りました!』

「こちら左ウイング、トカゲ20匹を視認しました」

チャンセラービルズ艦長も自身の双眼鏡で確認をする。

「やはりパ皇か……」

「艦長、もし奴らの目的が攻撃だとしたら危険——」

「——分かっている。だが、戦争状態ではないし、攻撃を受けそうだからという理由だけで攻撃するのは不可能だし、無理だ」

チャンセラービルズ艦長は難しい判断を責められる。

「ワイバーン散開! 10騎が本艦に向かってきます!!」

見張りからの報告が上がる。

チャンセラービルズ艦長はすぐに判断を下す。

「艦隊を解け! 最大戦速、敵の位置は!?!」

「左30、降下角30!」

「取舵30!」

操舵員が復唱する間を惜しんで舵を切る。

「敵、火炎弾を発射!」

10発の火球がチャンセラービルズに迫る。

9発はなんとか回避に成功するが、残り1発が飛行甲板に命中する。

「後部飛行甲板に命中!」

「ダメージコントロール!」

『こちら応急指揮所! 第一タービンにダメージです、速力低下します』

航海長がインカムのスイッチを押す。

「何ノットまで出せる?」

『出力全開で20ノット前後、安全で行くと15ノットです!』

「18ノットで頼む。足を止めるな!」

「CIC、叩き落とせ!」

艦長の命令はCICで受け取られた。

「対空戦闘、主砲攻撃始め!」

「くろしお、ながなみとのデータ共有終了、攻撃始め!」

チャンセラービルズからの目標割り振り情報を受け取った“くろしお”と“ながな

み”は、チャンセラービルズと共に5インチ砲でワイバーンを攻撃する。

ワイバーンは再攻撃しようと旋回、体勢を整えているところを攻撃されたため、回避もままならず10騎全騎が撃ち落とされた。

「続いて、残りの10騎だ。目標割り振り終了後、即座に攻撃だ」

「データ共有終了、ESSM発射用意！」

王城を攻撃していたワイバーン10騎がまっすぐこちらに向かってくる。

「諸元入力終了、ESSM発射用意！」

電子ブザーが鳴り響く。

「Fire!!」

チャンセラービルズの前部VLSからESSM6発が発射され、くろしお、ながなみの前部VLSからは36式短距離艦対宙誘導弾がそれぞれ2発ずつ発射される。

イージス艦であるチャンセラービルズ、そして艦隊防空能力を付与されている『くろしお』『ながなみ』のミサイルは当然の如く命中、爆発四散した。

「ターゲットデストロイ！」

「他の空中目標なし。火災は未だに続いていますが、すぐに抑えられるでしょう」

艦長はハンカチで額の汗を拭いながら指示をする。

「一時的に指揮権を『くろしお』に移譲。本艦は応急処置に専念する」

チャンセラービルズからの通信は護衛艦に届いた。

「—とのことです」

通信士妖精がくろしおに報告する。

「了解。まあ一発被弾したのによく誘爆しなかったわね」

「ダメコンが優秀だったのと、当たりどころがよかったですよ」

『くろしお』や『ながなみ』もそうだが、現代艦は基本的に紙装甲である。その中の一つであるイージス艦が被弾したのに行動不能にならなかったのは僥倖と言えるだろう。

その頃、チャンセラービルズの機関室ではダメージ判定が行われていた。

「あゝくそ。第二……………第三まで逝ってらあ」

「マジか!? 火炎弾一発でここまでかよ」

ミサイルならまだしも、火炎弾一発でガスタービンエンジン3基がダメになってしまった。

「—3つのうち、1つはなんとか応急処置で使えますが、残りはなんとも……………」

機関員の報告に機関長は頭を掻きむしる。

「あゝくそっ!! 長期メンテを終えたばかりかだというのに!」

長期メンテナンスを終えて、就航訓練のつもりで派遣されたというのにまたドックへ

トンボ返りというのはまさに最悪であった。

『自力航行は可能ですが、3ノットが限界です』

「了解した。司令部から軍祭切り上げの許可を得ている。日本の駆逐艦に曳航してもらおう」

艦長がそう言うと、内線電話を切る。

「火災鎮圧しました。尚、負傷者はいません」

「了解した……………」

チャンセラービルズ艦長は『ながなみ』を見る。

「1人だけか……………」

先の防御戦闘にて生き残ったのはたった1人だけであった。いや、1人生き残れたと  
いうのが正しい。

「よく生きていましたね。本艦と日本の駆逐艦のミサイル攻撃を受けたのに……………」  
「……………」 上は相当悩んでいるだろうな」

チャンセラービルズ艦長の言う通り、撤収命令を出した後、今回の事態に際して日米  
合同会議が行われていた。

「こんな時にパーパルディア皇国軍と実質的に交戦してしまうとは……………」

当事者、しかもある意味被害者である在日米軍将官が頭を抱える。彼らに現場を責める気はさらさら無い。むしろよくその被害で収めたと言いたい位であった。

「政府がパーパルディア皇国と慎重に接触している段階でこれです。火薬庫に火薬を追加したようなものです」

「取り敢えず、撤収命令は出しといた………だがチャンセラービルズは自力航行が困難だ。護衛艦で曳航したとしても、平均20ノットも出せない」

日米両将校が色々と悩んでいるところに日本の連絡将校が一人入室してくる。

「会議中失礼します！ おい！ プロジェクター借りるぞー」

連絡将校がボードを少し操作すると、画面に明かりが灯る。

「オルタナの情報共有を開始します。先程、衛星が捉えた写真です」

プロジェクトに画像が映ると同時に、オルタナで細かい情報が付け加えられる。

「戦列艦がどうした？」

国防省に限らず、国連軍でも異世界国家の分析は進んでいるが、自分たちと比べると、肩を並べるどころか、足元にも及ばないことは周知の事実であった。だが、ロウリア王国が4000隻を超える船を配備していたことを考えると、その数だけは侮れない。パーパルディア皇国にも似たような分析をしていた。

「パーパルディア皇国の戦列艦22隻がフェン王国へ向かっていることが判明しまし

た。現在フエン王国から180kmほです」

「す、すぐそこじゃないか!? なぜ今まで探知出来なかった!？」

「え、衛星は突貫改造ロケットにて打ち上げを行っていますが、まだ偵察衛星はたったの6基しかないんです。それに偵察の大部分を波動砲艦隊に頼っていましたので……………」

日本の早期警戒探知網の脆弱性が露呈してしまった。

「現場の撤収は今日中に可能か？」

在日米軍将官が第七艦隊司令部付参謀に小声で聞いた。

「無理です。日本の駆逐艦ならチャンセラービルズを曳航しても安全圏まで離脱できるでしょうが…………… 戦列艦、最大速力12ノット前後の帆船が目と鼻の先と言っていいほどの距離にいるのです」

参謀はそこで口を止める。

「我々の権限でできるのはここまでです。退避が不可能な以上、戦闘状態に突入するかもしれません。幸い、敵の数は22隻と少ない。なんらかの<sup>武カ</sup>行<sup>使</sup>の手を打つ必要があります」

参謀の提言を受けて将官が挙手する。

「事態は我々の権限で判断できるレベルを超えています。ここは政府に任せるべきでは？」

在日米軍将官の提言をほぼ受け入れる形でこの会議は幕を閉じた。

日本国 首相官邸

「我々に放り投げたのか……………」

上野は難しい判断を迫られ、眉を顰める。

「敵性艦隊は既に艦隊のSSMの射程に入ってます。ほぼ目と鼻先なのですよ!? 退避が不可能な以上、早く手を打たなければ……………」

広瀬国防大臣が珍しく声を張り上げる。

「…………… イージス艦を自沈—」

上野の言は広瀬が机を叩いたことで遮られる。

「日本円にして一隻数千億円掛かる船を、『はいそうですか』と言って認めらると思うか!? それにチャンセラービルズは国連と米軍の所有物だ! 我々の判断でできるわけじゃない!」

チャンセラービルズは前々から言っている通り、今は米軍に原隊復帰しているので米軍の所有物となっている。

「じゃあ曳航して—」



「帆船といえど10ノット近く出ているんです。こうして話している間にも100kmを切ります。ここは早く対応しなければいけない！」

「じゃあ外交……………いやなんでもない」

『外交を通じてどうか』と上野は言いかけたがパールディア皇国とのチャンネルが無いことを思い出したのと、広瀬国防大臣と宇治和外務大臣からキツく睨まれたので言葉を口に飲み込む。

「いずれにせよ、護衛艦退避が間に合わない以上、我々も対応する必要がある」

「フェン王国海軍は？」

「水軍ですが……………はっきり言うと、フェンが100%負けます」

広瀬がはつきりと断言したので上野は食い下がるのをやめる。

「わかった……………ただ、あくまで自衛戦闘だ。言い分は任せる」

今までの食い下がりぶりから一転して攻撃を認めたので広瀬は軽く驚く。

「分かりました」

国防省は親善艦隊に迎撃命令を通達する。

チャンセラービルズ 艦橋

「…………… 了解です」

チャンセラービルズは司令部との通信を終える。

「聞いての通りだ、『くろしお』は艦隊より離脱、敵性艦隊を迎撃せよ」

『了解』

画面越しにくろしおが敬礼しながら答えると、画面から消える。

「今年の占いが見事に当たってしまいましたな」

艦長が後ろを振り返り、副長に聞く。

「それはどう言うことだ？」

「あ…………… いや…………… その…………… 日本の占い——おみくじなのですが、新年に

引きに行ったのです。そしたら——」

『見事に大凶を引きました』と引き攣った笑顔で言った。思わず殴りたくなる衝動を

どうにか抑えつつ艦長は続けて問う。

「で、そのおみくじは結んだのか？」

「え？ なんですかそれ？」

まさかと思いつつ、副長の服を探る。すると折り畳まれた紙が出てきた。それを開く

と——

「……………」

艦長はそれを見るなり副長を殴った。

「すまん。いじめだとかなんとか言われようとお前を絶対に殴るしかなかった」  
艦長の左手に握られていた紙に書かれていたのは『大凶』であった。

くろしお CIC

チャンセラービルズでコントのような展開が起こっていることを知らずに、くろしおは任務を遂行する。

「現在、フェン王国沖60km。敵性艦隊までの距離60km!」

「…………… フェン王国水軍とパーパルディア皇国海軍が衝突します」

くろしおはリーダー画面を注視する。

フェン王国水軍 旗艦『剣神』

望遠鏡を使って見張りをしていた乗員が水平線上に艦影を視認する。

「前方! 敵艦を発見、パーパルディア皇国軍と思われる!」

「来たな、戦闘配置! 祖国を守るぞ!!」

「ウオオオオオオオオオ!!」

クシラの掛け声に声を張り上げる。

「奴らはこちらに魔導砲があることを知らない。それを最大限活かす」

『剣神』には文明圏外国家としては珍しく魔導砲が搭載されていた。ただ、皇国の魔導砲と比べると性能差ははつきりとしていた。

皇国艦隊との距離が3 kmまで迫る。

「後、およそ2 kmで射程です」

「ふふふ、奴らの驚く顔が浮かんでくるな……」

射程まで後1・3 kmの時点で異変が起こる。

「敵回頭! 腹を向けてます!!」

「何!? 奴らの魔導砲は1 kmではなかったのか!」

クシラが言った射程1 kmの情報はかなり古い。既に皇国では射程2 kmの爆裂式に置き換わっていた。

「敵艦発砲!!」

「くそっ! 当たるなよ!!」

クシラの願いは叶わなかった。

剣神の後続船3隻が被弾、即沈没する。

「後続艦3隻轟沈!!」

パーパルディア皇国艦隊から散発的に砲弾が発射される。命中精度は日本軍と比べれば低い、それでも心理的効果は大きい。

「射程まで100m!!」

「よし! お前らは全員退艦しろ!」

「で、ですが—」

「問答無用! わしも魔導砲を撃つたらすぐに逃げるからな。先に行け!」

「…………… 分かりました。御武運を」

そう言うのと、続々と海に飛び込んでいく。

「さく、パーパルディア皇国! ただで蹂躪はさせんぞ!!」

クシラは敵艦との距離を目分測で測る。そして魔導砲の発射タイミングを待つ。

「喰らえ!!」

魔導砲に点火すると同時にクシラは海に飛び込む。

水面に顔を出すと、どうやら一隻に着弾したらしく、炎上していた。

「よし。1発当てられただけでもよき」

「クシラ様、つかんでください!」

乗員の手を借りて大きめの木材を掴む。

「何も……………何も出来ませんでしたね」

「ああ、だが奴らに対して心理的ダメージは与えられた筈だ」

クシラの言う通り、フェン王国懲罰艦隊旗艦では若干の混乱に包まれていた。

『クマシロ』、火災を鎮火しました！」

「驚いたな……………まさか魔導砲を所持していて初弾で当ててくるとは」

「ええ、皇国の魔導砲と比べれば性能は下ですが、それでも魔導砲を所持しているというのは……………」

ポクトアールは腕を組み直す。

「……………ワイバーンロード隊との通信が途絶し、何か新兵器を配備しているのかと思っただが、そうでもなかった……………一体なんなのだろう？ この浮遊感は……………」

「まだ本隊では無いのかもしれませんが。或いは事故とか？」

憶測が憶測を呼ぶがポクトアールは議論を打ち切る。

「議論はそこまでだ。いずれにせよ、我々が知らない何かがある。気を引き締めていくぞ」

「了解」

艦隊は10ノットでフェン王国に突き進む。

くろしお CIC

「フェン王国水軍、全滅した模様」

「敵性艦隊との距離、50km！ まもなく有視界域に入る」

「合戦準備！ 対水上戦闘用意！」

「対水上戦闘用意！」

電子ブザーが鳴り、戦闘配置に入る。

「対水上戦闘用意よし」

「敵性艦隊を敵艦隊とする。ターゲットナンバー<sup>アルファ</sup>α1からアルファ22とする」

指令を下す砲雷長にくろしおはニヤリと笑いながら言う。

「砲雷長。使用武装は主砲とC I W Sのみ、マストを狙って」

「は？ マスト、でありますか？」

「その通り。奴らの船の動力部を破壊して撤退を促すわ」

すると、砲雷長は水を得た魚のように生き生きとする。

「分かりました！ 主砲発射管制は手動にて行う！ 砲術長！」

「はい」

「砲技技能審査主席艦である本艦の力を、敵さんの存分に見せつけてやれ」

砲術長は笑みを浮かべる。

「了解！」

「現在14：19、敵艦隊との距離40km、有視界距離に入った！」

「まずは軽く挑発します。魔信の周波数を合わせて」

「…… 合わせました」

くろしおはインカムのスイッチを押す。

「艦長！ 正面に艦影を認める！」

「艦影!? まさか本隊か？」

見張り員は望遠鏡の倍率を調整する。

「いえ、一隻だけです…… なっ!？」

「どうした？」

「巨大な船です、30ノット以上は出ています！」

「さ、30!？」

「文明圏外国家であるフェンがそんな船速を叩き出せるほどの船を作ったと言うのか

？」

慌てる艦長に対してポクトアールは冷静であつた。



「たったの一隻ならば問題ない。踏み潰してくれろ」

見張り員が追加の報告を上げる。

「未知の国旗です！ 白地に赤丸！ 白地に赤丸！ 太陽のような国旗です!!」

あつという間に巨大船は艦隊から2 kmの距離で並走する。

『「こちらは日本国防海軍である。貴艦隊はフェン王国領海に近づいている。直ちに進路変更されたし。繰り返す—』

艦隊の使用する魔信に突然知らない声が入ってきたので通信士は慌てる。

「司令！ 魔信に日本国海軍と名乗る者がコース変更を呼びかけてきています」

「皇国に対して航路変更しろだと？ 随分な物いいじゃないか。面白い、応対しよう」

ポクトアールが魔信のスイッチを押す。

「こちらパールディア皇国監察軍東洋艦隊司令、ポクトアールだ。皇国に対して随分と傲慢ではないかね？」

しばらくして凜とした女性の声が聞こえてくる。

『「こちらは日本国防海軍、護衛艦『くろしお』。パールディア皇国東洋艦隊に告ぐ。』

貴艦らはフェン王国領海に接近している。直ちに進路を変更されたし』

「……………」  
失礼だと思うが、貴官は女性かね？」

『「そうです。艦長のくろしおです」

「驚いたな……まさか女性が艦長だとは……いかにいかに。それで、進路変更をしろと？　悪いが断る」

『最後の警告です。フェン王国領海に近づいています。直ちに進路を変更してください』

「さつきから言っている通り、任務だ。撤退はできん」

（巨大船に砲撃しろ）

ポクトアールは視線で艦長に合図を送る。

「砲撃用意！」

『そうですか……』

「撃てっ!!」

左舷の魔導砲が発射される。

「う、撃ってきました！」

レーダー士官が絶叫を上げる。

「弾道は!?!」

「命中しません」

「不意打ちとは卑怯やな……」

「艦長？」

くろしおがドスの効いた声を出したので砲雷長は慌てる。

「向こうから仕掛けてきたんや。砲雷長、やったるで」

（関西弁……本気モードで怒っている証拠だ……）

砲雷長が冷や汗を掻きながらそう思った。

「了解……主砲発射管制手動にて行う。目標！  $\alpha 4$  のマスト！」

砲術士がジョイスティックを操作しマストに照準を合わせる。

「照準よし、射線クリア！」

「いてまえ！」

くろしおが叫ぶ。

「撃ち方始め！」

「発砲！」

ジョイスティックに付けられたトリガーを引く。

6 km も離れていないので、砲弾はすぐに着弾する。

「着！ 目標破壊！ 続いて  $\alpha 5$  のマスト！」

「いてまえ！」

「撃て！」

くろしおから127mm砲が放たれる。

「第二目標破壊！」

護衛艦くろしおは最大限の緊張を保ちつつ、サンドバッグ戦闘をこなしていく。

「半数のマストを破壊しました」

「了解。取舵一杯、進路を2-2-0へ」

任務をこなした『くろしお』は回頭しパーパルディア艦隊より離れていく。

「巨大船、離れていきます」

「これ以上はやらないというのか……………何がともあれ、感謝せねばならんな」

副長が司令と艦長の元に近づく。

「報告します。損傷艦11隻、行動可能艦艇11隻。尚、多大な負傷者を出しましたが、

死者はいないとのことですよ」

「死者が出なかった？ あれだけの攻撃を受けて？」

「はい、おそらく敵の攻撃がマストのみだったのが影響しているかと……………」

ポクトアールの脳裏に顔も知らない日本海軍の女が浮かび上がった。

「ハハッ！ ここまで手酷くやられるとはな……………こんな報告、狂ったとしか思われ  
んだらうな」

ポクトアールは自虐的に言う。敵の攻撃は全てマストを狙ってやったものだ。偶然でできることではなかった。

「動ける艦は曳航していけ。任務は失敗だ」

勝敗は決した。

フエン王国沖海戦と付けられたその海戦は、世界史上初の『死者を出さずに勝敗を決した海戦』として歴史に残ることとなる。

1週間後 パーパルディア皇国 第三外務局

「失敗しただど!? なぜだ! なぜ!?!」

タール課長が血走った目でポクトアールを問い詰める。その理由は懲罰艦隊が敗北したためだ。

「よくも帰ってこれたな! お前たちが負けたせいで文明圏外の蛮族がこちらに向かって反抗してくるかもしれないのだぞ!!」

(なぜこんな奴の下につかなければならないのだ………)

叱責を受けつつポクトアールはそう考えていた。第三外務局が指揮権を持つ監察軍は、その装備品全てが正規軍からのお下がり。そして構成員もなんらかなの問題を起こ

して飛ばされたものか、或いは経済的問題から手軽に入れる監察軍に入隊したものなど多岐にわたる。

そんな者が大多数の中、ポクトアールは正規軍から監察軍に出向し、そのまま監察軍東洋艦隊司令に着任したという経緯があるものの、歴戦がつくほどの力量の持ち主であつた。

(そんな俺でも、あの巨大船をみくびつてしまったがな……)

「それになんだ！ この報告書は!? 『皇国の戦列艦より遙かに巨大な鉄船、そしてこちらを優る船速』、『全ての砲撃がマストに命中』。ムーの小説家でもこんな物を書けないぞ? あん?」

(こいつ、ムーの『ラ・カサミ級』を上回るかもしれないということを理解していないのか? 報告書に漏れがあつたか? いや、しっかりと書いたはずだ)

「おい、こつち見ろ」

ポクトアールは顔を上げる。

「はっ、お前の顔をよく見りゃあ、蛮族みたいな顔をしているな」

タールはそういうものの、ポクトアールは聖都パーネルウス生まれ、両親どちらとも皇国人である。

「おことばですが、私の両親は皇国人です。それにこの顔は敵の攻撃の破片によるかす

り傷です。それで蛮族と一緒にされましても――」

「ああ!?　なんだその態度は?　ふざけるのもいい加減に――」

ポクトアールがターラの後ろの扉が開いたことに気づくが、ターラの身体によって隠れているため誰が来たのか分からない。

その事に気づかずタールは続ける。

「――しろ!　この――」

タールは拳を振り上げるがそこで後ろから手首を掴まれる。

「――だ、誰――か、カイオス局長!――」

タールはカイオス対し礼をする。

「タール君、敗北したのは確かに問題だが、彼は敵と最前線で戦ってきたのだ。責めるのはそこまでにしたまえ」

「は、はっ!――」

「それでポクトアール司令」

カイオスは近くにあった椅子を引き寄せて座る。

「報告書は一応読んだが、所々理解不能な点がある。詳しく教えてもらえんか?」

「分かりました。まず最初に――」

ポクトアールはあの海戦で起こった全てのことを細かく話した。

「なるほど。ようは日本に潰されたのか」

「はい。奴らの巨大船、鉄船はムーの機械動力船のように大きく、そしてムーのよりも速かったのです。それにその護衛艦『くろしお』とかいう船の艦長は、声だけで言えば女性でした」

「……信じられないな。まさか日本がそのような力を持っているとは」

「日本のことをご存知なので？」

「ん？ ああ、全てを知っているわけではないがな」

カイオスは自身の知っている日本の情報を話す。

「そ、そうだったのですか」

「すまない。私ともう少し日本のことを詳しく調査をしていけば……」

「いえ、局長が悪いわけでは——」

——バタン！

ノックもせずに職員が部屋に入ってくる。

「失礼します！ たった今、日本国の外交官が窓口に来ています！」

カイオスは静かに立ち上がる。

「噂をすればなんとかなだ。日本国の外交官を通しなさい。課長級全員で対応する」

「え!? 局長、それはあまりにも——」



カイオスはタールのことを鋭く睨む。

「では行くか」

タールは去り際にポクトアールのことを憎悪を込めた視線で睨んで去った。

日本国外務省外交官の杉崎すぎさきと由真崎ゆまさきはパーパルディア皇国との武力衝突の和解のために派遣された外交官であつた。

「これだけの意匠ができるとは、さすが第三文明圏最強というだけあるね」

「ええ、何というか…… イタリアのスフォルツァ城のような感じですよ」

しばらくして彼らの元に職員が近づく。

「お待ちせしました。局長が対応することなのでご案内いたします」

「え？ 局長がですか？」

職員が言ったことに思わず聞き返してしまう由真崎。

「はい、局長が対応すると申していました」

「パーパルディア皇国にとつても重要なものになるという認識でしょうかね」

「はい、出てくるとしても課長級かと思つたのですけどね」

2人は職員の後をついていく。

「こちらです。日本国の外交官をお連れしました」

『通しなさい』という返事が部屋から返ってくる。

中に2人が入ると、局長らしき人物以外にも4人いた。

「こちらで名前を名乗ってください」

「分かりました。私は日本国外務省外交官の杉崎と申します。こちらは――」

自己紹介をしつつ、杉崎は内心『会談というよりは面接だな』と思っていた。

パーパルディアア皇国の出席者の名前を挙げると以下になる。

・ 東部担当部長 タール

・ 東部島国担当 バルコ

・ 北東部島国担当係長 ニコルス

・ 群島担当主任 メンソル

そして第三外務局局長カイオスと、第三外務局の上層部全員が出てきているようだった。

（あの衝突はパーパルディア皇国にとっても重要ということか……… 力が入るな………）

杉崎は襟を正しつつ切り出す。

「今回我々が派遣されたのは、先日の武力衝突の件についてです。私たちは、不幸な行き違いから衝突してしまいました。よって、その関係修復と国交樹立の可能性の模索に参

りました」

「国交の樹立に関しては、できればいいという程度で日本は提示していた。

バルコが急に立ち上がる。

「不幸な行き違いだ?! 監査軍に攻撃を仕掛けておいて、何事も無かったかのようなその言動! 無事で済むと思っているのか!!」

バルコはいつも文明圏外国家に対して行うのと同じ口調で日本人に大声で叫ぶ。

杉崎は若干臆するもの、由真崎は臆することなく話す。

「いいえ、先に攻撃してきたのはあなた方です。我々は、あくまでも反撃—そう、自分達にふりかかった火の粉を払っただけです」

「皇国監査軍を火の粉だ?!」

バルコの目はすっかり血走っていた。カイオスが課長を手で制し座らせる。

「関係修復ですか……………」

局長カイオスは考え込む。

(何を要求してくる? いや、それよりもお互いのことをよく知らない。ここは情報を引き出すか)

「ふむ……………」 私はもとより、我々パーパルディア皇国の者は誰も貴方たち日本の

事は良く知らない。まずは貴方たちの国がどういった国なのか、教えていただきたい。

我々と国交を結ぶに値する国なのか、私は知りたいですな」

日本国外交官の杉崎は微笑む

「紙媒体しかありませんが、写真付きです。我が国を紹介するための資料です」

由真崎がパーパルディア皇国の各人に資料を配布する。

パーパルディア皇国の面々はその資料を見る。

「……………!?!」

タールが資料を詳しく読んでいると、ある事に驚き顔を上げる。

国土面積は大した事無く、中規模国家程度である。しかし、人口が1億4千万人と、皇国の7千万人よりも多い。

ロウリア王国のように人口が多い国が稀にあるので、大して驚いているわけではない。だがその次が問題だった。

「国ごと転移だ?!」

ロウリア王国とクワ・トイネ公国との戦争―ロデニウス大陸統一戦争―の少し前、中央歴1634年に国家丸ごとこの世界に転移してきたと記載してある。

国家ごとの転移であれば、皇国が、世界が歴史上一度も確認できなかった事実につじつまが合う。

しかし、ムーの神話や古の魔帝の未来への国家転移の神話以外に、国ごとの転移など

聞いたことが無い。

第三外務局からすると、彼らが戯言を言っているようにしか聞こえない。

「馬鹿馬鹿しい!! そんな…… そんな、国ごと転移などあり得るわけない! おま  
えたちは皇国を馬鹿にしているのか!？」

東部担当課長が声を荒げる。

「転移については我が国でも原因がまだ解っておりません。ただ一つ仮説が提唱されて  
います」

「ほう…… それは一体なんでしょうか? お聞かせ願いたい」

杉崎は由真崎に目配せする。

「学会、そして政府内部からも言われている事なのですが…… 『我々は神によつて召  
喚されたのではないか』と」

バルコが口を開こうとするがカイオスが手で制する。

「なるほど…… 戯言にしか聞こえませんが、それなら辻褄が合いますな。貴国のこ  
とはよくわかりました。その上で皇国に何を求めるのでしょうか?」

「はい、こちらをご覧ください」

杉崎が鞆から公文書を取り出す。

「な、何?」

メンソルが思わず声を上げる。

そこに書かれていた内容は――

・フェン王国に対する武力行使を命じた責任者が代表し、軍祭主催国フェン王国に公式に謝罪すること。

――のみであつた。

(日本国……商人からの情報よりもかなり温和だな。てつきり賠償を要求してくるのかと思つたがな……。いや、これはこちらを凶つているのか?)

日本国政府は賠償案も含めようとしたが異世界国家戦略局の助言、『刺激するのはやめろ皇国のプライド高し』と言われた為、謝罪のみの要求となつていた。

「貴様ら、皇国に対して頭を下げるだど? 舐めるのもいい加減にしろー!」

メンソルが紙をビリビリ引き裂く。

「舐めていません。我が国と貴国の間では国交はありませんが、それでも国と国の対話なのです。この位は当然なのでは?」

杉崎は慎重に言葉を選んで話す。皇国のプライドがどの位高いのかを見極める為だ。

「ハハハっ!! 第三文明圏外の蛮族が粹がるなよ。人口だけが多いようだが、それでも軍事技術は皇国の足元にも及ばないだろうさ!!」

(これ以上は無理だな。諦めよう)

「では、この要請は受け入れれないと？」

「当然だろう」

杉崎と由真崎が資料を鞆に回収すると席を立ち上がる。

「分かりました。とても残念です。これにて失礼します、貴重なお時間ありがとうございました」

日本の外交官が外に出たのを確認するとカイオスも立ち上がる。

「お前たち、会議室の片付けを頼む」

それだけを言うと、カイオスも部屋を出ていった。

「予想以上でしたね。これはやはり国交樹立というわけには行かなそうです」

由真崎が歩きながら杉崎に言う。

「ああ、だが収穫なしというわけではない。本省からの指示である『皇国の精神レベル』という目的は達成できた。技術レベルは近代並みだが、国家精神は中世以下かもな」

「は……ん？」

由真崎が後ろを振り返ったのだ、杉崎も顔を後ろに向けると、第三外務局局长、カイオスらしき人物がこちらに向かって走っていた。

「我々に用でしようかね？」

「まあ、試みましょう」

2人は行き足を止めて待つ。

「はあ、はあ……… すまない、日本の外交官殿。ここではあれなので、後で私の私邸に来てはくれないだろうか？」

2人は顔を見合わせる。暗殺の危険性があるというのにタダで乗るわけにはいかなかった。

「あなたたちは我々のことを信用していないのだろうが、どうか頼む」

カイオスが頭を下げる。

(ここは賭けてみるか)

杉崎が口を開く。

「分かりました。我々はどのようにな？」

カイオスがハツと顔を上げる。

「そうか、ありがとう！ 後で、君たちの宿泊先に私の使用人を使いに出す。それに付いて行ってくれ」

「分かりました」

杉崎と由真崎は足早に立ち去る。



（おそらくカイオスさんとの個人的な接触になるだろう）

となれば、それは皇国の意思に背いている可能性がある。あそこで無理に会話を引き伸ばせば、何か疑いを掛けられてしまうかもしれない。そう判断したのだった。

（よかつた。これでなんとか希望を持てる）

カイオスが会談の際にバルコラの暴言罵倒を止めなかつた理由は、皇国の、外務監察局の目を避ける為であつた。

「あの小娘に邪魔されたらまずいからな………」

「何がまずいのですか？」

突然の声にカイオスはビクツとなる。

「何かまずいのでしょうか？」

物陰から出てきた人が再びカイオスに問う。その顔はローブに包まれていてはつきりとしなかつた。

「いえ、何もです」

「そうですか……… ならいいです」

その人影が再び物陰に隠れる。カイオスがそれを追うと、既に消えていた。

「くそつ。暗部か………」

パーパルディア皇国の情報管理を司る機関。パーパルディア皇国情報目録監察機関、通称暗部の局員だろう。

「まずいな、全て聞かれたかもしれない……いや、引き下がるわけには行かない！」  
もはや自分の命すら賭けてくる必要性が出てきたが、カイオスは皇国の将来のため動くことを決意する。

---

### レイフォル王国沖

第二文明圏に位置する『レイフォル王国』。その沖合110kmにて帝国史上最大最強の戦艦―『グレード・アトラスター』が波を切り裂く。

やがて、『グレード・アトラスター』に搭載された巨砲、『45口径46cm三連装砲』2基が旋回する。

「撃ち方始め！」

レイフォル王国沖で46cm砲の砲音が鳴り響く。

## War

レイフォル王国沖

「撃ち方始め！」

大海に巨砲が鳴動する。

前部に設置された46cm砲6門から近接信管付きの砲弾が発射される。

「着発まで、5秒——着発！」

遠い上空でポツと灯りが灯る。

『10騎撃墜、残りの目標、尚も本艦に飛行中』

「主砲の第二射は間に合いませんね……………近接防空戦用意」

主砲の衝撃波を避ける為、遮蔽物に隠れていた水兵が対空機銃に付く。

「配置急げえ！」

40mm機銃と、20mm機銃にそれぞれ取り付く。

「高角砲の射程まで、後2分！」

高角砲要員は発射命令を待つ。

「電探連動よし、射撃用意——撃ち方始め！」

「撃つ！」

127mm3連装高角砲が火を吹く。初撃で3騎撃墜する。

「残り7騎！ 距離10km！」

既に高角砲の射撃限界距離まで近づいている。

「次弾装填よし！ 撃て！」

ダダアーン!!!

「2騎撃墜！」

「機銃射程まで10秒、射撃用意！」

40mm機銃要員が引き金に手をかける。

「撃て！」

若干重々しい音ともに40mm弾が発射される。その曳航弾を交えた射撃は昼間であつてもはつきりと視認でき、遠くから見れば神秘的な光景にも見えるだろう。だが、それは敵を倒すための光景であつた。

「20mmの射程にすぐ入ります！ 射撃用意！」

「撃て!!」

20mm機銃が火を吹く。

40mm機銃からの攻撃を受けても突撃を敢行していたワイバーンは、20mm機銃が加わった濃密な弾幕に恐れ慄いたのか、機銃の射程から離れていく。

「バカめ。高角砲の餌食だ！ 撃て!!」

高角砲から近接信管付きの砲弾が発射される。

レーダーと連動した高角砲は編隊を組んでいるワイバーンの中心に到達。信管が作動し、撃墜した。

「全騎撃墜」

『対水上レーダーに感あり、レイフォル王国の戦列艦と思われます』

戦闘を眺めつつ、ラクスタルは思索に耽る。

（歴史を繰り返す運命なのか……………）

ラクスタルはこうなった経緯を振り返る。

時系列は巻き戻り、中央暦1638年の春まで戻る。

中央暦1638年　グラ・バルカス帝国　帝都ラグナ

「ここグラ・バルカス帝国の帝都ラグナの外務省にて会議が行われていた。

「今度はパカンダ王国を通せか……………」

臨時外務大臣が唸りながら言う。

「はい……………」

「足蹴にされるのは業腹だが、それが向こうの通例である以上仕方ない。ここはもう少し粘り強く続けよう」

「はい。それと—」

職員が何か悩んでいる様子なので外務大臣が問う。

「どうした？」

「あ、いえ、その。未だに結果が出ないことに腹を立てて、今あるお方が来ています」

「む？ 一体誰だ」

「…………… 皇族の中で融和派筆頭のハイラス様—」

ガタツ!!

外務大臣が椅子から立ち上がる。

「そう言うことは早く言え！ すぐに行くぞ！」

スーツを着ながら大臣は走って応接間に向かう。

「失礼します。申し訳ありませんハイラス—」

「よい。仕事で忙しかったのだろうか？ まあ掛けたまえ」

「は、はい」

皇族の中の皇族、現皇帝『グラ・ルークス』とは異母兄弟であることもあり、かなりの影響力を持つ。

「進捗は芳しくないか？」

ハイラスの言葉に頭を下げる大臣。

「申し訳ありません。行く先々で足蹴にされておりました……………」

ハイラスは手を顎に添える。

「仕方あるまい。向こうからすれば我が帝国のことを知らないのだ。粘り強く行こう」

「ありがたきお言葉……………」

「それはそうと、シエリア次官はどうしたのかね」

ハイラスの何気ない呟きに大臣は若干ビクツとなる。

「シエリア、ですか？」

「ああ、彼女が私に融和に関する直談判してきた時があつてな」

『シエリアの野郎』と拳を握り締めつつ思った大臣。

「で、シエリアは何と言つたのですか？」

ハイラスはどこか悲しげな雰囲気を漂わせながら答える。

「『あなたはパカンダ王国でお亡くなりになるかもしれないかもしれません』だとさ。私はお前が預言者か何かかと言つてやったよ」

（パカンダ王国で死ぬ？ どういうことだ？）

「まあ、忠告された以上、緊張を持って行くとするかな」

（『行くとする』!?!）

「ま、まさか、パカンダ王国に行かれるおつもりなのですか!？」

ハイラスはさも当然かのように答える。

「うむ。そのつもりだが？ ああ、護衛は要らんぞ」

『お前が要らなくともこっちは付けなきやいけないんだよ!!』と、心の中で罵声怒声を浴びせつつ、何とか説得しようとする。

「申し訳ありません。既に数力国から足蹴にされている上、その全ての国家が帝国と比べてレベルが低い——そう、謂わば蛮族です。今までは処刑されるなどといった過激な行動はしていませんが、もうこれ以上は分かりません。どうかご再考を……」

大臣の進言にハイラスは手を顎に添える。

「ふむ…… 貴様の言うことはよく理解している。だが先も言った通り、私は融和推進派だ。で、ある以上、いくしかあるまい」

大臣はハイラスの目を見る。覚悟の据わった目であった。

「…… わかりました。こちらで何とかいたしますが、帝王の許可は絶対に必要

」



「それなら心配ない。ほれ」

ハイラスはそう言いながら懐から紙を取り出す。

「拝見します……………!?!」

そこに書かれていたのは、帝王『グラ・ルークス』直筆の許可証であった。

(流石だ。異母とは言え、一応血の繋がりはあるからか、この行動力……………)

「……………は〜」

思わずため息が出てしまう。どうして皇族はこうも癖の多い人物ばかりなのだろうかと大臣は思った。

「わかりました。ですが最低の護衛はつけさせてもらいます」

「よいよい、任せる」

そう言うハイラスは徐に立ち上がり、部屋から出て行った。

「は〜。寿命が縮む……………おい、今すぐ仕事に掛かれ」

大臣は部下に命じた。命じられた部下は一礼すると部屋から出て行く。

「なぜだ、なぜシエリアがハイラス様がパカンダに行くのと知っていた?」

疑問が尽きない大臣であったが、気持ちを切り替えて仕事に取り掛かるのであった。

そして運命の日がやってきた。

ハイラスはパカンダ王国にて使節団と合流、そしてパカンダ王国外交局の応接間へと

通された。

「事前に聞いてはいましたが、まさかハイラス様とここで会えるとは……」

職員が思わず涙を流す。グラ・バルカス帝国内での皇族の影響はかなり大きいからだ。

「気持ちにはわかるが、仕事に集中しよう」

「はい……」

大広間を通り、いくつもの通路を抜けると、一際大きな部屋に案内される。従者らしき人物が扉を開けて、『どうぞ中へ』と案内する。

部屋に入ると、驚きの光景があつた。

「ふん。どんな奴かと思つたら、ただの蛮族ではないか」

ピキッ

明らかに聞き間違いではない、眉間に力が入る音が使節団の耳に入る。

「どうも、私はグラ・バルカス帝国使節団のハイラスと申します」

他の面々も挨拶をしていく。

「ハッ！ 外交窓口であるパカンダ王国を通さず、直々に列強であるレイフォル王国に出向くとは……流石世界を知らない蛮族だな」

ピキッ

ハイラスは言い返したくなる衝動を抑える。世界を知らないという点ではまさにその通りだからだ。蛮族を除いて………。

「我が国、パガンダ王国は、第二文明圏列強国レイフォルの保護国である！　そして我が名はパカンダ王国外交貴族、ドグラスである」

ドグラスは足をもの上に乘せる。

（なんだよこれ!?　レイフォルともう一つの国の対応が遥かにマシじゃないか!?)

グラ・バルカス帝国外交官が内心で憤慨する。

帝国が足蹴にされたと今まで思っていたが、このパカンダ王国のドグラスとやらの対応はそのレベルを遥かに超える。

しかし命令は、『対話による融和』である。帝国臣民、そして外交官であるなら、それを忠実に実行しなければならぬ。

「申し訳ありません。今まで出向いた国家に対しても説明をしていますが、我が国は国家転移という現象によりこの世界にやってきました。現在我が帝国には他の国家との繋がりがありません。どうか仲介をお願いしたいのです」

恐らく、グラ・バルカス帝国が元いた世界、『ユクド』の他の国家が今の状況を見たら『気が狂ったか?』と思うほど下手に出ていた。

「ふん。ならこれを実行しろ」

ドグラスが質の悪い公文書をグラ・バルカス帝国外交官に渡す。

・第二文明圏との交易に際してはパガンダ王国を通し、関税をかける。関税率は項目により――

・パガンダ王国に対し、第二文明圏国家への口利き料金を金に建て替えて支払う。各国への額は――

・パガンダ王国を動かすために当外交局が稼働するため、外交長ドグラス個人に金及び関税の一部を納入する。額は――

「は？」

思わず間の抜けた声を出す外交官。

後ろからハイラスの護衛役である海軍軍人が公文書を見る。

「な!? これは賄賂だけで空母一隻建造可能なほどの金額じゃないか!」

「それになんだこの関税率は!? 常識の範囲を超えているぞ!!」

声を荒げるグラ・バルカス帝国人にドグラスは冷たい視線を浴びせる。

「これぐらいで大騒ぎをするな。むしろこれだけで済んでいるのだぞ」

ドグラスの言にグラ・バルカス帝国使節団がスツと静まり返る。外務省に限らず、様々な機関で言われていたことだが、この世界の国家は程度が低いと。だがこのパガンダ王国はもはや程度が低いというものではなく、人間以下ともとれない国家であった。

今まで黙っていたハイラスが静かに口を開く。

「私はグラ・バルカス帝国の皇族です」

「ほう。蛮族の王様の一筋か。で、何だ？」

ハイラスは机の下で拳を握りしめる。

「この要求はあまりにも法外すぎます。もう少し常識的範囲に留められないでしょうか」

「ハッ！ さつきも言ったが、これでも少ない方だぞ？ うん？ どうする？」

「国家と国家の対話とはとても思えません……」

「貴様らをいつ国だと認めた？ あん？ この要求を呑めば、国として認めてやるぞ？」  
ブチッ

どこかの血管が切れる音が部屋にいる者の全ての耳に入る。音源の主が静かに立ち上がる。

「礼を失する数々の言動、目に余る……貴国らは外交相手を粗雑に扱う程度の品格しか持ち合わせておらんのか！」

ハイラスがキレた。

「こうして我が帝国が下手に出ているというのに!!」

一頻り言った後、ハイラスは『あ、やってしまった』という顔になる。シエリアから

の忠告を心に留めていたのに、その全てがドグラスの失言に持つてかれてしまった。

「蛮族の、たかが皇族の一員がパカンダの王族であるドグラスに反抗するとは………  
フツ、衛兵!!」

ドグラスが声を張り上げる。すると、武装した兵士が扉を開けて入ってくる。

「どうしましたか!?!」

「其奴が不敬を働いた。不敬罪で拘束せよ」

「はっ!」

衛兵がハイラスのことを拘束しようとするが、護衛の軍人が少し妨害をする。

「グワっ!」

衛兵がハイラスに夢中になって、注意がこちらに向いていない隙に背中を強く押す。

「こちらへ!」

使節団を連れて部屋を出て行く。

「何をやっている! 早く追わんか!!!」

「奴らは不敬罪を働いた犯罪人だ! 絶対に捕らえろ!」

パカンダ近衛兵が出勤する。

使節団を連れられた海軍軍人は先頭に立ち、何とか脱出を試みる。だが場所が悪すぎた。部屋の位置が捻くれた場所にあるせいで外に出るまでが遠い。

「いたぞー！ あそこだ！」

「まずい!!」

急いで反対方向に向かうが—

「いたぞー！」

包囲されてしまう。

「クツ………逃げ場がない」

『せめて銃があれば』と強く思った軍人であった。

「蛮族にしてはまあ頑張った方だな。大人しく縄に突いてもらおう」

使節団全員が拘束される。

「はっはっはっ!! 情けないのく。あれだけのことを言っておきながら捕まるなんて」

ドグラスがハイラスのことを笑いながら言う。

「まあお前は俺に対して不敬を働いたからな。即日処刑だ」

使節団全員が驚愕する。皇族を不敬罪—ならまだ分かるが、あまつさえ処刑しような

どと言いつ出したのだ。

「な、何を言っている!?!」

もはや理解不能であった。

「待て。ここいつらも連れていけ」

使節団全員が一緒に連れて行かれる。

「本当に処刑するつもりなのか!？」

「当然だろ?」

「ふざけるな!」

声を荒げるハイラス。たしかに不敬を働いた。だがそれでも処刑というのはないだろう。

しばらく歩かされて、城から離れた場所に到着する。

「これより犯罪人の処刑を行う」

ドグラスが高らかに宣言する。

「罪状、王族に対し不敬を働いた罪」

あまりにも理不尽な行動に非難を浴びせる使節団。

「ふざけるな! こんなことが許されると思ふのか!!」

「もし本当に実行したら帝国の裁きが下るぞ!!」

そんな非難にも一切動じないドグラス。

ハイラスの目が覆われ、そして膝立ちにさせられる。

「構え!!」

処刑人が剣を構える。



「下せ!!」

剣は振り下ろされた。

「なっ!!」

ハイラスの首が地面に落ちると同時に体も倒れる。

「どうだ? 何もできない自分を恨むか?」

ドグラスは首を持ち上げて使節団の前に持つてくる。

あまりにも無惨な出来事に一部が嘔吐してしまう。

「この要求を呑まないどころか、不敬を働いた罰だ。グラ・バルカス帝国と言ったか? の上層部に伝えておけ」

使節団は解放された。

その後、ハイラスが処刑されたことが大本営会議にて公表、大本営会議はパカンダ王国に対して報復戦争を宣言。空母3隻、戦艦5隻、巡洋艦8隻、駆逐艦18隻からなる任務部隊がパカンダ王国に空爆、艦砲射撃による無差別攻撃を敢行。僅か2日で降伏した。

そしてこの行為に激怒したレイフオル王国がグラ・バルカス帝国に宣戦布告、今に至る。

ラクスタルがハイラスの処刑のことを知ったのは『グレード・アトラスター』艦内で、

艦隊司令会議を終えた後、2人で話していた時であった。

「全く同じ状況ですか」

「ああ。時系列が若干変わっているが、それでも年単位で見れば誤差に過ぎない」

「…………… その情報はどこから？」

「ハイラス殿下の護衛に出ていた海軍陸戦隊から教えてもらった」

「初耳なのですが……………」

「当然だ。皇族が直接出向くんだ。私を除いた一部の軍人しか知らない」

『それから』とカイザルは声のトーンを落とす。

「軍令部内に出ている案だが…………… レイフォルに対して報復攻撃を叫ぶ者が増えて

いる」

「…………… また同じ歴史を？」

カイザルは頷く。

「一応反対意見は出すべきだったが…………… こればかりは変えることは不可能だ」

何しろ皇族が処刑されているのだ。思慮深い人物でも報復を叫ぶのは当然だろう。

「まさか外務大臣とその関係者、そして軍令部の一部の人間しか知らなかったとは

な……………」

「東方艦隊司令である閣下でさえ？」

「ああ。第二級重要機密に指定されていた」

2人は揃って沈黙する。

「もはや裏に意図を感じますね」

「上からの指示だろうな。もしこのハイラス殿下の件で国内が戦争を望むようになったら……………」

「それこそ1度目と同じになる、ということですか……………」

カイザルは頷く。

「…………… 貴官に、もう一度レイフォル王国首都攻撃をやらせるかもしれません。すまない」

ラクスタルは制帽を被り直す。

「1度目で私はろくな死に方をしなと思っていました。ですが、こうして転生し、1度目より過酷ですが、私は責任を果たします」

ラクスタルは敬礼すると士官室から出ていく。

「我々をどこに向かおうとしている……………」

カイザルは自分がどうすべきか迷いつつあった。

『敵艦隊との距離49km。まもなく射程に入る』

「了解。航海長、速度を第五戦速に変速」

「両舷前進第五戦そく。黒10」

グレード・アトラスターの速度が26ノットまで加速する。

『敵艦隊、距離46km』

「レーダー測距開始」

グレード・アトラスターに備えられたレーダー照準器が敵艦隊戦闘に電波を照射する。

「情報来ました。射角修正」

グレード・アトラスターの前部主砲2基が敵艦隊を狙う。

「距離43km」

「3万5千で砲撃開始だ」

『了解』

やがて敵艦隊が35kmの距離に入る。

「敵艦との距離、3万5千です！」

「主砲第一斉射！ 撃ち方始め!!」

海上に46cm砲の音がこだまする。

「着弾！」

水平線の上で光が灯る。

「2隻轟沈」

元防空指揮場から報告が入る。

「レーダーを利用した射撃にしては若干精度が荒いな」

ラクスタルが唸る。

「まあ技術屋の言っていた通り、データをわざわざ手で記録する必要がないのでありがたいですね」

レントが同情的に言う。

「主砲、第二射用意よし」

「砲撃用意！」

ブザーが3回鳴り終わると同時に――

「撃て!!」

ラクスタルが声を張り上げて言った。

淡々とした作業をこなし続けているグラ・バルカス帝国とは異なり、レイフォール王国艦隊は悲惨な状況にあった。

「戦列艦トラント轟沈!!!」

伝令が報告を上げてくる。

敵の超巨大船から放たれる攻撃は戦列艦のマストよりも遥かに高い水柱を乱立させる。

すると、旗艦『ホーリー』の右3kmを航行していた戦列艦に砲弾が命中。水柱が消えるとそこには木片が漂っていた。

「せ…… 戦列艦『レイフォル』轟沈……」

ホーリー艦内に衝撃が走る

戦列艦『レイフォル』

王国の国名を頂くこの艦は、レイフォル無敵の象徴だった。

100門級戦列艦であり、最新式の対魔弾鉄鋼式装甲を持ち、国内では世界最強と謳われていた。それが、蛮族どもの超巨大戦艦の超巨大砲によりレイフォル艦隊射程圏のはるか外側からの攻撃により、あっさりと、たったの1撃の被弾で爆散、轟沈した。

しかし、現実にはゆっくりと絶望する暇を与えてはくれなかった。

さらに砲撃が続く。

歴戦の猛者たち、最高の艦と最高の乗組員たちが、ただの一撃も加える事無く、一方的に砲撃を受け、消滅していく。

レイフォル艦隊は風神の涙を使用しているにも関わらず、敵の超巨大戦艦の方が、圧倒的に速い。

一隻、また一隻と撃沈されていく。

「くそっ！ くそっ!!」

大将旗を掲げる100門級戦列艦『ホーリー』に乗艦する将軍バルは、ワナワナと震えていた。

自分以外に残っている艦は3隻。

敵艦は、現在残存艦の周囲を旋廻しつつ、全砲門をこちらに向けている。

「…………… 降伏の旗をあげよ」

命令が下る

戦列艦ホーリーのマストに、この世界で降伏を宣言するための、降伏旗が掲げられる。

「敵艦近づきます」

超巨大船が近づいてきた。

「おのれえ…… おのれおのれおのれおのれえー!!! 蛮族どもが近づいてきたら、全

砲門をもって、敵巨大戦艦を撃沈せよ!!」

当然のバルの命令に参謀が聞き返す。

「は？ 攻撃命令ですか!？」

「聞こえなかったのか！ 奴らが近づいてきたら全砲門にて攻撃せよ!!」

そんなことをしたら末代までの恥となってしまう。参謀は全力で反対する。

「し……しかし、降伏後に攻撃など………栄えあるレイフォルの名を汚します!」

グサッ!!

「かハッ!!」

参謀の胸に剣が突き刺さる。参謀はそのまま倒れて動かなくなった。

「敵艦からの発砲により破壊された味方艦の破片により参謀は戦死した。解ったな」

將軍バルは、参謀を刺し殺し、艦長に迫る。

「なーに、心配するな。我が方の炸裂弾を至近距離で食らえば、浮かんでいられる船など

この世にはない。どうせ敵は一隻しかない。誰も言わなければ、降伏後の攻撃を行っ

たと事など解らんさ」

バルは近づくと敵艦を睨む。

「砲撃用意」

バカな敵は、まんまと近づいてくる。距離は300mを切った。

「バカめ。俺の艦隊を散々壊してくれた代償は高くつく」

「撃てえええ!!!」

100門級戦列艦の片側、50門の砲が一斉に火を噴く。海軍の軍隊は水軍、攻撃方





を挙げてゐる。

海戦の勝敗は決した。

グレード・アトラスターの艦橋で副長のレントが怒りを含んだ声で呟く。

「明らかに降伏の意思を示していたのに攻撃してくるとは…………… 蛮族蛮族と言っておきながら向こうの方が蛮族じゃないか……………」

それは『グレード・アトラスター』乗員全員の気持ちであった。

「ひとまず本艦の任務は達成しました。帰還するとしましょう」

「ああ、そうだな」

レントが『航海長、進路を祖国へ』と言った。

「艦隊司令部に打電。『我、レイフォル王国艦隊を撃滅セリ』。そして詳細も打電してくれ」

「了解」

しばらくして通信士が艦橋に上がってくる。

「艦長。本国から新たな任務の指示です」

「何？ 新たな任務？」

ラクスタルが聞き返すよりも先にレントが聞き返す。

「はい。第二級秘匿通信です。開封していません」

ラクスタルは通信士から電文を受け取る。

「何かありましたかね?」

レントが聞いてくるがラクスタルは答えない。

(まさか降伏後の攻撃に対する報復攻撃命令か?)

ラクスタルは恐る恐る電文を、自身しか知らない符牒で送られてきた電文を見る。

「……………」

彼はそれを一瞥すると天を仰ぐ。

「どうかしましたか?」

ラクスタルはしばしの後に答える。

「先の降伏後の攻撃に対する報復攻撃命令だ。『レイフォル王国の首都レイフォリアに對して無差別艦砲射撃を行うべし』だとき……………」

レントは電文を受け取ると、『処分しておくように』と静かに言いながら部下に渡す。

「大丈夫ですか?」

(またやらねばならないのか……………いや、1度目は何の感慨も抱かなかつた。降伏後の攻撃に対するお仕置きでやるという、自分の正当性を信じて疑わなかつた行動だった。だが……………)

そう。悪巧みをするとき、普通の人間ならば1度目は何とも思わないだろうが、それ

をよく理解した上で2回目を行うとすると、とてつもない罪悪感に包まれるのである。

「艦長……… 自分が指揮を―」

「いや、自分でやる」

ラクスタルは迷いを断ち切る。

（これは俺が背負って行かなければならない業<sup>カレマ</sup>だ。1度目で俺は罪を犯した。それはこの世界でも同様だ）

「進路変更、取り舵反転180度。目標！ レイフォル王国首都レイフォリア!!」

同日、レイフォル王国の首都レイフォリアは、グラ・バルカス帝国東方艦隊所属『グリード・アトラスター』単艦の全力砲撃を受けて灰と化した。

翌日、生き残った軍部と政府首脳部によってグラ・バルカス帝国に対して無条件降伏した。

パカンダ王国事件から数えて僅か10日。五大列強国の一員であるレイフォル王国は滑落することとなった。

戦艦『グリード・アトラスター』は、たった一隻でレイフォル王国艦隊、レイフォル王国飛竜隊を撃滅し、その足で、レイフォル首都レイフォリアを焼き尽くし、降伏に追い込んだ世界最大最強の船として恐れられる事となり、生ける伝説となる。

この世界の歴史にとって、それは激震となった。

この世界にあらざる物体が第二文明圏西方沖で行われている海戦の撮影を行っていた。

その映像はリアルタイムで日本国防省情報収集部に送られる。

「……………」

映像解析官は送られてくる映像を黙って見ていた。

画面越しに戦闘が起こっているのだ。人の命を奪い合う戦いが。

大和擬きと戦列艦は戦闘に入る。が、やはりと言うか、戦列艦は手も足も出ずにやられたようだ。その後、大和擬きは一度進路を戻したものの、再び進路をレイフォル王国に向ける。そして虐殺が始まる。

「任務を達成したが、自分たちの威光を知らしめるためにやったてか？」

だとしたらグラ・バルカス帝国の国家像は上層部が予想している通り、覇権国家であると見て間違いない。

「危険だ……………」

解析官は直ちに報告を上にあげる。

ロデニウス大陸統一戦争時にも確認されたグラ・バルカス帝国諜報員、そして第三文明圏周辺で次々に確認されている潜水艦から危険な国家と認めていたが、これを機にグ

ラ・バルカス帝国を正式に仮想敵国、そして覇権国家と認めたのだった。

## 束の間の平和

グラ・バルカス帝国の脅威を再認識、そしてパーパルディア皇国との交渉決裂に関する会議を終えた後、白井は北海道に来ていた。

「何も変わっていないな……」

白井は川の畔を歩く。しばらく歩くと人影が見えた。少し離れていた人物がこちらを見るなり進路を遮るように立つ。

「お疲れ様です」

白井は敬礼すると手帳を提示する。スーツを着た男がそれを一瞥すると道を開ける。

「ありがとうございます」

白井は棧橋に向かう。そこで椅子に座りながら釣竿を持っている男に。

「議員活動すると言っておきながら静かに暮らしているか……」

白井は二つあった椅子の内一つに座る。

「まあSPが付いているけどな」

議員職を辞めたとはいえ、元総理大臣という立場上警護が付いていた。

「……で、なんで椅子が二つある？」

「俺がこんな辺鄙な場所にいて、警護がたったの2人。そんな状況を見逃すような奴ではないと思ったが、どうやら来ないようだ」

白井は向い岸を見る。親子が遊んでいた。

「家族はいいものだな」

「今更何を言っている?」

「つれないな……………」

佐山は白井の無慈悲とも言える言葉に若干がっかりする。

「そういうお前はどうかんだ?」

佐山は今までの表情から一転して、暗くなる。

「なぜお前はこうも心に刺さる言葉を使う……………まあいい。俺の家族は、代々政治家を輩出してきた名家の一族だった。一族の願いはこの国が負けない道を歩ませることだった……………」

佐山は赤く染まりつつある空を見る。

「見る、この空を。世界は変わってしまったが、どんな状況だろうとこの空は何も変わらない」

佐山は釣り竿を離すと、手を天高く伸ばす。

「我々はこの空の更に先、宇宙にまで活動圏を伸ばした。人類最後のフロンティアを求



めてな」

拳を握りしめる。

「日本は世界で唯一の被爆国だ。そして敵にとつても味方にとつても深い傷を残した戦争だ。この悲惨な世界大戦を2回も引き起こしてしまった人類の罪だ。だがな、皮肉なことに戦争は今の我々の生活の基礎を作ったと言つても過言ではない。それに我が国は一次大戦、朝鮮戦争と、戦争で発展してきた」

戦争というのは無限の消費活動だ。そこに需要というものがある限り、後方から物資を送る戦争当時国ではない国や企業というのはボロ儲けできるのだ。

「思えば、世界から見れば極東アジアに存在する取るにたらない島国が、世界経済の一角を成すと思つたか？ 答えは否だ。テロが世界を団結させると誰が思つた？ 答えは否だ。人というのはよく分からない、だからこそ我々が『人』でいられる所以だ」

佐山は手を下げる。

「話がかかり脱線したが、家族というのは人が人であるためのものであると俺は考える……」 皮肉なことに俺はテロで全てを無くしたがな……」

佐山の家族と――まだその時佐山は大学生――婚約者が欧州旅行中に欧州同時多発テロに巻き込まれた邦人の中に含まれていた。死因は一切不明、遺体も回収できず、墓に遺骨は収められていない。

「欧州テロ発生のニュースを見た時、俺は真っ先にあいつのことを心配したよ。だけど連絡が取れず、詳細が分かったのは欧州テロが終わってからだよ」

佐山の声が若干震えてきた。

「遺体は確認できなかったそうさ。まあ当然だがな」

欧州テロによる死者は50万を軽く超えている。ただ、これは民間人のみの数であり、欧州解放連合軍などの死者も含めたら80万を超える試算がされている。

「今まで、地球人類の全てが何かで一致団結するなんてことはなかったし、絶対にあり得なかった」

しかし日本などの継続的な努力、そして欧州テロという外圧を利用した国連の改革が行われ、大幅な国連の権限の強化、そして常設国連軍の設立に至っている。

「幸いにも、この世界には古の魔法帝国という世界共通の敵がいる。世界共通の敵がだ」  
国と国が協力しあうには、一番手っ取り早い手段としては利害の一致である。その中で一番国と国とのつながりが強くなると言えるのは大国の存在である。一カ国で対抗できないなら協力して対応しようということだ。古の魔法帝国というのは各国からの伝承を聞く限り、最低でも1960年代のアメリカレベルと同等見られている。

「これほど都合なことがあるか？」

白井は詐欺師を見るかのような目で佐山のことを見る。

「仮にそうだとしても、お前は既に議員職じゃないだろ？ それに次の総選挙は来年の12月だ」

佐山は不敵な笑みを浮かべる。

「そうだ。だが、これを見ろ」

そう言うのと、懐から紙を取り出し、白井に渡す。

「……………驚いた。あの野郎、荒稼ぎしやがって」

「少なくとも2年は静かに暮らして行きたかったが、そうは問屋がなんとかだな」  
白井は紙を佐山に返しながら『情報提供者は？』と聞く。

「経済連会長だ」

「あの狸親父か。情報の収集はお手の物か、流石だな」

白井が感心してそう言ったのに対し、佐山は気まずそうな顔になる。

「何も隠さずに言え」

「はい。実を言うと、経済連会長に情報提供した人物がいるそうです」

「名前は？」

「わかりません」

白井はあらゆる可能性をプロファイリングする。

「ははくん。可能性は3人だな」

「誰だ？」

「まあ直接聞いた方が早い。後で聞いておくよ」

佐山はすっかり暗くなった空を見て、腕時計を見る。

「もうこんな時間か………歩きながら話そう」

そう言いながら佐山は釣り道具を片付ける。片付けた後、バックを持って移動する。横と後ろにSPが付く。

「政府内部に不穏な動きがあるのも事実だが、そろそろ今まで目を逸らしてきたことに手をつけた方がいい」

「目を逸らしてきた？」

「ああ。転移に巻き込まれた他国の領土だよ」

白井はハツとする。一応国として支援はしていたが、転移から5年経ったにも関わらず、閣議でも話題に出ることはなかった。

「少し怠けてたな？　一応北方四島にいるロシア軍はこの国にいる外国軍としては三番目の勢力だぞ？　まあ転移初期から発令されている監視警報は継続されているみたいだけだな」

「すまん。存在自体を忘れていた」

「まあ仕方ない。目立った動きをしていないからな」

「そういえば、なぜそんなに詳しい？」

佐山は白井の目を見る。純粋な興味から聞いている目だった。

「ロシアの馴染みだ。ここ最近は会っていないが、昔はよく会ってた。そしてそいつからの情報だが、どうやら日本帰属への住民投票が行われるらしい」

「何？ 聞いたことないぞ？」

『そりゃあそうだ』と佐山が言う。

「州政府が独自にやろうとしていることだ」

「独自で、か……」

「領有権を捨てたのに、その領土が自分から日本へ帰ってこようとしてくるんだ。皮肉でもなんでもない」

我々が知っている領土問題としては、『尖閣諸島』『竹島』『北方領土』の主に三つである。そのどれもが日本の安全保障、そして資源の観点から見ると重要領土であった。しかし日本は尖閣諸島の日中共同開発の話が持ち上がると、竹島と北方領土の領有権を捨てたのだった。たしかに国益は損じた。だが、元北方領土住民の大半は超高齢化し、その子息も既に高齢化していて、仮に北方領土が日本に返還されたとしても、『誰が住む？』という話であった。資源もほとんどロシアに取り尽くされた上に、漁業権も、その漁師が日本では不足している。つまり日本の労働人口という問題であった。

そして『竹島』に関しては完全に捨てた。周辺に海底鉱場があるわけでもなかった。

西暦2030年代の日本は少子高齢化に伴う、領土整理を完了していた。使えるところは使い、将来、赤字になる領土は全て捨てる<sup>無人化</sup>という方針であった。

尚、例外の例として奥尻島を挙げる。

住民の高齢化に伴い、住民を本土へ疎開、当時ロシアとの緊張が高まっていたことから陸自の地対艦ミサイル連隊、そして空自の分遣隊が派遣された。ロシアとの緊張が低くなった後も、日本は奥尻島の要塞化を進めた。それが今の奥尻基地である。

2人はやがて車へ到着する。

「すまん、待たせた」

佐山が運転手に言った。

「滅相ありません。」

と返された。

「お前も乗るか?」

「SPは?」

佐山が白井の後ろに視線を送ったので彼も後ろを見る。

「覆面か……………」

「そういうこと、じゃあ行くか」

車は佐山と白井を乗せた動き出す。後ろからSPが乗る覆面が付いてくる。

「グラ・バルカス帝国、下手したら原子爆弾を保有している疑いがある国家」

「そのグラ・バルカス帝国だが、日本から約2万km以上離れた海域で戦闘が行われていた」

そう言いながら彼はホログラムを投影する。

「外務省を通じてムーに確認したが、どうやらレイフォル王国沖らしい」

場所の前置きをして白井は端末を操作し、映像を流す。

「これは………大和か？」

「そうだ。何故かは知らないが旧日本軍が保有していた兵器と意匠が瓜二つ」

佐山は黙って映像を見る。超弩級戦艦と戦列艦が戦闘を行なった場合、結果は目に見えていた。

だが、彼にはそれよりも気になることがあった。

「近接信管か？」

「御名答、以前から近接信管を実用化している可能性は指摘されていたが、これでほぼ確実になった。グラ・バルカス帝国のレベルは、大日本帝国以上の、アメリカ軍並みに電子技術を持ち——そしてこれだ」

白井は端末を操作し、画像を切り替える。グラ・バルカス帝国の艦船保有量の予測数

値であった。

「参つたな。アメリカ軍を部分的に凌駕しているじゃないか……」

戦闘艦だけの数値だけで言えば、300隻近くの艦船を保有していた。

「正直言つて、今の日本とグラ・バルカス帝国が戦争になったところで、相手にはならない。だが、これは……」

今の国防宇宙海軍の艦船保有量は、戦闘艦だけで言えば、約135隻と、西暦2030年代のアメリカ軍の主要戦闘艦の約三分の一となつている。補助艦も含めれば、約200隻に迫る。その内、約8割が艦娘運用艦となつている。艦娘は日本国防海軍の基幹を担っている存在であつた。

「…… おまけに現在も空母と駆逐艦が量産されつつある」

「戦艦は？」

佐山の懸念はそこにあつた。一応日本の護衛艦駆逐艦でも戦艦の撃沈は可能だが、それでも大和型が量産されているとなると、護衛艦単艦では対抗できなくなる。

「情報庁と統合幕僚監部の分析だと、大和型を建造できるドックは、最低2つある。そのうち、一ヶ所にある船体は、ほぼ完成間近といった感じだ」

白井は画像を切り替える。

「…… 大和型擬きの確認されている数は、就役している数で言うと、2隻。そして



建造中の2隻の合計4隻だ」

純粋な火力なら、おそらく新世界一位であろうレベルに佐山は頭を抱える。

「負けることはないが、面倒くさい相手だな」

「ああ。しかも、グラ・バルカス帝国と戦争するのは日本だけではなく、ムー、そして新世界最強の神聖ミシリアル帝国も参戦する可能性も高い。日本だけの問題ではない」

世界を巻き込む戦争、世界大戦に発展する可能性は、知識がある人があるならば誰でも予想できる範疇であつた。

車は市街地を抜けて住宅街に入る。

「国防軍はパーパルディア皇国をどう思う？」

佐山は窓の外を見ながら白井に問う。

「…………… 前世界の常識で接すると、間違いなく痛い目にあう、と考えている」

「―前途多難な道を歩まなければならぬし、当たり前だが、旧世界の気持ちで接する訳にもいかん……………」

これから待ち受けるであろう大きな壁に、佐山は物鬱げにため息をついた。

数日後 日本国 国防省 大会議室

ここに、日本国国防省海軍運用部会議室にて会議が行われていた。

「国連軍の艦船老朽化は深刻化しつつあります」

そう言ったのは、国連軍アジア方面軍司令部付きの参謀だ。新世界に来てからは国防軍に出向している。

「深刻なのが、ブルーリッジ、タイコンデロガ級、アーレイバーク級です」

タイコンデロガ級、アーレイバーク級はいずれも船体寿命延長改修、イージスシステムなどのソフトウェア改修を転移直前に済ませているが、ガタが来つつあるのは否めない。そして『ブルーリッジ』はその中でも深刻だった。就役から約80年が経過しているのだ。もはや米軍の中でも最古参となりつつある。

「新たな空母建造で判断が難しいことは存じています。ですがこのままだと、艦の信頼性が下がり、事故が起こってしまうかもしれません」

参謀の言に国防軍関係者は一同気難しい顔になる。

国防軍の新型艦更新により、各造船所のリソースが喰われていた。その中には国連軍装備品委託会社であるBW社も混じっていた。

だが、元在日米軍 現国連軍相手が相手なだけに国防軍も無下にできない。

しかし現在、国防軍が行なっている艦船更新は、旧海上自衛隊から運用されている訓練支援艦、FFM、潜水艦、補給艦など多岐に渡っていた。

よって、国防宇宙海軍参謀が提言する。

「艦船更新の順位付けを行った場合、優先度が低いのは海自の時の艦艇ですよね？ 一応運用は可能ですし、特にひびき型などはこの世界に潜水艦——応いますが、WW2の伊号のレベルなら問題ないでしょう。それに『てんりゅう』さんには悪いですけど、艦はできるだけ使い潰し——」

ダンッ!!!

参謀の三つ隣に座っていた女性が机を叩いた。

「艦娘を兵器扱いたくないでいただけませんか？」

そう言ったのは国防省艦娘運用課課長のイージス艦「こんごう」であった。

「うっ、すいません。失言でした」

艦娘は人であると政府見解が出されている。実際、艦娘を兵器として見ている人物は少なかった。だが、それでも彼女達を兵器として見ている者もいた。

「参謀、今の発言は聞き逃せないな」

運用部長が参謀に釘を刺す。

「申し訳ありませんでした」

「こんごうと部長に礼をする参謀。部長は咳払いをし、会議を再開する。」

「んん、失礼した。確かに参謀の言う通り、我々が保有している海自の艦艇の更新優先度

は低い。だが、ただでさえ艦船が不足しているというのに、リソースを回すわけには――」  
すると、会議室の扉が開かれる。一同扉の方を向くと、そこには白井防衛総隊司令がいた。

「起立！ 気をつけ！ 敬礼！」

会議室にいた全員が敬礼をする。国連軍参謀も例外ではなかった。白井は答礼を終えると『座つてよろしい』と言った。

「着席！」

「会議中にすまん。だが、話が平行線を辿っていきそうだったので介入させてもらった」  
白井が一步下がると、紺色のブレザーを着た女性が前に出る。

「BW？」

部長が胸に付けていたロゴを見てそう言った。

「はい、私は国連軍装備品委託会社であるブラックウオッチ社の東郷とうきょうです」  
「司令、どうしてBW社の人間が？」

「ああ、それは艦船に関する話があったので来てもらった。どうぞ」

東郷はホログラム投影装置を起動させると、映像を映す。

「これは…… ナノマテリアル？」

ナノマテリアル

## 通称 『記憶金属』

この新素材を使うことにより、今までブロック工法で建造していた艦船が、船体一体型建造法と呼ばれる新たな建造方法が確立された。旧海上自衛隊のあきづき型護衛艦レベルなら、最短で2週間で建造できる。

だが――

「ナノマテリアルの使用は禁止されている筈では？」

別に有害成分があるわけではない。ただ、日本にナノマテリアルの鋳床がないだけなのだ。

「ええ、ですが我々の不断の努力により、人工ナノマテリアルの開発に成功しました」  
会議室にどよめきが広がる。

「人工ですか…… DSSでさえ出来なかつた事業をよくできましたね」

DSS―Deep Sea Ship―深海棲艦を英語に直訳した単語の頭文字から取られた名前だ。

ナノマテリアル技術は全てが深海棲艦が保有していた技術だ。それを第二次世界大戦後、米軍が深海棲艦の各地方群を吸収、それに伴い技術も吸収された。

「本当に辛い作業でした。ですが、これにより問題が解決すると思います」

東郷が説明を終えて一歩下がる。

「ということだ。人工ナノマテリアルの認可が降りれば問題は解決するはずだ」  
「では……」

国連軍参謀がパツと明るい顔になる。

「数年以内に問題は解決するよ」

「あ、ありがとうございます……！」

参謀は涙を流す。日本にいる国連軍の装備品の問題は常に先送りにされていた。だが、仕方ないことだった。転移という天災が起こり、国家存亡の危機に瀕しているというのに、国連軍にリソースを回す余裕などなかったのだ。

会議は終了した。白井はエレベーターにて東郷と別れると、エレベーター前に置かれたベンチに座る。

「お疲れ様です」

そう言いながら白井の横に座るこんごう。

「ああ、お疲れ。ずっと何か言いたそうだったが、どうした？」

白井は先程の会議にてこんごうがチラチラと視線を送ってくるのがずっと気になっていたのだ。

「……最近、私たち艦娘のことを兵器として見ている人が増えているの」

「こんごうはそう言いながら手を握りしめる。」

「仕方ないことだとはいわねえ。ただ……ただ、私たちが元は人だったというのを理解されていないんじゃないかなって……」

「……第一世代艦娘が神の遣いと崇められていたことは知っているな？」

静かに頷く（うなづ）く。

「戦後、艦娘達は苦難な道を歩いた」

具体的には、艦体は戦勝国に賠償艦として引き渡され、その艦霊を宿した艦娘までも賠償艦の一部として引き渡すべきだという意見もあった。だが、米海軍のとある方と、親日勢力、旧日本海軍の阻止運動によってそれは免れた。

「君達は第三世代に分類されている。そしてお前らの子供が第四世代として分けられている」

「国民が君達のことを兵器として見るのは仕方ない。だが、国防軍の意識改革はなんとかしなければいけない……」

「ん」

白井がこんごうの頭にポンと手を乗せる。

「だが君達は人だ。それは紛れもない事実だからな」

そう言うと、エレベーターに乗り下り降りていった。

「はあ。道のりは長そうね」

こんごうは灯りを灯し続けるLEDライトを見つめた。

パーパルディア皇国 第三外務局

第三外務局局長のカイオスは多忙に包まれていた。

「ああくそ！ 暗部の連中め！」

愚痴を吐きながらも仕事に勤めるカイオス。

「皇帝陛下の耳と目されることだけはあるか……」

カイオスは各局から押し付けられた雑務の処理を続ける。こうなった理由は数週間前まで遡る必要がある。

中央暦1639年 6月

場所は先程と同じ第三外務局局長室。

「なんだ貴様は」

カイオスが局長室に入ると口元をローブで包まれた性別不明——ただし声で女性と分かった——の人物がカイオスに背を向けて立っていた。



「お久しぶりですね、カイオス局長」

透き通った声がかいオスに向けられる。

「日本大使との会談がどうでしたか？」

「なぜ今更？」

カイオスが日本大使と密談を交わしたのは今からおよそ半月前だ。暗部なら既に情報を掴んでいるだろうと当たりを付けていたカイオスは今更感が拭えなかった。

「いえ、これは私個人が情報を収集したのですが、日本大使と何を話したのか気になりますね……………」

どうやら本当に何を話していたかは知らないらしい。

「はく…………… ルディアス陛下に伝えないでおいてくれたことには感謝する。で、何を話せばいい？」

「そのままです。日本大使と何を話したのですか？」

カイオスは話すことを選ぶために日本大使との会話を頭に思い浮かべていた。

数週間前　カイオス私邸

海に面したカイオスの屋敷の書斎に日本外交官の杉崎と由真崎がカイオスの案内で

書齋に入る。

「すまない。散らかっているが勘弁してくれ」

「いえ、お気になさらず」

杉崎はそう言いつつカイオスの書齋を見渡す。古めかしい本が取り揃えられていた。

「……………」

「ささ、座つてくれ」

カイオスに従い、椅子に座る2人。

「カイオス殿、我々をあなたの私邸に案内した理由はなんででしょうか？」

「……………」 部下はあんな状態だが、私は貴国の真の姿の一部を知っている」

杉崎と由真崎の目の色が変わったのを確認すると、カイオスは続ける。

「貴国を一言で表すならば、『ムーをも超える超科学文明国家』と私は考えている」

「……………」 あなたは我が国のことを少しは調べたようですね。いいでしょう、あなたには我が国の本当の姿をお見せしましょう」

杉崎がそう言うと、由真崎が鞆からタブレットと棒のようなものを取り出す。

「それは……………」

「まあ、見た方が早いです」

由真崎は杉崎とカイオスとのやりとりを横目に作業を続ける。

「プレの用意ってしてあったか？」

「情報庁が作ったやつです、外務省ではありません——終わりました。では、我が国の映像を見てもらいます」

棒から光が漏れ始めると、空中に映像が投影される。

「(、これは……)」

その光の壁に手を翳すが、すり抜けてしまう。

映像の最初は日本の簡単な紹介から始まった。

その流れる映像にカイオスは驚愕する。下手したら——いや、これは神聖ミリシアル帝国を超えているのではないかと。

全ての映像を見終えたカイオスは額に汗を滲ませていた。

(これは……… 予想外としか言いようがない)

「如何でしたか？」

杉崎の問いに、カイオスは時間を少し開けて答える。

「戯言だと切り捨てたいが、*“ある筋からの物”*を見る限り、本当だと信じるしかない」

由真崎はカイオスが言った『ある筋からの物』を聞き逃さなかった。

「ある筋からの物？」

(やはり反応してくれたか………)

「私は第三外務局局長の職をこなす傍ら、貿易商もしている。そのおかげで各国の商人との関係もあるからな」

「なるほど。我が国のなんらかの物品や本を取り寄せて、知ったと……」

「そうだ」

由真崎が記録が終了したことを合図すると、杉崎は頷き返す。

「カイオス殿、あなたの話はよく分かりました。帰国したら上に上げておきます」

杉崎がそう言うのと2人が立ち上がる。

「ま、待ってくれ。貴国の政治的事情は詳わしくないが、このままだと我が国と貴国は衝突してしまう！」

カイオスは杉崎の袖口を掴む。

「皇国はこのままいくとフェン王国に武力侵攻を命じるーいや、既に命じているが、皇国軍の準備が整い次第、すぐに侵攻するだろう」

カイオスの爆弾発言に2人は驚愕する。政府内部でパールディア皇国がフェン王国に侵攻する可能性は前々から指摘されていたが、外務局の局長が直接言ったのだ。事実としての言葉の重みが違う。

「なるほど…… カイオス殿は我々に一体何を求めるのですか？」

「私はー私は貴国との独自のチャンネル設置を望む」

杉崎と由真崎は自分の耳を一瞬疑った。だが、その疑念もカイオスの次の言葉でかき消される。

「できれば魔信を——と言いたいが、信用できないのであれば、貴国の無線を屋敷に設置してもらつて構わない」

『これは国家の分岐点だ』と杉崎は思った。1人の判断が国家の運命を左右することになる。その重圧にどうしてこの男が耐えられるのだろうか、と由真崎は思った。

「……… わかりました。その話は本日中に上に上げておきます」

「！ 本当に、本当にありがとう」

カイオスは杉崎の手を握る。

「！なるほど。まさかそこまで正直に話してくれるとは思いませんでしたが……」

暗部はカイオスがここまで話してくれるとは思わず、軽く面食らう。

「隠しても無駄だ。日本大使と個人的に接触した事実は隠しようがないからな」

「聡明で何よりです。しかし、一歩間違えれば反逆罪とも取られかねない行動ですが？」

カイオスはその暗部の瞳をじつと見る。

(何を考えているんだ、この女は………)

感情の鷹揚が分からない。唯一反応したのは、カイオスが正直に日本大使との会話を

話した時に見せた反応くらいだ。

「日本大使と会ったという事実だけでも、ルディアス陛下にご報告できると思うが、なぜしない？」

「…………… 私が個人的に気になって調べているだけです。組織は関わってはいませんが」  
「その微妙な間が気になるが、聞かなかったことにしよう」

「もはや別の組織が動いていると直感したカイオス。これ以上の詮索は危険であると判断した。」

「感謝します。お話をお聞かせいただきありがとうございます」

「そう言うとそのくさど局長室から出ていく。暗部の女が出ていったのを確認すると、カイオスは椅子にドカッと座り込む。」

「暗部が関わっていないとなると…………… やはり軍か？」

「と言ったものの、『それはないか』と自分自身で否定する。」

「やはり個人で動いているのか…………… ?」

「色々な可能性を考えるも、様々な可能性が浮上ってきて詮索をやめたカイオス。」

「はく。フェン王国侵攻は止められそうにないな―だができることはしよう」

「カイオスは椅子から立ち上がり、行動を開始する。」

「皇国の明日のために。」

## 日本国 首相官邸 総理執務室

総理執務室にて総理レクが行われていた。

「―で、防衛力整備が必要な訳か……………」

「はい、国防軍の戦力比に対しての展開規模が釣り合っていない。深刻なのが国防海軍です。老朽艦の更新もそうですが、シーレーン防衛のために護衛船団を組まざるを得ない状況にあります」

別に海賊問題や攻撃的な国家が―潜水艦で攻撃してくる輩がいたが、数年前から鳴りを潜めていた―いる訳ではない。ただ、生物による民間船の被害が相次いでいたのだ。新世界の巨大生物は比較的温厚で、中には人間と会話が可能なものさえいた。だがそうではない、知能が低い生物による民間船攻撃が相次いだ。無論軍艦も例外ではなかった。国防宇宙海軍護衛艦『たかなみ』が攻撃を受けたこともあった。

海運連盟と政府は新しい航路を策定したものの、いっどこから新しい生物が襲ってくるかは不明のまま護衛船団を組まざるを得なかった。

「機動艦隊に関しては現状で問題はありませぬ。ですが護衛艦の不足がこれから明確に出てくると思われませぬ」

空母に関しては、あかぎ型航空母艦4隻、いずも型護衛航空母艦3隻の計7隻のローテーションが組まれているため問題ない。そこに、うんりゅう型ヘリコプター空母4隻が加わり、計11隻と、数だけで言えばアメリカの空母保有数に匹敵する。《ref》国連軍へ出向しているロナルド・レーガンのようにニミッツ級の内、2隻が国連軍の所属となっている。ニミッツ級の後継艦のジェラルド・R・フォード級4隻が就航したことにより、転移直前で計14隻の原子力航空母艦を保有していた《ref》

護衛艦の不足というのは、前世界では必要十分数に達していたが、新世界ではその海洋面積の増大、そして間違いなく訪れるであろう戦乱に対応するために必要な船の数が足りないという意味だ。

「戦乱の想定というのが世界大戦のようなことがこの世界で起きるのか？」

上野の甘い考えに、広瀬はため息を吐きそうになるが、グツと堪える。

「間違いなく起きると想定しています」

国防省が予想している大戦構図は、グラ・バルカス帝国VS世界か、日本VSグラ・バルカス帝国VS世界、科学文明VS魔法文明という三つであった。

「少なくとも、列強序列第二位であるムー共和国との友誼がありますので、三つ巴戦争という可能性は低いでしょう」

国防軍幕僚監部が付け加える。



「この世界大戦を回避する方法は？」

上野が広瀬に問う。

聞かれた彼は、幕僚監部の結論を口にする。

「ほぼ不可能、と、我々は結論付けました」

「ほぼ？ 回避できる可能性が僅かにあるということか……」

「といつても、まだ向こうの国の情報グラ・バルカス帝国が不足しています。分かっていることといえ、第二次世界大戦レベルの、日本的な技術思想を持ち、電子技術に関しては米軍並みのレベルを擁する覇権国家であるということだけです」

『やつかいなこつた』と、外務省関係者の声が聞こえてきた。

「そして我々が今日を向ける先はパーパルディア皇国です。彼らはいつフェン王国に侵攻してもおかしくない状況です」

「外務省、パーパルディア皇国との交渉の状況は？」

宇治和に上野が語気を強めて聞いた。宇治和が背後に控えていた秘書官からメモを受け取る。

「ええ。先ほど、現地に派遣している外交官から報告がありました、難航している模様です——え？」

言い終わった後、追加のメモを受け取り、それを見た宇治和が驚きの声を上げる。

「追加の報告をします。パーパルディア皇国の第三外務局長自ら、我が国に対し、個人的な外交窓口、通信機の設置を要請してきました」

「本当か？ あの国の事情を詳しく知っている訳ではないが、相当なことじゃないか？」

事務次官級の者たちがざわつく。

「総理、これはチャンスです。パーパルディア皇国との外交局の長との独自チャンネルを持てるのです！」

宇治和が言った。

「分かってている。だが、どうやる？ 外交官が無線機の仕様を詳しく知っている訳ではあるまい」

上野はそう言いながら広瀬に視線を送る。広瀬は背後に控えていた国防軍運用官を見る。

「現行法の解釈では国防軍の特殊部隊による設置は可能です。ただ、後々のことを考えると、ここは情報庁の力をお借りした方がよろしいかと」

部屋にいる全員の視線が荒米に注がれる。

「分かりましたよ、特殊作戦執行部を動かします」

一部の官僚がざわつく。荒米が言った特殊作戦執行部とは、情報庁長官直轄の非正規作戦部隊である。

「今までに非正規作戦を実行した経験はありませんが、まあその手に於いて圧倒的な実力を持つ方々から訓練を受けていますので……」

「圧倒的な実力？」

宇治和が問う。

「CIAと、米情報軍です」

在日米軍が丸ごと国連軍となった今でも、アメリカの影響力は日本に及んでいた。その最たる例が、CIAアジア行動部と米情報軍であった。

情報軍を一言で表すと『暗殺専門部隊』である。

「CIAは兎も角、情報軍が協力してくれたのか？」

「ええ、転移前の話ですけどね。経験は少ないですが、今回の任務に最適でしょう」

「分かった。すぐに動いてくれ」

「はい」

日本は特殊作戦執行部による作戦を許可した。

数日後 パーパルディア皇国沖

パーパルディア皇国沖合の海に漆黒の鯨、潜水艦がいた。

『予定ポイント到達、パーパルディア皇国です』

国防宇宙海軍の第三潜水隊群第六潜水隊の伊号―400であった。

「了解よ。パーパルディア皇国の接続水域です」

艦長の400が発令所からの連絡を後方にいた黒ずくめの服に、バックを背負った5人に言った。

「了解です」

特殊作戦執行部第三課隊長『近藤 勇』が返事をする。

『ソナーに反応ありません、海岸の様子は不明ですが行けます』

「了解。周囲は安全です、どうかお気を付けて」

近藤が頷くと5人は特殊潜航艇に乗り込んでいく。

「海岸まで30km、およそ50分は掛かります」

海軍の特殊潜航艇操縦手妖精が言った。

「ながらも少し休めるな」

そう言うと近藤は目を閉じて眠り始めた。

「隊長さんはどのくらいの経験があるんで？」

すると、凜とした声の女性が答える。

「CIAにて8年です」

「CIA? なんでアメリカの情報局に?」

「機密です」

短く、そして簡素なやりとりがその一言で強制的に打ち切られる。

しばらくして予定ポイントに到達したことを操縦手妖精が告げる。

「ポイントです」

いつの間にか起きていた近藤を含め、既に全員が装備を整えていた。

「水深10m前後です、海岸までは50m」

「なら、走っていけば8秒も掛からない」

近藤の冗談に妖精は内心苦笑してしまう。

(特殊作戦群と同類か)

隊長はSF P9に弾倉を入れ、スライドを引かずに安全装置を掛けてホルスターに入る。  
れる。

「海面から3mでホバリング、姿勢安定しています」

隊長が床にある扉を開ける。船内が与圧されているため海水が入ることはない。

次々と海に飛び込む隊員たち。隊長は最後に『また頼む』と言い、飛び込んで行った。

「(武運を)」

扉を閉めながら操縦手妖精は敬礼をした。

海に飛び込んだ後、数メートル泳げばすぐに足が着いた。隊長はそつと顔を出し、海岸の様子を伺う。

(誰もいないか?)

念のためにオルタナを上空8000mを周回飛行している無人偵察機の赤外線カメラにリンクさせる。

(いないな)

ハンドシングバルを送り、前進を命じた。

陸おかに上がり、森へと一気に駆ける。

「状況報告」

「装備点検異常なし」

「了解—さてと、長い長い生活の始まりだ」

隊長はニヤニヤしながら言う。

彼らに当てられた任務は、無線機設置のほかに高価値H目標Vの選定も帯びていた。

「野営ですよね?」

そう聞いてきたのは、特殊作戦執行部所属の岡であった。

「いざとなったら泥水だつて啜るだろう?」

「ですよね」

「しかし、最初は無線機設置だけでしたのに、なんで急に脅威度判定任務も含まれたのですかね？」

同じく、セレブラコリュフが聞く。

「さあな、上は相当焦っているかもしれない」

事実、焦っていた。ロウリア王国の時と違い、新世界の列強序列第四位との戦争の危機であり、下手したら新世界で厳しい立場に強いられる可能性があったからだ。

「我々はただ任務を遂行するだけだ」

近藤がそう言うと言行軍準備に入った。

全員が準備を整えたことを確認した近藤はオルタナで情報共有の操作をする。

「各員、作戦発動前のブリーフィングの通りだが、もう一度確認する」

それぞれがオルタナに表示されているデータを見るため、目をぎよろぎよろと動かし。

「屋敷まで直線距離で30km、まあ100km行軍に比べれば遥かに短いな」

地獄の選抜課程を思い出した4人は顔を擡める。

交戦規定

「ROEは自衛戦闘以外を禁止している。まあバレなければいい話だ。何か質問は？」

「……………ないな。では移動を開始する」

5人は気を引き締めて行軍を開始する。

それからほぼ半日、彼らはカイオスの屋敷のすぐそばまで来ていた。

カイオスの屋敷は海に面していて、そして周りある庭や森が綺麗に手入れされているため、建物と自然が綺麗に調和していた。

「岡、協力者を探せ」

「了解です」

岡はそう言いつつ、バックの中から虫かごを取り出す。

「頼むぞ〜」

虫かごの中からハエを取り出す。

「そい」

それを離すとコントローラを取り出し、オルタナをリンクさせる。

「共有を開始します」

各々が付けているオルタナにハエに取り付けられたナノカメラの映像をリンクさせる。

「うくん。いませんね〜」

「協力者の部屋は何階だった?」

近藤の質問にセラブラコリユフが外交官からの調書のデータを取り出す。

「4階の海に面した一番右側の部屋で会談をしたそうです。他にも部屋が多数あるとの



「と」

「了解」

岡はコントローラーを動かし、ハエを指定の部屋の近くまで飛ばす。

「いた、協力者を発見しました」

「顔認識を掛ける」

「了解」

近藤からの指示に従い、顔認識を掛ける。

『98.4% 一致』と表示される。

「間違いありません。協力者、カイオス氏です」

岡がハエを虫かごに戻しながら近藤に接触の方法を聞く。

「見つけはしましたが、どう接触しますか？ 表立っては向こうにも迷惑でしょうけど」

「ダメ元でやるか」

近藤が唸りながらそう言うのと、ポーチから可視化されたレーザーを取り出す。

「隊長、それ、バレませんか？」

「残念ながらこれ以外に有効的な手段がない」

近藤はそう言いつつ、スイッチを入れ、カイオスがいる部屋に照射する。

「はあ〜」

カイオスは屋敷の書齋にて大きくため息を吐いた。その理由は――  
「また徴募しているのか……………」

――皇国軍が兵員増員のために徴募をしているからであった。

「これは……………フェン王国侵攻に関する人員増強か……………」

パーパルディア皇国軍は、フェン王国侵攻を見据えて人員の増強を図っていた。

「戦争、また戦争……………」

カイオスは軍の予算概要請求書を見る。

「去年の2倍ではないか……………」

年々増加しつつある軍事費にカイオスは将来の予想を巡らせる。

（戦費や資源を手に入れるための戦争、そしてそこから更に戦争を呼び起こす。なんとかならんのか？――いいや、なんともならないから今の状況になっているのだろう）

自問自答するカイオス。

「んんー。は〜」

大きく伸びをすると、天井に緑色の点を見つける。

「ん?」

よく見ると、外から書齋への天井へと伸びている線であった。

「なんだ？」

窓の外をそつと見る。どうやら屋敷の外壁沿いの茂みから出ているようだった。

カイオスが茂みを見た瞬間、点滅し始める。

「……………日本の工作員か」

カイオスは急いで身支度を整えると、屋敷の外へと向かう。

正面の門から出てしばらく外壁沿いを歩いていると――

「協力者のカイオスさんですね」

カイオスは声が聞こえた方に体を向ける。そこに立っていたのは、ムー人と先日密談した日本人のハーフのような男が立っていた。

「そうだが……………」

「私は無線機設置のために派遣されたものです」

「では日本人なのか……………わざわざありがとう。さあ、こちらへ」

カイオスは正面の門ではなく、裏門へと案内する。

「あなた一人で来たのか？」

「いえ、ほかに複数。具体的に話すことができませんが……………」

カイオスは裏門を解錠する傍ら、その日本人を見る。背中に大きなバッグを背負っており、武装している気配はない。

ガチャンという音とともに扉が開く。

「さ、こちらへ」

カイオスが中に入るよう促すも、その日本人は中に入らず、森のどこか遠くをじっと見ていた。

「どうしましたか?」

「いや、なんでもありません」

しばしの沈黙の後に、その日本人は答えた。

カイオスは日本人を連れて先程までいた書斎へと入る。

「ここに?」

「いや、少し待ってくれ」

カイオスは本棚へと近づき、一冊を奥へと押し込む。

ガコン、という何かがハマる音とともに本棚が奥へと開く。

「おお、隠し扉というやつですか」

岡は子供のような声で静かにさわぐ。

「まあ大したものではない」

隠し扉の先は人一人が通れるか通れないかぐらいの狭い階段であった。10段ぐらい降った後、その部屋に到着する。

「ん？ この部屋は……………」

「私だけが知る部屋だ。正確に言うと、私とこの部屋を一緒に作った一部の者だけだ」  
「なるほど。無線機設置に最適というわけですか」

岡はそう言いつつ、バックから器材を取り出す。

「それが貴国の通信機なのか？」

「ええ、西暦換算で2050年代の技術で作られた無線機です」

工作隊が持ち込んだ無線機は、短波無線—アマチュア無線機であった。本来なら通信衛星を経由した衛星通信が望ましいところではあったが—稼働中の衛星は日本か第三文明圏、ムー共和国のみに展開していた。—現状、通信衛星は急速に高まる需要に伴いパンク状態となっていた。

「後はアンテナを設置すればいいのですが……………」 どこか適当な場所がありますか？」

「ふーむ……………」 屋敷に魔導通信機のアンテナがあるのだが、その横に設置してくれ」

「了解です」

岡はカイオスの案内で屋上に上がる。

「いい眺めですね」

そう感想を漏らしつつ、展開式のパラボラアンテナを展開し、固定する。

「よし。こんなもんすかね」

岡は再び隠し部屋に戻り、本国の外務省に対して無線感度チェックの通信を送る。

「こちら00、ラジオチェック、ラジオチェック。本日の東京五輪は快晴なり」

しばらくして明瞭な声が返ってくる。

『こちらマザーグース。本日の東京五輪は快晴なれども曇りなり。感度良好。通信、終わり』

しつかりと通じることを確認した岡は、無線の使用方法をカイオスに伝える。

「このプレストークボタンを、話すときに押してください。そして聞く時はボタンから手を離してください——」

その後の細かい説明を終えて岡はすぐに裏門から屋敷の外へと出る。森の少し奥へと進むと、声が掛かる。

「首尾はどうだ？」

「問題なく。次はモグラですか？」

「ああ。移動しながら話そう」

2人が茂みをかけ分けながら歩く。

「既に人物ファイルは頭に入ってるだろうが、我々はムーの人間を装う」

「ええ、だからこそ俺みたいのが今回の基幹要員なのでしょう？」

岡のフルネームは、岡<sup>わか</sup> 浩二<sup>こうじ</sup>。生まれも育ちも日本だが、母親はフランスから日本へ帰化し、父親はフランスと日本のハーフのため、その容貌はフランス人と見分けがつかない。

他の隊員も同じであった。

「野営と言いましたが、毎日というわけではありませんよね？」

「ああ、いずれはムー人になりすまし、パーパルディア皇国を色々と探っていく——」  
近藤が立ち止まり、ホルスターから銃を取り出す。

岡も静かに銃を取り出す。

「……………」

オルタナによる光学補正のおかげで森深くの夜でも昼間のように見える。

「岡、屋敷で付けられた気配は？」

「薄々と、屋敷に入る前から視線を感じました」

2人は同時に消音器<sup>サブレッサー</sup>をつける。

「いませんね……………」

「魔法とやらで透明化してるかもしれん」

日本国はロデニウス連邦と共同で魔法研究にあたっているが、その際、高位の魔導士は本当に透明化できると、報告を上げている。

「シユガー、応援に来てくれ」

バチ バチ

ジツパーコマンドが返ってくる。

近藤は前進とシグナルを送る。

(まずいな………協力者との接触を見られた可能性があるな)

内心は焦りつつも、近藤は油断なく周りを見る。

『前方40m、折れてる幹の側、何か動いた』

岡が近藤の肩を叩き、そうシグナルを送った。近藤はその場所を注意深く見る。

ジツ

オルタナのモーシヨセンサーが反応する。人の感覚では絶対に分からないであろう、僅かな動きにもそのセンサーは反応する。

(ありがたいな)

文明の利器に感謝しつつ、近藤は慎重に足を進める。

(姿が見えない………いや、影がある)

「どうします? 自衛以外の交戦は禁じられているんじゃないや………」

「岡、お前はまだ甘いな。自衛以外の戦闘を禁じるとは――任務を遂行するための戦闘は全て許可するという意味だ」



近藤が銃を構えると、その場所の景色が微かに歪む。  
パシユツ!!

消音器独特の銃声が辺りに微かに響く。

「命中。前進」

幽霊のような陰から微かに血飛沫のようなものが出てくるのを確認し、前進する。

(20 m離れてるのに、よく当てたな……)

岡は近藤の射撃センスに驚きつつも、周りの警戒は怠らない。

やがてその場所に着く。

「女?」

「綺麗ですね……」

二次元でしか存在しないような美貌を持つ女が銃創を抑えながら倒れていた。

近藤が背囊はいのうからモルヒネとガーゼを取り出し、腿に打つ。

「あんた、わざわざ俺たちをつけてどうするつもりだった?」

貫通してたのを確認し、傷口をガーゼで強く抑える。

近藤は、カイオスと工作員が接触したのを見ただけでも報告することはできるはずなのに、なぜそうしなかったのかと問う。

「……………詳細を確認するためだ」

「ふうん。なら、生かして帰すわけにはいかないな」

事実上の死刑宣告をするも、女は一切動じない。

「潔くやってくれ。敵に囚われた以上、もうできることはない」

「ふん。逃げようと思わないのか？」

「逃げてても無駄だ。身なりと、小型魔導銃を持っているということはムーの人間なのだろっ？」

（ムーの人間と勘違いしているのか、好都合だ）

「あいにくこの国の所属かは言えない」

「なるほど。日本人か」

「っ！」

近藤は微かに動じてしまう。

「分かりやすい反応だな。素人臭いぞ？」

無論素人ではない。近藤はCIAにて実地研修を積んでいるし、表沙汰にはできない任務にも従事している。

「尚更帰せなくなつたな」

「ちよ、ちよつと」

岡が静止するも、それを振り切り、女の額に銃口を突きつける。

「あばよ」

トリガーを引く。

ガチッ

だが、銃弾は発射されなかった。

「は。ツケは高くつくかもしれないがな」

近藤は徐に錠剤のようなものを取り出す。

「飲め」

女は素直に飲む。

一方、岡は全く状況が読めていなかった。

「隊長？」

「お前は自由だ。だが、俺たちを監視しているように、お前もこれから監視される」

そう言うと、女を立ち上がらせ、突き放す。

「隊長、よかったのですか？」

「さあ？ さつきも言った通り、このツケは高くつくかもしれない」

行くぞ、と言い、2人はその場から離れる。

「はあ、はあ、はあ」

一方、女は森の中を走っていた。

「くそ。やらかしたな」

走りながら悪態を吐く。女はしばらく走り続けると、木にもたれかかる。

「はあ、弾丸が貫通したはずなのに痛くない……………」

ある種の麻薬、モルヒネはその効果をしつかりと発揮していた。

「陛下になんと申し上げれば……………」

憂鬱げに言う。

気怠くなってきた体に鞭を打ち、女は歩き続ける。

中央暦1639年 5月12日 日本国 国防省

既に日は沈んでいるが、街を灯す明かりが夜を明るく照らす。

夜を明るく照らす街、東京都心のほぼ中心、市ヶ谷の国防省の大臣執務室に広瀬国防相がいた。

「は〜」

その部屋の主、広瀬は大きく息を吐く。

「井勘定ですが、来年度の概算請求となります」

財務省から国防省に一時的に出向している財務官が広瀬がため息を吐く原因となるものを出す。

「概算だけで去年の1.6倍か……………」

机に額を擦り付ける広瀬。

「陸の人員拡大もそうですが、特に顕著なのは海軍です」

財務官が端末を取り出し、予算増額の推移を表したグラフを表示させる。

「これでも削ったほうなんだよな？」

——当たり前です。と答える財務官。

「削らなかつたら2倍は超えるかもしれませんよ」

ゴン、ゴンと額を机にぶつける。

「どうしてこうなった……………」

「国防軍の役割が増大しているのですから仕方ありません」

「現場に頑張ってもらえないか……………」

そうですね、と財務官が相槌を打ったところでドアがノックされる。

「失礼します」

扉が開く。中に入ってきたのは事務次官であった。

「何かあった？」

「外務省と情報庁からの連絡が自分のもとに來たので報告を。内容は、『作戦成功』です」  
それを聞いた広瀬は背もたれに力なく寄りかかる。

「これで一步前進だな」

「はい」

領く事務次官。

確実な一歩だ、と広瀬は日章旗を見ながら言うのだった。

央曆1639年 7月12日

パーパルディア皇国 パラデイス城

「陛下。フェン王国侵攻の準備、整いましてございます」

皇国軍最高司令官のアルデがルディアスにそう報告した。

「分かった」

ルディアスが玉座から立ち上がる。

「余はここにフェン王国に対する宣戦布告を宣言する！」

「「皇帝陛下万歳！ パーパルディア皇国万歳!!」」

王の間にいる全員が万歳をする。

アルデはフェン王国侵攻部隊に対し、作戦開始を下命。数百隻の艦隊と揚陸艦が港から出撃した。

## これが戦争——1

パーパルディア皇国軍の動きは国防軍の偵察衛星によってすぐに把握された。

国防省 大会議室

「パーパルディア皇国艦隊の進路を予測した結果、フェン王国へ向かっているものと思われまます」

「官邸に第一報は？」

「既に送信済みです」

「前回の轍は踏まなくて済みましたが、問題は我々は何もできないということですよ」

フェン王国とは国交があるものの、安全保障条約といった軍事支援に関係する条約は一切締結されていない。それに大東洋条約機構に未加盟、おまけにパーパルディア皇国とは正式な国交がない、八方塞がりの状態であつた。

そして第一報を受信した官邸では緊急国家安全保障会議が開かれていた。

「フェン王国に滞在している邦人は約2038人、政府関係者も含めると、その数は2200人に昇ります」

広瀬が報告する。



「約2000人の邦人を迅速に退避させるのは不可能です。おまけに現地でパールディア皇国との武力衝突も懸念しなければなりません」

邦人保護出動の可能性を示唆されたことに上野は難色を示す。

「ただでさえ前回の護衛艦砲撃で野党から叩かれたんだ。なんとか穏便に——」

「——御言葉ですが」

上野の言を遮り、白井総隊司令が言う。

「事態は穏便という領域を超えています。フェン王国に大規模な艦隊が向かっている、邦人が危険に晒されている、戦争状態の国家に邦人が滞在している、それだけでも邦人救出の名目は立ちます」

——あなたが経済界に配慮しすぎなければこうならなかったんだ。

白井は誰にも聞こえないように罵る。

今回のパールディア皇国の軍事行動に移る前、国防軍と情報庁はその動向からフェン王国に刃を向けていることは把握していた。そしてそれを報告し、フェン王国に滞在している邦人をすぐにでも国外へ脱出させるべきと提言していたもの——

『フェン王国への渡航制限は認められない』という総理の鶴の一声で全てはご破産となった。

そのことに野党、そして与党内部からもパッシングを受ける始末となったが、上野は

臆することはなかった。

「それにしても総理、どうしてあんな強硬だったのですかね」

一角に座っている秘書官らがコソコソと話す。

「政務秘書官から聞いた話だが、経済界、特に造船界限と観光界限と強固に癒着しているらしい」

その一言で察する。

「癒着ならともかく、そこまで配慮するのか」

「ああ、誰かがキレてもおかしくない状況だ」

秘書官は国の心配をしながらもこれからの状況を見極める。

「たしかに名目は立つだろうが、間に合うのかね？ 向こうに航空インフラが整っているわけでもあるまい」

「確かに重量級はおろか、小型機が着陸できるだけの滑走路はなく、おまけに2000mを超える平野すらありません」

国防省の運用官が言った。

「だったらどうするつもりだ？」

運用官は続ける。

「現在フェン王国沖に第5機動部隊が展開しています。麾下の艦に搭載されている回転

翼機、VTOL機を使い、邦人を艦へピストン輸送します。しかしこれでは間に合わない上に一度に輸送できる人数も限られてしまいます」

——下手したらベトナム戦争の時の米軍になるかもしれません。運用官はそう付け加える。

「よつて第一護衛艦隊に『うんりゆう』を付けた増強第一護衛艦隊を現地へ急派させます」

「平時体制の状況で派遣できる護衛艦はこれが限界です。これ以上の派遣を望むのだったら最低でも邦人保護出動を掛ける必要があります」

「邦人保護出動の発令は無理だ。現況でなんとかできるのか？」

——ギリッ

誰かが拳を握りしめる音が聞こえてくる。

(ここにきて保身に走るのか?)

一部を除いた全ての閣僚が呆れて何も物を言えなかった。

「総理。今ここで邦人救出を命じてできるだけ助けたと世間に言うか、それとも戦闘の可能性を可能な限り避けた上で救出した結果、ほとんど救出できなかった——どちらを選びたいですか？」

白井が語気を強めて言う。

世間から前回の比にならないパッシングを浴びることを容易に想像できた上野は頭を抱える。

(首相にとつてはフェン王国の渡航制限を掛けなかったツケを払わされているな)

「……………直ちに全閣僚を呼び出してください。邦人保護出動を発令します」

ついに上野が重い腰をあげたのだ。

「分かりました」

関係者が慌ただしく動き回る。

「司令」

白井の後ろに控えていた運用官が耳打ちをする、

「部隊行動基準で武器仕様の制限が懸けられる可能性があります、如何します?」

「まあ甘んじるしかない、よくて護衛艦の主砲まで、悪くて隊員の小火器類の許可だろうな」

自衛のみの武器仕様許可の可能性を示唆する白井。関係部隊に指示を出すため口を開こうとした時——

「失礼します。司令」

——国防軍統合幕僚監部の連絡部付の隊員が耳打ちをしてくる。

「福生の在日米軍司令部から連絡が来ました。日本政府に対して邦人救出のための部隊

派遣要請を出すそうです」

「米軍が？」

「はい。ついでに国連軍の方にも動きがあるそうです」

「ある程度は動きやすくなったが、本国が消滅している中でよくその決断を出せたもんだ……」

この時の日本政府関係者は知る由もなかったが、アメリカ合衆国政府が消滅している中でこの決断は、『食客として不自由なく食わせてもらっているのだからその分の働きを返す』という至極簡単な理由だった。

「米軍の動きは？」

しばらくして運用官がメモを受け取り、それを読み上げる。

「現状はイージス艦一隻のみのようですが、原隊復帰命令によつて遠征打撃軍を米軍に戻すことも検討されているようです」

「イージス艦一隻となると――」

「――訓練中だった在日米海軍駆逐艦『ラファエル・ペラルタ』が動いています」

「『チャンセラービルズ』はやられたからな、動かせるのは『ラファエル』だけか」

「はい。遠征打撃軍を動かすとなると時間が掛かりますからね、駆逐艦を一隻出してくれただけでも十分でしょう」

会話がひと段落した頃、宇治和外務大臣が秘書官からメモを受け取る。

『報告します。先程、駐日米大使から連絡が入りまして我が国に対し、邦人救出のための部隊派遣要請が来ました』

危機管理センター室の一角がざわざわとなる。

「米国から？」

上野が思わず聞き返す。

「はい。既に在日米海軍のイージス艦一隻がフェン王国沖に向かっているようです」

「米軍が協力してくれるなら千人力だ」

その後の閣僚会議にて邦人保護出動が正式に発令されるのだった。

■ 日テレ

「おい、聞いたか？」

政策部局長がベテラン記者に声を掛ける。

「はい？」

「さつき全閣僚が官邸に入っていったらしい」

ベテランディレクターはすぐに興味を失う。

「そんなのこの世界に来てから日常茶飯事じゃないか」

「まあ待て」

局長がディレクターに詰め寄る。

「国防省の伝手からタレコミがあつてな。その閣議の内容が邦人保護出動に関連しているらしい」

寝耳に水であつた。そんな話は報道機関に出回っていない。

「……最近、国防軍の動きが少しだけ活発化していた原因はそれか……そのタレコミがなかつたら恐らく公式発表されるまで気付かなかつただろうな——それで、どこに対し邦人保護を？」

「フェン王国、と言えば分かるな？」

局長の一言で全てを察する。

「パ皇ですか。では、いよいよフェン王国に対し宣戦布告を……待て、だとしたらフェン王国にどれだけの日本人が？」

2人の動きが止まる。

「おい！ 全員聞け！ 特番の準備をしつつ、フェン王国に滞在している日本人の数、そしてパープルディア皇国の動向を調べてくれ！」

「え？ なんかあつたんすか？」

若手の1人が訳がわからずに聞いてくる。

「決まっているだろう、特ダネであると同時に日本の危機に遭っているかもしれないと

いうことだ——分かったならさっさと動け!!」

全員が慌ただしく動く。観光庁にフェン王国へ渡航している人数を確認するもの。官邸広報センターに閣僚会議の詳細を問い合わせるもの。それぞれがそれぞれの仕事を全うする。

「しかし局長。パールディア皇国の動向に関してはどうなのでしょう……?」

「そうだな。俺もそれをどうするか考えていたところだ」

どうするかと悩んでいるとアシスタントディレクターが声を上げる。

「ムー経由で問い合わせるのは如何でしょうか? ムーにはうちの報道局支部が出ていますし、ムーならパールディア皇国とも国交がありますから、報道局も進出している可能性もありますし……」

何より列強序列第二位ですから——と付け加える。

「……でかした。すぐにムー経由でパールディア皇国の動向を掴め。政府の公式発表を待っているほかの報道局を出し抜けるぞ!」

2日後、ムーの報道局から日本の報道局に対して連絡が入る。

「局長、時間が掛かりましたがムーからの返信です」

局長にタブレットを渡す。

「ありがとう」



内容を一瞥した局長の顔が驚愕に包まれる。

「なっ……大規模な艦隊が揚陸部隊を擁して出撃している!? それも3日前!」

だとしたらその艦隊はフェン王国の目と鼻の先にいるだろう。

「滞在している日本人は確か2000人強だったな?」

「はい」

「政府の発表はなし、フェン王国から脱出している形跡もないんだっただな?」

「はい、至って普通です」

（まさかこの期に及んで退避勧告すらしていないのか?）

恐らくそうだろうと自問自答する。

（だとしたら……政府はこの事実を隠蔽していた?）

局長が有る事無い事を想像していると――

「局長!」

自身を呼ぶ声に現実を引き戻される。

「あ、ああ。どうした?」

「先程、官邸から報道機関に向けて連絡がありました。20分後に記者会見を行うと」

「定例ではなく緊急か……だとしたら他局よりもうちらが一步踏み込んだ質問ができ

るな……現場へは誰が?」

## ■ 官邸 記者会見室

官邸のプレスセンターに集まった報道各局の記者やアナウンサーは一同困惑していた。

「今回の突然の記者会見ですが、何かあったんでしょうか？」

「さあな、一切の情報が無いからなんとも言えん」

（やはり他局には情報が降りてきていないのか……）

囁き声ささやかしこえがプレスセンターに響く。

すると、官房長官が入室してくる。カメラのフラッシュが一斉に焚かれる。

「まず今回の記者会見を開いた理由ですが。現在、我が国の邦人が多数滞在しているフエン王国に対し、パーパルディアア皇国が宣戦布告したという件です」

一切知らなかった報道陣が騒めく。

「えー、先程政府は内閣閣僚会議にて自衛隊法第82条第1項国防軍に改組した現在も、自衛隊法のままになっている。の邦人保護出動の布告を閣議決定致しました。今日中までに布告を完了し、国防軍に対し直ちに邦人保護のための出動を命じます」

「邦人保護：2041年のモロッコ以来か」

新聞記事やニュースのテロップは『10年振りとなる邦人保護出動の発令』で埋め尽くされるだろうと報道陣は容易に想像できる。

原稿を読み終えた官房長官は内閣広報官に合図をする。

「それでは、これから皆様より御質問をいただきます。指名を受けられました方は、お近くのスタンドマイクにお進みいただきまして、社名とお名前を明らかにしていただいた上で、御質問をお願いいたします。まず、幹事社から御質問いただきます。富士テレビの——さん、どうぞ」

「富士テレビの——です、今回の邦人保護出動の発令で現地で戦闘になる可能性はありますか？」

「十分にあり得ます。そのための邦人出動です」

「フェン王国に滞在している日本人は約2000人を超えると観光庁が発表しています。が、全てを迅速に退避させることは可能でしょうか？」

「可能な限り迅速に退避させます」

(明言を避けたか……)

他、いくつかの質問を終えて席に着く。

「ありがとうございます」

「では、次に日日テレビの——さん、どうぞ」

「日日テレビの——です。官房長官にお聞きします——」

「——邦人保護出動の発令前にパーパルディア王国から数百隻を超える艦隊がフェン王国に向けて出港しています。現在の位置を推測しますと、既にフェン王国沖に到達していると考えられますが、如何でしょうか？」

プレスセンターの空気が揺れる。流石の官房長官でも冷や汗を流す。

「長官！ 今の対応速度では間に合わないのではないですか!？」

「2021年のアフガンの再現でもするつもりですか!？」

日日テレビが投下した爆弾の余波は受けて、他の報道社も矢継ぎ早に質問をする。

「静粛に！ 静粛に！ 質問はそれぞれお受けしますので、落ち着いてください!!」

内閣広報官が場をなんとか鎮めるが、官房長官は冷や汗を垂らしていた。

(どこから情報が漏れた!?)

(わかりません!)

幕の裏で官房長官を見ていた演説官に視線で会話をする。

「えー…」

動揺を隠せずにしどろもどろになってしまふ。そして辛く長い記者会見が終わる。

「日日テレビの方、少しよろしいでしょうか?」

内閣広報官が日日テレビ関係者を呼び止める。

「はい、なんででしょうか?」

カメラマンを含め、全員が作業の手を止める。

内閣広報官は日日テレビの記者一人を裏に連れて行く。

「それで、なんの御用でしょうか?」

「いえ、私ではなくあの人です」

広報官が指さす先を見ると、

「ではこれにて」——と広報官が去るのを見送ってから男が話す。

「国防軍総隊司令の白井です。流石は日日テレビ、政府が具体的な明言を全て避けたのに、敵の侵攻方法——は容易に想像できるか…: 艦隊の規模すらほぼ正確に当てまし

たね」

記者はため息を吐きながら話す。

「申し訳ありませんけど、情報源についてお話しすることはできません」

「いえいえ、気にならさず。まあ、ムー共和国はパーパルディア皇国と正式な国交が締結されていますからね。ムーの報道社経由で色々聞きだしたのでしようけど」

記者の目の色が変わったのを確認した白井は更に続ける。

「情報源は言わないと言いましたがね、今回の記者会見の前に国防省が意図的にリークさせました」

「……で？」

「外国に報道支社を出しているのは日日テレビだけです。おまけに日本から直線距離で2万kmも離れているムーに、ね」

「確かに盲点でしたな。それで、本題は？」

「単刀直入に言います。今回のリークはあなた日日テレビ、及び報道機関を試すためのミスリードです」

「“利敵行為”の心配ですか？」

「そうです。今回は先ほども言いました通り、ミスリードです。今後はあのようなリークはないと思ってください」

『貴重なお時間をありがとうございます』——白井がそう言うのとプレスセンターから出て行く。

「——さん。なんか言われました?」

「国防軍の現場司令トップが出てきやがった」

「え? 国防軍の総隊司令がですか?」

「ああ、利敵行為の釘を刺された。おまけに政策部の局長の情報源からのリークはミスリードだったとさ」

踊らされた、ということですか?——とカメラマンが問う。

「ああ。やられたな..」

最後まで残っていた日日テレビ関係も出ていき、プレスセンターには静寂が残るのだった。

### ■ フェン王国沖

総勢数百隻の艦隊とそれに匹敵する規模を誇る揚陸船を擁する艦隊がフェン王国沖にいた。

この艦隊の旗艦である超フィッシュヌス級戦列艦の上部甲板にて、一眼見て艦隊の司令であることが分かる服装をした人物が報告を受けていた。

「司令、飛竜隊は全騎発艦を終え空中待機中。揚陸船も準備が整っています」

「うむ！ ご苦労！」

その報告はフェン王国への侵攻準備完了を知らせるものだった。

「皇帝陛下から直接勲功を賜るとあつて兵たちの士気は高いです」

御前会議終了後、ルディアスからアルデへ直接、『フェン王国は好きにしてい』と言われたのだ。つまり一軍人がその土地、人民をどう扱おうが構わないということである。

「……………」

「閣下、如何なさいましたか？」

「いや、なんでもない。作戦に集中しよう」

最初は竜母から発進したワイバーンロードによる後方拠点と海岸防衛拠点の破壊が実行される。

ワイバーンから火球が放たれ、赤い軌跡を残す。

「また来たぞ!!」

「退避！ 退避——!!」

フェン王国軍は上空からの攻撃に成す術なく壊滅する。

「海岸周辺に敵影なしとのこと、揚陸部隊の上陸を開始させます」

「うむ」



既に制圧された海岸に歩兵部隊が上陸する。

「はあ、こんな簡単な作戦なんて……拍子抜けだな」

かなり遠い山の上から赤い煙が上がっている。どうやら狼煙を上げているようだった。海岸の砂を踏みしめながら歩いていると、カキツという金属音のような音が聞こえてきた。

「ん？　なんか——」

何を踏んだのか確認をしようと足を上げた瞬間、そこで彼は意識を失う。

ポオオン!!!

砂塵を巻き起こしながら爆発が起きる。

「な、なんだ!?!」

「敵の攻撃か!?!」

最初の爆発を皮切りに次々と爆発が起こる。

「どこだ……敵はどこにいる!!」

上空のワイバーンに敵の位置確認の連絡を入れるも、『周囲に敵影なし』と返ってくる。

「ふ、ふざけるな!　この爆発が見えんのか!?!」

再度確認を請うも返ってきた答えは先程と同じであった。

この爆発の正体、フェン王国軍が敷設した対人地雷であった。

フェン王国軍はパーパルディア皇国軍の上陸をどう足掻いても防げないと判断し、日本の軍事関連雑誌を片っ端から読み漁り、有効な戦術を見つけようとした。

その際見つけたのが対人地雷であった。

フェン王国からすれば製造費用は高くついたものの、上陸部隊の戦力を削れるならと惜しみなく投入されていた。

ちなみに日本からすれば条約違反の代物であるが、違反した相手は異世界国家フェン王国、おまけに条約を未批准。倫理的に問題はあつても、法律的には問題なしであった。歩兵隊は強引に地雷原を突破するとそこに留まる。

「全員傾注。我々はしばらくここでフェン王国軍の襲撃を警戒する。海岸を戦列艦の総砲撃で耕してから本隊が上陸することになる。：アルタラス王国のように簡単に行くと思うな。気を引き締めてかかれ」

既に50人以上の仲間を失った歩兵隊。上陸前のような気楽さはなく、全員が表情を引き締める。

「くそっ！ ニシノミヤコまで行くのにどれだけの被害が出るか……」

歩兵隊指揮官はこれからの行軍に憂鬱げになるのだった。

一方その頃、ニシノミヤコでは——

「ですから！ パーパルディアア皇国の軍がすぐそこまで来ています！ すぐにも逃げないとまずいことになります。」

フェン王国兵が住民、いや、観光客日本人に向かって退避するよう促していたのだが――

「は!?! わざわざ金を払ってまでここに来てのに!?! だいたい、そんなのが来てるところで――」

日本人の言葉は笛の音でかき消される。

「ま、まずい……ワイバーンが……」

フェン王国兵が上空を見たので日本人も釣られて見る。そこにあつた光景はワイバーンが火球を形成してこちらに向かって撃とうとしている様子であった。

「は、はや――」

ワイバーンから火球が放たのを確認した兵士は日本人を強く突き飛ばす。火球が着弾する。

「グアアアアアア!!!!」

人の叫び声とは思えない声を兵士は発する。悲鳴を上げながら兵士は地面を転がり回り、やがてパタリと動かなくなる。

最初の攻撃を皮切りにワイバーンが次々と街や逃げ回る人々に火球や火炎放射を浴びせる。

「は、早く逃げろ!!」

日本人や、僅かに残っていたフェン王国民が逃げて行く。

「どのくらい残っている?」

「日本人観光客、約200人! フェン王国民に関しては少数!」

「向こうに逃げろ!」

「ま、待て! まだ上空にいるのに——」

凄惨な光景であった。無慈悲な攻撃によつて次々と破壊されていくニシノミヤコ。

幸いなことは日本人、及び民間人に被害が出ていなかったことであつた。

敵のワイバーンは街を一頻り破壊した後、撤退していく。

「なんとか乗り切つたな。だが……」

破壊された家屋や道路を見つめる。

「くそつ。好き放題してくれやがって……」

「兵士長、随分とやられてしまいましたね……」

「ああ、直前で避難が間に合つたのが不幸中の幸いだ。だが——」

兵士長は崩れた塀のそばで蹲うづくまっている日本人グループを見る。

「奴らが素直に避難してくれれば、あいつが死ぬことは無かつたのに……!」

「恨むのも無理はない。だが彼らは戦う術を知らない一般人だ。彼らを我々は助けなけ

ればならない」

すると兵士長の目に瓦礫を撤去し、フェン王国兵を助けている一団を発見する。

「おい、君たち。何をしているんだ？」

兵士長は兵士を1人連れてその一団に詰問する。

一団——明らかに日本人と思しき服を着た3人が、助けた兵士を他の兵士に引き渡す。

3人のうち、1人が一歩前に出てくる。

（今まで見てきた日本人と顔付きと髪の色が違うな……）

「私はレイモンドと言います」

（日本人の名前と違うな……）

その正体が気になる兵士長だったがその思いを片隅に置いておき本題に入る。

「……仲間を助けてくれてありがとう。感謝する」

「いえ、当然のことをしたまでです」

それからしばらく話して分かったことは、彼らは日本に駐留している国連軍とやらの軍人で、フェン王国へは休暇の消化で来ていたという。

「飛んだ災難でしたな。こんなことに巻き込まれるなんて」

「いえ、戦争になるのは覚悟の上でした」

「覚悟の上？」

「ええ、戦争の危険が迫っていたのに、日本国政府は渡航制限を設けませんでした。下手したら何の罪もない市民が犠牲になる可能性があります。私たちはあくまで休暇の消費としてくることにしました」

兵士長はこの3人の覚悟に心を少し驚かせる。だがそんな余韻に浸かる暇も無く、新たな狼煙が上がり始める。

「兵士長！ 報告です」

「なんだ？」

兵士がメモを読み上げる。

「ニシノミヤコから見て北側50kmにパーパルディア皇国軍の地竜複数を確認したとのこと!!」

『もう来やがったか』と兵士長が歯切りをしながら言う。

「アマノキへの道は安全か？」

「いえ、ワイバーンがいるでしょうから、安全に移動させることは困難です……」

長い熟考の末、兵長は口を開く。

「…… ミミールの森を通れば或いは？」

兵士長の言に兵士は思わず耳を疑う。

「お、お待ちください！ ミミールの森は我らでも迷うほどの深い森です。そんなところに一般人を連れて行けば、どうなるかは想像できるはずです」

ミミールの森とはニシノミヤコとアマノキを塞ぐようにして形成されている巨大な森林だ。

その森の深さはフェン王国の民でさえ迷い込むほどの魔の森として恐れられている。「いや、何も森の中に入る必要はない。森の外縁の沿うように移動し、万が一の時は茂みなどに隠れればいけるのではないか？」

「それは賭けですか？」

「賭けだ」

兵士の問いに兵士長は強く言い切る。

「分かりました。護衛はどのように？」

「第一兵隊と第二兵隊をつけよう。その他は街に残り出来るだけ時間を稼ぐ」

「はっ！」

踵を鳴らし、伝令を伝えるために走っていく。

「聞いての通りだ、君たちも指示に従ってもらおうが、いいな？」

「問題ありません」

兵士長が側に控えている兵士に指示を出そうとした時、再び甲高い笛の音が鳴り響

く。

「ワイバーンだ!!!」

「くそっ!! 第二波か!？」

「全員伏せろ!!」

再びフェン王国の美しい第二の都、ニシノミヤコの破壊が開始されるのだった。



時間は少し遡り、ニシノミヤコへの第二攻撃を開始する前に移る。

「それにしても、上陸した歩兵隊に約3分の1がやられるとは思いませんでした……」

「ああ、やはり文明圏外などに関係なく、全力で叩き潰す必要があるな……ニシノミヤ

コへの空襲は実施したのだったな？」

「は。既に空襲を行ったワイバーンは全騎帰還、休養に入っております」

シウスは瞑目すると静かに目を開く。

「第二次空襲を行う」

「は？ 2回目ですか？」

副司令は思わずシウスに聞き返してしまふ。

「海岸は戦列艦の砲撃でなんとか安全を確保したが、内陸となるとそうはいかない」

「し、しかし。戦列艦の支援砲撃を行うために海岸になるべく近い平野を選んだのです



「馬鹿者!!」

突然のシウスの怒声に作業を行なっていた誰もが手を止める。

しかしシウスは一切気にせず続ける。

「いいか? あらゆる準備をした上でこの作戦は決行されたのだ。だが、既に上陸戦だけで想定以上の被害が出ている。しかも正体不明の攻撃でだ。正体の不明の攻撃の正体を、我々は掴めていない!! あらゆる想定を行い、慎重に攻略を進める。いいな?」

シウスのぐうの根も出ない叱咤にしょんぼりとしてしまう副司令。

「全部隊に伝えろ。相手は列強だと思え、とな」

パーパルディア皇国軍は今までの楽観的な思いを全て捨て、命を賭けた戦いであると覚悟することとなる。

◆ 兵士長は燃え盛る街を見て呆然と立ち尽くす。

少しはパーパルディア皇国軍と戦えるだろうと思っていた。だが、その考えは浅はかだった。フェン王国にはない兵器、戦術、そしてワイバーン。その差は残酷であった。

「……………長。兵士長!!」

「……………はっ! ど、どうした!?!」

「もうすぐそこにパーパルディア皇国軍が来ています。急いで下さい！」  
「あ、ああ……」

フエン王国軍は絶望的な市街地戦の準備を始めるのだった。

■ ミミールの森 周辺

ミミールの森と平野の境を200人以上の人々が列を為して移動していた。彼らはニシノミヤコから退避する日本人と数十名のフエン王国人であった。

その一部、国連軍所属のレイモンドは部下2人と話をする。

「結構な行軍になるな…… 確かニシノミヤコからアマノキは300〜500km位だよな？」

それにはレイモンドの部下であるウイリアム・F・ケネディが答える。

「かなり無理がありますが、そうでもしないと生き残れないですよ」

『だけどなく』とウイリアムの後ろを歩いていたジエームズが言う。

「敵に航空戦力がある以上、この強行軍は一か八かの賭けですよ…… 本国からの救助が来るのか一切不明ですし……」

3人があれこれと話していると――

「ねえ、——は!?!」

「あれ!?! いない!」

列の中腹、レイモンド達の3人分離れたとこを歩いていた夫婦らしき人物達が騒ぎ始める。

レイモンドはその夫婦の元に近づく。

「すみません。どうかしましたか？」

「え……はい。あの、息子……この位の大きさなのですが——が、いなくなつてしまつて……」

「いつから居なくなりましたか？」

「はい、えーと……そういえば街を出たあたりからいなくなつたような……」

夫婦が街に戻ろうとするのを静止するレイモンド。

「奥様。貴女達はこのままアマンノキへと向かつてください」

「で、ですが……」

レイモンドは有無を言わず、そのままニシノミヤコへと戻つていった、

「じゃ、行きますか」

ウイリアムとジェームズもそれに続いて行つた。



ザツザツザ、と軍靴が音を並べて歩く。

パーパルディア皇国軍第21歩兵隊であつた。

行軍する彼らの表情は一同暗い。空が雨模様になりつつなるのもあるだろうが、上陸戦で数十人に仲間を失っていることが最大の要因だった。

「まもなくニシノミヤコへと到着する。事前の航空偵察によれば、フェン王国軍が防衛戦を敷いてるようだ。よって、我々はまず牽引式魔導砲による事前砲撃終了後に突撃を開始する。いいか、先の上陸だけで数十人が死んだ。絶対に油断するな」

隊長の言葉に力強く頷く兵士達。

歩兵隊はニシノミヤコの手前20kmで行軍を停止する。

「牽引式魔導砲、全ての準備が整いました」

「うむ——砲撃開始!!」

「撃て!!」

牽引式魔導砲。第二次世界大戦でいうところの野砲が火を噴く。

「命中!——続いて撃て!!」

牽引式魔導砲の全力射撃。演習はおろか、実戦でもまず見ない光景に隊長は思わず感嘆の息を漏らしてしまう。そして再び気を引き締める。

◆ 数十分に及ぶ全力砲撃の後、第21歩兵隊は後続隊と合流した後、ニシノミヤコへと突撃を開始する。

レイモンド達はほぼ全力疾走に近いスピードでニシノミヤコへと戻ってきていた。

しかし、普段からトレーニングしている為、肩で息をする程度までは息が上がっていない。

「な、あんたら、また戻って来たのか!？」

ニシノミヤコへと着くなり、すぐに兵士に止められる。

「もうすぐ戦闘が始まるんだ！ 早くあんたらは——」

「子供を探している!!」

「子供？」

レイモンドは夫婦から言われた子供の特徴を伝える。

「おい、お前見たか？」

「いや、見てない」

数少ない手空きの要員を捜索に出すことを決断する。

「あんたらに頼むのは気が引けるんだが、すまないが手伝ってくれ」

「もちろんです。そのために来たのですから」

レイモンド達はフェン王国兵と協力して探すものの、中々見つからない。

「くそ。どこにいます」

捜索している全員に焦りが広がる。

「おい、そのの——」

フェン王国兵が次の指示を出そうとした時、線の抜けるような音が辺りに響き渡る。レイモンド達はそれに聞き覚えがあった。

これまでの戦争、紛争で嫌というほど聞いた音。

「おい、聞こえたか？」

不気味な音が、風を切る音が近づいてくる。

「伏せろ!!」

レイモンドの叫び声にフェン王国兵士もその場に伏せる。

ドオオオーン!!!

「な、なんだこの攻撃は——」

「いいから伏せろ!」

砲撃が始まったら、なんでもいいから地面の窪みなどに身を入れ、体の姿勢を低くして凌ぐしか方法はない。

永遠とも思える時間の後、砲撃が終わる。

「大丈夫か!」

フェン王国兵士が無事だと答える。

「おそらく、パーパルディア皇国軍の事前砲撃だ。すぐにでも奴らは来るぞ!」

レイモンドの予想は当たっていた。

猛烈な砲撃で耕されたニシノミヤコへと向けて歩兵隊は進軍していた。

「いいか？ 動いている者がいたら、容赦なく撃て！」

隊長の命令を、パーパルディア皇国軍兵士は忠実に実行していく。

フエン王国兵動く者を容赦なく撃ち殺していく。

「や、やめ——」

バンツ！

「行くぞー！」

散発的に突撃をしてくるフエン王国兵を、虫を殺すかの如く淡々と倒していく。

バンツ！

そんな銃声を、怯えながらも必死に隠れている人影があつた。

「大丈夫。ここなら見つからないよ」

奇跡的に砲撃を免れた家屋の地下に、一見防空壕と見間違うような地下室が設けられていた。

その地下室に今にも大声を上げて泣き出しそうな子供一人と、若い男がいた。

若い男は子供を泣かないように励ます。

バンツ！！

銃声が段々とこちらに近づいてくる。

2人は迫り来る脅威に怯えつつも息を潜め続ける。

必ず助けが来ると信じて——



## これが戦争——2

ニシノミヤコに怒声と銃声とが響き渡る。パチパチと音を立てて炎が燃え盛る。夢かと思うような光景だが、紛れもない現実であった。

「だめだ。全然見つからない」

そんな悪魔のような光景が広がるニシノミヤコを静かに移動する人影が三つあった。  
(伏せる)

レイモンドからのハンドサインを確認して2人は手近な瓦礫に身を潜める。すぐそここの通りをマスケット銃を抱えてパーパルディア皇国兵士が走って行く。

通り過ぎたのを確認したレイモンドは通りを静かに移動する。

崩壊した家屋は後回しにし、無事な家屋を中心に探すもの——  
「やっぱりいない」

ニシノミヤコの中心部にまで来たが、未だに見つからない。

「分かれて探しますか？」

ウイリアムの提案にレイモンドは首を横に振る。

「駄目だ。相手はマスケット銃とはいえ、銃を武装している。対して俺らは丸腰、その状況で分散したらかなりキツイ」

「了解です」

相手の武装は骨董品のマスケット銃、されどマスケット銃だ。当たればどんなに頑強な者だろうと死んでしまう。なら、1人で立ち向かうのではなく、複数で対処したほうが良いと判断した。

バンッ！

再び銃声が響く。

「これ生きてんのか？」

ウィリアムのぼやきは他の2人にハッキリと聞こえた。しかしレイモンドはもちろん、ウィリアムも探すことはやめない。生きていたら助けを待っているかもしれない。生きていなくても、せめて遺体を確認するまでは——

◆

パーパルディア皇国軍第21歩兵隊はニシノミヤコの掃討作戦を行っていた。

バンッ!!

瓦礫に身を潜め、こちらが近づいてきたら斬りかかろうとするフェン王国兵を淡々と倒して行く。

「ヤアアア——!!!」

バンツ!!

仲間と共に正確に撃ち抜いてゆく。

「ん?」

ふと、1人が足を止める。

「どうした?」

「…… あそこで何か動いた」

崩れた家屋の影を指さす。

2人はマスケツト銃を構え直すと、慎重に近づく。

ガタツ!

突然発生した物音に、2人は振り向く。

——犬であつた。

「ツ……… なんだ、犬か………」

勘違いであつたことに安堵した瞬間——

「——むぐツ?!」

口を強く抑えられ、そのまま喉を切られて心臓に鋭い痛みが走り、そのまま彼は息絶

えた。

「なっ！」

もう一人に仲間が慌ててマスクेट銃を撃とうとするも、マスクेट銃の銃口を天高く向けられ、そのまま大きく外れてしまう。そのまま喉笛を掻き切られ、そのままこの世から去る。

「制圧です」

「武器弾薬を全て回収、死体を隠し、搜索を続行する」

「分かりましたけど……俺ら、マスクेट銃の使い方なんて知りませんよ？ まさか隊長は知っているのです？」

レイモンドは手をパチつと額に当てる。

「すまん。失念してた」

結局、使えるのは装填されたままのマスクेट銃一丁のみという結果になった。

「ま、ここならよく探さない限り見つからんでしょう」

死体を瓦礫の奥に仕舞い込んだウィリアムとジェームズの2人はレイモンドの元へと戻る。

「隊長、やはり分散するべきなのでは？ 今の位置は街の中心から少し外れた場所。おまけにそれなりの規模の街です」

レイモンドは頭を抱える。ウィリアムの言う通り、この街を探すととても時間

がかかる。おまけに3人で一緒に探しているため、余計に時間がかかる。

「だが…… 分散は危険だ。時間はかかるが、固まっていこう」

若干の不服はあつたものの上官はレイモンドのため、了解する。

パールディア皇国兵士の搜索をかい潜りながら、3人は子供を探すもの——

「——見つかりませんね……」

ジエームズが一息を吐いた時、そばにあつた家屋が崩壊する。

「うおっ!?!」

家屋の破片が飛んでくるが、なんとか避ける。だが——

「おい! 声がしたぞ!」

「探せ! 探せ!」

大声を出してしまったことで、パールディア皇国兵士に感づかれてしまう。複数の足音がこちらに近づいてくる。

「まずい——この家に入れ!」

奇跡的に砲撃に巻き込まれずに無事だった家屋の中に入る。制圧するのも一案だが、相手の人数が不明な上に、マスキット銃を装備している兵士だ。無駄な戦闘を避けるためにレイモンドは家屋の中にて身を潜めることに決めた。だが——戸の隙間から周囲を伺っていたレイモンドがあることに気付く。

「まずったな。無事な家屋がここしかない……」

周囲には倒壊した家屋が殆どなのに、ここだけが倒壊を免れている。怪しい、どう見ても怪しすぎる。どうやって凌ぐかをレイモンドが思案していると——ジュームズがあることに気付く。

「隊長、これ……」

彼は倒壊した物置の下、そして麻布の下を指さす。

「……地下室か！」

麻布をずらすと、地下室へと続くであろうハッチがあつた。

「どうします?」

「入れ」

即断即決、レイモンドは迷うことなく中に入ることを決める。

ウイリアムとジュームズを先に入れさせ、レイモンドは不自然にならない程度にハッチを隠してから地下室へと続く。

「う……暗いな」

外の光が一切届かないため、漆黒の闇に包まれていた。

「ライターありますよ」

ウイリアムがポケットからライターを取り出し、ジュポつと音を立てて青白い火が灯

る。

地下室がライターの光で淡く照らされると、大きなものは机、小さな者は食器と、どうやら物置として使われていたらしい。

「物置きだったみたいですね——つて、隊長。何をやっているんですか」

レイモンドは木製のものを片っ端から折り、布を巻き付けている。

「松明にするんだよ。ライターだけじゃオイルがもたないだろ」

「なるほど」

ジェームズもマスケット銃を慎重に置き、レイモンドと同じように松明を作る。

「だいぶ見えるようになりましたね……」

「あいつらがここに入ってきたらかなり厄介なことになるがな」

「祈るしかありませんね」

現状、3人が持っている武器はジェームズが鹵獲したマスケット銃一丁と崩壊した家屋から回収した刃物だけであった。これで戦うにはかなり心許なさすぎる。

ふと、ウイリアムがあることに気づく。

「あ、隊長。無事な家屋はここだけですの、もしかしたら……」

レイモンドはウイリアムが言おうとしていることを理解する。

「探してみよう」

さほど広くない地下室だ。おそらくすぐに見つかるはずだ。

(ん?)

地下室に転がるように入ったため、最初は気づかなかつたが、よくよく見ると地面に大人1人と子供1人の足跡があつた。

(やはりここに……)

慎重に物置の隙間を見て行く。すると、ガタツという物音が鳴る。

「いきました!」

音の発生源の近くでウイリアムが声を上げる。そこに向かうと、フェン王国人と日本人の子供1人の2人がいた。

「よかつた。君が——君だね?」

5歳くらいの子供がコクンと頷く。その顔は恐怖に染まっていた。

「あ、あんたらは?」

フェン王国人が誰何してくる。

「この子供を探しに来たんだ。守ってくれてありがとう」

「ああ、だけど外にバカの連中がいるんだろう? どうやって来れた?」

バカの連中がパーパルディア皇国のことを喻えていると理解する。

「コソコソと、2人始末したがなんとか来れた」



「すげえな」

若いフェン王国人は感心する。

「さて、バカ言つてないでどうやってここから出るか」

ニシノミヤコをどうやって見つからずに移動するかをレイモンドが思案していると、地下室の上——無事な家屋の扉を蹴破る音が鳴る。

(静かに)

ジエスチャーで静かにするように合図する。

「おい、いたか？」

「いけません。やはり気のせいでは？」

「念のため探せ。全ての物をひっくり返せ」

ガタツ！ ゴトツ！ とあらゆる物が倒される音が鳴り響く。

(まずいな……)

このままだと見つかつてしまうだろう。

(奥へ2人を)

レイモンドはウイリアムに2人を奥に隠すよう指示する。ウイリアムは2人を連れて先程と同じ場所に押し込む。

だんだんと音が近づいてくる。

「あ！ 隊長、これ！」

どうやら地下室へと続くハッチを見つけたらしい。

「地下室の扉か？」

「おそらく」

「探せ」

ハッチがこじ開けられる。

「やはり地下室のようです」

「暗いな……明かりを」

何か呪文のような声があると、地下室がポツと明るくなる。

「足跡があります。それも5人くらいです」

「ほう……」

兵士の報告を受けた隊長は面白そうな顔になる。

「出てこい！ 大人しく投降すれば、保護すると約束しよう!!」

(さて、どうするつもりだ？ フェン王国の民よ)

『出てこい！ 大人しく投降すれば、保護すると約束しよう!!』

そう言われて素直に出るほどレイモンドらは馬鹿ではない。

「どうします？ おそらく複数の兵士が外にいるでしょうし……」

「強行突破は無茶を通り越して無謀です」

万策尽きた。そう表現するしかない状況にレイモンドは頭を抱える。大人しく投稿したとしてもいい扱いは受けないだろう。だが、投稿すれば、少なくとも命の保証はされる可能性が高い。

「――」

「待て。逃げ道が一つある」

若い男が提案をしてくる。

「ニシノミヤコに限らず、アマノキでもそうなんだが、地下水道が整備されているんだ。その入り口はニシノミヤコの東側の外れにあつて、その地下水道はアマノキに程近い海岸に繋がっている」

「！ おお、強行突破する価値が出てきたな」

レイモンドらの顔が一様に明るくなるが、対して若い男は一段と暗くなる。

「だが、その水道…… パーパルディア皇国兵士が気づいていないとは考えづらい。地下水道の入り口はかなり目立っているからな」

その希望は提案した本人によって容易に打ち砕かれる。

「だが、やるしかない」

レイモンドは覚悟を決める。

「いいか？ よく聞け」

レイモンドは大雑把な作戦を説明する。

包囲している兵士の数によって作戦を実行するかしないかは適当に合図する。もし実行できたら複数の兵士を人質に取る。ジェームズとウィリアムは、できるなら上官を人質に取ってくれ。

つまるところ、人質作戦。

人質を取ることにより、なんとか地下水道にまで辿り着こうという魂胆であった。

「まさしく博打ですね」

「ま、せめて子供とあなただけでも逃しますよ」

命を賭ける事態だというのに、この男たちはなぜ笑っていられるのか。若い男はずっと心に疑問を抱いたままだった。

「じゃあ行くか—— わかった！ 投降するから手を出さないでくれ！」

地下室から男4人、子供1人が出てくる。5人を広場へと連れて行き、跪かさせる。

「ほう。その以外、フェン王国人じゃないのか……… どの出身——」

隊長が興味深げにレイモンド達に近づいたところでその顔が驚愕に包まれる。

「……… 貴様——」

口をパクパクとさせる隊長。

「まさかムーの人間？」

「ムーだと……」

「ま……まずいな……」

（何を言ってるんだ？）

言葉が理解できないのではなく、隊長らしき人物が言っていることがよく分からないのだ。

「貴様、出身はどこだ？」

この隊長が何を言っているのかは分からないが、それでも敢えて乗ってみせる。

「そうだ……ムーの人間だ」

必要以上の答えは言わないでおく。

「うぐつ……ただの民間人とはいえ、手を出せば流石にまずいか……」

若干困惑気味の5人を置いて、パーパルディア皇国兵士たちは話を更に飛躍させていく。

（このままなんとか誤魔化せそうだが……フェン王国の奴と子供が取り残されてしま……）

「よし、その3人を解放しろ。上空にいるワイバーンへ通信しろ、『空襲は当分の間控えるように』と」

「了解」

「待て」

兵士がレイモンドらを立たせようとした時、ウィリアムが声を上げる。周囲の目がウィリアムに集まる。

「その2人は我がムーの友好国の内の一つ、日本国の人間だ」

極一部の兵士がどこの国だと思うなか、大多数の兵士が一様に困惑した顔になる。隊長を除いて。

「日本、だと……！」

「ああ…… あなたたちは知らないかもしれないが、日本国は間違いなくムーをも上回る力がある」

「だからなんだと?」

少し手強いなと思いつつ、ウィリアムは続ける。

「フツ。たかが1人や2人だと思っていると、いつかパーパルディア皇国は痛い目に遭うだろう」

言い切ったウィリアム。かなり具体的に脅したから、ある程度は理解できるだろうと思った矢先。

「き、貴様、いくらムー人だからといって皇国を愚弄するつもりか!!」

そう言いつつ、激昂した兵士が剣を持ち斬りかかろうとする。

「っ！」

ウイリアムの背後にいたため、反応が遅れてしまう。だが、兵士の剣があらぬ方向へと強制的に変えられると、そのまま剣を奪い取られて首に突きつけられる。

「グハッ！」

また一人、同じような状況になる。隊長が呆気にとられつつも状況を把握しようとする。そしてすぐに理解する。

「き、貴様ら——ぐっ!?!」

全員の注目が人質となった兵士へと向けられていたため、隊長にジリジリと近づくとウイリアムに気づけなかった。

「悪いね。あなたには人質になってもらう」

「貴様、ムーの人間ではないな？ ましてや民間人でもないな!?!」

隊長がそう喚き散らすのを、レイモンドは不敵に笑いながらフェン王国人と子供を守るように立つ。

「ああ。ムー人でもないし、日本人でもない」

レイモンドは日本語ではなく英語で言う。

の国民なのだ。そう。彼は——彼らは自由の国である、アメリカ合衆国の国民なのだ。世界最強の国

『We 俺 are ち American は』  
ア メ リ カ 人 だ



## これが戦争——3

『俺 We たち are は ア メ リ カ 人 だ だ American』

眼前の男が言っていることが一ミリも理解できなかつたが、それでも人質を取られて  
いるということに彼らは現実引き戻される。

「ムー人だと少しでも思った俺らが馬鹿だった」

齒軋りしながら兵士が言う。

「悪いね。我らがアメリカは誰もが自由に暮らせる多民族国家なんだ」

誰もが自由にとは語弊があるが、それでもほほ間違いはない。

「そんなことはどうでもいい！ 早く仲間を返せ！」

「取引にはそれ相応の対価が必要だ。常識だろう？」

「くっ……」

今にもマスケット銃を撃つてきそうだが、レイモンド達が兵士を盾にしているため、  
手が出せない。

「何を望む？」

剣を突きつけられている隊長がようやく口を開く。

「首都アマノキまでの安全な移動の保障だ」

「移動手段をこちらで用意しろと？ はっ、馬鹿馬鹿しい」

「違う。先程の空襲の停止を確約だ。それ以上は望まない」

「既に停止させた。だが、首都に移動したところで我が軍の攻撃に遭うことは明白だぞ？」

まったくもつてその通りであった。首都に避難したところで、パールディア皇国軍が進軍してきたら結果はまったく同じだ。

だがレイモンドたちは、アメリカ海軍のイージス艦が一隻、アマノキ沖合で戦闘態勢を整えていることを知る由もない。

「ああ、確かにそうだろうな。だが、日本が国民の命が危機に晒されているこの状況を座視するはずがない」

半分ほどブラフであった。

「はっ。まあいいだろう。上空のワイバーンへ念を押せ」

その後、魔信にて上空にいるワイバーンへと念が押された。

「それで、これからどうするつもりだ」

「首都アマノキへと移動する。お前たちの仲間、途中で解放する」

舐められている。

パーパルディア王国兵士の顔が屈辱に塗れる。今まで黙っていた隊長がようやく話し始める。憤怒の表情を浮かべて。

「舐めるなよ……」

隊長は意を決して叫ぶ。

「お前たち！ 俺たちに構わず撃て！ 我らパーパルディア王国は、卑劣な交渉には屈しない!!」

レイモンドは下唇を噛む。想定されるなかで最悪な状況となってしまった。

「撃て！ 撃て！」

レイモンドは人質に取っていた兵士を引きずりながら少しづつ下がって行く。それにならって、兵士たちもジリジリと距離を詰めてくる。

レイモンドが覚悟を決めようとした時——乾いた銃声が鳴り響く。

「ぐっ……!!」

レイモンドの左の太ももに焼けるような痛みが走る。

——撃たれた

戦場病というやつだろう。レイモンドはすぐに状態を把握し、対応する。

「逃げる!!」

撃つてきた以上は人質の意味を成さない。危険は承知だが、敵に背中を向けて全速力で走つて逃げる。若い男はこちらが何も言わずとも子供を背負つてくれる。

レイモンドも焼けるような痛みには耐えながら走る。

しばらく走り、手近な瓦礫に身を潜める。どうやら敵兵は再編成を行い、こちらを追跡しようとしているらしい。

「くそっ！」

太ももの心臓に一番近い部分に麻紐をきつく締める。

「大丈夫ですか？」

ウイリアムが心配する。

「大丈夫だ」と言い掛けたが、ぐつと飲み込む。

「正直、かなりキツイ……………」

「マスクット銃、威力だけで言ったら現代のそれより上ですもんね」

ジェームズがそう言いながら添え木を当てる。気休め程度だが、かなりマシになる。

「それで、これからどうするんだ？」

子供をあやしつけながら若い男が聞いてくる。案を話そうとしたところで、この男の名前を聞いていなかったことに気づく。

「ああ、それよりも名前を聞いてなかった。名前は？」

暗い雰囲気を少しだけ明るくしようとレイモンドは軽い調子で聞いた。だが、若い男は顔を俯けて表情を暗くし――

「……………名前はないんだ」

「うぐつ……………すまない。迂闊な質問だった」

「ま、この国に同じような奴は山ほどいるしな。気にするな。名前はないが、呼び名はある――ノーマだ」

「ノーマか。俺はレイモンド、こつちが……………」

「ジエームズです」

「ウイリアムです」

「さて、この先どうします?」

ウイリアムがそう聞いてくる。レイモンドは頭の中で考えたことを口にする。

「ノーマ、前に言った水道の場所はどこだ?」

「え? ああ……………ニシノミヤコの外れにあると言ったけど、ミミールの森に程近い場所にある」

「ミミールの森か……………」

避難民脱出のために通った森だ。そこならレイモンド達でも場所は分かる。

「だが、奴らがその場所を押さええてると思う」

「そうだな、だが行ってみる価値はある」

そう言いながらレイモンドが動き出した瞬間、パーン、と、乾いた銃声が鳴り響く。「フエン王国の部隊がまだ応戦してるのか？」

その後も立て続けに銃声が鳴り響く。

「この音、地下水道の入り口の方からだ！」

ノーマが走り出したので、レイモンドたちも子供を背負って走る。

「この先だ」

倒壊した家屋から慎重に顔を覗かせると……………

「……………フエン王国兵か」

地下水道周辺の街道をフエン王国兵が守備していた。

「よし」

フエン王国兵のもとへと向かおうとした時、再び銃声が鳴り響く。

——ピシッ!!

「狙われてる!!」

着弾位置から発射位置を推測し、射線を切る。

「危なかった、完全にこつちを狙ってたな」

「マスケット銃、精度はかなり劣悪のようですが、かなり近い位置まで持ってきたとなる

と、そうとう腕のいいやつですかね」

「くそつ、もう少しだつていうのに……」

地下水道はすぐそこなのに、敵の妨害を受けてたどり着けない現状に歯噛みする。

「どうしますか？ 正面突破すればいけるはずですが……」

「……」

周りの様子を伺いながらどうするか考える。その末にたどり着いた答えは。

「俺が囮になる」

「馬鹿言ってるんじゃないやありません。ドラマや映画じゃないんですよ」

ウイリアムの言う通り、これは紛れもない現実だ。だが、現状取れる手段がこれしかない。

「フェン王国兵になんとかこつちに来てもらえれば……」

怒号と銃声が耳に入る。まだ戦闘は続いているようだ。

「気付く、のか？」

金属と金属がぶつかるような音、銃声と、声を張り上げても気付いてもらえそうにない。

すると、鼻を吸る音がレイモンドの耳に入る。子供が涙を流しながら声を押し殺していた。普通なら大声を上げて泣き出したのだろう。だが、それを必死に抑えていた、

「ごめんね…… もう少ししたら。パパやママと会えるからね」

流暢な日本語でレイモンドは子供を励ます。

「うん……」

微かに聞こえる声で頷く子供。

「あんたら、あそこの水道まで子供を背負ってけるか？」

ノーマが聞いてくる。ウイリアムがここから水道の入り口までの距離を目算で測る。

「ざっと200m。俺が子供を背負った場合、2分弱でいけます」

「もう少し早める。1分30秒だ」

「……… 了解」

キチガイなタイム設定といえるが、ウイリアムは特に反論することなく了承する。

「これで問題ない。だが、どうするつもりだ？」

素早く打ち合わせを終えると、ノーマに問いかける。ノーマは不敵に笑っていた。

「なに……… なんでもないただの1人の男が他の国の人のために死んでくるだけさ」

「おい、馬鹿な真似はよせ」

ジェームズが止めようとする。

「あんたらと地下室で会ってな、話を聞いてき……… 素直にカッコいいと思ったよ。

危険を冒してまでこの街に戻ってきて、俺とこの子供をなんとかここまで連れてきてく



れたんだからな」

「よせ」

「会ってから少ししか話せなかったけどな、これだけ言わせてくれ——

——ありがとう

ノーマはそう言うと瓦礫から飛び出ていた。

「待つ………！」

「行くぞ!! 今しかない!!」

ノーマの後を追おうとするジェームズを引き留め、レイモンド達は地下水道の入り口へと向かう。距離にして200m。レイモンドやジェームズはともかく、ウィリアムは子供を背負っているため、時間がかかる。

——ビシッ!!

時折、こちらを狙ってきた弾丸が地面や壁に着弾する。

200m走のちっぽけな短距離走が始まる。

やがて、銃声が3発連続で鳴り、怒号が響く。

レイモンドたちはそれに構わず走り続ける——

「っ!？」

右肩甲骨が碎けるような音がした。そのままレイモンドが地面に倒れる。

「隊長!」

「くっ……」

歯を食いしばり、痛みを耐える。ジエームズがとうすぐさまレイモンドの左肩を持って瓦礫へと引き摺り込む。

「かはっ…… 右肩甲骨が完全に死んだ」

右肩を僅かに動かしただけでも激痛が走る。敵の位置は不明だが、おそらくすぐそこまで迫ってきているのだろう。そして、地下水道の入り口付近から聞こえていた戦闘音は一切しなくなった。

「…… ウイリアム、ジエームズ。先に行け。このままだと、全員が死ぬ」

「ふざけないでください。米軍は、仲間を決して見捨てないんですよ」

そう言いながら無理矢理レイモンドのことを担ごうとする。

「やめろ！ 被弾面積をデカくしてどうする！ それに、地下水道までは距離がある」  
先程よりもだいぶスピードが落ちる。

——ビシッ！

近くの壁や地面に着弾する音が多くなる。

このままだと全員が死ぬ。そう判断したレイモンドは——

「んむっ!？」

無理矢理、ジエームズの手を振り払い、先を進んでいるウイリアムの元へ突き飛ばす。  
レイモンドはそのまま回れ右をして逆走を始める。

「隊長!!」

ジエームズはすぐさま戻るとするが——

「離せ！ ウイリアム!!」

ウイリアムがジエームズのことを、子供を背負いながら器用に肩を掴む。

「もう無理だ！ それに、隊長なら生きて帰ってくる!!」

ウイリアムは自分が言っていることが叶うとは到底思っていないかった。だが、こうでも言わないと自分の気持ちにも、ジエームズ気持ちにも示しがつかなかった。

ウイリアムはジエームズの手を強く引つ張る。

「やめろ…… ウイリアム」

ウイリアムは手を離さない。

「行くぞ!!!」

「レイモンドオオオ!!!」

レイモンドの耳に自身の名を叫ぶジェームズの声が入る。

「ふっ………俺らしくないな」

服を破り、傷口付近をキツく縛りながら軽く自嘲する。

「ふん………!!!」

応急処置を終え、レイモンドは敵を迎え撃つ準備をする。といつても、待ち伏せなのだが。

「くそっ! 地下水道に逃げられたか!」

「まだ走れば間に合う筈だ! 走れ走れ!!」

足音が近づいてくる———今だ。

「ん?!」

先頭を走っていた兵士の横面を吹き飛ばし、そのマスケット銃を奪い、発砲。至近距離からまともに喰らった兵士は左腕から先が吹き飛ばす。

「うわっあああ!!!」

兵士たちが動揺している間に、左腕を無くした兵士から剣を奪い、斬りつける。

こちらに向かつて撃つてくる兵士もいたが、味方撃ちを気にしすぎて全く当たらないかった。

やがて、増援の兵士が続々とやってくる。

「うぐっ!？」

どうやら敵は味方撃ちを気にしなくなつたようだ。問答無用で撃たれた弾丸の内、1発が右の脇腹に当たる。そこで限界を迎えた。

「かはっ……」

大きく息を吐き出し、膝から崩れ落ちるレイモンド。倒れた先に水溜りがあった。目だけを動かして周りを見ると、いつのまにか雨が降っていた。

ふと、レイモンドはあることに気付く。死を目の前にして、どうしてこれだけ冷静でいられるのかと。そして、理解する。

(ああ……もう死ぬんだな)

雨が体に打ちつけられる。

バシヤツ、と音を立てて、レイモンドの顔の前に足が現れる。

「手を煩わせやがって……」

その男はレイモンドの髪を掴み、上体を起こさせる。もう、レイモンドの体は動かない

かった。

「やられた仲間の恨みだ」

そのまま膝立ちの姿勢を取らされ、頭に銃口を突きつけられる。

「何か言い残すことはあるか？」

レイモンドは心の中で、日本にいる家族に謝罪する。そして、最後の力を振り絞りこう口にした。

——合衆国、万歳。

と。

乾いた銃声がニシノミヤコに響き渡る。

この日、ニシノミヤコ守備隊は壊滅。同日、ニシノミヤコは敵の手に落ちたのだった。幸いなことは、フェン王国軍による住民避難が完了し、民間人犠牲者は一人もいなかったことであろう。

◆————◆  
ニシノミヤコ陥落の報は、すぐさま日本国政府に届けられた。

日本国 首相官邸 危機管理センター

危機管理センターでは関係閣僚、官僚が詰めていた。

「第一報を確認します。大使館からの情報だと、ニシノミヤコは陥落。幸いにして、フェン王国による住民避難が間一髪完了したそうです」

外務省職員が第一報を読み上げながら、センターの内部を見渡す。危機管理センターに詰めてる要員の顔は、皆揃って暗い。

「すいません、続報です」

補佐員が追加のメモを渡してくる。内容を一瞥した職員の顔が苦渋に塗れていく。

「大変申し上げにくいですが、先程の第一報の一部内容を訂正します」

「何かあったのか？」

上野が聞いてくる。職員は頷くと、メモを読み上げる。

「邦人一名と、アメリカ人3人が行方不明だそうです……いや？」

職員はある項目に目を止める。

「アメリカ人3人はどうやら、避難中に逸れた邦人1人を探すためにフェン王国のニシノミヤコに戻ったようです」

危機管理センターにいる全員の顔が驚愕に包まれる。

「自らあの戦火に飛び込んだのか!？」

国防省運用官が小さな声で叫びながらモニターを見る。モニターには、フェン王国上空の偵察衛星の映像が流れていた。

「No. 5 衛星、まもなく地平線に沈みます。以降の映像はフェン王国上空飛行しているドローンになります。尚、次の衛星到着予想時刻、next05」

「司令官、まさかとは思いますが、アメリカ人というのは国連軍なのでは？」

総隊司令官付き副官が聞いてくる。白井は腕組みをしながら唸る。

「雲野副司令経由で国連軍に問い合わせさせてくれ」

「分かりました」

副官が自分のスマホで副司令に電話を掛ける。マル秘に関する事項はないので問題ない。

しばらくして『分かりました』と、副官は電話を切る。

「アメリカ人3人が国連軍の所属かは不明ですが、横田基地所属の国際連合軍兵士3名がフェン王国へ観光に行ってるのは間違いないとのことです」

それなりに時間が掛かったとは言え、正式なルートをかつ飛ばしてくれたのだ。感謝しかない。

「ありがとう……細かい事実確認は必要だが——ここはゴリ押ししてみるか……」



文民統制の観点から、本来なら広瀬国防相に代理で発言してもらうか、閣僚などから意見を求められた時に答えることが望ましいのだが、敢えて白井は暗黙の了解を破る。

スツと手を挙げる。

「どうした？ 白井？」

すぐに何かを察してくれたのだろう。広瀬が名指しする。

「一つ報告をしなければなりません。ニシノミヤコに戻ったとされるアメリカ人3人ですが、国連軍の兵士の可能性があります」

「国連軍」の単語にいち早く反応したのは上野だった。

「こ、国連軍……!?!」

日本に駐留する国連軍は、在日米軍がそっくりそのまま国連軍になったと考えてほしい。つまり、在日国連軍の兵士が亡くなるということは、アメリカ人が亡くなるということだ。

「その情報に間違いはないのか!?!」

「いえ、国連軍に確認しましたが、その3人が観光に行った3人なのかどうかは不明です」

「まだ不明なのか……」

白井は無理矢理叩き込む。

「総理。民間人にしろ軍人にしろ、アマノキへ避難した邦人が危険に晒されています。現在、米海軍のイージス艦が防空任務に当たっていますが、一隻では限界があります」  
「だからこそ艦隊が向かっているんだらう?」

「その通りです。ですが、最高速度40ノット前後が限界なんです。艦隊が到着したときには、イージス艦は沈み、アマノキが火の海になっている可能性があります」

「君はどうしたいと言うんだ! ハッキリ言え!」

白井の周りくどい言い方に上野の堪忍の袋の尾が切れる。

「護衛艦隊のワープ航法の許可を出して頂きたい」

国防省の文官武官、軍事に聡い官僚の顔が一瞬にして驚きに変わる。だが、ワープ航法の意味を理解できなかった上野が問い返す。

「ワープ航法?」

「次元跳躍、つまり、ある一点からある一点までの空間を超光速で進む航法です」

「? そんなものがあるなら、さっさとやればいいじゃないか」

上野はキョトンとしながら言うものの、官房メンバーと法務省関係者の顔が暗くなる。

「総理、ワープを使用するとすると、防衛出動の発布、または今回の戦争が我が国に対する武力攻撃事態であると認めなければなりません」

数多ある自衛隊法の中でも、敵国に対する武力行使が容認される、唯一の法律だ。そして明記されている法律でもある。

だが、戦後から今まで一度も発令されたことのない、『伝家の宝刀』でもある。そのことが、上野の判断を鈍らせる。

「……………防衛出動の要項を満たしているのか？」

法務大臣の嵯峨さが昇のぼるが渋い顔をしながら言う。

「満たしていません。まず、防衛出動は我が国に対して、明白な武力攻撃をしてきた場合、或いは、急性迫害の危険性がある場合のみです。防衛出動待機命令なら或いは……………」

「白井司令、ワープ航法使用に関する例外はないのか？」

上野が白井に聞いてくる。一応、上司である広瀬の顔を見て確認を取る。小さく頷いたのを確認し、答える。

「新世界での使用例は一度のみです。護衛艦『あきづき』が一時的に国連宇宙軍の指揮下に入り、人員輸送を行いました」

「国連軍か……………」

今回の事態に際して、国連介入するとは考えずらかった。今回の戦争当事者、フェン王国とパールディア皇国は国連非加盟国だ。ましてや、旧世界の国際法、慣例が適当

すらされない、

過去、経済制裁が非加盟国に対して何度か行われたものの、数例のみに留まっている。武力制裁は尚更だ。ロデニウス大陸統一戦争の国連軍の参加は、あくまでもアジア情勢の不安定化に伴う治安出動であつた。

「柔軟な運用を期待するのは酷です」

「くそっ……邦人保護出動でどうにかならんのか？」

「無理です。邦人保護出動はあくまでも火の粉を振り払うだけです」

選択肢は二つとなつた。

このまま邦人保護出動で対応するか、防衛出動待機命令を発出するか。

どちらの選択をしても、それ相応の対価を払うことになる。

「……」

全員の視線が上野に注がれる。

(戦後初の防衛出動待機命令の発出の重圧に、この男が耐えられるはずがない)

白井は上野のことをどこか蔑むように視線を向ける。

「はあ〜」

白井は小さくため息を吐いたのだつた。

その後、結局邦人保護出動のまままで事態の対処に当たることが決定された。

国防宇宙海軍第一護衛艦隊はフェン王国に約25ノットの速度で向かっていた。

第一護衛艦隊旗艦『いずも』艦橋で艦隊司令の安藤あんどうが端末を一瞥すると、ため息を吐いた。

「いずも艦長。速力そのままだ」

「分かりました。ワープ航法の許可は出さず、ですか」

「ああ。現在の速力を維持して、早くて2日後…… 戦闘が起きてないとは考えずらいな」

「速力を上げますか？」

いずもの進言に、安藤は少しの間考える。

今無理をしても、その後の戦闘に支障をきたす可能性が大だ。第一、ここで無理をし過ぎれば、ただでさえ崩れかかっている艦隊ローケーションが崩壊しかねない状況になっている。今はまだ無理をすべき時ではない。

「いや、このままでいい。『ラファエル・ペラルタ』との連絡を密にしろ」

「了解」

安藤は水平線の先にある、まだ見えぬフェン王国の方角を睨むのだった。

## 『ラファエル・ペラルタ』の戦い

ニシノミヤコ陥落の報がフェン王国侵攻軍司令部へと届けられる。

「やつと落としたか」

シウスが唸りながら言う。

軍事力で圧倒的な差があったと言うのに、街一つを落とすのに犠牲者が多すぎた。

「シウス司令。ベルトラン將軍からの連絡ですが、フェン王国人一人を捕らえたそうです」

「…… 一人だと？」

今までの戦争の中で、街一つを落として得た虜囚がただ一人だったと言うことは一度もない。

「はい。そして、アメリカ人を名乗る人物を殺したとのことです」

「ん？ どう言う意味だ？」

わざわざそのような報告をあげてくると言うことは、何か意味があるのだろうと思  
い、問い返すもの——

「わかりません。ベルトラン將軍からの魔信に含まれていました」

淡々と報告してくる副官を他所に、シウスは深く考え込む。

(アメリカ人だと? そのような民族など、聞いたことがない)

長いこと、パーパルディア皇国軍にて戦争に従事してきたが、少なくともこの世界にアメリカ人などと言う民族は存在しないことは確かであった。この世界には、だ。

「まあいい。虜囚を大量に抱えても足手纏いになるだけだ。それより——」

シウスは声のトーンを落とす。

「首都空襲の準備は?」

シウスは陸軍部隊に対する援護として、首都空襲を画策していた。そして砲艦約20隻を首都沖合に派遣し、艦砲射撃を行おうともしていた。

「既に整いつつありますが、事前に偵察を思わせようと考えています」

「無論許可する。念入りにやるよう伝えておけ」

竜母から三騎のワイバーンロードがアマノキの偵察へと向かう。

ニシノミヤコ上空を飛行している鳥がいた。その鳥は胴体下部にある目をギョロギョロと動かし、睥睨する。不思議なことに、その鳥は羽を幅たせることなく、代わりに、虫の羽のような音を立てて空を飛んでいる。

それは鳥ではなく、国防空軍の無人偵察機『MQ-2』であった。

無人偵察機が得た映像はリアルタイムでアマノキ防空任務に就いている『ラファエ

ル・ペラルタ』の元へと届けられる。

「コンタクト。ドローンが空母から発艦するワイバーンを捉えました」

画面に三つのブリップが表示される。

「……………三機だけか」

艦長のブラッドレイ中佐だ。

「はい。おそらく偵察が目的と思われます」

「防空ラインに侵入した時点で撃墜だ」

「了解。ESSM、スタンバイ」

防空ラインはアマノキのほぼ上空に設定されている。『ラファエル・ペラルタ』からの距離は約40kmだ。本来なら約60kmのラインが望ましいのだが、米国はあくまでも戦争に関わるつもりはないという意思表示のためにこういう処置が取られた。

「通信に警告しろ。通じるかは知らん」

「了解」

通信員が魔信のスイッチを入れ、警告を開始する。

「こちらはアメリカ海軍駆逐艦『ラファエル・ペラルタ』。アマノキへ接近しようとするワイバーンに通告する。貴機は避難作業中のエリアへ侵入しようとしている。直ちに左旋回し、当該空域から離脱せよ。繰り返す——」



この警告は上空を飛行している竜騎士がすっかり聞いていた。

「と、言ってますけど?」

「はっ! 皇国軍に警告するなど、恥を知ってほしいものだな」

「そうですな!」

『アハハ!』と笑う竜騎士たち。

「そうは言っても、警告してきた恥知らずの正体は知りたい。警告してきたということ  
は、既に捕捉されているな…………… 低空に降りるぞ」

「了解」

軽口は叩いたものの、彼らは気を抜くことなく敵の正体を暴こうとする。

アマノキに近づいてきたブリップが画面からフツと消える。

「レーダーロスト。低空飛行に移りましたかね」

「流石にマジックレーダーがあるだけはあるな。対レーダー戦術を理解してる」

レーダーがワイバーンを失探<sup>ロスト</sup>してもクルーは驚くことはなかった。

「AWACSさえいれば……………」

火器管制官が苦悶の表情でそう言う。確かにAWACSがいたら、フェン王国全体、  
そして周辺<sup>ねだ</sup>の状況を瞬時に把握できるだろう。

「無いもの強請<sup>ねだ</sup>りをしても仕方ない。全力で対処だ」

「了解」

彼らは一瞬の気を抜くことなく、目標の再探知に努める。

編隊はリーダーの探知を避けるため海面スレスレを飛行していた。彼らの練度の高さが窺える。

「まもなくアマノキ！ 全員警戒配置！」

密集体型から間隔を広く取り、警戒配置へと移行する。

「…………… 見えた!!」

アマノキの沿岸に灰色の巨大船が見えた。

「フェン王国があんな船を持てるはずが無い。間違いなく警告してきたやつだ」

隊長が敵の評価をしている中、僚騎は魔信にて母艦に偵察状況を報告する。

「アマノキ沖合にて灰色の巨大船を確認。全長、約150m。武装は艦首に魔導砲らしきものが一門。その他の武装は見当たらず」

その後も報告を続けていたのだが、ムー製の双眼鏡で巨大船を見ていた隊長が衝撃の光景を目の当たりにする。

「爆発？」

敵艦の艦首部分から猛烈な煙と炎が現れる。その煙は真っ直ぐ上に上がるとこちらに指向する。

「敵の攻撃か！ 全騎散開！」

各々回避行動を取る。だが、更に驚くことになる。

「ついてくる!!!」

反射的に魔信スイッチを入れて、そう叫んでいた。

上空に黒い花が三輪咲いた。

『ついてくる!!!』

それ以降、通信が入ることはなかった。

「こちらからも呼びかけていますが、未だに応答がありません。おそらく撃墜されたものかと」

シウスは腕組みをしながら計画を立てる。

「艦がワイバーンを落としたのなら相当な高性能艦だろう。だが、一隻のみ……」

全力出撃を命じれば、すぐにでも撃沈できるだろう。だが、高速で飛行しているワイバーンをこんな短時間で撃墜できるほどの技量を持つ艦がいる……」

「司令、やはり陸軍の侵攻のためにも攻撃すべきです。撃沈に至らなくても、せめてフェン王国から引き離さないと……」

参謀の言う通りだ。

「……どの程度出すべきだ？」

「陸軍の援護、艦隊の直掩もありますから……… 保有騎の5割は出すべきかと」

「……… 6割で行こう」

「了解」

念には念を、で約140騎による航空攻撃の実施が決定された。

後方の安全海域を遊弋している竜母艦隊に攻撃命令が下される。

「発艦用意！」

艦首を風上に向けて全速で動かし、そこに風神の涙による人工風を形成、ワイバーンの発艦を補助する。

大空へと飛び上がるワイバーンロード。140騎がそれぞれに編隊を形成し、攻撃目標へと向かう姿は圧巻であった。

「頼んだぞ」

はつきり言うなら、この攻撃の成果次第でフェン王国侵攻計画を根底から変えかねない。

シウスの願いは大空へと吸い込まれるのだった。

◆ 日本国 国防省

ワイバーンが発艦する様子を捉えた映像が統合運用室に流される。

「詳細な数は不明。100を超えているものと推測されます」

海・空関係者が騒つく。

「イージス艦といえど、制空権がない状況では攻撃を受ける可能性があるぞ!!」  
加えて対空戦闘に不利な位置。避難作業の支援を行なっていた結果であった。

「距離は約80 km」

「くそつ! 第一護衛艦隊は絶対に間に合わない!」

「艦載機は? 艦載機ならどうだ!」

「無人空中給油機を使用したとしても、足が届かない。第一、パイロットの負担が大きすぎる」

議論は段々と白熱する。仲間友甲が自分たちの国のみならず、日本人とフェン王国人を守るために戦っているのだ。すぐそこで戦っているのに、自分たちだけ蚊帳の外という状況に、彼らはイラついていたのだ。

議論はただの罵り合いになろうとした時、上座についていた白井が『静かに』という言葉で、騒音は収まる。

「…………… 全員、耳を澄ませ。全員が証人だ」

白井が何を言っているのかよく分からなかった幕僚らだったが、素直に従う。

白井は卓上に置かれた受話器を取り、どこかに電話を掛ける。相手はすぐに出た。

「安藤司令。白井総隊司令だ」

「第一護衛艦隊の司令?」

「……まさか」

一部の幕僚が察する。

「貴官に友軍援護の命令を下す。直ちにワープし、友軍を救援せよ」

部屋は物音一つないため、向こう側の声もハッキリと聞こえた。

『しかし、防衛出動が発令されていませんが!』

「そうだ。だからこそ、私が責任を取る。貴官は……一切の気兼ねなく任務を果たせ

！ 安藤!!! これは命令だ!!!」

急な怒声に要員がビクツと肩を上げる。

『……分かりました』

弱々しい安藤の声が部屋に残ったのだった。

ガチャ、と音鳴らし、受話器を置く。

「……さて、命令違反の時間だ。ここから先は俺の独断専行だ」

そう言うと、白井はあちこちに電話を掛け始める。

海軍の第四機動部隊、空軍の第三航空団の部隊に待機命令を発動。陸軍中央即応連隊、第41戦闘旅団にフェン王国への移動準備命令。

「何をしてる！ 司令1人に任せるつもりか!! さっさと仕事に移れ!!!」

それまで呆気に囚われていた幕僚たちが、雲野副司令の喝によってパツと動き出す。静かだった部屋は再び騒音に包まれる。

「つたく…… どうするつもりなんですか？ 司令」

雲野が白井のもとに来るなり、そう聞いてくる。

「すまん。ありがとうな。お前たちを巻き込むことになるが……」

「結構です。まさか人生初の反抗が国家に対する反抗になるとは思いはしませんでしたかな」

いつも通りに接してくれる雲野に白井は心の中で感謝するのだった。

フェン王国に向かって約30ノットで突き進む第一護衛艦隊。

総隊司令直々の命令を聞き終えた安藤はため息とともに受話器を戻す。

司令官室から艦橋に上がる。

「いずも艦長、中央からの命令だ。戦闘中の友軍を救援せよとお達しだ」

「ワープ航法の許可が？」

「司令の独断専攻だとき。我々はそれに全力で応えるだけだ」

全てを察したいはずも。いずもはインカムのスイッチを入れる。

「『いずも』より『たくみ』『あきづき』。フェン王国にて戦闘中の友軍の救援を命じます。

直ちにワープ準備に入ってください」

『了解』と両艦艦長から返事がくる。

「近海の安全が確認され次第、我々もワープに入る」

第一護衛艦隊は直ちにワープ準備に入るのだった。

◆ 『ラファエル・ペラルタ』 C I C

イージス駆逐艦『ラファエル・ペラルタ』はフェン王国首都アマノキの沿岸にて遊弋、警戒配置についていた。

彼女の任務は、在留邦人を守ることであった。

艦長のブラッドレイ中佐はC I Cの艦長席にて瞑目していた。

レーダー画面を凝視していたレーダー員が敵艦隊の位置を報告し続ける。

「フェン王国、ニシノミヤコ沖10kmでパーパルディア皇国艦隊、その後方20kmに空母艦隊の反応です」

画面に表示される輝点ブリップの数は、地球のを基準にするとかけ離れていた。

「AWACSはまだなのか？」

火器管制官が苛立ち気味に聞く。

「再三司令部へと要請していますが、未だに……………」

「イージス艦の能力は連携で発揮するんだぞ……………それを理解しているのか？」



個より集団での戦闘重視の弊害がでていた。

「……………！」

画面に映るレーダー情報を凝視していたレーダー員が鋭く報告を上げる。

「空母艦隊から多数の艦載機の発艦を確認！ 数は未だ上昇中」

すると、今まで腕を組んで目を閉じていた艦長が目を開けた。

そして重々しく『ついに来たか……………』と言う。

その言葉にCIC要員一同が気を引き締める。

「避難作業中のへりに退避命令を発令」

「了解」

アマノキにて人員輸送を行っていたMH-60Sに退避命令が発令される。

「敵航空機、数は約140機。速度100ノット……………更に増速、120ノット」

「140……………ロウリアの時に比べたらかなり少ないが……………」

あの時は艦隊での迎撃、及び、強大な防空能力を持つ日本の戦艦が対応したからこそ無傷で勝利せしめた戦いなのだ。今回とはまったく違う。

「目標群識別を開始」

ブリップにそれぞれ、a、b、c、d、e、f、gと割り振られる。

CICの緊張感が更に増して行く。

「増援はないな？」

「艦載機も無理か」

「第一護衛艦隊が全速でこちらに向かって来ていますが……」

40ノット以上の快速を誇る日本の護衛艦がこちらに全速力で向かってきているらしいが、2日も掛かるのだ。到底間に合わない。

「まもなく防空圏に侵入します！」

「了解……」

(約140機か)

現代戦に於いて、これほどまでの攻撃に晒されたことはない。ましてや艦隊への攻撃ではなく、単艦にだ。

速度は遅い。イージスの能力を持ってすれば対処は可能だろう。だが、もし撃ち漏らしたら――

艦長は決断する。

「システムをハルマゲドンモードへ」

艦長のその言葉にCICが静寂に包まれる。

「全自動迎撃モードですか……？」

「ああ、単艦で対処できる能力を上回っているのなら、それを超える力を使うだけだ」

中佐は冷徹に答える。ここで起きているのは戦争なのだ。

「……………分かりました」

火器管制官が重々しく宣言する。

「これより、ハルマゲドンモードへと移行する」

その宣言を聞いた各攻撃士官がデバイスから手を離す。ピピピッ！ という電子音とともに、システムがハルマゲドンモードへと移行したことが知らされる。

艦橋に於いても、舵輪やスロットルレバーから手を離された。

この艦は、人の制御を離れたのだ。

『ラファエル・ペラルタ』はレーダー情報をもとに判断した高脅威度目標に対して直ちに反撃を行う。

まずは艦載機を発艦させた敵艦に対してハーブーン全弾の発射を行った。発射されたハーブーンはロケットブースターにて加速した後、ターボジェット推進へと移行。空母艦隊へ真っ直ぐ飛んでいった。

空母艦隊への攻撃を完了し、『ラファエル・ペラルタ』は回頭を行い、射線を確保する。射線の確保を確認し、全力攻撃を開始する。

前部後部のVLSからSM-6が発射される。発射されたSM-6は母艦の誘導を受けて真っ直ぐワイバーンの編隊へと突き進んでいく。ミサイルシーカーが起動し、イ

ルミネーターの誘導が外れる。そして、すぐさま次弾のSM-6が発射される。

『ラファエル・ペラルタ』は自身の煙に包まれながらも戦闘を続行する。

竜母から発艦したワイバーンロードは、各小隊が編隊を形成し、それぞれ海岸線に沿うようにアマノキへと向かっていった。

「にしても」

竜母『ミール』から発艦したワイバーンロード隊の隊長は呆れともおぼつかない感情を心に浮かべる。

「多すぎるんだよ」

たかが一隻への攻撃に140騎は多すぎる。これではこの数が逆に足枷になりかねない。

「ん?」

そんな愚痴を吐いている時だった。前方からまるで真つ青な絵に染みのようなものが現れたのは。彼は仲間へ知らせるべく魔信のスイッチを押す。

「各騎警戒せよ。正面下方——」

彼の意識はそこで消えた。

ドオオン!! という音とともに前方を飛んでいた小隊が全滅する。

「なっ!」

反射的に旋回しようとするものの、魔の手は彼らを逃さない。

SM-6は近接信管を作動させ、調整破片弾を周囲に撒き散らし、もれなく死をデリバリする。

「回避！ 回避イイ!!」

栄光あるパーパルディア皇国海軍ワイバーンロード隊はなす術なく撃墜されて行く。

「低空飛行だ！ 海面ストレスを飛べ!!」

生き残った50騎が海面ストレスを飛んでいくが、低空飛行に慣れていない新兵が海面にワイバーンロードともども叩きつけられて脱落して行く。残り40騎。

「待ってろよ……！」

竜騎士たちはまだ見ぬ敵に対して激しい憎悪を抱くのだった。

『ラファエル・ペラルタ』のCICにてレーダー員が報告をあげる。

「レーダーロス。目標群αは低空飛行へと移行した模様です。数は50」

失探した時、10騎がいなくなっているのだが、彼らは知る由もない。

「全方位同時攻撃、波状攻撃に注意せよ。艦載機を上空に上げろ」

今まで退避していたMH-60が高度を上げてレーダー捜索を行う。探知距離は短いものの、それでも地形に影響されず、水平線の向こう側も探知できるため、索敵に動かす。

『ラファエル・ペラルタ』はその無機質なコンピュータの駆動音を響かせながら静かに状況を把握する。

(水平線の下に隠れたか。艦載機のレーダー探知はギリギリ間に合いそうになり……) 近接防空戦闘か……)

水平線の距離が前世界とは違い、約17kmあるため、有視界距離に入るのはすぐだ。ただ近づかれ過ぎるとVLSの都合上、至近距離は狙えない。

(8kmの敵をミサイルで優先的に排除。以降は艦砲、近接防空火器で対処)

敵がどんな状態であろうと構わない。『ラファエル・ペラルタ』は創造主の望みに従い、迫り来る脅威を全て殺すことが仕事なのだから——

「レーダーコンタクト！ ロストした編隊です、数は40」

「40？ 残りの10騎は？」

「ノーコンタクト」

艦長がインカムのスイッチを押そうとした時、艦橋の見張りから報告が入る。

「敵編隊視認。本艦右舷40度、速度120ノット。真つ直ぐ近づく」

報告が終わると同時に、後部VLSからESSMが発射される。

「敵編隊、まもなく本艦の懐に入ります」

ESSMはまだあるものの、10km圏内に入られると、VLSの都合上かなり当た

りづらい。

「マークインターセプト。残り34」

「1対34か……………」

艦長は冷や汗を流す。鈍足であり尚且つミサイルへの対抗手段を持たない連中だ。とはいえど、その攻撃は同じイージス艦である『チャンセラービルズ』の被害によってその脅威が証明されている。防空の鬼とはいえ、30騎以上ものトカゲに取り憑かれてはひとたまりもない。

『ジリッ……………』

インカムにノイズのような音が走る。

「ん??」

火器管制官がそのことに気づくも、無線の不調だと結論する。

「懐に入られました……………」

『ラファエル・ペラルタ』の戦いは佳境を迎える。

(推奨BGM ジパンングのあれ)

「全騎、突入進路を確保!」

「了解!」

残存した竜騎士たちは眼前を航行する『ラファエル・ペラルタ』に対して憎悪の視線

をぶつける。密集体型だと一発の矢で複数騎が落とされるため、5騎編隊で各個攻撃を行うつもりだった。

今まで撃ってきた必中の矢はどうやら底が尽きたらしい。偵察隊の報告通り、艦首に魔導砲が一門確認できるが、魔導砲は艦に当てるのにすら苦勞するのに、万が一にでも空中を高速で移動するワイバーンには当たらない——のだが、魔導砲が旋回し、こちらに砲口を向ける。

「たかが一門の魔導砲で、何ができるといふのだ？」

隊長は思わずそう口にしていた。

『右対空戦闘。目標群α。主砲、撃ち方始め』

イージスシステムの管制下にあるMk. 45 5インチ砲。mod 4がワイバーンに対して牙を向ける。

ダン！ ダン！ ダン！

その速射性能は高くはないものの、この時代の砲火器の装填速度の常識を上回る速度で砲弾が発射される。

超音速対艦、極超音速対艦ミサイルすら迎撃可能な主砲を、時速120ノット程度のワイバーンロードに向けたらどうなるか。容易に想像できる。

砲弾は戦闘を飛ぶワイバーンロード命中。立て続けに編隊に命中し、消滅した。



「目標群α、撃墜！」

『続いての高脅威度目標を攻撃』

主砲が連続して火を吹く。低空から艦に近づく目標を優先的に攻撃する。

『低空目標排除』

残り28騎。

『ラファエル・ペラルタ』はシステムをフル稼働させる。

ガン！ ドゴオオン！

低空を飛行していた仲間が爆発音とともに爆発四散する。

「クソツタレが！ 全騎続け！」

上空から一気に急降下、高性能な魔導砲といえど、仰角を直角までに取れるわけがない。

12騎が『ラファエル・ペラルタ』を目掛けて急降下を開始する。

『ラファエル・ペラルタ』は直ちに回頭。ワイバーンロードの懐に入り込もうとする。そしてCIWSとODINを起動。

コンマ数秒のスピンアップを行い、轟音とともに銃弾の雨を編隊に浴びせる。そしてODINはCIWSでは捌き切れない目標に対してレーザーを照射する。

「ガッ………!？」

急降下していた竜騎士たちは銃弾の雨と高出力レーザーに絡め取られ、この世から去る。

『っ！』

コンピュータからの警告が入る。編隊ではなく個々で接近してきているワイバーンがいた。数は14。

『主砲は間に合わない。CIWSとODINで対応』

——が、CIWSは先程の射撃で残弾がかなり厳しい、数秒の射撃で底を尽きるだろう。

『ラファエル・ペラルタ』はそれを無視して実行。ODINも攻撃させる。

「2騎撃墜！ 残存機との距離、1マイル!!!」

リーダー員が絶叫に等しい声を上げる。

『迎撃は間に合わない』

『ラファエル・ペラルタ』が持つ武器はほとんど撃ち尽くした。主砲はデンジャークローズのため使用不可。ESSMがまだ残っているが、同じくデンジャークローズ。ODINはまだ使えるが迎撃効率が悪い。

この状況で、創造主を守るために取れる最善の行動………それは。

『ジジジッ!!!』

「つ……………」

ヘッドセットに強烈なノイズが走った。

「なんだ？——うおっ!？」

艦が左に大きく傾く。

「右に舵を切った？」

すると、今まで沈黙していた主砲が再び攻撃を再開する。

「前方に位置してる敵機を優先的に攻撃をしています」

「どうしてだ……………?」

ラファエルはいったい何をしようとしているのか。

「どこへ向かおうとしている」

チャートを睨むCICオペレーター。右回頭し、真っ直ぐ沖合へと向かっている。

「そういうことか…………… 艦長」

「ん?」

「どうやらラファエルは民間人を戦火から遠ざけようとしてようです」

何かしらの流れ玉が当たる可能性を考慮したのだろう。それはわかったが、この時点でその行動を行う理由が理解できなかつた。

「分かつた。だが——」

一つ杞憂があった。

「そんなことを、機械が——イージスシステムができるのか？」

「分かりません。ただ、本艦はイージスシステムの管制下にあります。そこから察するに、自身の思考に基づく判断を下していると言えるでしょう」

もはや事前のプログラムで設定された、イージスシステムの範疇を超えている。

「ラファエル…… 最後まで任務を果たそうと……」

艦長は思わずそう呟いていた。

「よし。もう少しだ」

「あいつ、魔力切れのようですね。全く撃つてきません」

全周囲から攻撃を仕掛けた竜騎士たちだったが、敵艦は前方にのみ攻撃を行っていた。後部からの攻撃は一切ない。

「今度こそやれる」と全員が確信する。

「よし！ 全騎、我に続け!!」

愛騎に導力火炎弾の発射準備を指示する。火球が形成され、発射準備が整う。

「発射!!」

残存騎8騎から放たれた八つの火球。『ラファエル・ペラルタ』へと真つ直ぐ向かう。

そして――

「2発命中!」

巨大船を見ると、艦中央部と艦尾にある平らな甲板に命中していた。艦中央部に命中したのは、大きな破口を形成した。

「ざまあ見ろ!!」

「仲間の仇だ!!」

「よし、このまま畳みかける!!」

そう言いながら攻撃体制を取ろうとしたとき、ちょうど灰色の艦と編隊の中間地点の空間が歪んだように見える。

「ん?」

歪みはやがて大きなうねりとなり――

「な!?!」

轟音、氷が割れるような音を伴いながら空中に艦が出現する。

「ど、どうなって……?!」

刹那――その艦から猛烈な対空砲火が向かってくる。

「は?」

光弾の雨、外れることのない矢、あらゆる攻撃がワイバーンロード隊へと向けられ――

――10秒以内で上空を飛行していたワイバーンロード隊は全滅した。

「あれは……………」

艦に設置されているカメラの映像を見た艦長。その途端、思わず顔がにやけてしま  
う。

その艦は空中に白い航跡を描く。

「国防宇宙海軍の『たくみ』です」

そう報告した士官の声も安堵に包まれていた様子であった。

「助かった!!」

「よかった!!」

口々に喜びを分け合うクルーたち。絶望的な状況でありながらも奮闘した甲斐が  
あったというものだ。

「艦長、ハルマゲドンモードを解除します」

火器管制官が艦長に聞く。

「システム解除」

「システム解除」

システムがシャットダウンする寸前。それは聞こえた。

『無事でよかったです』

男性とも女性にも聞こえる声で、『ラファエル・ペラルタ』クルー全員の耳に入った。

「……………聞こえたか？」

「はい、間違いなく」

「……………」

ブラッドレイは艦長席から立ち上がり、艦尾方向に体を向けて敬礼する。CIC要員だけではなく、クルー全員が星条旗に敬礼をした。

そして更に喜ぶべき事態が発生する。

『こちらダメコン班！ 幸いにして、死者はいませんでした!!』

「よっしやああー!!!」

ついに喜びを爆発させるクルー。

「これがアメリカ合衆国の力だ!!」

仕事を着実にやっていたつも、艦内はお祭り騒ぎになるのだった。

「空中目標排除。その他の目標確認できず」

レーダー士官が報告する。

「了解。引き続き警戒せよ」

砲雷長が「ふう」と息を吐く。

「ワープアウト後の即対空戦闘でしたが、なんとかかなりましたな」

「ホントホント、グラビティダメージで機関が数十分まともに機能しないっていうのね」

砲雷長の言葉にその特徴的な茶髪を振り乱しながら同意するたくみ。

「艦長、『ラファエル・ペラルタ』と交信しましたが、ほとんどの武装が枯渇してしまい、戦闘行動不可とのこと。任務引き継ぎの要請です」

「承諾して。それと『貴艦の奮戦に感謝する』と付け加えて」

「了解」

たくみはモニターに映る『ラファエル・ペラルタ』を見る。艦中央部とヘリ甲板に大きな破口があるが、幸いにして死傷者はいなかったとのことだ。

「さて、気を引き締めていきましよう。まだ戦いは終わっていません」

たくみのその言葉に、乗員全員が気を引き締めるのだった。

◆ 日本国 国防省

「——『ラファエル・ペラルタ』はハルマゲドンモードを起動し、脅威目標を撃墜。被弾したものの、幸いにして死傷者は発生しなかったとのことです」

「“たくみ”と“あきづき”が間一髪で間に合いましたか……」

「第一護衛艦隊もワープし、フェン王国の防備に入ります」

「第一輸送隊も順次ワープに入らせます」



迅速な邦人救出のため、フェン王国へ向かっている艦船全てをワープさせる。空軍もAWACSを中心としたサポートパッケージを進出させる。

全員がフェン王国に取り残されている邦人のために動く。

そんな時であった。

「司令。官邸にいる広瀬大臣からです——」

副官が電話を白井に渡してくる。白井は部屋から出て電話に出る。

「もし、白井だ」

『……………』

相手は無言のままだった。

「すまん、そっちに迷惑を掛けた」

『……………』  
なんて言えいいのか分からない。だが、総理がご立腹だ。すぐに官邸に来

い

「分かった」

部屋に戻り、副官に携帯を返す。

「官邸に行く。すぐに準備してくれ」

「分かりました」

副官付きが部屋を飛び出て行く。

「雲野、官邸に行く。後は頼んだ」

「分かりました、1発かましてやってください」

白井は雲野の冗談には答えず、部屋を後にするのだった。

司令官用車の日産フーガに乗り、官邸に向かう。

フロントガラスが雨により滴る。空は暗かった。

「司令官はどうしてこのようなことを？」

助手席からバックミラー越しに副官が聞いてくる。

「副官、今年で連勤何年目だ？」

「3年目になります」

通常、副官の任期はおおよそ一年が普通だ。だが、この副官は純粋な副官として白井のもとで働いている。仕事に慣れてきた段階で異動となる国防軍だが、異例とも言えることであつた。

「だったら、少しは分かるはずだ」

副官は少し考え込み、答える。

「アフガンの二の舞を恐れた、とかでしょうか？」

「それもある」

アフガニスタンの状況よりはだいぶマシなのが現状だ。各種法律の整備も整い、それ

を実行に移せるだけの力が日本にはある。だが――

「それもあるが、やっぱり怖さが出てきたんだ」

「怖さ?」

「ああ。救える命がそこにあるのに、救えなかった……. そんな経験をした全ての人たちに、そして、この国を今に導いてくれた先人たちへの恐怖だ」

「……………」

「だからこそ、やり切って後悔する」

白井のその言葉に、副官は黙り込むのだった。

車は直ぐに官邸に到着する。勝手知ったる官邸。迷うことなくNSCセンターに向かう。

地下に続くエレベーターに乗り、NSCセンターへと入る。センターへ入るなり、視線が白井に集められる。

哀れみ、怒り、困惑。さまざまな感情が入り乱れた視線。後ろを付いてきている副官は気不味そうにしていた。

「白井司令!! 君はなんて事を!!」

NSCセンターに怒声が響き渡る。首相の席からこの入り口までそれなりに距離はあるが、それでもハッキリと聞こえた声。取り敢えず、白井は距離を詰めてまともに話

せる位置につく。

「君は一体なんてことをしてくれたんだ！ 防衛出動を出していないというのに、部隊の移動、あまつさえ、護衛艦をワープさせるなんて!!」

「護衛艦をワープさせなければ、アメリカ海軍艦船が撃沈される恐れがありました。それに、仮に米イージス艦が空襲を防ぎ切ったとしても、武装は枯渇。逃げるしかありません」

「だからと言って——」

「簡単な話です。私を解任すればいいのです」

人事は国防省が行うものの、最終的な承認、拒否、解任は内閣府に一任されている。首相の一言で首を切るなど容易いことなのだ。

「その上で防衛出動待機命令、防衛出動を発布すればいい。そうすれば、現場の暴走ということに仕立てれる。私もそれに協力しましょう」

「白井司令、あんな顔するんですね」

大臣補佐官が物珍しいものを見る目で上野と白井の会話を見ていた。対して、広瀬の顔は段々と険しくなっていく。

「…………… あいつ、自分の首と引き換えに邦人を守るつもりだな」

「え？」

大臣として、そして友人として止めなくてはならない。そう思い、口を開いた瞬間――

「君を解任する!!」

上野と白井がどのような会話をしていたのか不明だが、どうやら逆鱗に触れたらしい。解任を告げられた白井はどこか冷静な表情で上野のことは見ていた。

「分かりました」

そう言いながら、左胸につけてある国章を外し、上野の前に置く。

「では、これにて」

白井があっさりと退場する。センターを出る前に広瀬のこと一瞥してから出て行った。

「これからどうすりゃあいいんだ……」

思わず愚痴をこぼす広瀬であったが、無情にも事態は更に進んでいくのだった。

## 挑発

パーパルディア王国 第三外務局

「これは……………」

第三外務局局長のカイオスが外務局監査室から送られてきた書状に困惑する。

内容は『第三外務局の日本国に対する対応を不適切と判断。以降、第一外務局に管轄を移し、レミールを日本国の対応官とする』と。そして最後に、『直ちに第一外務局に出頭するように』と付け加えられて。

「あの狂犬に日本の対応を任せると！ やはりフェン王国の例の件か……………」

カイオスが裏で色々手を回している内に、事態は深刻化していたのだ。

そして、『日本国と思おぼしき艦船から攻撃を受けた』という報告が軍務省から各局に通達があったのだ。

「まずいな……………」

事態は思ったよりも進行、そして深刻化していた。うじうじしていても仕方ないので、第一外務局に向かいながら対応策を考える。

「いや、無理だな……………」

正式な手続きを得て管轄が移されたのだ。カイオスが出来ることは限られている。第一外務局は皇宮内にある。第三外務局も皇宮のすぐ側にあるため、すぐに着く。

第三外務局も『文明圏外国家』を主として対応しているため、装飾はそれなりのものが用意されているが、第一外務局は『列強国』を主として対応しているため、皇国の中でも最高級の建材、装飾が施されている。

そんな第一外務局の局長室に入る。

「……………ようやく来たか」

部屋に入るなり、威圧的な声でそう発する女。外務局監察室のレミールだ。

「貴様、よく文明圏外の国家に対してこんな対応ができたな」

「は…………… 国家戦略局の情報から警戒すべき相手だと……………」

カイオスは予め用意した回答を淡々と述べる。

「ああ、あれか。だが、所詮は文明圏外国家同士の戦争。なぜそんなに警戒する必要がある」

「どうやら国家戦略局の報告を知っていたらしい。」

「は…………… 戦争の経緯や兵力などは兎も角として、ロウリア王国を降伏させた時間でも……………」

「国家戦略局はロデニウス大陸の工作には失敗したものの、情報収集を怠ることはな

かった。それがこの結果である。

「なるほど、確かに憂慮すべきことだ。だが、それよりも……………」

レミールはダンツと机に紙を叩きつける。

「日本国と言ったか…………… 文明圏外国家のたかが外交官に局長の貴様から課長まで首を並べて会談しただと……………。列強たる皇国の担当が、情けない限りだ」

カイオスは額に冷や汗を浮かべる。下手したら物理的に首が飛ぶ可能性がある。

「…………… カイオスよ、今後日本との外交は、第三外務局ではなく、第一外務局が行う事とする。外務局監査室から私が第一外務局へ出向するという形をとり、今後日本国への外交担当は私が行う事とする。今回処分されなかつただけでも、ありがたく思え。今後、せいぜい気をつけるんだな」

今回処分されなかつただけ——全くその通りである。

カイオスは恭しく一礼し、部屋から出て行った。

「情けないですな」

「エルト局長と第一外務局局長の席を争った男と思えませんな」

カイオスが部屋から出て行った後、第一外務局の職員は彼のことを嘲笑する。「全くだ。優秀な男だと評価していたのだが……………」

レミールは紅茶を優雅に飲む。エルトを一瞥する。



「エルト…… 件の報告は誠なのか？」

「は、間違いありません。アルデ長官に再三問い合わせをしましたが、『捕虜は1人も確保できず、損害が想定を上回っている』で間違いありません」

「……… つ!!!」

レミールは紅茶が入った陶器のコップを壁に投げつける。

ガシャン、という音が鳴り、カップが砕け散る。メイドがすぐさま片付ける。

「レミール様？」

「『合衆国と名乗る艦船からの攻撃を受けてワイバーンロード隊が半壊した。竜母も半数以上が撃沈された』………」

報告書に書かれた一文を呪文のように繰り返す。

「……… 皇国がここまでコケにされるとはな——— 確か、日本の外交官がまだいたな？」

「はい。皇都のホテルに宿泊しています」

「すぐに呼び出せ」

「は………」

第一外務局は日本の外交官に対し、すぐに来るようにとの内容で命令書を出した。

「…………… なんだこりゃ」

杉崎が困惑した表情で質の悪い用筆紙を見る。

「正式な国交がないとは言え、『命令書』ですか…………… 『要請書』ならまだ分かりますがね……………」

「…………… まあ文書の形式は置いておいて…………… やはり武力衝突の件か」

「そうだと思います。アメリカ大使館の外交官がもうすぐ到着するはずですが……………」

由真崎がそう言った後、部屋の扉が開けられる。

「なんとか間に合いました」

流暢どころか、全く違和感のない日本語で話すアメリカ外交官。彼は駐日米大使館の外交官『セオドア・H・ワトソン』である。その後ろには一時的に大使館付き駐在武官となった『キャサリン・F・ケネディ』海軍大佐もいた。

「ワトソンさん、お久しぶりです。今回はよろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくお願ひします、杉崎さん」

「来て早々ですが、呼び出しを受けたので外務局に向かいます。先方には失礼を承知で…………… いや、向こうから吹つかけられた失礼ですから、この程度は大丈夫でしょう。ワトソンさん達も一緒に随行してください」

「分かりました……………なるほど、そう言うことですか」

ワトソンが机の上に置いてある例の文書を一瞥し、全てを察した。

「ではすぐに向かいましょう」

ワトソンらが大荷物を置いたことを確認し、第一外務局へと馬車に乗って向かう。

「……………日本の馬車のほうが100倍マシだ」

ワトソンは信任状捧呈式にて大使に随行し、皇宮警察の馬車に乗っていた。

「まあ向こうはサスペンション付きですし、道も整備されてましたからね」

「ハッハ……………さて、杉崎さん。例の武力衝突の件で呼び出しを受けたようですが

？」

「はい。おそらく合衆国のことも聞かれる可能性があります」

「大使館からは全てを話せとの命令が出ています。ご自由にお話しただいて構いませ

ん」

「分かりました」

4人は、第一外務局に到着するまでの間、会談の擦り合わせを行うのだった。

「まるでベルサイユ宮殿みたいですね」

皇宮内に入ると、ケネディが言った通り、ベルサイユ宮殿のような華やかさと栄華を

追求した建築様式の建物だった。

「いちちらにござうぞう」

案内人に従い、皇宮内を進んで行く。

「綺麗ですね……………」

由真崎がうつとりとした声で言う。確かに、素人からの目でも美しいことがわかる。やがて第一外務局の扉の前に着く。案内人がノックし、中へと案内させる。

部屋の奥側に、豪華な椅子に腰掛けた20代後半くらいの美しい銀髪の女性が座っていた。細い体系をしており、頭には金の環をかぶっている。

部屋の隅に第一外務局の職員らしき人らが控えている。

彼女の鋭い眼光によつて睨みつけられたケネデイ以外の三人は一瞬硬直する。

「パーパルディア皇国、第一外務局のレミールだ。貴様ら日本に対しての外交担当だと思つて良い」

「レミール……………」

杉崎と由真崎の2人はその名前に見覚えがあつた。

カイオスとの会談が終了し、その後の会談が全くなかつた時間にパーパルディア皇国を調査していたのだ。

その際、ムー大使の『ムーゲ』と会談する機会を得たのだ。

『レミールという人物をご存知ですか?』

『いえ』

『あの方には気をつけたほうがいい』

その後、ムーゲから語られた事実は想像を絶するものであった。

・文明圏外国家の住民を見せしめとして数百人処刑し、敵国をすぐさま降伏させること。

これが一番イカれてる。

そんな残虐行為を平気で命ずるレミールが目の前にいる。

「日本国外務省の杉崎です」

「同じく由真崎です」

レミールの視線がワトソンとケネディに移る。

「アメリカ合衆国国務省外交官のワトソンです」

「アメリカ合衆国海軍大佐ケネディです」

「アメリカ……資料にない人物かと思ったが、貴様らがアメリカ人か」

思案する様子を見せたレミールだったが、すぐに獐猛な笑みを浮かべる。

「ちようどよかった。本当なら日本人に見せるつもりだったが、アメリカ人がいるなら好都合だ」

高圧的な声でレミールは語りかける。

「それはそれは、いったい何を見せていたただけなのでしょうか？」

感情の無い声で問いかけるワトソン。

レミールは使用人を一瞥する。

ドアが開き、1m四方の立方体の水晶のようなものが現れる。

「これは魔導通信を進化させたものだ。この映像付き魔導通信を実用化しているのは神聖ミリシアル帝国と我が国くらいのものだ」

「はあ……………」

杉崎は間の抜けた声を出す。

テレビ電話のようなものだろう。

「これを起動する前に、お前たちにチャンスをやろう」

少し質の悪い紙が配布される。

ファイルアレス大陸共通言語で書かれたその紙には、要約すると以下の事が記載してあった。

- 日本国の王は、皇国人とし、皇国から派遣された者を置くこと。
- 日本国内の法を皇国が監査し、皇国が必要に応じ、改正できるものとする。
- 日本国軍は皇国の求めに応じ、必要数を指定箇所に入投できることとすること。
- 日本国は皇国の求めに応じ、毎年指定数の奴隷を差し出すこと。

○ 日本国は今後外交において、皇国の許可無くしてあたらな国と国交を結ぶことを禁ず。

○ 日本国は現在把握している資源の全てを皇国に開示し、皇国の求めに応じてその資源を差し出すこと。

○ 日本国は現在知りえている魔法技術のすべてを皇国に開示すること。

○ パールディア皇国の民は皇帝陛下の名において、日本国民の生殺与奪権利を有する事とする。

以下省略

「何ですか!? これは!!!」

由真崎は抗議を行う。

この内容では属国以下であり、完全な植民地状態である。

「列強国、世界秩序を担う国家が、こんな急進的なことをしてもいいと思っっているのですか!? 世界で最も先進国家のあなた達が!」

由真崎はレミールの自尊心を突くような形で物を言う。

が――

「秩序だの先進国家だの…… 文明圏外国者が知ったようなことを言うな!」

「レミールさん。貴国の日本に対する要求は理解しました。そして、我が国から貴国に

対して、直ちにフェン王国に対する武力侵攻を停止するよう要求します」

レミールの顔が『こいつ正気か?』という表情になる。

「……………要求だと? 列強たる皇国に向かって要求だと! その言葉後悔させてやる

!!」

レミールが指を鳴らすと、装置が魔力を帯び始め、質の悪い映像が流れて始める。

「これは……………」

最初、何が映っているか分からなかったが、人を映したものだとは理解した。

「人を見せて、どうするのですか?」

「よく見てみろ」

そう言われて、画面に映る人物を凝視する。

そこでようやく理解した。画面に映る人影が殺されたアメリカ人だと。

「! あ、アメリカ人……………」

「ようやく気づいたか。そうだ。ニシノミヤコにいたアメリカ人だ。小癩なことに、兵士を数人殺したようだ……………分かったか? 逆らえばこうなるということをして……………」

レミールの後ろに控えている、エルトを除いた職員全員が満面の笑みを浮かべて頷いていた。



ギリッ!

ケネディの拳に力が入る。だが、彼女はここでは発言できない。

「フェン王国の首都アマノキまで進軍するつもりですか?」

「勿論だ。アマノキにはどれくらい日本人アメリカ人がいるだろうな」

もう駄目だ。彼女は、いや、このクソ野郎は自分たちのことを人間だとは思っていないのだ。家畜と同等の扱いをしているのだ。

「分かりました…… 既に本国では邦人保護出動が発令されています。あなた達が今回受けた被害とは比べ物にならない程の損害が発生するでしょう」

「我が合衆国も、貴国に対し、それ相応の罰を受けてもらう」

「ハッ! どれだけ烏合の衆が騒ごうとも、結果は同じだ。今回我が軍を押し退けたのは、たまたまだと言うのに」

もはや会谈ですらない会谈が終了した。

「くそ! くそつ!!」

ケネディが悪態を吐く。

「どうしてアメリカ人が…… どうして……」

「おそらく、映像に映っていたアメリカ人は……」

「はい。ニシノミヤコに戻ったとされる国連軍人です」

沈黙が4人の間に漂う。

結局、馬車に乗らずに宿舎へと戻ることにする。

街路を歩いてみると、海が見えて来る。この先で戦争が起きているのだ。

本来ならここでうじうじしている暇などないのだが、それでもアメリカ人が1人犠牲になつたという事実が4人に重くのしかかつていた。

そんな4人の背後から近づいて来る人影があつた。

「！ 誰か！」

ケネデイがいち早く気づき、誰何する。

「失礼しました。日本国情報庁特殊作戦執行部の近藤です」

「あ、潜入班の方ですか」

「はい、偶然お見かけしましたので、声を掛けさせていただきました」

杉崎は近藤の目を見る。

「何か嫌なことがあつたようですが？」

「ここではあれなので……」

場所を移すことを提案すると、近藤は二つ返事で了承する。

「それで、何があつたのでしょうか？」

杉崎は徐に口を開く。

「まず、最初に言います。アメリカ人1名が犠牲になりました」

近藤はワトソンを見ながら、軽く驚いた様子を見せる。

「アメリカ人が……」

「はい」

「合衆国としての対応はどうなるでしょうか？」

ワトソンは少しの間黙り込む。

「……… 分かりません」

本国が消失し、大使の意思が米国の意思とされるが、どうなるかはワトソンにも分からなかった。

「ですが、戦争の足音がすぐそこにあるのは間違いありません」

これについては断言できた。

「分かりました。我々もできることをします。手を煩わせてしまい、申し訳ありませんでした」

そう言うと、近藤は宿舎から出て行った。

「取り敢えず、本国に報告します」

「私も大使館に報告します」

どれだけ打ちのめされても、それぞれが仕事を全うするのだった。

## ◆ 日本国 首相官邸 総理執務室

「……………それは本当なのか？」

「はい。現地にいる外交官、米大使館からも同様の報告が来ています」

総理執務室にてパーパルディア皇国に派遣されている外交官からの報告を討議する会議は、さながら葬式のようにであった。

「ニシノミヤコに引き返したとされる国連軍人一名が犠牲に……………」

上野はその一文を呪文のように繰り返す。

「米国はどうするつもりだ？」

新山経産相が聞く。

「何とも言えません。ですが米国の動向を気にするよりは、この事態をどう対処するかです」

宇治和が広瀬のほうを見いやる。

「国防軍は邦人保護出動を実施し、フェン王国に在留する邦人と外国人を保護しています。輸送艦による輸送を急いでますが、約2000人以上の邦人がいます。外国人もです。全てを避難させるには時間が掛かります」

「仮にパーパルディア皇国が殴り掛かってきたとしたら対応できるのか？」

「技術力の差から言えば敵ではありません。ですが既に必要最小限度の戦力を大きく超

えています。言うならば派兵です」

そこで広瀬は上野の顔を見る。

「やはり防衛出動が望ましいかと。向こうは既にフエン王国に対し宣戦を布告。そして我が国に対して隷属の要求をしてきたのです。防衛出動の発動条項は満たしています」

事前承認の決を取ったとしても、野党やマスコミが反対するとは考えずらかった。

「……………」

「総理。日本国民の生命、自由及び幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険がある事態と認めることができます。防衛出動待機命令だけでも発令すべきなのでは？」

「総理」

「総理」

閣僚が口々に『総理』『総理』と言う。

「どうして」

「え？」

「…………… どうしてそんなに決断を押し付けてくるんだ！ もしここで判断したとしても、皆んな私に責任を負わせるつもりなんですよ!!？」

上野がついに感情を爆発させた。

「大体、防衛出動防衛出動って言うけどね！ 邦人を迅速に退避させれば問題ないで

しよ！ それに、従属の要求にしたって、ムー共和国が黙って見てる訳がないでしよ!!」  
なぜここでムー共和国の名を出すのかと、理解に苦しみながら閣僚が上野のことを宥める。

「総理、我々も責任を負います。とうか総理が辞任すると言う事態になった場合、必然的に内閣総辞職になりますから……………」

「信用できない!」

「あつ!」

そう言いながらNSCセンターを出て行ってしまった。

補佐官と秘書官が慌てて追いかけて行く。

「…………… 一度休憩を挟みます」

危機管理監がそう言い、場の緊張が解かれる。

広瀬は真つ先に首相の席に向かい、そこに置かれている国章を取る。

「管理監、30分程本省に戻ります」

「分かりました」

そう言い残し、広瀬もセンターから出て行った。

「大臣、どうなってしまうのでしょうか」

エレベーター内で運用官が聞いてくる。

「さあな、あそこまでヒステリックになると、まともな判断は出来なさそうだな」  
「白井司令も居なくなつてしまいましたし……」

「……………」

エレベーターが2階に到着する。

ホールから階段を降りて、車寄せにまで行く。

「では、自分は別の——」

「いや、君も乗ってくれ」

「…………… 分かりました」

幾ばくかの時を置いて、運用官も大臣車に乗る。

運用官は助手席に乗ろうとしたのだが、秘書官から隣に座ってくれと言われてしま  
い、仕方なく広瀬の隣に座る。

「……………」

車内では、広瀬が何かを考えているのか、静かであった。

車は国防省の車寄せへと到着する。

メインロビーに入ると、ある人物が目に残まる。

「あれ？ 三笠様では？」

「え？」

待合の椅子に1人座っている少女が1人いた。

「…………… あ、大臣」

広瀬は真つ直ぐその人物のもとへ進む。

「…………… 嫌な予感がしてきてみれば、このようなことになっているとはの」  
開口一番に叱責であつた。

広瀬は大人しく頭を下げる。

「小さな歪みは、やがて大きな災いのもとになる。その時は近い」

そう言い残し、三笠は椅子から立ち上がり、ロビーから姿を消した。

「三笠様はなんと?」

エレベーターに乗ると、運用官が聞いてくる。

「大きな災いが来るつてさ」

「は?」

エレベーターが地下に到着したことを告げ、扉が開く。

目の前に白井がいた。

「つ……………」

「待て!!」

咄嗟に振り向いた白井だったが、広瀬に腕を掴まれる。



「お前までが消えてどうする！ 日本は窮地だぞ!!」

「すまん……………」

そう言いながら腕を振り払い、エレベーターへと乗る。

伸ばした手は無情にも、閉まる扉に阻まれた。

「くそっ!!」

ガンガンと、何度も拳を扉に打ち付ける。

運用官は静かにその場を離れて、統合幕僚会議室に向かう。

「おう、戻ってきたか」

羽崎陸軍参謀総長が声を掛けてくる。

「大臣も一緒にいます。打ちひしがれています……………」

「うん、分かっている」

すると、自身の席の上に、大量の紙が乗せられていることに気付く。

「これは……………」

「パーパルディア皇国本土の攻撃案だ」

「…………… 現在までに判明している、敵基地への攻撃案ですか」

そこに書かれているのは、あくまでも紛争の範囲に限定された攻撃案であったが……………。

「ですが、今回の敵は我々の常識、国際法が通用しません。一部の基地を攻撃しただけでも、過剰な反応をする恐れが……………」

「あくまで案だ。そこまで深く考える必要は無い」

そうは言うものの、羽崎の言葉には、どこか後ろ暗い感情があった。

「すまん。俺も頭が混乱してる」

羽崎は白井シンパの中でも屈指のタカ派だ。そのリーダーが突然の引責辞任をしたとなれば混乱するのも頷ける。

「軍の対応は？」

「現在、海軍の第一護衛艦隊がフェン王国の守備に入ってる。第41戦闘旅団が揚陸作業をたつた今開始したところだ。空軍もAWACSを中心としたサポートパッケージを進出させている」

「米軍の動きは？」

「ドック型揚陸艦に特科連隊が便乗、アメリカ海兵隊遠征隊も一緒にフェン王国に向かっている。第7艦隊のイービス艦3隻、潜水艦1隻もフェン王国に向かっている」

「日本にいる国連軍のほとんどを原隊復帰させているのですか……………」

それだけでも米国に怒りの具合が伺える。

「……………こうなったら——」

羽崎がその後、何を言ったか分からなかったのであった。

◆ フェン王国沖 第一護衛艦隊『いずも』

いずもCICでは早期警戒機が探知している艦隊の対応について話し合っていた。

「——やはり無力化しかないか……」

苦悶の表情で安藤がチャートを睨みつけながら言う。

「はい、統合司令部からの新たな部隊行動基準では、必要以上の攻撃は認められない  
とのことです」

「……くろしおがやったように、麾下の艦にマストのみの無力化を行いましょう」

「だが、最大のネットワークがワイバーンだ」

タンタンとチャートに表示されている空母群を叩く。

「アメリカのイージス艦がそうなったように、波状攻撃を受ければ、無傷では済まない」

あーでもないこーでもないかと参謀らが首を捻りながら考える。

「取り敢えず、奴らが仕掛けてきたら対応する」

結局、玉虫色の決断がされたのだった。

第一護衛艦隊が攻撃判断に悩んでいるのと同時刻。

パールディア皇国艦隊も同様に悩んでいた。

「まさかたつたの一隻に140騎が落とされようとは……………」

「はい。波状攻撃でなんとかかなると思いましたが、まさかここまでとは……………」

「……………くそっ!!!」

ガンガンガンと、海図が載せられた机を叩き、羽根ペンやインクを弾き飛ばす。

だが、誰もシウスを止めない。

全員がシウスの気持ち痛みほど理解できるからだ。

しばらくの間、いろんな物に八つ当たりして、ほつと息を吐く。

「すまない、取り乱した」

参謀が、インクで染められた海図を新しい物に変える。

「高性能艦がアマノキに位置しているのか……………」

「はい、攻撃隊の最後の報告では、2発命中させたとのこと。それを最後に、通信が途絶

えました」

作戦の前提が崩壊し掛かっていることに、シウスは戦慄する。

「……………だが、奴らは陸軍戦力を持ってない。陸からの侵攻なら、手も足も出ないは

ず」

「陸軍部隊は既に地竜の揚陸作業を終え、ゴトク平野を目指して進軍中です」



ニシコミヤコを陥落させた陸軍部隊は、部隊を再編成し、地竜を先頭にしてアマノキを目指していた。

時折、フエン王国兵が散発的に攻撃を仕掛けてきたものの、地竜の火炎放射で殲滅した。

「にしても、二個部隊が壊滅したのは痛いな……」

「はい。市街地戦ではある程度の損害を覚悟していましたが、二個部隊の壊滅は想定外です」

「上陸でも、ニシノミヤコの損害も想定外………こんなこと、今まで一度もなかったぞ………」

ベルトランはパールネウス共和国時代からの軍人であり、パーパルディア皇国となつた今でも軍人として国のために尽くしてきた人物であった。

「ベルトラン将軍、シウス司令からの魔信です。『アマノキ空襲のために出撃したワイバーンロードが壊滅した。十分に注意しろ』とのことす」

参謀の報告にベルトランは耳を疑う。

「ワイバーンロードが壊滅した!？」

「どうやって高速で飛ぶワイバーンを落とすと言った………」

参謀内に混乱が広がる。

「全員落ち着け！ このことは、我らの内に留めておく。今はゴトク平野を目指す」  
「「はっ!!」」

ベルトランは陸軍部隊に合わせて航行する戦列艦を悲しげに見つめるのだった。



フェン王国首都アマノキに程近い海岸におおすみ型輸送艦2隻と、さつま型輸送艦2隻から発進した計8隻のL C A Cがひっきりなしに海岸へと上陸し、人員と装備を吐き出していく。

見物に来ているフェン王国人が驚きの声を上げる。

「船が陸にまで来ているぞ……」

「あんなのを持っている日本ならパーパルディア皇国を打ち払ってくれろ！」  
やがて、日本軍に対して歓声を送るのだった。

#### 国防軍第42戦闘旅団

国連軍に出向し、中東紛争にも参加したことがある。単体の戦闘団としては第二師団、第七機甲師団以上の練度を誇る。

旅団長の久世<sup>くぜ</sup>陸将補は『いずも』C I Cに隣接された指揮所にいた。

「次の輸送で旅団の揚陸が終了します」

「了解」

ディスプレイが進軍中のパーパルディア皇国軍をクロースアップされる。

「現在侵攻中の部隊ですが、我々の基準だと、重機械化師団、もしくは機甲師団に相当します」

「特科部隊の到着は1日後、敵部隊のアマノキ到着予想時刻も同日です」

「……………この平野は？」

久世は比較的地形が穏やかな地点を指す。

「ゴトク平野です。高低差30m以内の穏やかな平野です」

「機甲部隊展開の好条件地域か……………」

「はい。敵もそれを理解しているはずです」

「……………部隊をゴドク平野に進出、そこで敵を迎え撃つ」

「分かりました。対戦車ヘリ二機でローケーションを組みます」

飛行隊長が班長に指示をする。

「やはり特科連隊がいらないのがつらい……………」

幕僚が苦悶の表情で言う。

「ですが、対戦車ヘリもいますし、航空隊の支援は潤沢です。ヘマをしなければ負けることはないのでしよう」

「7空と調整し、すぐに支援を受けられるようにします」

砲火力では不足しているものの、空母航空団の支援を受けれる。

「分かった。敵の前面を第4戦車中隊と偵察隊で削り、後方を対戦車ヘリで攻撃、航空攻撃も適時実施する」

久世陸将補が大まかな方針を言い、作戦会議を締め括った。

「使用できる支援は潤沢ですね」

会議が終わった後、幕僚が話しかけてくる。

「戦闘団単体の打撃力が不足しているんだ。中央も、そこら辺は理解してくれてる」

「特科連隊もアメリカ海兵隊と一緒に来ている。それで戦力は完結だな」

「…………… いよいよ戦闘ですか」

「ああ。気を引き締めていこう」

久世陸将補はマグカップに残っているコーヒーを一気に飲み込んだ。

第10戦車中隊中隊長は40式戦車の車内にて静かに戦術端末を凝視していた。

「ついにこの時が……………」

ドローンは今も尚侵攻中のパーパルディア皇国軍を映す。

敵の数は強大だ。油断できない。



「各車、相手はこちらより遥かに劣っているが、油断はできない。総員気を引き締めてかかれ」

各車より了解の返事が来る。

中隊長はまだ見えぬ敵に対して微かな恐怖を抱くのだった。

◆ 小松基地

国防空軍小松基地に古めかしいレシプロ機が着陸する。

翼と胴体、尾翼にはムー共和国の国章があった。

ムー共和国　ロールス・ロトル社製　ラ・カオス

ムー共和国初のエンジンを4発搭載した輸送機にして、破格の輸送能力を誇る長距離輸送機だ。

ラツタルが降ろされ、ムー共和国三軍の制服を着た8名の将校と士官が降りてくる。

最後に降りてきたのは、前回のムー共和国使節団に随行した技術士官のマイラスと戦術士官のラツサンであった。

彼らは今回のフェン王国武力衝突の件で、日本国へと派遣された観戦武官であった。

ムー政府が観戦武官派遣を通知すると、日本国政府は初戦は見ることはできないかもしれないと前置きして観戦武官を受け入れることになった。

「また来るということになるとはな………」

ラッサンが滑走路から離陸していくF-15を見ながら言う。

「来月から始まる技術交流までは来れないと思ってたけど、こんなに早く来れるなんて！」

マイラスがはしゃぐ子供のように言う。

「ははは。たしかにそうだな。だが、今回は前回と訳が違う」

そうだ。今回は演習の見学などでは無い。日本軍の実戦を見ることになるのだ。使節団のときに来た時とは全く異なる。

「ああ。じゃあ行くのか」

マイラスとラッサンは職責を果たそうとする。

## 殲滅のメロデー

第10戦車中隊はゴトク平野に進出。

稜線射撃の体勢にて敵を待ち構えていた。

辺りには長閑な景色が広がっており、とても戦地だとは思えなかった。

野鳥が囀りながら、平野の丘陵に鎮座する40式戦車の上に止まる。

「雀みたいな鳥だな……」

車長用の周囲監視装置で鳥を見る。

「異世界だつていうのに、文化は文明開花以前の日本にそっくりですからね。似たような生き物が居てもおかしくはないでしょう」

「それもそうだな」

『まもなく会敵予想時刻。全車、戦闘配置』

中隊長車から指令が届く。

5両の戦車が丘陵地帯に身を隠し、伏撃を狙う。

その他の車両は稜線射撃の体勢に入った。

「第一弾は後方にある砲火力の殲滅か」

「艦載機による誘導爆弾の投下です」

ゴトク平野にて展開される迎撃作戦は、敵部隊を直掩する戦列艦の無力化または撃沈。そして航空部隊による敵砲火力の制圧、そして機甲部隊と対戦車ヘリによる撃滅が想定されている。

『現在時刻1423。作戦開始時刻まであと2分』

整合された時計を見る。

まもなく戦闘が始まる……………。

『作戦開始まで1分——』

デジタル表示されている時刻は刻々と進んでいく。

『——3、2、1、作戦開始』

「Drop ready. Now, bombs away. Laser on……………  
raising」

その言葉とともに上空で待機していたF-4B戦闘機がJDAMを投下。JDAMは地上部隊のレーザ照射先に向かって真っ直ぐ落ちていく。

殲滅のオーケストラの前奏が始まる。

ゴトク平野に進出したパーパルディア皇国軍地竜隊は布陣を整えて進軍を再開していた。

なだらかな平野には一人の敵の姿も見えず、平和なものであった。

「このまま進めばアマノキです。おそらく、平野の切れ目辺りに防衛線を布陣しているものと思われませう」

ベルトランと参謀は敵の布陣の予想を立てていた。

平野は地竜が最大の力を発揮できる戦場。敵もそれを理解しているからこそ、平野には兵を一人も配置していないのだろう。

「ううむ。アマノキには確か例の正体不明の戦力があるのだろうか？ それを頼りにしている可能性もあるな………」

「はい。とにかく、ゴトク平野を占領し、アマノキに斥候を差し向けます。ワイバーンによる偵察は、海軍の報告通り危険と判断しました」

情報が不足しすぎている、というのが、ベルトランと参謀らの共通見解であった。

「今、上空にいるワイバーンも下に下ろすべきか？」

「そうしたいのですが、斥候を前衛に出しすぎると、伏撃にあるかもしれませぬ。偵察のために、下ろすことは………」

できないと、参謀が言おうとした瞬間。

上空にいたワイバーンが急旋回を始める。

『何が——!!』

魔信に竜騎士の絶叫が聞こえた瞬間、ワイバーンは爆発音とともに上空から消え去る。

「な、何が……？」

混乱するベルトランを他所に、事態は更に進行する。

「後方で爆発音!!」

「何?」

ベルトランが後ろを見ると、魔導砲が配置されている後方が爆炎に包まれていた。

「何があった!」

「落ち着いてください! 今、情報を収集中です!」

混乱に包まれる地竜部隊を他所に、魔導砲が配置されている後方が次々と爆発していき。

やがて、爆発が収まった頃には、部隊は悲惨な有様であった。

「ま、魔導砲が一門を残して全滅!」

「い、一門しか残っていないというのか……!」

失われたのは魔導砲とそばにいた兵士のみ。全体の1割にも満たない数だが、それで

も重要兵器である魔導砲が失われたのは大きすぎる。

そして、海上でも動きがあった。

「正面、巨大船を発見！」

地上部隊の支援のために沿岸を航行していた戦列艦10隻は、正面から一隻で近づいてくる未確認船を発見した。

「ワイバーンロードを壊滅させた例の艦か……」

「気を引き締めていくぞ!!」

「それにしても……」

敵艦は速い。こちらの船速の倍以上はありそうだ。

「敵艦回頭!!」

「何!？」

その報告に艦長は驚く。

距離は約30km。砲戦距離にしては離れすぎている……………。

「発砲!! つ、続けて発砲! 信じられない速度です!!」

「転舵! 回避運動!!」

10隻の戦列艦がそれぞれに回避行動を行う。

だが――

「うお!？」

猛烈な爆発音を立てて、隣を航行していた味方艦が轟沈する。

「しよ、初弾で——」

艦長の言葉はそれ以上続かなかった。

地上部隊援護のために沿岸を航行していた戦列艦10隻は、護衛艦『しらぬい』の攻撃の前になす術なく全艦沈没した。

護衛艦『しらぬい』の艦橋にいたムー共和国海軍将校と士官は驚きに身を振わせる。

「交戦距離約30kmで初弾命中、しかも全弾命中させるとは……………」

「はい。しかも、装填速度も尋常ではない速さです」

視察団の報告と、その後の交流によって日本国軍の実力は少しずつ明らかになってきてはいるが、実際にそれを見るととなると恐怖でしかなかった。

もし、これがムーに向けられたとしたら……………」

将校と士官の脳裏に、日本軍の攻撃を前になす術なく平伏していく様子が思い浮かぶ。

「味方でよかった」

心の底からそう思うのだった。



直掩の艦隊が全滅した様子はベルトランら地上部隊も目撃していた。

「皇国軍の戦列艦がなす術もなく全艦撃沈されるとは……」

敵は予想以上かもしれないと、ベルトランが思っていると、参謀の怒号が耳に入ってくる。

「第一、ワイバーンを一瞬で落としたのはなんだ！　ワイバーン一体を落とすのに苦労するのに！」

「戦列艦が一瞬で撃沈させられたんだぞ！　アメリカ合衆国とかいう軍に違いない！」

参謀のその一言に戦慄が走る。

もしかしたら、平野に敵が潜伏しているかもしれない。

「各個撃破の危険性はありますが、斥候を出しましょう!!」

「ああ、そうしよう」

攻撃の正体が不明の中、参謀らはよく働いていると評価できよう。

だが、敵はパーパルディア皇国軍の想像を上回っていた。

「敵、目視」

「中隊、射撃準備」

第1小隊と第2小隊からなる第10戦車中隊は稜線にて姿勢制御を行い、稜線射撃の体制を取る。

先鋒は第1小隊が担う。

「中隊射撃命令、対戦車榴弾。目標、敵装甲車。指名」

「距離2600。距離良し」

「撃て!!」

40式戦車の120mm滑腔砲が火を吹く。

ダン!!

「ん? 発砲音?」

ガアアアーン!! という音とともに、地竜が耳を塞ぎたくなるほどの断末魔をあげ、即死する。

「な、攻撃か!!」

「斥候からです! 正面左右に鉄竜が5騎ずつ。計10騎が魔導砲らしきものを撃つたとのこと、斥候からの連絡は途絶!」

その間にも地竜に次々と砲弾が命中していく。

頭から全てが吹き飛んだり、貫通して後ろにいた歩兵を数十人絶命させていくものま

であった。

「とにかく、その鉄竜に攻撃をしよう！ でなくては何もできん!!」

「は!!」

地竜部隊が敵がいるであろうおおよその位置に前進するが、その間にも地竜が次々と死んでいく。

「このままだと、盾になる地竜が全滅します……………」

「くっ……………」

だが、それでも前進する。

そしてよくやくその場所に着いたものの、敵は既になく、足跡らしきものが残されていただけだった。

「くそっ！ もう下がっていたか!!」

『正面！ 敵鉄竜を発見!!』

ベルトランが望遠鏡を使い、正面の丘を見る。

「な、なんだあれは……………？」

怪異。

ベルトランは40式戦車を見るなりそう思った。

その怪異が煙に包まれる。

「さ、最後の地竜が!!」

パーパルディア王国軍が精強である理由の一つ、地竜の全てが死んだ。

「くそっ! 撤退だ!!」

陸将ベルトランは恐怖に支配されていた。

城門すら一撃で吹き飛ばす皇国の切り札、陸戦兵器のけん引式魔導砲、これが一門を残して全損。

地竜も全て全滅。

自分達にあの鉄竜を打ち破る方法はない。

「どうする……」

脳裏に降伏の2文字が浮かんだ。

「いや、それは出来ない」

皇帝陛下の関心が高いこの戦いで降伏すると、一族がどんな目にあうか解らない。なら、転進すればいいのだ。

一時的に撤退し、戦力を補充、また攻撃を再開すれば良い。

ベルトランは撤退命令を続けて発出する。

不思議なことに、鉄竜は何の手出しもしない。

「いったいどうするつもりだ?」

「後方に未確認飛行騎!! 騎数6!」

ベルトランは後ろを振り向く。

「あれは何だ!?!」

後方に2騎、右後方に2騎、左後方に2騎。

自分たちを囲むように虫のような物が空に浮いている。

風車のようなものを回して空を飛んでいた。

「何をするつもりだ!」

すると、羽虫の頭の下の辺りから、白い煙を上げながら、連続して陸戦隊に向かい、光の槍が猛烈な速さで飛んでくる。

声を発する暇も無くそれは着弾、巨大な爆発と共に、陸戦隊の後方、右後方、左後方が被害を受ける。

敵の飛竜が咆哮をあげ、光弾が連続して飛んでくる。

飛翔してきた光弾は炸裂し、陸戦隊の兵がバタバタと倒れていく。

隊の後方は恐怖に駆られ、前方の中心部に逃げる。

しかし、隊の最前列は停止しているため、密集体系となる。

「あの飛竜も倒せないのか!?!」

ベルトランははき捨てる。

味方は既に脅えきっており、主力の地竜も全滅、敵については空の鉄竜、鉄の地竜を倒す術も見つからない。

「ま、まずいー！」

参謀は隊が密集体系になっていることに気づく。

「ベルトラン様！」

「何だ！」

「早急に降伏を進言いたします！ 我々は追い込まれています!!!」

「何?！」

「我々は追い込まれているのです！ 兵が無意識のうちに密集、中心部に追い込まれています!! 敵は止めを刺すつもりです！ 地竜も、ワイバーンロードも、支援攻撃の砲艦も失いました！ 全滅する前に降伏を!!!」

「しかし…… 我々はニシノミヤコを、他国を蹂躪してきた部隊だ。降伏してもなぶり殺しに会うだけだ……」

「このままでは全員死んでしまいます！ 全員死ぬよりも、僅かでも生き残る手段を!!!」  
ベルトランは拳を振るわせる。

降伏の恐怖と屈辱が混じったよくわからない感情が起こる。

「降伏の旗を揚げよ!!!」

それでも、彼は決断した。

パーパルディアア皇国軍は、隊旗を逆さにし、左旋回にふり始め、第3文明圏での降伏を示す合図を送り始めた。

その様子は40式戦車内でもハッキリと捉えていた。

「何をしてるんだ？ あいつら」

「…………… 戦意は失っているようです。武器も放り出していますし」

「…………… 指揮所に至急電を」

「はっ！」

現場の報告は直ちに戦闘指揮所に届けられた。

だが、何を意味するのかまったくもって不明なため、観戦武官であるムー共和国軍に問い合わせた所、第三文明圏での降伏を意味する行動であると判明。

残存パーパルディアア皇国軍約800名が捕虜となったのだった。

陸の戦いに決着がついた頃、海はこれからフェン王国沖海戦と括られた海戦が始まるうとしていた。

フェン王国 ニシノミヤコ沖

パーパルディア皇国海軍竜母艦隊は隊列を組み、整然と並んでいた。

竜母はワイバーンロードの発着を行うため、他の戦列艦に比べ2回り大きい。

他国とは隔絶した圧倒的な造船技術があるからこそ、この船は造る事が出来る。

第三文明圏はおろか、第二文明圏の列強国『レイフォル』すら打ち倒すことができるだろう。

だが……

「まさか攻撃隊が壊滅するとは……」

アマノキに向かわせた偵察隊の撃墜から始まった戦闘。

攻撃隊からの無線は支離滅裂であった。

その最たる例が『絶対に外れない矢』である。

回避行動をしても、外れることのない神の矢と表されている。

竜母艦隊司令のアルモスはフェン王国を見つめる。

「合衆国とかいう国家か……」

日本国でさえ全ての素性が掴めていないというのに、アメリカ合衆国とかいう国の全ての素性が不明だ。

おそらく、上層部も同様だろう。

「残存竜母は、あと5隻……」



攻撃隊が発艦してまもなく、どこからともなく飛んできた矢に8隻の竜母が沈められたのだ。

アマノキにいた高性能艦が撃ってきたとしても、距離は170km以上離れている。常識的に考えてあり得ないのだが………。

だが、不幸中の幸いだったのが、旗艦に命中しなかったことだろう。

もし艦隊の中核である旗艦がやられていたとしたら………。

アルモスは隣を航行する『ミール』を見る。

通常の竜母に比べ、砲弾への耐性を持たせるため、対魔弾鉄鋼式装甲をふんだんに用いた美しく、強く、そして大きな竜母がそこにあった。

すると、前方の護衛戦列艦からムー製の警報器の警戒音が上がり、思考が中断される。アルモスは前方を注視する。

「何だ？」

非常に見えにくいのが、青く塗られた2本の大きな矢が、超高速で旗艦ミールに向かっていく。

「あの時の!!」

海上スレスレを飛んで来た『それ』は艦の前方で1度大きく上昇し、斜め上方から旗艦ミールに突入した。

『いずも』から発艦したF-4B戦闘機から発射された40式空対艦誘導弾のうちの2発は、亜音速でパーパルディア皇国海軍竜母艦隊、旗艦ミールに命中した。

旗艦ミールが光と煙に包まれる。

巨大なミールの船体よりも大きな爆煙が轟音と共にミールを包み込む。

巡洋艦を1発で大破させられるほどの威力を持つ対艦ミサイルの直撃により、旗艦ミールは内部の人員、ワイバーンロードと共に、艦隊司令アルモスの眼前で木っ端微塵に粉碎され跡形も無く消滅した。

「くそっ！ またあれか!!」

「飛行物体、多数飛来っ!!!」

各竜母艦隊は隊列を崩し、各々が勝手な動きを始める。

「フィシヤヌス轟沈!!!」

パーパルディア皇国の誇る最新鋭の100門級戦列艦フィシヤヌス。

最新式の対魔弾鉄鋼式装甲を施した皇国自慢の艦が、たったの1発でなす術も無く、木っ端微塵に粉碎される。

「竜母ガナム消滅!!! 竜母マサーラ消滅!!!」

1発の矢で一隻一隻沈められていく。

「この艦に向かって来るぞ!!!」

見張り員が絶叫する。

「!!!」

乗組員が絶叫する。

艦隊司令アルモスの思考は強制的に切断された。

竜母艦隊はF-4B戦闘機の対艦ミサイルの攻撃を受けて、護衛の戦列艦もろとも全滅した。

その様子は上空を飛行している早期警戒機のレーダーによって正確に把握されていた。

「空母機動部隊、護衛艦を含めて全艦撃沈しました」

「よし。あとは殴り合うだけか」

戦術士官が100隻を超える大艦隊に近づく、6隻のブリップを見る。

海上戦の最終段階に突入しようとしていた。

国防海軍海上総隊直轄の第一戦隊『むつ』『こんごう』と第一護衛艦隊の護衛艦を含めた第15打撃部隊が、100隻を超える大艦隊に近づいていた。

「距離50kmです」

各艦は既に対水上戦闘、対空戦闘用意を終えて、戦闘配置に付いていた。

「結局、中央からの命令は全艦撃沈せよ、でしたね」

最初、邦人保護出動の範囲でのみの戦闘許可であったものの、その後の続報で『フェン王国周辺にいるパーパルディア皇国軍は避難活動中の邦人に害を為す危険性があると認める』と出動部隊に伝達。

暗に、防衛出動レベルの武力行使が許可されると伝えられた形だ。

「にしても、まさか司令が『敵艦全てのマストを破壊できるか』って言われたとき、こんごう艦長と言ったら驚きましたよ」

むつ砲雷長妖精が顎に手を添わせながら言う。

「『なら司令がいつも艦長と一緒に突撃してください』ってね。笑っちゃいましたよ」「ふふふ。まあ安藤司令も無茶振りだって分かった筈よ」

「はこ」

邦人の避難は輸送隊が全力で行っている。全体のおよそ6割の收容が完了したところらしい。

1日後にはアメリカ海軍の揚陸艦も来ることなので、明日までには終了するだろう。

「距離40km! まもなく交戦距離に入ります!」

「本艦とこんごうの初撃で前面を崩します。その後、距離を保ったまま砲戦を続行します」

「了解」

まもなく有効射程距離に入る。

「砲撃の射線を確保します。面舵30、210。方向へ」

『面舵30、210。』

艦が微かに左に傾斜する。

後ろからこんごうがピツタリと付いてくる。

「距離33km！」

「対水上戦闘、左砲戦用意！」

三基ある主砲が緩やかに角度調整を行い、その砲門を敵艦に向ける。

45口径16インチ三連装砲三基、2隻合わせて18門が敵艦に向けられる。

有効射程30kmに入った。

「撃ち方始め!!」

攻撃士官の号令で砲術士がトリガーを引く。

『むつ』と『こんごう』の一斉射であった。

弾道解析画面に18の線が映る。

「着弾まで、10——3、2、1、着」

「敵艦に全弾命中」

CICの画面に最前列艦の様子が映し出される。『むつ』と『こんごう』の攻撃を受け

た戦列艦は材木一つの欠片すら残さずに消滅した。

「木っ端微塵です」

「戦艦必要か？ これ」

「明らかな威力過剰ね」

戦艦不要論の空気が両艦CICに流れる中、パーパルディア皇国艦隊はそれどころではなかった。

「距離30kmでの射撃で全弾命中だとお!？」

シウスは目の前で繰り広げられる光景に衝撃を受ける。

30kmという非常識な距離で撃ち、その全てが命中する。しかも大口徑砲なのに装填が速い、速すぎた。

「何をどうやったたらあんな命中率を、装填速度を実現できる!!」

近づこうにも巨大艦の間に4隻の、戦列艦と比べて遥かに大きな艦が巨大艦を守るように陣取っている。

「おまけに速度が違いすぎる」

敵艦は約20ノットで航行している。対してこちらは全速で14ノット。近づこうにもすぐに引き離される。

「何も……何もできずに終わるといふのか!!」

最初は、上陸戦の損害など、いくつかの想定外があったものの、順調に推移していた。だが、アマノキ空襲の時点から歯車が狂い始めた。攻撃隊の全騎撃墜、アメリカ合衆国とかいう未知の国家。そして日本国。

「こんな、こんな結末……認められるものかあああ!!!」

その瞬間、シウスが乗る艦に『むっ』の砲弾が命中。

!!!

その衝撃でシウスは海上に吹き飛ばされたものの、奇跡的に生存。日本国の捕虜となつた。

これで第二次フェン王国沖海戦は幕を閉じ、一時的な小康が訪れた。

◆ 同時刻 アマノキ

アマノキに避難する日本人や在留外国人が犇めき合っていた。

その中に、子供を抱えたウィリアムとジェームズの姿があった。

「……………」

「レイモンド……………」

2人の顔は一樣に暗かった。

2人はふらふらと歩みを進めつつ、子供の親を探す。

「!? ——なのね!!」

集団の列が途切れた辺りに子供の親がいた。

「この子で間違いありませんね？」

「はい…… 本当に、本当にありがとうございます……」

「ありがとうございます」

家族全員が2人に頭を下げる。

その子供の親は気付かなかった。助けに戻ったのは3人だったのに、ここに戻ってきたのは2人だということに。

家族は何度も何度も頭を下げて順番待ちの列に入っていた。

「家族の下に戻れて何よりだが……」

ウイリアムが下唇を噛んでいると、集団を掻き分けてこちらに近づいてくる5人のグループがいた。

国防陸軍であった。

「国連軍の方ですね？」

「ああ。そうだ」

「あなたたちを拘束するよう命令を受けています。申し訳ありませんが……」  
リーダーらしき人物が結束バンドを取り出す。

「ああ…… 構わない」

2人は素直に両腕を差し出す。



拘束中、隊員の1人がチラチラと見てくる。

「あんた、名前は？」

「かしろ神代です」

「カジロ、何か言いたそうにしていたが？」

「……レイモンド大尉のことです」

「おい！」

隊長が制止しようとするが、神代は続ける。

「パーパルディア王国との交渉で、レイモンド大尉の遺体が映されたようです。『お前たちもこうなる』と」

「っ……」

ウイリアムは神代に近づき、胸ぐらを掴んで強く揺さぶる。

「どうして、どうして助けが遅かったんだ！ フェン王国の兵士も、レイモンドも、みんな死なずに済んだのに!!!」

ウイリアムは自分が言っていることが、ただの八つ当たりだということとは理解していた。自業自得、助かったのに戻ったのが悪い。そう言われたらそれまでだ。

だが、こうでもしないと彼の気持ちは保てなかった。

「……すみません。私たちに派遣の命令が来たときには、既に……」

「っ……」

ウイリアムは胸ぐらを掴んでいた手を離す。

「ありがとうございます。そして、国防軍を代表して謝罪します。本当に申し訳ありません」

隊長がヘルメットを外し、深く礼をする。

隊員も同様にヘルメットを外し、礼をした。

「すまん……」

ウイリアムは一言、そう謝った。

その後、2人は一時的に国防軍の下で拘束され、米海兵隊へと引き渡された。

◆ パーパルディア皇国 ムー共和国大使館

「——まさか我が国が今戦いに負けると分析しての事でしょうか？」

二ソールの問いに、ムーゲ大使はしばらく黙る。

「……」

「まさか、本当に我が国が負けるとお考えなのでしょうか？ 答えていただきたい」

長い沈黙の後、ムーゲはようやく口を開き、ある事実を話す。

〈2日前〉

◆ 第一外務局執務室

レミールは書記に作らせた報告書に目を通していた。横には局長エルトも同席し、書面に目を通す。

「蛮族が滅亡に向かつて突き進む……か」

エルトの呟きにクライスが反応する。

「トップが馬鹿だと大変ですな。日本はすべての民が消滅の危機にさらされているという事が全く理解出来ていない。それにアメリカ合衆国とかいう国もだ」

エルトは哀れみすら感じる。

皇国は多くの国を滅してきた。

今回もその一部になるだろう。

すると、ドアがノックされる。

「入れ」

次長ハンスが決裁書類を持って駆け込んでくる。

「どうした？」

「今回のフェン王国の戦いに関し、観戦武官の派遣の有無を列強に調査いたしました」

「神聖ミリシアル帝国については、今回も派遣をしないとの回答でした」

「うむ、いつもの事だな。で、ムーはいつ派遣してくるのだ？」

ムーはパーパルディア皇国との戦争にいつも観戦武官を派遣していた。前回のアル

タラスのときもだ。だからこそ、クライスは尋ねたのだが……ハンスの顔が緊張に包まれる。

「その……ムーは皇国へ観戦武官の派遣はしない旨を回答してきました」

「珍しいな。ムーが派遣をして来ないとは。戦闘の収集癖が無くなったのか？」

「……」

次長ハンスが黙り込む。

「ん？ どうした？」

「ムーは、日本に観戦武官を派遣した事が判明いたしました」

「……」

執務室にいる全員の頭に雷鳴のような音が響いた。

日時をムー大使館へと戻す。

「——そのことについては秘密保持命令が出ていますので、回答はできません。ですが、私個人から申し上げるならば、日本のほうがいいと思いますね」

「！」

ニソールは目の前にいるムーゲを凝視する。

駐皇国大使となってから約6年。おそらく、ムーの中で皇国を一番知っている人物だろう。

そんな人物が、皇国よりも日本のほうがいいと言ったのだ。

「ムーは、日本に敵対できるほどの国力を持ち合わせてはおりません。私の個人的な感想なのですが、私は貴国の勇氣に敬意を払いたいと思います」

二ツールはそのまま逃げるように会谈を終わらせようとした。

だが、あと一つ聞かなければならない。

「分かりました。そして、最後に一つ、お聞きしたいことがあります」

「なんででしょうか？」

「アメリカ合衆国という国をご存知でしょうか」

「……ええ。日本を介して交流を行っています」

「分かりました、重ね重ね、ありがとうございます」

二ツールは応接室を後にする。

「急いで報告しなければ……！」

急いで報告しなければならぬ。

日本を介しての交流ということは、ムーは日本とアメリカの全容、またはその一部を把握しているに違いない。

ムーでさえ敵わないとされる日本。

なんとかしなければ……

## 宣戦布告

フエン王国での海戦、陸戦は、日本側の勝利で終結。

あとは、ニシノミヤコの奪還と敵艦隊の対応を残すだけであった。

◆ 国防省 統合幕僚会議室

「敵艦隊は全て殲滅。数百名が捕虜となりました」

「現在、アメリカ海兵隊は揚陸作業中。特科連隊が合流することによって編成完結となります」

「……ここまで来ると、防衛出動のほうがりやすいんだがな」

雲野副総隊司令官がうそぶく。

「それよりも、向こうの出方が気になります。既に軍事的には圧倒的な敗北ですからね。パーパルディア皇国の性格を考えると、ラインを超えるのでは？」

現状、フエン王国で展開されている戦闘はあくまでも紛争とされている。その先は——である。

「まあいい。ニシノミヤコの奪還、そして残存艦艇の対応でフエン王国の騒乱は終わり

だ

「はっ」

その後、ニシノミヤコにアメリカ海兵隊を中心とした日米連合部隊が突入。

海兵隊の攻撃へり、国防軍の特科部隊の精密な支援により、ニシノミヤコに駐留していた部隊は壊滅。

残存部隊全てが降伏。

揚陸艦隊も同様に全て降伏。

フエン王国の戦いはフエン王国側の勝利で終わったのだった。

◆ フエン王国 ニシノミヤコ

ニシノミヤコの外縁付近にある崩壊した家屋の群れを海兵隊の一個中隊が歩いていった。

彼らはそこらじゅうに転がっている遺体をチェックし、生きているものはいないかどうかを探す。

「ダメです」

既にこの中隊だけで約20人の遺体の確認をしている。いや、20人だけ、とも言えた。

「フエン王国が避難させてなかったら、もっと犠牲者が出ていたに違いない」

中隊長は周囲の警戒をしつつ、瓦礫をどかす。

また瓦礫の下に遺体があった。

「……」

ダメであった。

中隊長は左手を自分に胸に当て、右手をここで亡くなった遺体に手を載せる。

「せめて、次は戦争のない幸せな世界で生まれてくれ」

部下に指示をして、遺体を通りにまとめさせる。

すると『中隊長』と無線から呼び出しを受ける。

「どうした？」

『その通りの先の広場に来てください』

「分かった。何かあったのか？」

中隊長は駆け足で広場に向かいながら問い返すも、返答は来なかった。

「何があったんだ」

1分走り、広場に着く。

広場の真ん中で人集りひとだかできていた。

「何があった!」

中隊長の問いに誰も答えず、中隊長は人混みを掻き分ける。その先にあったものは――



「……っ！」

遺体であった。レイモンドの。

「間違いないのか……」

「はい。大尉の持つIDと一致しました。間違いなくレイモンド大尉です」

「……」

中隊長は動かないレイモンドを見つめる。頭部が銃撃により大きく抉れており、原型を留めていなかった。

「総員、作業やめ。たった今、勇敢なる戦士の最後の場所を見た。総員——  
中隊長は涙を流しながら一言、発した。

「——敬礼」

その場にいた隊員が敬礼をする。

最終的に中隊長が『直れ』と言うまで敬礼は続いた。

その後、この悲報は全国ニュースとなり、日本中が彼を殺したパーパルディア皇国と、彼を助けられたかもしれない日本政府に深い怒りの矛先を向けるのだった。

◆ パーパルディア皇国 皇都エストシラント

第一外務局局長室では、今後の日本に対する措置について、アルデを交えて話し合いが行われていた。

第一外務局長エルトが発言する。

「間もなく皇国陸戦隊がフェン王国の首都アマノキを落とす頃ですね。レミール様、本場に現地の日本人観光客は殺処分してもよろしいのですか？」

「良い。今度こそはもつと多くの日本人が確保出来るだろう。蛮族には、しっかりと教育をしなければ分からないようだ……やはり、ニシノミヤコで日本人を一人も押さえられなかったのは痛かったな。アルデよ、アマノキでは確実に日本人を捕縛しろ。ニシノミヤコのように、アメリカ人一人などではなくな」

「はい、分かりました」

「で、その後の事だが……」

ドアがノックされる。

「入れ！」

次長ハンスが汗をかきながら入室してくる。

「本会合に関係ある内容でしたので、失礼とは思いましたが、文書をお持ちしました」

次長ハンスは局長エルトに対し、文書を差し出す。

『緊急調査報告書』

そう書かれていた5枚程度の簡単な報告書が机上に置かれる。

次長ハンスは報告書の概要を口頭で説明する。

「ムーがフェン王国での戦いに関し、日本側へ観戦武官を派遣した事案につき、ムー大使に事実確認とその意図を調査した結果の報告書になります」

ムーが観戦武官を日本側へ派遣した事を知っていた第一外務局は、ムーの意図を計りかねていた。

「結論から申し上げますと、ムーはフェン王国での戦いは日本が勝つと判断しています」

「なんだと!」

「ハンス! どういう事だ!」

「ムーは、自らが入手した情報を分析した結果、今回の戦いは日本が勝つと思っているのです」

「まさか——」

アルデは恐る恐ると言った様子で話す。

「日本はこうなることを予め予測していたのでは? もしそうなら、ムーも一眼を置くほどの情報収集能力を持ち、適切な戦力を運用できるだけの力量を持っている可能性が……」

「なるほど。ムーが観戦武官を派遣するのも分かる……」

エルトが報告書の半ばに書かれている一文に注目する。

——『アメリカ合衆国との関連性あり』

「アメリカ合衆国との関連ありとはどう言うことだ？」

「はい。ムー大使からの情報で、日本を介してアメリカ合衆国と交流していると」

「……何かしらの情報ではなく、全容を掴んでいるのでは？」

アルデのその言葉に局長室にいる全員が顔を青ざめる。

すると、雑なノックの後に汗にまみれた第一外務局の若手幹部が入室してくる。

「失礼します!!」

「何だ!!」

「フェン王国に派遣していた皇軍は、戦列艦隊、補給艦隊、竜母艦隊、陸戦隊、すべて全滅。残ったニシノミヤコ守備隊と揚陸艦隊は、日本国とフェン王国の連合軍に降伏しました」

「な……何だと?」

「ば、馬鹿な!! 何かの間違いではないのか？」

誤報ではないかと指摘するアルデ。

パーパルディア皇国軍は、フェン王国を落とすために十二分な戦力を整えていた。送り込んだ兵力はフェン王国を落として余りある戦力だった。

誰もが顔面蒼白となる、その時だった。

パリン！ と、カップを落として割れる音が鳴り響く。

レミールであった。

「フェン王国という文明圏外国家ばかりか、日本に負けただと!!!」

レミールの脳裏に生意気な2人の外交官の顔が浮かぶ。

おそらく、今回の件で強気に出てくる日本の姿が容易に想像できる。

「蛮族めえええ!!!」

奇声の様な声を上げるレミール。

レミールの目は血走っている。

フェン王国で、皇国が敗れた事はすぐに各国に広まるだろう。

これ以上の悪いことが起きる予感がし、軍の最高指揮官アルデは逃げるように退室した。

「列強たるパールディア皇国がここまでコケにされた事を許すわけにはいかない!!!」

日本国を殲滅するしかない!!! エルト!!」

エルトは椅子から飛び上がる。

「陛下に許可をもらいに行く。殲滅戦の準備をしておけ!!!アルデにも伝えろ!!!」

「ははっ!!!」

レミールは退室した。

残された第一外務局の職員は硬直していた。

「全員動け!!」

エルトのその一言で職員らが動き出した。

戦争の第2歩が動き始めた。

◆ 同国 デュロ 陸軍基地

パーパルディア皇国三大陸軍基地に数えられるデュロ陸軍基地。

ここは陸海軍共用基地となっていて、港には多数の戦列艦が停泊している。

そんな基地を一望できる山の中腹に、デカイ図体の望遠カメラを構えた人の姿があった。

それらは、一見して分からない様に、迷彩服の上から偽装服を着込み、レンズの反射を防ぐためにカバーを掛けてあった。

「……」

日本国情報庁、特殊作戦執行部の東堂とうどう紗季さきであった。

既にここに張り込んでから1週間近く経っている。

(張り込んでから1週間、未だに姿を見せず、か……噂は噂だったのか?)

彼女がここに来た目的。

エストシラントのとある居酒屋で皇国軍幹部らしき人物らの会話を盗聴していた潜入班はある会話を聞いた。

曰く。『デュロにワイバーンロードに対して撃墜判定を叩き出す高性能な対空魔法がある』という。

東堂は陸路で馬車を乗り継ぎ、デュロへと到着。

現地で情報を収集するものの、それらしい情報は無く、張り込みすることとなった。

(気が滅入りそうね……)

時折、周囲を警戒しつつ基地の偵察を行う。

衛星の映像画像だけは把握できない場所の記録。ローケーションの把握。

やることが多い。だが、それをこなすには粘り強く観察しなければならない。

欠伸をすると、滑走路脇の広場に何かが牽引されてくる。

「ん?」

カメラをズームする。

馬鹿でかい鉄の塊の様なものがあった。

「なにあれ?」

写真と映像の同時撮影を開始する。

半円形の物体に鉄の棒が突き刺さっている。

「あれが噂の対空火器？」

しばらく見てみると、布を曳航しているワイバーンが数騎飛行してきた。

すると、例の物の砲身にアニメなどで出てくる魔法陣が出現する。

かなり離れた場所でも、目視で確認できるほどだった。

「お？」

すると、砲身に光の粒子が集まり、銃弾を猛烈な速度で発射していく。

砲火はワイバーンが曳航する標的を次々と撃ち抜いていく。

「……」

その光景を写真を映像に収める。

「脅威ね。少なくともエリコンかブローニングレベルの機関銃と言ったところかしら」

そして、10秒弱に攻撃の後に突然収まる。

砲身から多量の煙が出ていた。

「……」

その後、しばらく見張っていたものの、それ以上射撃することなくどこかの格納庫に撤収していったので、東堂も機材を回収し、撤収する。

「急いで報告ね」



このことはエストシラントにある潜入班本部から情報庁へと送信、統合幕僚本部へと議題に上がることになった。

「まずいですね。概算のデータだけなら中高度を飛ぶジェット戦闘機が撃墜される可能性があります」

そう発言したのは高射幕僚だ。

「データが十分ではないため、断言できるほどではありませんがもしこの通りなら、我に十分な脅威であると言えます」

「仮にデュロの工業地帯や基地を爆撃するとなると、ストライクパッケージの進出、あるいは巡航ミサイルによる攻撃になります」

デュロに配備されている未知の対空兵器の対応するための議論を雲野が止める。

「……詳細な立案は後にしよう。それより、先程政府から停戦交渉に備えろ、とのお達しが来た」

雲野がダンつと、机に紙束を放り投げる。

「これ以上パーパルディア皇国を刺激するような真似は避ける、とのことですか？」

「その通りだ。ま、ムーの情報通りなら実質的な敗北を認めることになる。そんなこと、我々が彼らの立場だったら屈辱でしかない。そんなもの、到底受け入れられないだろうな……」

「はい……」

「それより司令、パーパルディア皇国の攻撃計画の立案は継続でよろしいですね？」

「ああ。だが、面倒な戦争になるな、これは」

雲野のその言葉に一同顔が暗くなる。

パーパルディア皇国の性格は外務省からだけではなく、ムー共和国軍からも伝わってきている。民間についても同様だった。

既に幕引きを図るタイミングを失っているように感じる。

「はあ。どう幕引きを図るのだから……」

ニシノミヤコ解放から2週間後。

邦人や外国人として初の死者となったレイモンドの軍葬が横谷基地に併設されている国立墓地にて行われていた。

参列者は親族のみならず、日米両政府、両軍関係者、そして三笠も来ていた。

「まさか日本人があんなことをするなんてな」

ウイリアムが愚痴ともおぼつかない言葉を言う。

レイモンドの棺を横須賀基地からこの墓地に来るまでの間、警察の先導を受けて霊柩車が走行したのだが、その沿道で多くの日本人が星条旗を掲げて旗を振っていたの

だ。

中には、クレーン車に巨大な星条旗を吊り下げているものもいた。

「ああ。誰もがレイモンドを悼んでいるんだろう」

ジェームズが星条旗で覆われた棺を遠い目で見る。

棺は海兵隊員6名の手によって運ばれる。

やがて棺が台座に収められ、式典が始まる。

「――」

だが、ウイリアムは発せられるその全ての言葉が、ひどく薄く、ペラペラにしか感じられなかった。

関係者のスピーチが終わり、儀仗銃を持つ兵士が整列する。

「装填——撃て」

それを13回繰り返し、散って行った戦士への慶弔を示す。

全ての行程を終え、いよいよ棺を埋めるための準備に入る。

棺に覆い被せられている星条旗をキビキビとした動作で13回、三角形に折り畳まれる。

独立戦争を三角帽を身につけて戦った戦士をイメージするために、そう畳まれる。

三角形に折り畳まれた星条旗を頭より上に上げたまま、レイモンドの妻の元へと歩い

ていく。

一度敬礼をし、『アメリカ合衆国大統領、アメリカ合衆国軍および感謝する国民を代表して、あなたの愛する人の名誉ある誠実な奉仕に対する感謝の証として、この旗を受け取ってください』と言った。

星条旗が妻へと渡される。

そして、埋葬となる。

葬送ラツパとともに、棺が収められ、埋められていく。

「敬礼!!」

号令によつて兵士たちは敬礼を、政府関係者や参列者は右手を胸に当てて三十度の敬礼をする。

葬儀は終わった。

政府関係者や参列者はすぐに帰つて行つたが、親族や妻、レイモンドとジェームズは残っていたが、親族も3人を残して帰つて行つた。

墓地に3人が佇む中、空をどんよりとした雲が覆つていき、雨が降り始めた。

「どうして……」

妻が星条旗を抱えたまま、目の前にある墓石に言う。

「っ……」

ウイリアムは下唇を噛む。

あの時、無理矢理にでも連れて行けば……

「よせ。今更何を言っても、レイモンドは戻ってこない」

どうやら口に出ていたらしい。

ジエームズに肩を叩かれる。

「……馬鹿野郎が」

それが、今のウイリアムに言える精一杯の言葉だった。

そんな3人の姿を、敷地内の小高い丘から眺める人影があった。

「……まさか、転移後初の犠牲者が日本人でなく、海外邦人。しかもアメリカ人で国連軍とはな」

「はい」

「……日本は強硬論へと傾きつつあるが、軍はどういう状況かの？」

見た目に似つかわしくない口調で話す人物。三笠であった。

「副官経由で話を聞いていますが、羽崎陸軍参謀総長を中心にパールディア皇国に対する報復論で沸いています」

「……」

「申し訳ありません。ストッパー役の私が辞めることになってしまい——」

「もう過ぎたこと。それよりも、次をどうするかじゃ」

「——はい」

三笠の言う通り、事態は進みつつある。その対応を考えなければならぬ。

「この東京で、再び政府、陛下に銃口を向けさせるような事態を起こしてはならぬぞ」  
「は……」

そう言うのと、三笠はコートのフードを被り、墓地から去って行った。

「は〜」

1人残った白井は、駐車場に向かいながらため息を吐いた。

あの御仁と話すのは疲れる。

「ん?」

自身の車の横で傘を差し、こちらを見ている男がいた。

「誰だ?」

帽子に掛かる水滴を払いながら近づくと、見覚えしかない顔があった。

「は〜。北海道にいたんじゃないやなかったのか? 佐山」

そこにいたのは前首相の佐山 譲二であった。

「悪いが隠居生活もできそうな状況じゃなくなっただんでね。上京してきたわけさ」

白井は周りを見ると、ため息を吐きながら言う。

「……まあ、取り敢えず車に乗れ」

「おう。悪いな」

前首相なのにSPGがいらないことで察してしまったのだ。

「かく……警備課に連絡はしたのか？」

「一応。その上で警護はいらぬことを伝えた」

「了解。取り敢えず、朝霞の『浦賀』に行くぞ」

浦賀とは、会員制のバーのことで、利用者は防衛省勤務者が主な場所だ。

「プライベートか？」

「バカ。副官と会うんだよ。羽崎の動向を調べさせてる」

「……羽崎？」

「ああ。国防軍の中でも屈指のタカ派だ。それが色々と動いてるらしくてな」

「……色々ね〜」

国防軍のタカ派が動いている。それだけで佐山はある程度のことを察した。

車は『浦賀』に着く。

白井が車を降りると、佐山も付いてこようとしたため、それを制止する。

「待て待て」

「ん？」

「ん、じゃねえ。一介の幹部が元総理に会うとなったら緊張して話にならない可能性があるあるんだぞ」

「でも前首相だぞ?」

「……」

両腕を広げて首を傾げさせる。そういえばこいつ元総理だった。

「OK。来い」

「分かった」

2人はバーに入り、指定していた部屋に入る。

「白井さ……佐山前首相?」

部屋で水を飲んでいた副官が白井に隣にいる佐山を見て驚き、立ち上がる。

「し、失礼しました。佐山前首相」

「気にしなくていいよ。白井に無理を言っつてついできたんだ」

「そう、ですか」

白井と佐山は座るのを確認した副官も椅子に座る。

「よし。早速だが、状況は?」

「はい。羽崎参謀総長ですが……友恵ともえ会メンバーの幹部を中心としてクーデターを画策しているのは、ほぼ確実です」



副官のクーデターという言葉に佐山が目を見開く。

「确实なのか……」

「はい」

「羽崎だけではなく、友恵会までもか……」

友恵会とは、防衛大出身者の陸軍幹部らが入会している会だ。だが、その構成メンバーはタカ派の集まりだ。

「……副官。お前の予想でいい。俺にも声が掛かると思うか？」

白井の問いに副官は一時を置いて答える。

「はい。白井さんの影響力は無視できないものです」

「……わかった。このことに勘づいている奴はいるか？」

「いえ。私が思う限りでは誰も」

白井が大きなため息を吐きながら頭を抱える。

事態は自身の予想を遥かに超える深刻さだ。

何をキツカケに爆発してもおかしくない。

「何がトリガーになってもおかしくないな」

「白井さん。どう対応を——」

「したところでどうなる」

「え?」

予想外の一言に、副官の思考が停止する。

「司令官としての肩書きあつた頃ならともかく、今は総理から直々に解任を言い渡された元司令官だ。国防軍に強い影響力があるとはいえ、クーデターを画策している連中に言葉は通じない」

「……」

白井の強い言葉に、副官も佐山も言葉を失う。

「すまん。言い過ぎた」

そう言うと、一万円札一枚を机に置いて店から出て行つた。

すると、副官のスマホから着メロが鳴る。

「……はい。岩見一尉いわみです。はい。佐山前首相だけです。はい——」

階級を出したということは、幕僚からの電話だろうと推察する佐山。

「——え? わ、分かりました」

副官の顔が戸惑いの表情に変わる。

「すいません。司令官代理から緊急の呼び出しが入りました。佐山前首相も来てくださ

い」

「俺も?」

自身を指さしながら聞き返す。いくら前首相だったとはいえ、今は一般人に過ぎない身分だ。国防省などに気軽に入れるものではないのだが……

「SPもつけていない前首相を一人にするな。連れてこい。と、言われました」  
「……すみません」

平謝りするしかなかった。

2人は店を後にし、駐車場に止まっている車に向かった。

「お疲れ様です。岩見……一尉。え？ 佐山前首相？」

フロントにもたれ掛かっていたドライバーが佐山の姿を認めるなり、目が点になる。

「三村三曹、悪いけどこの通り」

「……分かりました」

その後、3人は国防省へと移動し、副司令官室へと案内される。

「佐山前首相。国防軍総隊司令官臨時代理を務めています、雲野海将です」

「突然の訪問、大変申し訳ありません。ですが、一民間人である私がなぜこのような場所に……」

先程とは真逆の言葉遣いと態度に副官が『え？』という顔になる。

「確かに今は民間人であることに間違いはないでしょう。ですが、それを通り越してでも、あなたに伝えなければならないことがあります」

「……」

クーデターの件かと聞こうとしたが、佐山は雲野が友恵会のシンパであることを警戒して言わなかった。

「なんででしょうか？」

「先程、外務省から各省庁に通知がありました。フェン王国での武力衝突の和平交渉を行うために派遣された外交官に対してパーパルディア皇国が——」

——「パーパルディア王国が宣戦布告をしたそうです」